
暴食王の戦い

ピサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暴食王の戦い

【Nコード】

N4071M

【作者名】

ピサ

【あらすじ】

能力と欲望が渦巻く世の中を実質的に支配している、能力者達の集まり『能力組織』。その組織はあまりにも完成されており、政治に関するような商売から人を殺める仕事、更には”組織の障害となる者は消す”と圧倒的な力を裏社会で見せている組織でもあった。

だがその能力組織でさえ恐れる存在、それが現時点最強と言われている能力を持つ者『ボルテクス』。

そしてこの二大勢力が狙うは、何百年にも渡り受け継がれている『暴食の血を継ぐ者』。

通称『暴食者』。

この戦いは野望、因縁、欲望に巻き込まれた何世代にも渡る、暴食の血を継ぐ者の戦いである。

暴食王の戦い―序章―

『能力』。それは精神が生み出す『力』。

能力の力は、精神力が強ければ強いほど能力の力も増し、逆に弱ければ弱いほど力も小さい。

そして能力の力は、それぞれの『精神』により各々が”必ず”異なる能力を持つ。

更に、能力の覚醒も人様々であり、生まれつき覚醒してるものもいれば、ある物に対しての強い精神から覚醒するものもいる。

しかし、覚醒しても自らの精神が能力に耐えられる精神力でなければ、その者は能力に精神を支配され精神は崩壊し、やがて死に至る。

そして、この過酷な能力を制する者を人は『能力者』と呼ぶ。

この戦いは、能力者達の『因縁・野望・夢』を果たす戦いである。

* * * * *

時は1890年。場所はアメリカ合衆国、州不明・南西部牧場。
この物語はこの戦いから動き出す。

二人の男の戦場と化した場所はどこにでもある『牧場』。だが、この二人の男がこの牧場に現れたことにより、牧場はたちまち荒野となり戦場と化した。その二人の男の戦いは、つい先程まで牛や豚がいた場所を、一瞬にして荒地へと変えてしまう程激しく、その戦いは人間の身体の限界を突破している戦いといえるだろう。

地面に豚小屋か、鳥小屋だろうか、見分けもつかないほどに潰されておき、その小屋の木屑には中に居た動物のと思える大量の血と肉が混ざり溢れ出していた。その小屋はまるで上から何かに押し潰されたかのごとく潰れている。

そして潰されている小屋の近くに、牧場をこれ程の惨状に変えたと思われる、元凶ともいえる金髪の男と黒髪の男が、異様な空気を漂わせていた。

金髪の男は2m程の肩から膝まである黒いマントを羽織っており、上には灰色の長袖を下には黒い長ズボンを穿いている。目の色はどす黒い赤い色と、金色の長髪。

そしてもう片方の黒髪の男が白色の長袖に、灰色の長ズボンを穿いている黒髪の男。だがその男は頭から血を流し、肩を上下させかなり弱つてると見られる。状況から見ると、金髪の男の方が優勢と見るのが正しいだろう。

「……実に殺風景な場所だな……しかし場所など、どこでもいい！
！ この『ボルテクス』の野望が叶えばなァ！！」

金髪の男、ボルテクスが風景を見渡し、一瞬冷めたような口調の直後気が狂ったかのように不気味な叫び声をあげる。

「ボルテクス……！！ ここはお前のような屑の墓場となる、屑の為の墓穴など必要ない！！」

黒髪の男が頭から垂れてくる血を手で拭いながら、怒りをあらわにした表情でボルテクスを睨みつける。その返事にボルテクスは「実に面白い冗談だな……」ベルゼ」と赤い眼で睨み返すと、羽織っていたマントを右腕で剥がすと同時に上空に放り投げた。一体何の意味があるかは知らないが、黒髪の男、ベルゼはこの男を決して侮りはしていない。むしろこのボルテクスには、こうして睨み合っていただけでも底知れぬ恐怖を感じ取っていた。だがそれ以上にベルゼにはこの男に対する「怒り」の方が上回っているが故に、闘えているのだろう。

「貴様のような弱者が、この俺の”野望”を知ったところで
途端、ボルテクスの姿がベルゼの視界から消えた。錯覚、迷彩などではなく、その場から一瞬にして視界の外へ移動したのだ。移動手段はわからないがその速度は瞬間移動とも言えるほど、速く眼に捉えられない移動手段。

しかしそれ程のスピードで動けば、牧場に生えている草が少しは揺れる筈なのだが、その草は一切揺れていない。更に足音すら聞えない為、まず眼で追う事とは不可能。

勿論、ベルゼはボルテクスの”能力の正体を知らない”。それ故にベルゼにはボルテクスの姿を眼で追うことも不可能。ボルテクスの能力の弱点も分らない。更に頭からは出血している、完全に不利な状況。

だが、ベルゼも丸腰で怒りという感情だけに任せてボルテクスと闘おうとは、到底思っていない。つまりベルゼはベルゼなりの秘策を持っている。それが。

（ 予知、俺には奴の動きを予知できる、先程の予知は既に終わっている ）

先程、ボルテクスがマントを投げ捨てた時からベルゼの”予知”は始まっていた。その予知が映し出すのは結果。最終的な結果のみを”波動の予知”は映し出す。

「 阻止できるとでも思っているのかアアアアアアア！ 」

予知した先、それは後方の空中を示した。ベルゼは自分の予知に従い、即座に振り返りざまに空中を見上げるとそこには、どこから持ってきたか、全長三メートル程の巨大な牛を右腕一本だけで持ち上げている、ボルテクスの姿が眼に入る。その姿は最早怪物。

何故空中にいるのかは謎だが、ベルゼにとってはそれはどうでもいい事。ただベルゼはボルテクスを殺せれば、この世から永遠に葬むればいいと、それ以外は全て二の次。

ボルテクスが雄たけびをあげるのと同時に、身体を反らせるとそれをバネに使い身体を戻す反動と同時に、全力で巨大な牛を投げってくる。投げられた牛の速度は二百キロメートルは超えている。

「『波動』！！」

その牛に対し、ベルゼもボルテクスと同じく”右腕だけ”で、牛

の額に拳を一突きさせる。だがこの時ベルゼは、全力では殴っていない。ほんの少しだけ力をいれ拳を作り、その拳で牛に殴りを入れていたのだ。勿論全力で殴っていないベルゼのほうが、圧倒的にパワー負けしているのは目に見えている。

牛に拳がぶつかるのと同時にサンドバックを殴ったような、小さく鈍い音が虚しく響く。直後、その牛は鳴き声をあげるまでも無く殴られた『額』を中心に、背骨以外の肉、肋骨、足、眼等の部位が全て磁石が反発するように背骨から弾け、飛び散る。更に背骨の中を串でも入れたかのように、牛の背骨が綺麗な直線になっていた。少しの歪みも無く。

だが飛び散った肉片、骨と同様に血も水風船が割れた様に、弾け飛びベルゼの右眼の視界を遮る。その時ボルテクスの口元が僅かに緩み、笑っているのが左眼の視界に入ってきた。

（まさか、これが奴の狙い！？）

瞬間再びボルテクスの姿が消える。またも”瞬間移動”したかのように、今度は空中から姿を消す。だが消える直前、必死に左目だけでボルテクスを眼に捉えベルゼは予知を成功させていた。

が、その予知の結果を知るまでも無く突如、背中から腹にかけて何かが貫く猛烈な痛みをベルゼは感じた。その痛みは”痛い”を通り越して、一瞬焼けているという錯覚まで起こすほどの猛烈な痛み。だが、先程の不可思議な牛の弾け方は予想外だ……あれが貴様の能力か？」

振り返ろうとするが、その事を考える余裕すらこの痛みは与えてくれず、声すらあげる事ができない。声を出すどころか、大量の血が喉からベルゼの口に湧き上がってき、口から溢れ出す。

「ッー！」

その血はドロドロとしており、生暖かい温度を持っていた。それも大量に喉から溢れ出てくる為、自分の血で窒息死するのか、と思

うほどの膨大な出血。最早自分の身体に力を入れることすら儘ならなくなっており、何故自分が尚も立っていられるか、それがベルゼにとって気掛かりな事であった。

ベルゼにとって下半身は神経が背骨ごと絶たれ、感覚が無く”胴体になんかがぶら下がっている”としか認識できない。下半身が本当にあるのか、それを確認しようと下に眼をやった時、そこには腹を貫通していると思われる、ボルテクススの血に染まった赤黒い右腕が眼に入った。予想外の光景にベルゼは動揺を隠し切れず顔を顰める。「だがな……王の前では全てが無力！ 暴食ですら、ただの蠅に過ぎんのだよオ！」

ボルテクススがベルゼの腹の中にある内臓を、手探りでつかめるものを掴み右腕と共に引っかく。ベルゼは僅かな感覚の中、自分の身体から何か長い紐が、抜かれる。という感触しか感じ取れなかった。それ程痛覚も麻痺しはじめており、意識も殆ど飛んでいた。そしてその何かが抜かれた途端、ベルゼの身体は糸が切れた人形の如くうつ伏せに崩れる。

不幸中の幸いというべきか、腹に穴が開いたおかげで血がそこから溢れ出し、窒息死は免れた。だがそれは、寿命が一秒ほど延びたといえよう。腹に開いた穴は、十センチほどの巨大な穴。あと十秒もすればベルゼは死んでしまうだろう。

意識が遠のいていく中、ベルゼは最後にボルテクススの姿を見ようと、動かせる首を精一杯ひねり振り返る。振り返った先には赤い血に染まったボルテクススの右腕と自分の内臓が、月明かりに照らされ、影として眼に入った。

「どうした、ベルゼ？ ……その眼は、このボルテクスに命を乞っているのか？」

月明かりで表情が伺えずとも、ベルゼにはこの男の心の表情は読み取れる。

『この男はたった今、油断している。勝ったという優越感にしたり、完全に油断している』

一方のボルテクスはベルゼの内臓を右腕で握りつぶすと、握りつぶした”それ”を牧場の彼方へと投げ捨て、倒れているベルゼに対し、再び拳を作り止めを刺す場所を探している。

（この状況……やはり、俺の予知に狂いはなかった、か……）
ベルゼが薄れゆく意識の中、完全に意識が飛ばないように、必死に自分の意識にしがみ付こうとする。ここまでベルゼの心を”支えているもの”は何か、それはまだ語るべきものではない。何故ならベルゼ自身もまだ分っていないのだから。だがこの”支えているもの”は、後に世代を超えて受け継がれ、その時再びボルテクスの前に”現れる”だろう。

「実にいい気分だ、暴食者を殺し……その時点で俺の野望が叶うのだからなア！！」

ボルテクスが、ベルゼの背中から反対側にある、心臓部を見つけると背中の上から右腕の拳を全力で振り下ろす。だが、この時ボルテクスは致命的ミスを”一つ”、たった一つ犯していた。勿論ボルテクス自身は気付かない。が、ベルゼはそのミスに気付いていた、いや正確にはミスを”予知”していたのだろう。予知は結果のみを映し出す。それ故に過程は見えないが、予知の殆どが絶対的出来事となりうる。それが例え自分の死であっても。

予知に狂いはない。

瞬間、ボルテクスの右腕がベルゼの背中を貫く瞬間。ベルゼはうつ伏せの状態から、振り返るのと同時に、最後に残った力を全てを注いだ右腕で油断しているボルテクスに殴りかかる。

（こいつまだこれほどの生命力を……）

が、虚しくもその拳はボルテクスの前に届く前に、感覚が消え力が入らなくなりそのまま、右腕は地面に落ちていく。ボルテクスも「能力を使う必要がない」と判断するが、念のためにその場から半

歩後ろに下がろうとしていた。時、ベルゼの落ちていく右腕が地面につく前に、その腕からもう一本の半透明な腕が飛び出し、ボルテクススの右腕をかすめる。ボルテクススはそれを見た途端、能力を発動しようとしたが発動するよりも早く、不意を突かれたボルテクスはその腕に右腕をかすめさせる、という事を許してしまった。

（こいつ……何をしゃがったア！）

危機を感じたボルテクスは能力を使用し、一旦距離を置こうとしたが。途端ボルテクスが見ていた光景が、全て暗闇に変わる。

「なっ……景色が」

と声を発した直後、更なる違和感をボルテクスは抱く。それは自らの声が聞き取れなかったという事。とそれを理解するまでも無く、新たな違和感をボルテクスは感じ取った。それが右半身の感覚が無くなっているという事。息も苦しくなってきたており、意識も遠のいていく。ボルテクスは何が自分に起こったか全くわかっていない。何をされ、自分がどうなっているか、それすらも分らない。

ただその中でも唯一判っていたのが、これはベルゼの仕業であるという事、つまり最後に触れた何かが罠であつたという事。故に、ベルゼに対しボルテクススの怒りは頂点を超え、それは感情という類を超えていた。右半身の感覚、機能を完全に失い、音と光も失う。それはボルテクスが実現させようとしていた、野望にとっては大きな損傷。

「お……ぬえ……」

右半分の舌が動かないせいで、舌足らずな言葉となってしまう、が当の本人は音というものを失っている為、自分の言葉にすら気付かない。直に右半身全体の臓器が止まり、右脳も停止するだろう。そうなれば死んだも同然。

この時、ボルテクスは思った「自分より格下の者に俺は殺されるのか」と。自分より何もかも格下の、ボルテクスからしてみれば糞も同然の、相手に殺される。それがボルテクスにとっては、最も屈辱的な事。

（まだ……右脳が、右肺が動いている内に、こいつを……ベルゼを殺すウー！！）

ベルゼはボルテクスが右半身の全てを失った事により、拳が心臓に届く寸前に威力を抑えられたのだ。だが、かろうじて寿命が二秒ほど延びたといえよう。

「……俺の能力は自由を喰う能力だ……お前の自由はたった今喰われた、お前はここで死ぬんだ」

とベルゼが言い終わった直後、ボルテクスの左腕がベルゼの身体に触れた。何も見えず、聞えず、本当にベルゼを触っているかどうか、それすらも不明だがボルテクスはその触ったものに、残っている力と怒涛の怒りをぶつけた。

「この……屑がああああ、あ、あ、あ、ッ！！」

左半分だけの力で、右舌と右唇、声帯を無理やり動かし激昂し、その触っているものを肉片ではなく、液体に近い状態になるまで殴りつくし、殴りつくし、殴り潰した。そしてボルテクスは朝日が昇るころには、既にその牧場には居らずどこかに移動していた。その後のボルテクスの行方を知るものは少ない、そもそもこの惨劇が”あつた”と知っている者など、能力者であれ、無能力者であれ、これを知る者は指よりも少ない。

だが、ボルテクスは生きている。どう生き延びたかは知らないが、ボルテクスは生きている。身を隠し、どこかでひっそりと生きているのだ。

* * * * *

時は動く。その間にも歴史には数々の大きな偉業が刻まれていく。人類が月に降り、人類が新たな兵器を発明し、あの惨劇から大分時は流れた。その中で能力というものが、裏の社会で発見され、それは世間に公開される事なく歴史の影に埋もれていく。

そして時は遂に2010年、惨劇から約百二十年の時を経て再びこの歴史が動き出す。

第一章 第一話『暴食を継ぐ者』

2010年、日本・東京都某所 九月三日。

季節はまだ残暑が残る秋。

あの惨劇から、実に百二十年。その大きな時の間も、暴食と呼ばれる者達の血統は世代を超えて、受け継がれていた。ボルテクスとの因縁と共に。

「もうこれで五回目よ……いい加減に起きろオ!! 大河ア!!」
怒りの罵声ともいえる女性の激昂が、台所から小さな家の中を何回も反響し大河と呼ばれる人物の部屋に、古いドアを突き抜け響き渡る。

「……もう朝かあ、頼むあと少しだけ寝かせてくれ、いもう……」
どこか部屋にある時計を見ることも無く、自らの眠気にまけそのまま布団に再び潜ってしまう、この大河という人物。更に眠気に負け、返事の最後は最早言葉になっていない。最もその返事自体呟きに近いほどの、小さい声だったのだがこの大河という人物は、その事を全く気に留めていない。

勿論台所にその小さな声が届く筈も無く、大河を起こそうとした人物は無視されたかと思い、その人物はその態度に苛立ちを覚え始めていた。その人物はその時点で声で起こすという、普通の起こし方を止め、強制的に起こすという強硬手段に移ろうとしていた。

「五回も呼んで起きないなら、強制的に起こすしかないわよね……」
半分呆れ気味に、半分苛立ちを込めた言葉を小さく呟き、その人物は大河の部屋へと床を踏みしめ向かっていく。その一步一步自体力を入れていないが家自体が脆く、歩くだけで木が軋み一步一步歩くたびに、ギシギシと音が発せられる。最も台所から大河の部屋までは直ぐに着く距離なので、そこまで迷惑な音ではない。

その人物は大河の部屋の前で止まると、ドアノブに手を掛け握り

締めると、何故か一度深呼吸をし息を整える。そしてドアノブを降ろすのと同時にドアが壊れそうなほど強い力と、苛立ちを込め、力一杯にドアを押し開ける。その瞬間に発せられた木が折れるような音は、普通の音とは比にならないほど大きく、寝ている大河もその音に危機感を感じ、掛け布団を取っ払い急いで飛び起きる。飛び起きるといつても、上半身を起こすだけだが。

「大河ア！！ いい加減に……って、もう起きたのね」

その人物はドアを開けた際の衝撃音と共に苛立ちをこめた激昂を大河に浴びせる。が、その人物は大河が起きているのを確認すると、声のトーンを下げ再び呆れた口調に戻るのと同時に、やり場の無い苛立ちに対して虚無感を感じていた。

大河は激昂が発せられたドアの方をまだ眠たそうな虚ろな目でしばらく見ると、まだ眠たい頭の中を響きまわっているその人物の激昂を頭から振り払うように、頭を掻くと「……最高の目覚めだ」と冗談を交えつつ、返事を返す。

そして大河が見ているその人物の容姿は、肩に掛かるほどの長い茶髪に、女性用の中学制服を上下に着ている。制服のブラウスには”正”と書かれた紋章が胸についており、スカートの裾にも”正”と書かれた刺繍が入っている。そしてこの人物こそが、大河の”妹”だ。今はわけ合って大河とこの妹だけで暮らしている。何故だか妹は拳を握っているが。

「”最高”ねえ……とりあえず朝食は軽く作っておいたから早く部屋から出てきなさいよ、”三日”も起こしている側の身にもなってよね」

態度といい、口調といい、明らかにその言葉は呆れているというものを、あらわにしていた。その呆れた言葉を言い残すと拳を解き、そのまま部屋に入る事無くドアを閉めリビングの方へと足早に去っていく。

妹に呆れられた兄大河は、そのことには苦笑する程度で気にはし

ていなかった、むしろ今は別のことに頭を悩ませていた。それが”夢”。夢といっても、将来の夢やメルヘンなどの夢ではなく、睡眠時間に人間が見る夢について頭を悩ませていたのだ。そしてその頭を悩ます夢の内容が、三日間連続で見た昔実際にあった事件。簡単に言えば、昔の嫌な記憶が夢として三日間も連続で出てきている、そのことに頭を悩ましていたのだ。

「嫌な夢だ……三日連続で見るとはな」

その嫌な夢を三日連続で見たことに大河は驚きと同じく、嫌な予感もしていた。三日連続で同じ夢を見ること自体奇跡に近い事、誰かに言えば誇れる事だ。だが大河はそれを実の妹にすらいえない、何故ならその夢の内容が二人にとっては喜ばしくない内容だった為だ。

まだ少し残っている眠気を取り払うように頭を再び掻くと、くしやくしやになっっている布団を畳み直し、それを部屋の隅にやる。布団がないことで少し部屋の真ん中にスペースが出来たので、その場でカーテンレールに掛かっている埃を少し被った制服をハンガーごと取ると、パジャマを脱ぎ捨て”それ”に着替える。

その制服には”王”と書かれた紋章がネクタイに刺繍が施されており、横にある鞆にも”王”と刺繍が施されている。少し明るめの灰色のスポンを履き、まだ少し冷たいワイシャツに肌で直に触れながらそれを羽織る、次に袖に手を通し前にあるボタンを上から一つ目の部分だけ開け、それ以降を順に閉じていく。意識はしっかりとあるが、起きたばかりのせいか指が思うように動かず、ボタンを閉じる作業に少し手間取りながらも、なんとかボタンを全て閉じ終える。

その上に深い緑色のブレザーに袖を通し羽織ると、前についている四つの少し大きいボタンを閉める。一応夏用の服なのだが、まだ残暑が残る季節では着たくないものだ。

最後に白い靴下を転びそうになりながらも履き、全ての下済みを終える。

と、終わったのと同時にリビングから「時間かけすぎよ!」と、ドア越しに野次が飛んでくる。大河はそれに対し、不快感を覚えながらも悪夢のせいとはいえ、最も起きる時間を過ぎた自分が悪いと自覚しているので、言い訳等はせずそのまま受け入れる。

「分った、もう行くって」

返事は適当に頭から探りそれを返した。

まだ朝食をとっていない大河は朝食をとるため、人が四人ほどまでしか入れない小さなリビングに向かう。そのリビング内には、これまた小さいちゃぶ台と 16 インチ程のテレビが一つ置いてあるだけで、横には人一人入れる台所と繋がっている。食事自体は少ないが、リビングと台所が近いのは楽でいいと大河は思っている。

床を踏みしめながら、リビングへとゆっくりと歩みを進める。一歩一歩、歩く度に木が軋みの音が廊下を反響して家に響き渡る。リビングに着くと小さなちゃぶ台に、茶碗一杯になるかならいかの量の白米だけが、ポツンと置いてある。親がいない為、何もかもが貧しいがそれでも、生きていけるほどの金は大河がバイトで稼いでいる。

と、床に腰を下ろそうとしたのと同時に、大河の妹が入れ違いになるように足早にリビングから廊下を通り玄関に歩いていく。

「あれ、”彩香” もう学校なのか? 随分と早いな」

テレビの上にある小さい時計はまだ七時を差しており、大河も妹の学校の場所くらいは知っているの、登校時間にしては早い、と思ひ玄関にいる妹の”彩香”に声をかける。

彩香はスニーカーの紐を結ぶ手を止める事無く、背を向けたままそれに答えた。

「今日から委員会があるの、だから明日からも同じ時間になると思う」

素っ気無く無駄を省いた返事を玄関から返す彩香。と大河が聞き取った矢先、彩香が「あっそういえば……」と何かを思い出したのか、返事に付け足す。

「自分でもちよつと可笑しいと、思っただけど……笑わないでよ、ね？」

どこか恥らっているような口調で、最後に一言警告を付け足す。彩香の背をみながら「分った」と一言だけ返す大河。無駄に文を付け足しても、彩香の足を止めてしまっただけ、と大河は考えたので無駄な部分は省いた返事を返したのだ。

「うん……で、その内容なんだけど、”夢”の事で少し訊きたい事が……」

夢！？ まさか、彩香も。

予想外の言葉に思わず立ち上がりそうになり、ちゃぶ台に膝をぶつける大河。と、その直後彩香がその言葉に「って、やっぱり可笑しいよね……」と、自分が訊いた内容を言葉に出して改めて、可笑しいと思ったのか、力なく小さく笑いながら少し弱気な口調で付け足す。とそのまま、何を言う訳でもなく無言のまま家を出て行ってしまった。

大河も何か言おうとしたが、どのような言葉をかけていいか頭を探っても見つからず、何も言えないまま、質問になにも答えられない送り出してしまった。

「……彩香」

* * * * *
* * * * *

「ごちそーさん……」

彩香が家を出て五分ほどだろうか、大河は朝食を食べ終わり台所へと食器を運ぶ。食器といっても箸と茶碗だけだ。食事の間も、大河は彩香の質問が頭から離れないでいた。まだあの”夢”というものが、理想の夢か、それとも大河と同じく寝ている間に見る夢か、

それすら判別できていないが、長年暮らしている大河はあの様子から、すぐに『自分と同じ方の夢』だと判別がついた。勝手な思い違いかもしれないが、あの挙動と話し方からはそれ以外思い浮かばなかったのだ。

もし、同じあの夢だとしたら。

大河の頭に嫌な予感がよぎる。と、ここで後ろ向きに考えてはいけない、と思い首を小さく横に振ると、洗面所に顔を洗いに足を運ぶ大河。

だが……あの挙動は……。

顔を洗っている中でも、再び後ろ向きな考えが頭をよぎる。直ぐにその考えを振り払おうと、顔に両手ですくった冷たい水を強く叩きつけるようにかける大河。その後も何度かその考えが過ぎるたびに、それを否定する考えを浮かべる、どっちな心がつくことは無く、両方の考えに葛藤する大河。葛藤しながらも考えた挙句、出た答えは結局『分らない』。それ以外は何も頭に浮かばなかった。

「……もう時間か」

テレビの上にある小さい時計を確認すると、時刻は既に四十分を回っていた。悩んでも仕方ない、と踏んだ大河は一旦その事を忘れ、学校から帰ったら直接訊こう、という結論に至った。

兎も角今は学校に行き、授業を受けなくてはならない。折角授業料も払っているのだから、私的な悩みで休む訳にはいかない。鞆、バス代、そして家の鍵。昼飯は抜きだ、それが大河の普通。

廊下を踏みしめ、玄関で学校で規定されている靴を履き、重い鉄のドアを開けてまだ暑さが残る外へと出る。そこで、家のほうに振り返ると手に持つて鍵を鍵穴に差し、半回転右に捻るとガチャンと鈍い金属音が発せられた。大河はそれを確認すると鍵を鍵穴から抜き靴にしまう。

大河達が住んでいる家は、二階建ての古い木製アパート。比較的家賃も安く、二人で暮らす分には困ることはない。辺りにはバス停までの一本道の車道が一本通っているだけで、その車道の周りには

雑木林が茂っている。

勿論、両親がいなくなってからここに自主的に越したのだ。大河達の部屋は一階の右から数えて二番目。部屋番号は一〇二号室、玄関にある札には『ベルゼ邊流是 たいが大河・さやか彩香』と横に一行で簡潔に書かれている。

大河は自分の姓を見ていつも疑問に思うことがある。それが苗字のいい加減さ。辞書から適当に引つ張ってきたような漢字と、当て字のような読み。このことは以前、まだ両親がいる頃に父に、一度だけ大河は駄目元で聞いたことがある。すると意外にも父は「意味はある、古く大切な意味がある」と、幼き大河の素朴な疑問に正面から真剣に答えてくれたのだ。最も大河はその返答の意味を、未だに理解できていない。

と無意識に歩みを進めていたら、既に足はバス停についていた。そこで足を止め、鞆を膝に抱えるとこれまた古いクッションの効いていない、木のベンチに深く腰をかける。座ると家の廊下以上に大きく軋み、大きな音を発する。バス停の周囲は田舎そのもの。今大河が座っているベンチの後ろには、誰が管理しているかも知らない田んぼが広がっており、またベンチの前、バス停の反対車線側には雑木林が茂っている。日本の首都東京に存在するとは思えない場所。バスが来るまで呆然とただ景色を眺めていると、不意に”あの夢”の事が大河の頭をよぎった。

「ちつくしょーが、折角忘れかけてたのによお……」

大きく溜め息をつきながら、思い出した事を悔やむように言葉を吐き出すと、”あの夢”と同時に、朝の出来事も再び思い出してしまった。

ここまで、大河を悩ませる”あの夢”とは一体何か。それが大河の両親に大きく関連する、昔実際に起こった世間にとっては小さな事件。その事件が起こったのはまだ大河が小学生の頃、今から五年前程の事だ。その頃の記憶は新たな記憶に埋もれ、鮮明には全てを覚えていないが、その事件の”結果”と犯人と思われるものを大河

は目撃し、決して忘れる事がなかった。その内容は突如現れた金色の長髪と”赤い眼”を持つ特徴的な、大男に両親が共々に連れ去られる、という奇怪な事件だ。覚えていた記憶からして銃火器などは使っておらず、一瞬にして、気が付いたら両親が連れ去られていたという、聞けば聞くほど奇怪な内容。

その事件の事を思い返していると、大河が視界の端にまだ小さく見えるバスの姿を捉えた。それを合図に大河は木製のベンチを大きく軋ませながら、膝に抱えている鞆を手に取り立ち上がる。ズボンに少し木屑や埃が付いてしまったので、それを掃うように数回ズボンを軽く叩く。

ズボンのほうに気を取られている内に、バスは既に大河のすぐ前に今にも止まろうとしていた。エンジンが止まり、その時に発せられる空気が押し出されるような音に大河は気付き、前に立ち直る。大河が気付いてから数秒程立った後バスの真中にある、比較的大きいドアが、静かに音を立てずに独りでに開く。

そのドアの先には、二個ほどの小さな階段がありそこを登ると、後は殆ど段差は無い。大河が座るのは一番後ろの座席、最後に数センチの段差があるがそれは階段とは呼べないだろう。

大河が全て登りきり一番後ろの、今度はクッションの効いた座席の真中に深く腰をかけ、気持ちを落ち着かせる。そして、自分以外はあと一人しか乗っていない事を確認した上で、大河は鞆を自分の横に置いた。普段ならば迷惑な行為だろうが、人が少なくそれも遠い前の座席ならば迷惑はかからないだろう、と大河は踏んだのだ。

乗って二分ほどだろうか、大河はその間バスの心地よい振動に揺られながら、景色を視線で追う事無くただ呆然と眺めていた。その間にも度々夢の事が頭に浮かぶので、大河は景色を眺めなるべく考えるという行為をやめた。そうすれば、夢の事を思い出さなくて済む、と大河は思っていた。そう、この時はまだ。

「……」

静かだ。大河が乗っているバスの中はエンジンの音、整っていない道路の上を転がる車輪の音、それ以外は一切声も無ければ、雑音も無い。ただその中で大河は次第にあまりの静けさに違和感を感じていた。

そういえば、いつもの乗客がいない。

大河が外の景色からバスの中に視線を移し、バスの中を左から右に視線を巡らせ、二秒ほどでバスの中の景色を全て眼に入れた。そして、全て見終わった後やはり大河は違和感を感じていた。まず一つがいつもの乗客が乗っていない事、田舎の方を走るバスに乗る人物達を、大河は時間帯さえ同じなら覚えていた。だが今日はその時間帯なのに乗っている人が、運転手と自分を含めて三人。つまり、乗客では自分以外を数えると一人しか乗っていないという事だ。バスに乗る時は”夢の事”で他に思考を回す余裕が無かったので、大河は気付かなかったが、こうして今見返すと奇妙なものだ。更に大河に違和感を感じさせたのは、その一人の乗客だ。その乗客は全く見ない顔の為、大河はそれに違和感を覚えていた。だがいくら田舎とはいえ、それでも東京の中なので別に知らない顔が乗っていても理屈はおかしくない、そう大河は自分に納得させるような理由を頭の中で作り上げると、それを自分に納得させるように心の中で自分に言い聞かせる。

そういえば制服も同じだな、転入生か？。

普段見慣れないその者がまず男だという事が大河は判別できた。容姿は白く透き通るような白い肌に全体的に少し長めの茶髪。眼の色は遠すぎるせいか大河からは、確認する事はできなかった。背丈は座っているので不明、服は大河と同じ制服。

すると、茶髪の青年が大河と同じように自分と同じ制服だと気付いたのか、こちらを少し見るなり頭を小さく下に下げる茶髪の青年。これを挨拶と受け取った大河は「こちらこそ」とは言葉にこそ出さ

なかったが、その茶髪の青年同様に小さく頭を下げる。その時、茶髪の青年と眼が合った時、大河はその茶髪の青年の目の色を知ることが出来た。その眼の色は深い蒼い色をしていた。

ハーフ、それとも外国人？。

同じクラスになるかもしれない者が、どのような人物が知りたいという、好奇心に大河は揺さぶられるのと、田舎では珍しい白人系の肌の色だった為大河はしばらく、その青年の方に視線を向けていた。流石にそれには茶髪の青年もそれに気づいたか、こちらを見るなり「何か顔についてますか？」と何も付いていないのを知っているながら、大河に問いかける。大河は慌てて「あ、いや何でも……こめんな」と返事を返す。こういう事には慣れているのだろうか対応が迅速だ。と大河は思った。同時に深く掘り下げはしないが、どの道同じ学校に行くことだし、名前だけでも先に訊いておこう、と大河は考え茶髪の青年に名前を問う。

「今日転入される人の方ですが……名前を伺ってもいいですかね？」

緊張が先走ってしまい、思わず慣れない敬語で話してしまう大河が、ある意味それが功を奏したのか、茶髪の青年もその言葉に優しく「名前ですか、別に構いませんよ」と敬語で大河の問いに応じてくれた。

が茶髪の青年は名乗ろうとした直前、何か用を思い出したかのように一瞬行動が停止する。そして、同時にその時の青年の表情から笑みは消え、所謂無表情というものになっており、その表情のまま唇と舌だけを動かし今度は逆に大河に一つ問うてくる。

「……何故僕が、転入生だと判ったのですか？ それだけ聞かせてください」

低いトーンで発せられた”それ”は、大河の心を小さく揺さぶる。が、揺さぶられたのも、急に怒っているということに対して、不気味さを感じただけで何か弱い所を突かれたわけではない。大河は少し間を空けると、その問いに落ち着いて答える。

「いや、こちらへんじゃ見ない顔だけど、制服も同じだし転入生か
と思ったんだが……もし気に障ったのならごめんな」

その答えを聞いた、茶髪の青年は数秒ほど間を空けると表情に笑
みを浮かべ「そうでしたか、これは失礼」と律儀に大河の答えに相
槌をうつように、答える。とその次にブレザーの胸ポケットに手を入
れると、そこから七センチ程の長方形の紙を取り出す茶髪の青年
「こういう者と申します」

すると、茶髪の青年側からこちらに数歩歩み寄つてき、その長
形の小さい紙を大河に差し出す。大河はその前の台詞と、この行動
からこの紙が名詞のようなもの、と思いそのことに驚きを感じなが
らもその紙を受けとる。

受け取った紙を持ち直し「……えーと、名前は」と、小さく口を動
かし呟きながら、その紙に書いてある文字に視線を走らせる大河。

と、名前を読むつもりで受け取った名刺と思われる紙には、名前
ではなくもつと長い何かの文章が書かれていた。それに大河は違和
感を覚えながらも、その文章をゆっくりと頭の中で読み上げていく
と、文章を読み始めた瞬間に大河は背筋が凍るような感覚を覚える。
その文章が。

『暴食の血を継ぐ者、ここにて果ててもらふ』

大河は二文字目までを読んだところで、先程の違和感を越える恐
怖感を覚えた。大河自身幼き頃、父親に名前の意味を聞いたときか
ら、ある事を忘れかけては度々親に言い聞かされていた。それが『
暴食というものは命の危険がある、関らない方がいい』。それが幼
き頃から、親が誘拐されるまで大河に言い聞かせていた事。故に、
大河は”暴食”の二文字を読んだところで、自分の命に危険がある
と認識し、それと同時に恐怖を覚えたのだ。

イボ・ティス
『騎士』ッー！

瞬間。手に持っていた名刺、いや脅迫状というべき紙が鋭く光を

反射した、何かに真中から二つに切られる。大河は紙の両端を持っていたため、斬られる事はなかったが何か刃物で切られかかった、という事に改めて自分の危機感を覚えた。と、視線を紙を切った刃物のようなものがあると思われる方向、茶髪の青年がいる方向に視線を向ける。

すると、その先にいたのは先程までの茶髪の青年ではなく、窓から差す日差しを反射している、『銀色の鎧』を纏い『長剣』を手に持った騎士の姿が目に入った。

「……貴方には、僕の能力チカラの前に果ててもらいます」

『第一章』第一話『暴食を継ぐ者』（後書き）

スローペース投下でやっていくつもりです。

第二話『能力』

「な……!？」

大河はただ目の前の事に驚愕し、僅かな放心状態になっていた。

いきなり目の前にいた青年が『殺人予告』を出し『騎士の鎧』と

『剣』をだしそれを身にまとった。剣は150cmはある”長剣”だ

手品、怪奇現象、幽霊、夢、超能力、いずれも考えたが違う、

何か別の。

「…君に教えておこう、僕の名は『ツヴァイ・インページ』平和のために、君を殺す者だ」

その言葉に我に返り、状況を把握しようと無駄な思考回路を巡らせる。が、やはり何度考えてもたどり着く結果は『わからない』。

「一発目」

そうこう考えている内にツヴァイが、大河の椅子へ剣を構え”跳んで”くる。

それも重い鎧を纏いながら。しかもたった一回跳ぶだけで、大河がいる一番後ろの席まで跳んで来た。人間離れしている跳躍だ。

大河がいる場所は一番後ろの席なので、かわすといっても横にしかかわせない、更に一回横に飛んでしまえば、追い詰められたも同然。椅子と窓、壁に道を阻まれ動けなくなる最悪の状況だ。

大河はいくつかの策を練ろうとしたが時間がない。残された選択肢はやはりかわす。大河は剣を振り下ろされると同時に右に跳びかわす。

「かわす、”見えている”のですか……」

ツヴァイが小さく言葉を漏らす、大河はその言葉を聞き逃さず、その言葉に疑問を抱いた。見えているのは当然だ、それは目の前に手を出して『この手が何故見える』といってるも同然。

「無駄な考えはよしたほうがいい……ただ僕に斬られ、死ぬ。それで平和になるのだから」

またも意味不明な言動、大河の疑問はより深まる。

そもそも、ツヴァイが言っていた”能力”とはなんだ……しかし今そのことを、じっくり考えている時間はない。今はこの逃げ道が塞がれた状況を打破しなければならぬ。

ツヴァイが剣を持ち直す、そして威力を知る為に先ほど、剣によりきられた椅子に目を向ける。

「何だこれは……」

視線を椅子のほうにやると、そこに存在するのはさっきまでの柔らかな椅子ではなく、剣により上から斬られ、そこに置いてあった鞆の残骸や、スポンジが飛び出している。たった一撃でここまで酷く成り果ててしまった。

「抵抗はやめてください、見ているこちらのほうからみると哀れそのもの……」

「抵抗をやめろだと？ 殺されそうなのに黙って死ねって事か！？」

大河が怒鳴り返すとツヴァイは「逆にそれ以外に何かあるのです？」と嘲笑うように返し、剣の切っ先をこちらに向け”跳んで”くる。振り下ろせば長剣なら届く距離だが、何故か跳んでくる、何故だが理由を知りたいが今はそれより、ツヴァイからどう逃げるか。次かわすとしたら恐らく”下”そう予測されているのは間違いない。

しかしそれ以外にかわせといっても、かわす場所がない。”かわす”場所が無い……。

この時一つだけこの状況を打破する方法が脳裏をよぎった。リスクもかなり背負うが、この方法以外は全て読まれているだろう。そうかわす以外で相手から逃げる方法。

大河は恐れながらも覚悟を決め、跳んでくるツヴァイに対し右腕の拳で顔を”殴ろう”と反撃する。

「何！？」

ツヴァイも生身の人間が殴りかかってくるとは、読めていなかった。

だが読めていなかっただけで、ツヴァイにとってはかわせないという事は無い。顔を必要最低限に横にずらし拳をかわす。拳を見てたった一秒も経っていないのに、殴られるという状況をこの男は打破した。

そして、そのままの勢いで大河の腹に剣を刺そうとする。

大河は渾身の一撃をかわされ、突き出した拳に体重が乗っている為、後ろに飛び跳ねる等の器用な動きは不可能だ。できる事はあまつている身体の部位のどこかでツヴァイの攻撃を”肺””心臓””脳””喉”等、致命傷になるべく関するところは避ける事。

『一体何処で受け止めればいい』

大河は脳をフル回転させようとするが、頭を使う時間はとてもじゃないが無い。なら、せめて肺と心臓は。

「ッ！」

一瞬、視界が途絶え真っ暗になり、腹に感じたことも無い激痛が走る。本当に死ぬほど痛いとはこういうことを言う。

だが、致命傷になる部位はかわせた、意識も僅かだが保ててる。それに今相手の剣は腹に深く刺さっている為、抜くのには時間が掛かるだろう。反撃するなら今しかない。

「うおおおー！」

そう思った大河は、痛みを振り払う勢いでツヴァイに一発殴りかかる……だが。

「……痛ッ！」

腹の痛みより、瞬時的な拳の痛み、思わず声をあげてしまう。いくら殴っても痛むのは大河の拳だけ。何故なら相手は『鎧』を纏っている。

硬い鉄の鎧を殴るという事は自殺行為だという常識を腹の痛みにより忘れていた。いやツヴァイが鎧を纏っているというのを忘れていたのかもしれない。

いくら強く殴ったところで所詮は人間の骨と肉の塊。鉄の塊の鎧とはわけが違う。

更に腹に刺さっている剣の痛みも増してきた。出血で意識も遠く
なっていき、形成を一気に逆転させた。いや、正確には形成が逆転
した事は無い、ずっとツヴァイが有利な状況だったのだから。

「暴食といったところで所詮凡人ッ！ 能力者に勝てるわけが無
いという事だ」

ツヴァイは剣に力を込め引き抜く。引き抜いた場所からは大量の
血がにじみでていき、制服が一気に黒気味の赤色に染まった。

「うぐっ…あ！」

大河は痛みのあまり、床に前から倒れこんだ。これだけの惨事とな
っていても尚バスは走り続ける。意識を失ったのか死んだのか、呻
き声も止み、指一本動く事も無くなった。

「（死んだか…？ いや或いは意識を失った……念のため脈を図
っておこう、どの道死体は”持ち帰る”んだからな）」

ツヴァイは大河が生きているかどうか確かめる為に、一旦能力を
解き鎧と剣を消す。

生の指で触らなければ温度と脈はわからない。この時、ツヴァイ
の中では『生きていたとしても、動けないだろう』という判断をし
ていたため、完全な無防備となっている。

だが、この判断が大きく結果を変えることになる。

ツヴァイが能力を解き鎧を消し大河に触ろうとした瞬間、大河の
指が一瞬だけ僅かに動く 意識が戻りつつあった。

しかしツヴァイ側からは指が見えていない為、無防備に左手を持
ち上げるツヴァイ。

「脈は」丁度言いかけた頃だろうか、突如うつ伏せに倒れている
大河の目が開き、ツヴァイを見上げる。その眼は鬼の如くツヴァイ
を睨みつける。

ツヴァイはそれに気づき、能力を発動させようとするがその行動
よりも早く、大河の右腕がツヴァイの顔を殴りつける。

そして、この一撃で大河の運命は大きく変わる事にもなる。

大河の予測ではツヴァイを殴りつける。つまり物理的攻撃の訳だ

が、大河の腕はツヴァイの顔を『すり抜ける』ように貫通した。

ツヴァイはかなり驚愕したものの、大河は殆ど意識が無い状態、考えることが殆どないので『驚く』という事もなくなった。

更にその顔をすり抜けたところで、大河の手に何かの感触を感じた。頭蓋骨や肉の様な感触ではなく、もつと別の空気の塊を触っているという感触。

その”何か”を掴もうとすると、がっしり掴む事もでき、そのまま大河は腕を引き抜く。すると、”何か”もツヴァイの身体から引き抜く事ができた。大河はそれを力一杯引き抜く。

その”何か”は大河により引き抜かれ、正体を見せた。大きさはツヴァイと程同じ。というよりかは、半透明のツヴァイの身体そのもの。目や臓器、皮膚もなくあるのは『半透明のツヴァイの形だけ、指や足、髪などにはあり、まるで身体のまわりだけを線でかこい、周りだけを復元した様な物』。

大河が掴んでいるところは、身体で言うところの『頭』の部位に当たる。その何かの心臓に当たる部位だろうか、そこには大きく銀色に輝く玉があった。

「何をした……暴食者ツ！」

ツヴァイは目の前の状況が把握できず、僅かな混乱状態に陥っている。だが、そこは熟練者なのか、叫んだ五秒後には我に返った。そして自らの置かれている状況を把握し、相手の”能力”を知る為に能力を発動させる。

「答える……その口を裂いてでも答えさせる『イポーテイス』ツ
！！」

ツヴァイが能力を発動させる。が、能力は発動しなかった。

「……何故だア！ 何故能力が発動しない！ ……まさか！！」
叫び混乱するツヴァイ……しかし、直にあることにツヴァイは気付いた。

そう、それは『大河が持っている』自分の形をした何か』それを取られてから発動しない……そう考えたツヴァイがたどり着いた

結論は、大河によつて体から引きずり出された”何か”が自らの『能力』という結論にたどり着いた。

ここまで来たら、大河の能力を殆ど当てるも同然。ツヴァイは今度こそ『勝った』という確信を持っていた。

「（あれが、僕の能力そのものなら……あれを取り返せば僕の能力は再び『覚醒する』

そして”剣”で奴の”心臓を確実に突き刺し”死体を持ち帰れば”任務完了”だ）」

ツヴァイは覚悟を決めるまでもなく、わかつたのならすぐさま行動に移した。

床に溜まっている血溜りを物ともせず、ただ大河がもつ『自らの能力』に走り、手を伸ばし掴もうとする……だが。

触れない。伸ばした手は大河が持っている『能力』をすり抜け、何も掴むことなく自らの拳を握る事になった。掴んだのは空気と自分の掌だけ……。

そしてツヴァイは、虚しさと驚愕を同時に味わい、崩れるように血だまりの上に膝を突く。

『何故何故何故』

ただ、絶望と謎が彼の脳を埋め尽くす。彼は頭をかきむしり、血の上に両腕を叩きつける。目は焦点が合わず泳ぎ、彼は完全な絶望を味わい、混乱状態に陥った。

脳裏をただ混乱させる考えがよぎり、無駄な思考を巡らせ、より混乱におちていく。

しかし大河も既に危険な状態であった。

大河の腹の流血は止まらず、そろそろ死ぬか生きるかの境界線をまたぐといった所。

だが、大河は絶望こそ感じるものも、まだ生きるという事を諦めてはいなかった。

暴食……何で暴食だからって、殺されなければならないッ！

俺は、俺はもつと自由に生きていたい！

この時の感情、意志の強さが大河の”異能力”『暴食の能力』を僅かだが覚醒させた。『能力』とは精神に比例し強くもなり、弱くもなる……だが大河自身気付いていない、自身に宿る能力は、その強い意志に呼び起こされ、覚醒した。

能力の覚醒によって僅かに大河は意識を取り戻す。能力は自身を支える力にもなる、この時の回復は正に、能力が大河を支えたといっても過言ではない。

僅かに目を覚ました大河は周りの状況を把握はせず、自らが持っている”ツヴァイの形をした能力の塊”を見るとそのまま、その能力の顔に殴りかかった。恐らく今の大河に『持っている能力の塊』がツヴァイに見えたのだろう。

実際形も同じな上、眼も完全には開いておらず、僅かな意識の中で敵に攻撃するという事だけで十分すぎる奇跡。

「……ウツ!？」

すると何故か殴られていないツヴァイが殴られた頬を抑える。この一撃でツヴァイは混乱から目を覚まし、あることを新たに知った。それは今大河に殴られた『ツヴァイの形をした能力』は自らの能力であると同時に、痛覚も共感しているのだという事。大河は自分の重い身体を立ち上がらせると、そのままツヴァイの形をした能力に更に殴りかかる。

「俺は…まだ死にたくない……死んでたまるか……」

右腕で殴り、左腕で殴り、再び右腕で殴る、そして殴り殴り殴りひたすら無情に殴り続ける。

「ゲウツ! ……」

ツヴァイは声も出ず、ただそのばで蹲る。

「……屑暴食が……この俺の顔に傷を……ッ」

大河は大量の拳を加えた後、糸が切れた人形のようにその場に倒れた。

今度は完全に意識を失い、息もしているかしていないか分からない。すると大河が持っていた『ツヴァイの形をした能力』は大河が意

識を失ったのと同時にツヴァイの元に、一瞬で戻っていった。

出血も動いた事によりまし、放っておいても大河は死にツヴァイの目的は果たされる。

そう考えたツヴァイは、大河に止めを刺さずあえての『バスと共に殺す』という選択肢を取った。理由は無論”存分に苦しませて殺す”が理由だろう。

ツヴァイは殴られた頬や腹を抑えながら、重い体を立ち上げらせる。

「暴食者……貴様は本当に運がいい。感心するほどな」

そしてツヴァイが向かったのは、何故かバスの運転席。するとそこに座っている運転手を椅子から落とすように、どかす。いや正確には”運転手の遺体”といった方が正しい。

ツヴァイは怒り狂う感情を抑え、運転席についている”受信機”の様な物を殴り壊す。

「遠隔操作受信機を破壊させてもらうぞ……ここからは俺自身の事情なんぞで……」

そこには最初の貴族のような姿は無く、怒りにみちた表情が顔に浮かんでいた。そして破壊した受信機を余所目に、ツヴァイは運転手の靴でバスのアクセルを踏ませ、靴が常に踏んでいる状態にする為に、運転手の遺体を運転席とアクセルの間に挟み、つかえ棒のようにした。

「暴食者、貴様は運がいい……そこでだ、最後の運試しといこうじゃないか」

第三話『運試し』

「最後の運試しといこうじゃないか!!」

ツヴァイが能力を発動させ『剣』を持ち『鎧』を纏う。

そしてそのまま、意識の無い大河に言い聞かせる様に”運試しのルール”を説明する。

「ルールは簡単。このアクセル全開の状態で、君が生きてバスを降りられるかどうかだ。どんな手段を使ってもいい」

『どんな手段を使ってもいい』このルールは意思がある大河なら非常に有利な条件になるだろう。

しかし今の大河は意識がなく、バスから降りる事すら困難な状況に加え、運転手も死んでおりバスは壊れるまでアクセル全開という状況。

この説明も運試しも、いつてみれば”ツヴァイの鬱憤晴らし”に過ぎない。

「このバスも、今はまだ田舎を走っているが、後十分もすれば”大道り”に出るだろう……」

すると、ツヴァイは剣でバスの天井を丸く切り裂き、能力を解き天井の上につたった一回のジャンプで乗る。やはり、身体能力は人間離れしている。

尚もバスは加速している為、天井の上は風が強く、ツヴァイの制服と髪を揺らす。

ツヴァイは勝ち誇った心で、大河を天井から見下ろしており、その表情は完全に笑っていた。

「…しかしこれでは君が不利すぎるな…そうだ、僕も条件を賭けよう」

するとツヴァイの表情が突如真剣な表情に変わり、自らを追い詰めるような条件を出した。

「これで君…いや『暴食者』が生き残ったら、君を追う、追跡す

る、殺す、などの事を全て僕は”やめる”」

この条件は言い方を変えれば『この運試しが、大河に対する最後の攻撃だ』という事にもなる。

「最も”生き残れば”だが…それじゃあ、僕はそろそろ降ろさせてもらう」

ツヴァイはバスの天井からなんと飛び降りた。バスの速度は60 kmはある。その中バスの天井から道路に飛び降りるというのは自殺行為同然。

しかしツヴァイにとってはこの高さは”50cm”の高さから飛び降りるも同然。飛び降りたときによるめく事も無く、そのままバスの反対側へと歩いていった。

バスは尚も速度を増し”70km”まで速度が上がっていく。辺りの風景も、家がちらほら見え始め、まだ田舎といえば田舎だが、確実に都会のほうへバスは向かっている。

このままいけば、まず都会に出るだろう。

仮に都会に出たらどうなるか、そうなれば制御が利かないバスは、人を轢き車とぶつかり、大事故となる事は間違いない。

防ぐといっても、バスの時速は70kmを超え、最早外から止める事は殆ど不可能な状況。

ツヴァイでも止められるかどうか。それに、大河自身も出血により時間が残されていない。

止めるには、人知を超えた力が必要不可欠…そう、人知を超えた”力”が

* * * * *

AM 8:05 同刻・某バス停。

ここのバス停は田んぼに囲まれており、このバス停を使う人も極僅か。

そして今、このバス停には二人の高校生がバスを待っている。

一人は何やら落ち着かない女子生徒。制服は大河と同じ”王”の紋章が胸についており、髪は黒いストレートが肩までかかっており、眼鏡をかけている。外見は比較的どこにでもいる女子高生だ。

もう一人は、制服のブレザーを大きく開けており、バス停の椅子を二人分くらい使い腕を組み座っている。大きく開けているブレザーには大河と同じ”王”の紋章がついている。

鞆は頭の上に乗せ顔が陰になり、表情がうかがえない。体格も大きく、身長は170cmはあるだろう。

「あ、あの……貴方も同じ制服を着ているようですが、バスって何時頃くるんですか？今日は初めてここのバス停を使うので……」
女の方がおどおどしながらも、男に問いかける。すると男は大きく溜め息をつき、一言。

「俺も今日ここの高校に転入してくる者で、ここの時間帯は知らん、知りたければその時刻表をみればいいだろうが」

機嫌が悪いのか、苛々した口調で返す。その口調に女子生徒は「し、失礼しました」といい、足早に時刻表に向かっていく。

「少し聞いたただけなのに、何で怒ってるのかな……なるべく関わらないようにしよう、でも私と同じ学校の”転入生”なんだよなあ」
愚痴を漏らしながら時刻表をみると、自分が乗るバスの時間帯を読み上げる

「えー……と、時刻は”8:15”か、まだ時間もありそうだなあ」

そうすると、バス停のほうを振り返るとそこにいるのは、さっきまで二人分の場所を使っていた男が今度は、五人分使い寝転んでいるではないか。女子生徒は”完全に不良と認識”し絡まれないように急いで目をそらした。

その瞬間女子生徒の心に「絶対に関っちゃ駄目だ私」という決心が生まれた。

「だけどこのまま立って待つのも……いやいや、関らない為に

は惜しまない』

だがその時女子生徒は違和感を覚えた、何か軽くなった感じというよりは、何かが無くなった感じ……そうだ鞆がない。

慌てて自分の足元を見るが、そこにも鞆は無い。少しパニック状態になりながらも、女子生徒は自らの記憶をたどり、何時なくしたか記憶から探る。

『家を出てここに来るときは持っていた……』という事はバス停の椅子においてきてしまったというのが確実……でもバス停の椅子には……』

恐る恐るも再び男のほうへ視線をやると、そこには驚く光景が目に入ってきた。

それは、女子生徒の鞆を枕代わりに男が寝ている光景。おまけに自らの鞆は額の上に乗せ、太陽の光が当たらない様に置いてある。

「なっ何してるんですかつ!!」

女子生徒はその光景に思わず叫んでしまった。相手が不良に近いという事を知り即座に口を抑え込む。

すると男は無言で立ち上がり、そのまま女子生徒の方へ鞆を持ち歩いて来る。

「（まずい……どうしよう、どうしよう!? 確実に怒らせちゃったかな……）」

女子生徒の身体は僅かだが震えている。膝は笑い、完全に暴行を振るわれると覚悟していた……だが。

「……すまん、俺の鞆と間違えたみたいだ」

男はそういうと、鞆を驚愕している女子生徒に渡し、自分の鞆を探し始めた。女子生徒はその場で力が抜けたのか、その場で地面に崩れるように座る。

「（こ、こ、怖かった……でも殴られたりしないでよかったあ、あと）」

女子生徒は座ったまま男の方へ視線をやる。男が鞆を探しているのは知っている、だからこそ見た、何故なら男の鞆は”男の頭の上

”に未だ乗っているのだから。

「（この人に対して私の本能が別の”恐怖”も抱いている……だけれど、この人かなり天然みたい）」

女の生徒は驚愕と安堵と疑問を同時に感じ、男に「あ、あの……鞆なら頭の上にありますよ」と恐る恐る伝える。

「ん？頭の上か……、教えてくれて有難うな」

男が鞆を頭の上から取り、再び椅子に座ろうとした時、バスが遠くの一本道からこちらに来るのが見えた。

「……なんだ、バスが来るのが十分はや……い！？」

男は突如椅子から立ち上がり、走って道路の真ん中に立ち何やら身構える。表情は、ふざけや笑いを取る為にやっているのではなく、覚悟を決めた表情そのもの。

それをみた女子生徒には”三つ”の疑問が浮かんた。一つは『何故男がバスの時間を知っているか』二つ目が『何故道路の真ん中でたっているか』三つ目が『バスが何故十分も早く来るのか』。

女子生徒は自分の疑問を解く為に、男に疑問を訊く。

「あの、何で時刻がわかったんですか？」

それに対し男は「お前の声が大きかったからな、十分に聞こえた」と言い返す。

女の生徒は「私声に出ちゃってたの……まさか全部！？」と顔を僅かに赤める。だがすぐに我に返った女の生徒は、男に再び質問をしようとしたが。

「おい！ お前、救急車呼んでおけ、急いでだ！」

男が突如声を上げ叫ぶ。

女子生徒は急に呼ばれたため、僅かに硬直してしまっただが、直に我に返り何故呼ぶのかを問おうとしたが。

「早く呼べ！ 取り返しがつかなくなるぞ！」

と男は何やら焦っており、頬を汗が伝っている。

女子生徒は怒鳴ってくる男に従うしかなく、救急車の番号に携帯から電話をかけ呼ぶ。

「あ、あのでも何故救急車を……？」
すると男は「あのバスが着たらわかる、それまでお前はそこにいろ」と返す。

「そこにいろって……貴方は」「そこまで言いかけた時、男の背中から巨大な半透明の男の上半身が飛び出す。

ザ・パートナー
「『仲間』！！」

「人ッ！？」

そのまま男は両腕を前に出し、何かを受け止めるように構える。半透明の上半身だけの男も同じ行動を取る。

70km近い速度で突っ込んで来るバスに対し、男は両腕で受け止める体勢をとったまま受け止めようとする。

そしてバスは人を引く音では無く、岩に衝突したような轟音をあげ男と衝突する。男は半透明の男と共に、バスを両腕で受け止めている。

だが、バスの速度は下がる事は無く、そのまま男を無理やり押しながら走っていく。

その光景に女子生徒は思わず言葉を失い、その場に立ちつくす。そのバスの天井は丸く開いており、恐らく何者かが入ったか出て行ったのだろう。

「……思ったよりかはパワーがあるもんだな」

すると、背中から出ていた半透明の男の上半身が、男の体に被さるようにバスを受けて止めながら、両足からも半透明の足を出し、バスの速度を僅かだが徐々に下げていく。

バスの正面には男の腕が減り込んでおり、本当に事故直後の車体のように潰れている。

「うおおお止まれええええ！！」

速度は下がるが、バスは止まる事無く男ごと依然走り続ける。このままの速度では男の方がバスより先に倒れてしまう。

すると半透明の男が左腕だけを完全に男と”同化”させ、一瞬左

腕をバスから離し、その離れた左腕をバスに戻すと同時に殴りつける。

「ウオオラアッ!!」

辺りには車と車が正面衝突したかのような轟音が鳴り響く。

殴りつけられたバスの前方は車と車が衝突したような衝撃音と共に、男の拳の形をした凹みができ、前方のガラスが数秒遅れて耳を突き抜ける様な甲高い音を上げながら、割れ、飛び散った。そのガラスの破片の内、何個か男に突き刺さるがこの男にはその痛みなど皆無。

しかし殴られたバスは、尚も止まらず走り続ける。

だがその時、男はそのガラスを割ったときにあるとこに気付いた。それはアクセルを踏んでるのは人間では無く、別の”物体”だという事に。

「……血の臭いが激しいな……」

先ほど前方のガラスが割れた事により、血独特の鉄に近い臭いが男のところまで漂ってくる。

すると男は『外から止める』ではなく『中から止める』と思考を切り替え、すぐさまガラスが割れた所に片手を伸ばし、その淵を掴むとそのままバスの中に転がるように飛び乗った。淵を掴んだ手はガラスの破片がまだ残っていたのか、血が大量にでており、バスに転がり込むように入ってきた為、体のいたる所にガラスの破片が刺さり痛む。

「ッ! ……体中が痛む……」

愚痴を漏らしながらも、男は立ち上がる。すると、まずその時目に入っただのが。

「……やはり、”バス停から見えた”のと同じ、いやそれ以上に出血してる」

そこには大量の血を流し、バスの真ん中に倒れている青年が目に入った。先程バスに殴りかかった時に、位置が前に移動したのか”

バス停から見た”ときより大分前のほうへ来ている。

男は躊躇う事無く少年の元に行くと、自らのブレザーで少年の腹を締め付け、できるだけの止血をする。手には元々自分の血がついていたこともあってか、特に血を拒絶する事はなく追応急処置を行う。

その時男の目にあるものが目に入った、それは倒れている生徒と見られる物の生徒手帳。

「……名前は邊流是大河、”ベルゼ”か」

そして止血を終え、大河を開いている座席に寝かすように置く。

そして男が次に向かったのは『運転席』。

運転席に行くとそこには地獄絵図が広がっていた、箱積めのように丸められた運転手の死体が、アクセルのつかえ棒になっており、その死体は最早人間の原型は無く、手の位置すら確認できない。

「酷い事をしたもんだ……」

その光景に思わず吐き気を覚えるも男は運転手の死体を椅子とアクセルの間から出し、血だらけの運転席に座り、ブレーキを掛ける。するとブレーキは壊れていなかったのか、あれほど苦戦して止めたバスが、嘘のようにピタリと止まる。

バスが止まったのを確認すると、男は大河の方へ駆け寄り脈を確かめる。

「脈はあるな……あとは救急車が来るのを待つだけか」

少しだが男は安心を感じ、その場で座り込みスボンのポケットからはライターと煙草を出し、煙草を銜え火をつけると、なんと煙草を一服吸い始めた。一応男は高校生、無論見つければ逮捕だろう。だがそんなことを気にも留めず煙草を吸っている。

「何かやった後の一服は美味いな……」

* * * * *

某バス停

一方女子生徒はその場で見た光景が脳を支配し、救急車を呼んだ時も舌が上手く苦労したが、彼女は直に男が何者なのか理解できた。そう常人の頭では理解したが事を”理解できた”のだ。

「……今の男の人、もしかして『私と同じ』能力者」
「」

『第四話 病院』

人間離れしている男の行動に女子生徒の脳裏にはある事がよぎった。

それは『自分と同じ能力者』。

それも恐らく自分より強い能力者。能力者は能力者同士で『野望の為に』闘う為、自分より強い能力者と対峙するのは、無謀ともいえる。

それなら”自分が能力者だと悟らせなければいい”単純な事だ。

だが、それは『あの男という間は能力の発動は出来ない』という事にもなる。そうなれば自分の野望実現の大きな障害となる、更に同じ高校であるという事も含むと更に邪魔となる。

「で、でもなんとかなるよね……うん！　なんとかなる！」

女子生徒は自分を無理やり元気付け、その場で救急車が来るのを待つ。

それにしても、何故能力者が同じ時期に同じ高校に転入するのか……奇妙すぎる偶然だ。

* * * * *

そして待つ事二十分、ようやく救急車がやって来て大河と、潰されている運転手を運び出す。駆けつけた救急隊員はバスと運転手の死の方を見て、不可解に思いつつもまずは今ある命を優先して、救急車に大河を運びこむ。

その時「救急車に同席してくれると助かるんですが」と聞かれた為、男は承諾したが女子生徒は拒否し、学校に登校するという事を選んだ。

なるべく自らを超える能力者とは関りたくないのだろう、その為に男と同じ行動を避ける為救急車に同席するのを却下したのだろう。

つまり逆に男が同席しなければ、女子生徒は乗っていたという事になる。

* * * * *

P M 2 1 : 3 0 東京都・第八病院・手術前待合室

そこには、大河の妹が学校から駆けつけており、バスを止めた男と共に待合室で大河の手術が終わるのを待っていた。

妹はどうやら狙われたりする事は無く、怪我もしていない様子だ。しかし精神的に参ってしまったのか、ずっと泣いておりそれを看護婦が慰める形で座っている。

一方の男はパニックになることも無く、ただそこで『誰が大河を殺そうとしたか』それを考えていた。いや正確には殆ど分かっているが、確信を得る為に大河から事情を聞かなければならない。それが目的でここにいるといってもいい。

ブレザーは気に入っているのか、血を洗い落とし再びブレザーを着ている。

「……なんでまた……ウチの家族が……」

そう、彩香と大河は過去に両親を”赤い眼”をした”金髪の男”に連れ去られ、それ以降二人で暮らしてきた為、これで大河が死んでしまったらそれこそ自殺するかもしれない。それ程必要な人になっているのだ。

それに対し看護婦は

「大丈夫、大丈夫」

と励ますが彩香はただ泣きじゃくるだけ。その状況に男は段々と嫌気が差したのか、椅子から立ちあがると、待合室から出て行き外の空気を吸おうと病院の外に出ていく。

病院正面玄関

男は外で大きく深呼吸すると曇っている空を見上げ煙草を口に銜

え火を付ける。

「……とんでもない事態になっちまったな……まあ、”奴”が動き出したんだ、焦る気持ちは分るがな」

すると何処からとも無くどこかで聞いた事のある声がする。

「おやおや青年、学生は煙草禁止の筈ですよ」

男は思わず煙草を口から落としてしまいそうになるが、直に声の正体がわかったので、煙草を口に銜え直す。

すると再び「だ・か・ら・それ（煙草）は犯罪だ」と影から再び声がする。

それに対し男は「うるせえな……」椿先生”と煙草を吸いながら答える。

「うるさいとは何だ？ 先生に向かってよくそんな口が利けるな、ん？」

すると陰から出てきたのは、ショートヘアの黒髪に紫色のジャージを上下に着用しており、身長は男と同じ170cm、175cm位の女性。体系も引き締まっており、格闘技かなにかやっているような、スタイルの良さだ。

「椿先生……あんた、外にまでジャージで出てきているのか」

「お前はこんな目立つところで、おまけに学ランで煙草を吸っているのか」

男が半分呆れた声で訊くが逆に椿に呆れられてしまった。

男はその言葉に「なら目立たない場所で吸ってくる」と返すが後頭部を手の平で叩かれ「そういう問題じゃない」といわれ銜えている煙草を取り上げられる。

男はその行動に溜め息をつきながら、近くの木に寄り掛かると一つ椿に対し言葉を投げかける。

「椿先生……あんた何をしに、ここに来た？」

それに対し椿は「お前の連絡が無かったからだよ」と返す。

男はその言葉を訊くと『そっぴや連絡してなかったな』と思いつつも「知らん」と意地を張り自分の正を突き通す。

「まーたまた、意地を張っちゃって、まだまだ子供だなあ彰も」
木に寄り掛かっている彰に近づくと、椿は彰の頭を撫で回し始めた。

それに対し彰は「やめろ」と手を弾く。

「なんだあ、可愛くねえな……子供の癖に意地張っちゃって」
すると取り上げた煙草を自分の口にそのまま咥えると、どこから持ってきたか、ライターを取り出し、火が消えた煙草に再び着火し煙草を吸う。その行動に彰は「お前も注意するならすうのやめろよ」と心の中思うが、発言したら面倒な事になりそうなので、あえて発言するのを控えた。

しばらく沈黙が続き、聞えるのは椿が煙草を吸う音と息を吐く音だけ。

「……なあ、彰、何でお前はここの病院にいるんだ？ 誰か知り合いでもいるのか？」

煙草を銜えるのを止め、人差し指と中指で挟み彰に訊く。

「あ、そうだったな、まだ理由を言っていなかったか……実はここに”暴食者”がいる」

その返答は思いもなかったのか、指で挟んでいた煙草を思わず落としてしまう。

「ちなみに、暴食者は重体だ……いつ意識を取り戻してもいいようにここにいます」

その説明を全て聞いた椿は煙草が落ちた事さえ無視して、質問をする。

「……それはやはり『スキルメンバーズ能力組織』の仕業か？」

「恐らくな、今回はツヴァイの仕業だろう……刺し傷に、バスの天井が切り取られていた」

バス内の惨状を彰は伝え、椿は全てを聞いた後に、落ちている煙草を一旦しゃがみ拾い上げると、再び立ち上がりその煙草を何回か空中で振ると再び銜えた。

火が消えかかってた為、銜えている煙草に再びライターで火を

つけ、大きく吸う。

「……で、”校長”から昨日聞いたんだが、暴食者には妹もいるらしいな、その妹さんは無事なのか？」

そちらのほうで椿にとっては不安なのか、少し早口調で訊いてくる。

「まあ、ちよつとな……精神が不安定になり、泣きじゃくっている状態だ」

それを訊いた椿は煙草を途端に口から手に取り、その煙草を握りつぶし火を消すと、潰れた煙草をポケットに入れ病院に入っていく。彰は待合室の状況を思い出し椿を止めようとするが。

「椿先生、今はあまり向こうに行かないほうが」

そこまで言い掛けた所で、椿が彰の口を塞ぐような言葉を発した。

「大丈夫、『治療』してくるだけだ、それとも私の”元本職”を忘れたのか？」

その言葉に彰は言葉を失くすが、直に”元本職”の事を思い出し、「成程」と納得せざる得なかった。だが同時に今の大河の妹には丁度いいと思い、そのまま椿を止める事無くもう一本煙草を吸おうとしていたが。

「……ん？ライターが無い……」

ポケットにしまって置いた筈のライターが無くなっていた、だが代わりに一枚紙が入っていた。その紙をポケットから出し、広げてみると。

「『ライターは貰った。怪盗・椿、か……見事にやられたな」

その紙を読み上げると同時に、苛立ちが僅かに積もるがその苛立ちを抑え、ゆっくりと歩いて病院に再び入っていく。

* * * * *

手術室待合室

椿が手術室の前にある待合室まで来ると、そこには泣き崩れている大河の妹とみられる人物とそれを慰めている看護婦が座っていた。

「……手術中か」

ランプを見上げるとそこには『手術中』のランプが光っており、待合室には重い空気が流れている。

「あの、手術は何時から行われているんですかね？」

看護婦はこの発言で初めて椿がいるのを知ったのか、「は？」と思わず聞き返してしまった。しかし直に我に返った看護婦は椿の身をまず訊いた。

「あ、あの貴方は一体……患者様の知り合いで？」

質問に質問を返してくる事に、椿は少し戸惑いながらも「はい」と何故か偽りの答えを返す。しかし何も知らない看護婦にとっては、手術室前まで来て「関係者」といえば殆ど本当だと信じてしまうだろう。

「あ、それで手術の開始は朝の”九時十分”から手術室に入って現在も手術中ですね……」

やっと質問に答えた看護婦に対して頷くと、今度は彩香の元へと歩いていく。

「それで、この方は妹さんでよろしいのですかね？」

念の為に訊くと看護婦が「はい、そうです」と返してくる。しかし当の本人は下を向き泣いている為、表情を伺えない。

「（成程ねえ、これじゃあ彰も嫌気が差すわけだ、というより十二時間近くもこの部屋に入れたのか……）」

すると椿は二回深呼吸をすると、表情を和らげ彩香に対しての”治療”の下準備を始める。

「君、名前は？」

その質問に彩香は泣きながらも答える。

「……さ、彩香……彩色の彩と香りの香……」

椿はその返答に「いい名前だね」と優しく返すと彩香の前にしゃがみこむ。

「じゃあ彩香ちゃん？今から彩香ちゃんに質問するけど、大丈夫かな？」

ろくに喋れない彩香に対し、質問をするとは嫌がらせにも聞える訳だ。

「あの一体何を……」

といいかけたところで、突如後ろから肩を掴まれる看護婦。すぐさま看護婦が振り返るとその視線の先に居たのは、煙草を銜えた彰がその場に立っていた。

「……安心しろ、火は付いていない、ここには俺のライターを取りに着た訳だが」

彰は煙草を口から離し、人差し指と中指で挟むとその挟んだ煙草で椿と彩香のほうに指を差すように差す。

「あれを見る、椿先生は今から”治療”を開始する……その邪魔にならないようにするのが俺達に今できることだ」

指に挟んだ煙草を制服の胸ポケットに戻すと、椿達の正面にあるつまり、反対側の壁に椅子に座ると看護婦も邪魔にならないようにと、何をするのか不思議に思いながらも彰の横に座る。

そして二人で椿と彩香のやりとりを見守る……しばらくみていると、治療の意味がやっと看護婦にも分ってきた、その治療とは心の治療『カウンセリング』。

そして椿が行っている、彩香とのやり取りは正に”カウンセリング”。初めの方こそ質問に戸惑いを隠せなかった彩香であったが、二十回くらいの質問をした時には、戸惑いも殆どなくなり、普段の彩香に戻ってきたのか声も透き通って聞え、涙も止まっていた。

質問の内容も様々であった。最初のほうは緊張を和らげる為に、聞いても仕方無い質問を繰り返すが、その内に段々と打ち解けて今では、質問というよりは”会話”になりつつある。

P M 2 3 : 1 0

椿は彩香と打ち解けたのか、彩香の前にしゃがむのではなく、彩香の隣の席に座り何かを話している。内容こそ聞えないものの、彩香の表情も僅かだが微笑が出てきたのが感じられる。

彰は二十二時ごろに「理事長に連絡を入れておく」とどこかにいってしまいました。そのまま帰ってこらず、看護婦は椿達の様子を見て待合室を後にし下へと降りていった。

その時、遂に待ち望んだときが、重いドアの向こうからやってきた。

重いドアを

「……手術は”成功”しました」

この一言を彩香はただだけ待ち望んでいたのだろうか、その場で泣き崩れると「良かった、良かった」とただ泣き崩れる。椿はその時に辺りを見渡すが、彰の姿は依然見えておらず「相当な長い連絡だけだな」と思い、気には掛けていた物も今は大河の様態を医師から訊くのが先決だ。

だが丁度その時、理事長との連絡が終わったのか、彰が息を切らして走って帰ってくる。彰はその光景を見て把握したのか、一言「良かったな」と声を掛けるとそのまま走り病院を出て行く。

だが後ろを向いた時一瞬だけ彰の表情が鬼の形相に変わったのが見えていた。

『理事長と何かあったのか』

椿はそう思いつつも、とりあえず明日の日が昇るまでは彩香に付き添うといい、彩香もそれを承諾し二人は大河と同じ病室で夜を開けた。

* * * * *

手術終了から一日後、AM11:53

ここは、どこだ……白い天井に……俺は一体どうなって……

大河は僅かに目を開け、僅かだが意識を取り戻した。

「……さ……や、か？」

彩香は今にも消えそうな声に反応し、直に大河の手を握り椿に伝えるように叫んだ。

「お兄ちゃん……が起きた……大河が目を覚ました！」

く 第四話『病院』（後書き）

結構新しいのいっぱい出てきましたが、いずれまとめるのでそれまでは脳内でどにか覚えてください。

煙草は未成年で吸っては駄目です。

第五話『関係』

目を開いた途端白い天井に吊るされている蛍光灯の光が、まだ完全に開いていない視界を埋め尽くし、その眩しすぎる明るさが朦朧としている大河の目を覚ます。

「……ここは!？」

先ほどの明るさのせいか、目はボヤケ焦点が合わず、辺りを見ようとしても目が思うようにピントが合わない。聴覚は少しづつだが戻りつつある。その戻りつつある耳に聞き覚えのある声が枯れた声で入ってくる。

「起きたお兄ちゃん站了起来よ!……」

一瞬声が枯れていた為誰の声かは分らなかったが、この世で大河と兄妹の関係にある人物は一人しかいない、彩香だ。

「……彩香なのか？」

まだ完全には開いていない目で声がするほうを見つめる。すると見覚えのあるシルエットがかすんで見えてくる。次第に視覚が戻ってきたのか、見覚えのある茶髪が見えてくる。

「そうだよ、お兄ちゃん!」

聴覚が完全に戻っていたのか、先程とは比べ物にならないほど声が鮮明に聞える。身体感覚も戻ってきたのか、背中に柔らかく生暖かい布団の感覚が伝わってくる。

ただ、大河の妹が大河のことを『お兄ちゃん』と呼ぶのは珍しい事で、不安な時に『お兄ちゃん』と呼ぶ事が多い為、大河はそれが気がかりで仕方がない。

「彩香、何かあった

上半身を立ち上がらせようとした所で、腹に激痛が走る。身体は反射的に腹を押さえ丸くなるように蹲り、柔らかいベットに倒れ込む。

「痛ッ! 何だこの痛み……!？」

彩香は「まだ無理しないで！」と泣きそうな目で見つめてくるので愛想笑いで「大丈夫だ」と一言かける。眼も完全に開くようになってたのか、焦点も合うようになっており、自分が何処にいるか目に入ってくる景色で段々と分ってくる。

どうやら、自分がいるのは病室という事がまず分った。

それから、自分のベットは一番窓側にあり、左側には青い空が見える。右側には妹の彩香が大河に、倒れ込むようにしがみ付いており、頬は赤く膨れ上がり、目には涙が僅かに浮かんでいる。

他の患者はこの部屋にいないみたいだ。

しかし、今の大河が一番気がかりになっているのは『腹痛』の原因だ。

何だこの感じたことも無い腹痛は？ …… そういえば、昨日から俺の記憶が打っ飛んでる…… 記憶

そこまで考えた時、頭を鉄バットで殴られたような激痛が走る。

と同時に、大河の頭に記憶が押し込まれるように、バス内での出来事が一斉に入ってきた。

幻覚かと最初こそ思ったが違う、その詰め込まれている記憶の中で触ったもの、聴こえたもの、血の臭い、バスの中の景色…… 全て身体感覚が覚えている。

そして自らがその後どうなったかも、誰がバスを止めたかも、何故か手に取るように頭に入ってくる…… いや正確には詰め込まれている。

その詰め込まれてきている記憶は救急車に運ばれるところで、映像が切れる様に途絶えた。

『何だ今の痛みは…… それに今の記憶は……』

謎の痛みと自らが意識を失ってから救急車までの記憶…… 勿論彼が驚いているのは、そのこともあるがそれ以上に彼が驚く事があった。

それは今の”記憶の映像”が『第三者視点』であったという事。

丁度記憶の映像が途絶えたところだろうか、重い病室のドアが開きそこから紫色のジャージを着た女性が一人中に入ってきた。

身長は大河より大きく、165〜175cm位の身長だろう。髪は混じりけの無い黒色のショートヘアで、スタイルも引き締まっており、ジャージのチャックは胸元まで下がっている。

大河はその姿を見て「一人しかない病室に何のようだ」と思いつつも、今の記憶を詰め込まれたという現象のほうに、不思議だった為そこまで気には掛けていなかった。

すると、その女性は大河のほうに近づいてくると、前屈みになり彩香の頭を左手で撫でながら、大河に対して「もう意識を取り戻したか」と一言投げかけてくる。

いきなり初対面の相手にこんなことを言われたら、誰だって戸惑うだろう。

しかしそれ以上に大河には戸惑う事があつた、それは女性が前屈みになっている為、ジャージからは胸が見えており一応健全な青年の大河にとっては刺激が強すぎたのだ。

「……あの、どちら様か知りませんが、前……見えてますよ？」

大河は目をそらし、顔を赤くし恥ずかしながらも、伝えたい事を伝える。その女性はその言葉に「可愛いな」と言いつつ、ジャージのチャックを顎のほうまで上げ、完全に閉める。

だが大河の記憶にこのような女性は記録されておらず、一体誰でどういう関係でここにいるのかという疑問が浮かぶ。

「あの……すみませんが、貴方は一体どちら様で、彩香とはどういった関係で？」

「私か？ 私は『花美月 椿』ハナミズキ ツバキという者だ。彩香ちゃんとは、昨

日色々あつてな、だが本当の会いたかったのは『大河』君、君だ」「俺に？」と思いつつも、大河はとりあえず相槌をうち話を聞くことにする。

「ん……多分まだ私についてまだ色々と聞きたいと思うが、大河君に一つ話がある」

椿が彩香から手を離すと、大河から見てベットの下の方に座ってきた。

丁度この位置だと、椿が大河の方を向かない限り大河からは、椿の顔が見えない位置になっており、背中しか大河側からは見えない。「でその話というのが『暴食』についてなんだが」

そこまで言ったところで、大河は血の気が一気に引いた。更に表情が見えないというのが更に恐怖を煽ったのだろう。

『暴食まさか、この人も俺達の命を！？』

大河はいざとなれば、妹の彩香だけでも逃がすつもりでいた。だが次の一言で大河の抱いた恐怖は打ち砕かれるように消えることになる。

「私は『暴食の血を継ぐ者（暴食者）』を私達が教師を務めている学校『異端学校』に迎えに来た。理由は『暴食者』を強くする事と安全を確保する事だ」

「……は？」

思わず大河は口を開け声を漏らしてしまうが、直に我に振り返り状況を把握する。しかし思考は空回りするばかり。

すると椿は大河のほうに振り返り、大河の目を見つめそのまま話を続ける。

「まあ、分らないのも無理は無いだろうな。でも実際時間がないということも把握して欲しい。これは彩香ちゃんも同じ事だ。……残酷だが『暴食者』ってだけで殺される可能性があるからな」

最後の『暴食者だけで殺される』という一言が大河の不安を怒りに変えた。

『暴食者』ってだけで殺される？……なんだ、そんなくだらない理由で俺はこれからも殺されそうになるのか？……』

既に大河の思考の全てがネガティブな思考に変わっていた。

つまり、今大河にこの事を言ったということは、火に油を注ぐも同然。

「……」 暴食者”ってだけで殺される？ そんなわけの分らない

その理屈だけで俺は殺されかけたのかよ！」

思わず声を出して怒鳴ってしまう大河。椿はその質問に「訳があるんだが……」とそこまで黙り込んでしまう。

彩香も兄（大河）の怒鳴った姿を始めてみたのか、黙ってしまい、その場を長い沈黙が支配する。

「椿”先生”。そんな荒い説明のしかたは、あんたらしくないと思うぜ？」

低く太い声がその場の沈黙を破るように大河達の耳に入る。大河は声がした方へ視線を直ぐ向ける。

その声の正体は大河と同じ高校の制服に、ブレザーを大きく開けている大柄の男。

しかし制服やブレザーのいたる所に、血や砂が大量に付着している。

「彰、その格好は一体何があつたんだ？！」

椿が彰の制服をみるなり、なにやら不安げな表情で彰に訊く。大河からは表情が伺えないが、声が先ほどとは違い、なにかに焦っている、恐怖しているような声が大河の耳に入ってくる。

すると彰と呼ばれている男はそれを無視して、他のベットの側にある椅子を持つてくると、その椅子に座り一言言う。

「詳しくは後で話す、それに椿先生あんたが今喋るべき相手は俺じゃなく、そっちの餓鬼の方だろ？」

その言葉に椿はしばらく、下を向きうつむいてしまう。やはり、暴食者が狙われている理由は、何か特別な理由だという事はその場で察知できた。

「すまなかった、大河君……少し焦りすぎたようだ」

少し表情に作り笑いを加えながら、先程の声とは違う不安が少し籠った声で謝罪をする。

大河も「いや俺もすまなかった……少し熱くなりすぎた」と謝る。だが実際の気持ちはどうだろうか？ 無論大河は表では謝るものの、実際の気持ちは未だに怒りを抑えきれていない。しかし今ここで怒

鳴り散らしても助かる訳でもなければ、何も起こらない。

とりあえず、ここは膨れ上がる怒りを心の奥底に一旦しまい、理由を聞く事にした。

「では、理由について話すがこの理由を聞いて、絶望や後悔はくれぐれもしないでくれよ」

椿はベットに座ったまま上半身だけを大河の方へと捻り向け、大河の目と目をあわせる。すると大河は小さく頷く。彩香も一応暴食者なので、覚悟を心に決めていた。

「……では、まず何で大河君、いや大河が昨日殺されかけたかだ」大河は自分の腹を右腕で押さえ、昨日の悲劇を思い出しながら説明を聞く。

「まずは、昨日大河を殺そうとしたのは『ツヴァイインページ』という奴だ、彼もまた能力を持ちつ者、能力者だ」

ここまで訊いたところで、大河と彩香には疑問が生まれる、それは能力とは何か。そもそも、大河達は能力という単語自体耳にする事は殆どなく、能力に関しても知識は全く無い。

だが、今ここで説明を割って入るのはマナーとしては最悪だろう。それに全ての説明を聞いた後でも、能力についてはまた訊ける、ならばここは説明を聞くことを優先するんのが当たり前だ。

「彼の能力は『騎士^{イボータイス}』瞬時に剣と鎧を身に纏う事ができる能力だ。そしてその彼が所属している組織が『能力組織^{スキルメンバース}』。科学力も最先端を常に歩き、能力者の中では知らないものも殆どいないほどの巨大組織にして、暴力組織でもある」

所属しているという事は、ツヴァイは上の命令で動いたということか……と大河は確信と不安を同時に持った。

「その能力組織が、何故暴食者を狙っているか、その理由は極めて単純にして残虐だ。その理由というのが『ボルテクス』という一人の能力者の野望を阻止する為だ」

理由は聞いた、しかいこれだけの理由なら俺達を殺さないですむ筈……第一巨大組織といわれる位なら一人や二人の能力者なら

倒せてもいいはず。と誰もが思うだろう。

しかし、椿の説明を聞いていく内に”ボルテクス”という”一人の人間が何万人をも人間を超える力を持つ事を知る事になる。

”そもそも、何故ボルテクスが恐れられているか、それは簡単に言うと”奴に適う者がこの世に存在しない”というのと奴の野望が”人類を絶滅させる”かもしれないという事だ”

その言葉を訊いても大河達は今一、ピンとこなかった。

そもそも何十億という人類全てがかなわない存在というのが、まず理解できない、だがこの頃はまだ理解できなかったが、後にこの説明の”本当の意味”を大河は知る事になる。

「真実かどうか疑問に思うかもしれないが、これは事実だ。現にボルテクスに対して能力組織が一回だけ、軍や能力者達で攻撃を仕掛けたことがある、だが無残にも戦闘に参加した者は全員”心臓を抜き取られ”、死んでいたその時攻撃に参加した者は『520』人に対し、相手は一人……最早人間の限界を超えている化け物だ”

その説明を聞いて、初めて大河達はボルテクスが化け物だと実感した。これなら先程の『同じ力量の人間がいない』というのも納得できる。

だが、これだけなら大河たちに隠す必要もない、これだけなら。

「しかしこれだけなら、君たちに理由を隠す必要は無い……覚悟して聞いてくれ”

先程まで説明口調で早口だった椿の声が、一変して震える声に変わった。

言いにくい事なのか、声が弱弱しく中々聞き取りづらい。だが、そんな声でも静寂とした病室では十分に耳に入ってきた。

「君たち暴食を狙っている者達は、私達を除いて”現時点で確認できている”ボルテクスも含む『能力者全員』だ”

『能力者全員』これが意味するのは『人知を超えた力を持つ者全員』が自分を狙ってきているという状況。それは常にどこかで自分の命を狙っている人がいるという事。

まだ二十歳も超えていない大河達には、過酷過ぎる言葉。そして同時にこの時椿が自分達に言いたくない理由も分った。何故ならこの言葉の重みは、今の大河達には重過ぎる。

しかし、このまま放っておいても誰かに殺されるだけ、それならばいつその事話してやった方が対策も取れるし、もしかしたら”暴食の能力”が『覚醒』するかもしれない。

そう考え椿はこの事を話した……後残っている不安は、この事を話しが裏目に出なければ良いということ。

「過酷過ぎるかもしれないが、この事実が現実だ……だからこそ私達は君たちを救おうと『異端学校』に案内しているんだ」

しかし、この時大河の頭にはあることが過ぎった、それは『この人達は本当に味方なのか』。

丁寧に説明してくれるのは嬉しいが、自分達を狙っているのは”ツヴァイ”みたいに人間離れしてる者達全員という状況。無論バスを止めてくれた彰さえも今の大河にとっては疑いの的に変わっていた。

「じゃあ、一つ聞かせてくれ……」

大河がベットの上でまだ痛む上半身を無理やり起こし、椿とより近くで向き合い、目をより近くで見つめられるように、より相手の表情が見えるようにと真剣な眼差しで見つめる。

それに椿はその行動に最初こそ驚いたものの、大河の迷いの無い行動、完全に自分を見ている真剣な眼差しをみて、あえて動かず顔を近づけたままで質問を聞く。

「あんた達は……」本当に俺達の味方”なのか？」

この一言は質問というよりかは、試し。

自らの目を相手の目の前から逸らせないようにして、相手の心理にプレッシャーをかけ、その状態で相手が、表情や目を逸らす等の行為を行った場合は、殆どが嘘とも言えるだろう。

それを大河は今実行し相手を試している。本当に事実なら何も変わりなく答えられる筈。

「本当に嘘じゃないんだな」
更にプレッシャーを掛ける大河。

だが椿は目を逸らさず、表情も変えず、声色も変えず、大河の目を真正面から見て、何の動揺もせず今まで通りに答える。

「無論、」本当に君達を守り」に来た」

だが、大河は言葉が発せられた後も睨みつけるように、目を逸らさず椿の黒い瞳を自らの視界に捕らえる。しかし椿は表情すら変えずに睨み返すように大河の目を見る。

すると大河の表情が次第に和らいでいき、再びベツトの上に背中から倒れ込む。

大分無理をしてこの行動を行ったのか、大河は腹を両腕で抱えるようにベツトの上で横になりながら蹲り、呻いている。

彩香はそれを見て「無理しないで！ まだ一応怪我人なんだよ！」と一言注意する。

椿も肩の力を抜き、リラックスした様に大きく息を吐くと、続けて大河達にもう一言掛ける。

「大体君達を標的にしているなら、既に君たちを殺しているだろう？ 私達は殺そうともししていない」

その言葉に大河は腹を押さえながらも「確かにその通りだ……」と思わされ、一時の安堵を感じた。

く第五話『関係』（後書き）

かなり遅いですが、これからはこれ位のペースになりそうです。

第六話『片鱗』

安堵、それを感じたのも僅かな時間だけだ、この安堵は椿達が敵じゃないというのを知ったからこそ訪れたもの、だが実際の敵は先程聞いたとおり椿達を除く『能力者全員』という、絶望的状况に変わりはない。

「さてと、私達の言う限りの事は言った、君達はまだ質問があるか？」

蹲っている背後から、声が降りかかってくる、椿の声だ。

「質問か……あ、ある！一つだけあります！」

大河がベットから声をあげ、ゆっくりとベットから起き上がる。

彩香は相変わらず心配しているみたいだが、大河は「輸血と点滴がついてるから平気だ」と一言返す。

ベットの上に上半身だけ起こし、座るような形になるとそのまま質問を投げかける。

「まず一つ目なんですか……能力ってなんですか？」

全くもって予想していなかった質問だ。何故なら椿は大河達が『能力』を知っているという上で話していたのだから、この質問は正に不意を突かれたといつていいほど、予想外な質問。

「……えーと、能力の意味を知らずに君達は話を聞いていたということか？」

椿が聞き返すように答えると大河は「はい、そうですけど」と当たり前のように返してきた。

「そうか……なら、まずは能力を見てもらった方が早いな」とすると椿が病室の奥にいる彰に呼びかける。

「お前も今の話は聞いていただろう？　なら話は早いこの二人に能力を見せてやってくれ」

しかし、その呼びかけに対し彰は反論の意を見せる。

「何故俺に？　椿先生あんたの能力をみせればいいだろう？」

すると椿が何やら、少し声を濁らせ答える。

「いや、私の能力は、なんだ……見せるには恥かしい、からな」

その返答に少し間を空け、何かを思い出したのか「分った」と先程まで嫌がっていたのに、直に承諾した。

「あ、あの能力を”見せる”って？」

大河が二人の会話に戸惑いながら椿に訊く、すると椿は「まあ見てろ」と一言返すだけで、質問には全くの返答になっていない。

その返答に少し不満を感じながらも、とりあえずここは黙ってみる事を選択する。

すると彰が椅子から立ち上がり警告を一言いう。

「大河といったな……いいか、俺が能力をこの病室で見せるのは”一回”きりだ！ 瞬きで見えなかったなんていっても、”一回”きりだからな」

その時、彰は「一回きり」といった……何故一回しか見せられないのか、それにも恐らくだが、何らかの理由があるのだろう。

今は考えるよりも”見る”だ、一度しか見れないなら尚更だ。そんなことを考えている内に、彰がなんの宣言もなしにいきなり能力を発動させた。

その瞬間、病室全体を緊迫感が包んだ。

「どうだ？ こいつが俺の”能力”、名前は『ザ・パートナー仲間』」

そして、その能力で発動させられたものは……”人”それも半透明で、男の形をしており、筋肉と思われるものも付いている。

その人は、彰の横に立っており、存在を感じるには感じるが”いるようでいない”まるで『幽霊』のような存在。

その男の肌の色は、半分だが見ることが出来る、肌の色は全身『半透明の紫色』。

眼の色は『透き通るような青色』、髪は『黒色』で頭には金色の輪がはめられており、その金色の輪で前髪を掛からないようにしてあるようだ。

だが、後ろ髪は纏め切れていないのか、耳から後ろは背中まで掛かる長い髪となっている。

服は”古代ギリシャの衣装に似た、布状の服を下半身に一枚まくという”衣装、その布状の服は膝辺りまで掛かっており、動きにくそうな衣装にも見える。結び目は右側の腰に団子状になって結ばれている。

「こいつが”見える”か？」

彰が大河と彩香に問いかける。

この質問どこかで聞いたことあるような……そうだ、ツヴァイも同じ質問を。

その時、大河はツヴァイの質問を思い出した、あの時のツヴァイの一言とこの質問の意味はまるで同じ。

「俺には見える」

大河がザ・パートナーを見ながら答える、この時の大河は『誰にでも見えて当然』という考えが定着している。しかし次の一言で大河の考えは覆される。

「わ、私には……何も見えない……」

彩香が小さく口を開き答えた。この一言が意味するのは『目の前にいる大柄の男』が見えていないという事になる。しかし視力に障害がある訳でもないし、少し戸惑ってから言う所を見ると、嘘をついているわけでもないだろう……なら本当に見えていないのか。

「お、おい……見えないって、ここにいないじゃな……」

大河はそこまで言い掛けた所で、ある事が頭をよぎった……それは『能力』と『ツヴァイの質問』。

あの質問が意味するのは『見えるか、見えないか』のではなく、『能力が見える者か、見えていないか』という質問という事。

そして、もう一つがツヴァイの口ぶり……例えば能力と言う物が誰にでも見えるのなら、あんな事を言う必要はない、あんな事を言うのは『相手には見えていないと思っていたら見えていた』つまり能力を見るには何らかの条件が必要という事。

その結論にたどり着くまで時間は掛からなかった。

「……椿さん、これが見えるって事は俺は『何らかの条件』を満たしているという事ですか？」

いきなり過程をぶっ飛ばして、聞きたい”結果”だけを椿に求める。

過程が無いいきなりの質問に少し戸惑うが、意図を理解したのか質問に答える。

「その質問、君には見えていてその上で何の”条件”を満たしてるか知りたいって事になる訳だが？」

一応確認を取る為に訊きなおす椿、それに対し大河は頷く。

彩香は既に何の話だかつてこれていない、だが今は大河の質問に答えるほうが先だ、だがこの分だと狙われるもの大河のほうが多くなるだろう、そう思いながらも椿は話す。

「じゃあ、単刀直入に話させてもらおう……大河君、君にはどうやら”能力の片鱗”が覚醒しているようだ」

「え！？」

突然の宣告に驚きで言葉も出ない大河、彩香は意味が分っていないようだが”何か重大な事”というのだけは大河の反応を見て分かった。

「能力というものは”能力を持つ者、即ち『能力者』にしか見えなないものなんだ、それが見えるって事は大河君が『能力』を持っているということだ」

しばらくの沈黙の後、閉ざしていた重い口を開き一言訊く。

「……それはつまり、俺が”能力者”という事ですか？」

その質問に対し椿は素っ気なく「そうだ」と返す。

大河は最初こそ混乱したが、直に我に返り椿にあることを訊く。

「俺が……俺が能力者という事は、狙ってきている能力者達とも戦えるってことですか？」

「さあな、とりあえず君も能力の能力に関しては私達は何も知らない、たった今君が能力者ということが分ったんだからな」

希望を閉ざすような返答だが、実際大河自身もどんな能力かは分っていない。つまり、能力を持っているが使い方も知らない『猫に小判』という事だ。

だが、この時彰も同様だが椿は大河の能力に期待をしていた、何故なら能力組織スキル・メンバースやボルテクスが欲しがるとの”強大な能力”を秘めているかもしれないからだ。

ボルテクスが欲しがると暴食の能力がどれ程の物なのか、それはまだ未知数。

それは彩香も同じ、今はまだ能力こそ覚醒していないが、暴食の血を継いでいる者なら確実といっているほど、能力が覚醒するだろう。

何時覚醒するか分らないが。

「で、本題だが能力についての説明を行う」

椿がそう言うと彰はザ・パートナーを引っ込め椅子に座った。疲れているのか、嫌だったのか、背もたれに凭れ掛かり疲れた顔をしている。

「まず、能力というのは生物の『強い精神によって生みだされる力』これを能力と私達は呼んでいる、そして能力は自分が強い意志を持った時に覚醒する」

この時、この言葉を聞いた彩香は「自分にも強い意志があれば……」と心の中で深く思った。今回こそ襲われたのは大河だけだったものの、『次は自分が狙われるかも知れない』その想いもあったが、一番はやはり『劣等感』。

「次に話すのが『能力の二つの掟』だ、その掟の一つが『能力者には一つしか能力が覚醒しない』、二つ目が『能力は互いに異なる能力を必ず持つ』、この二つの掟は今まで破られた事も無ければ、これ以上の掟が創られたことも無い、つまり絶対的掟だ」

この時点で大河は説明を理解できていた、だがそれと同時に”疑問”も生まれた。

しかしその疑問は今では言うべきではない……言いたいのには山々だ

が、今言ったら自分の頭の中が整理しきれなくなる、そう考え大河は”それ（疑問）”を胸の奥にしまっておいた。

「と、まあ言える限りではこんなところだ、私達も能力については下手に発言できないからな」

椿の説明が終わったと同時に、彰が立ち上がり椿に「時計を見ると一言掛ける。」

すると椿も「もうこんな時間か」というと、紙を取り出し大河のベットのの上に紙を置く。

大河は何をやっているのか、それを訊こうとしたが。

「この紙には『異端学校』への地図が書いてるからな、退院したら是非来てくれ、すまんがもう時間じゃあな」

椿が紙を一枚大河のベットの上に置くと、病室の出入り口の方へと歩きながら大河に言う。その時既に彰は病室からいなくなっていた。

大河が「あの、何処に行くんですか？」と訊くが、その時既に病室のドアは閉められ椿達は、病室からいなくなっていた。

彩香は何が急に起きたか、理解できず、まさに『嵐のような人』と思った。だが一つだけ分った事は、自分も能力を持ったほうが言いという事。それと『劣等感』を覚えた。

一方の大河は、自らが能力者であるという事と、暴食についての因縁を既に頭の中で整理していた。

「……行っちゃった……」

彩香が小さく呟く、大河はとりあえず頭を整理する為そのままベットの寝転ぶと、そのまま再び寝てしまった。

やはり無理して体を起こしていたのか、顔が少し引きつっており、腹に手を当てながら寝ている。

* * * * *

病院玄関前。

先程病院から出てきた椿と彰は、煙草に火をつけるとその場で一服。

そして、煙草を公衆の灰皿に捨て歩いていく。

「彰、そういえば昨日何があったんだ？ 今日もそうだが、理事長と何かあったのか？」

その質問に対し、彰は何やら嫌がりながらも答える。

「……実は、暴食者が通っている学校に、俺と同時に転入してきた奴が他に四人いてな、そいつらの内『三人』が能力組織からの回し者だ、昨日はその内二人に襲われたただけだ」

椿はその答えに「そうか……」と呟く。

「なら、残りの一人はツヴァイになるだろうな……で理事長からは？」

それに対し彰は少し間を空け頷くと続けるように椿に言う。

「理事長からの連絡だと『アサシン』が、対暴食チームとして動き出したようだ」

その答えに対し椿は不安げな思いと、僅かな焦りを抱いた。

* * * * *

そして椿達が病院を訪問してから一ヶ月が経った、念のためこの一ヶ月間面会は全て断っていた。彩香は一人で暮らせるといい、この一ヶ月間一人暮らしをしていた。

そして、遂に退院のときが来た。

AM9:10

彩香はバイトを休み、病院までバスに乗ってわざわざ迎えに来てくれた。

服は水色のTシャツに、短い白色のズボンを履いている。

大河の家は親がいないため、金が足りない。そこを補う為に大河

が毎日バイトをしている。

大河が学校に行く日は、入学式・始業式・終業式・卒業式、又は月に一日だけバイトを休み、学校に行っているのだ。つまり、大河がツヴァイに襲われた日は始業式という事になる。

そして大河が風邪を引いたときは、彩香が変わりに行ってくれている、大河と彩香は互いに支えあって生活している訳だ。

そして、この入院で休んでいる間は彩香が変わりにバイトにいつていたことになる、中学生の女子にとっては、相当は苦痛の一ヶ月間だったに違いない。

更に、一ヶ月一人暮らしというのは精神的に響くものなのか目の下に濃いクマがある、年頃の女の子として、これは平気なのだろうか？、とも思うが着てくれた事に大河も嬉しさを感じていた。

そしてバスに乗った途端、彩香の緊張の糸が切れたのか、椅子に座るとそのまま寝てしまった。

その寝顔は少しだが、笑っているようにも見える寝顔で、やはり何時殺されるか分らないという状況下で、一人暮らしというのは相当辛かったんだろう、そのせいで寝れていなかったのかもしれないので、大河はとりあえず家に着くまでは起こさずに寝かせておいた。彩香が座っている席は大河と同じ最後尾の椅子なので、他の乗客には迷惑は掛からないだろう。

く第六話『片鱗』（後書き）

次話の投稿が少し遅れそうです、すいません。

第七話『ルーチェ?』

病院から家までは一時間程、その間彩香はずっと眠っており大河はバイトや暴食の事等この先どうやって暮らしていくか考えていた。家の近くにあるバス停に着くと、彩香を起こそうとしたが、中々起きてくれない。

バスの運転手もこれ以上長引くのは御免だろう、と大河は思い、仕方なく大河は彩香を負ぶって運転席の方へと行く。

財布は彩香のズボンのポケットに入っており、取ろうとすると手がくすぐったいのか、彩香の足が、モジモジ、と動くので少し手間が掛かってしまった。そして二人分の乗車料を払いバスから降りる。そのまま大河は彩香を背中に負ぶりながら、バス停から自宅のアパートのほうへと歩いていく。

歩いている途中大河は、まだ五年前親が連れ去られて間もない時はよく慰める為に負ぶっていた事を思い出した。五年前はまだ大河は小学六年、彩香は小学三年、位のときになる。

しかし流石に中学二年の身体となると、色々と成長して体が大きくなっている訳なので無論、体重も重くなっている。

一步、一步、歩くのに大分体力を使う。それ故に負ぶっている彩香にも大分振動が伝わっているに違いない。だが、その振動でさえも起きる気配は無く寝息が聞こえてくる。

そして五分ほどでやっとアパートに着いた大河と彩香。大河は退院初日に汗をかく運動をしたことに、少し自分の運の悪さを感じながらも、彩香を起こす事無く家までたどり着いた。鍵は入院中、大河自身も合鍵を貰っている為、今度は彩香のポケットから出さずに済んだ。

そして、鍵を開け家に入ると靴を起用に両足だけを使い脱ぎ捨て、腕の横に出ている彩香の脚からも靴を取ると玄関にそろえる事無く、

又しても放り投げるようにに玄関に置く。

大河達の家はまず玄関から入ると、短い廊下がありそれから右に大河の部屋、左に彩香の部屋があり、トイレは大河の部屋の隣、風呂は反対側の彩香の部屋の隣にある。

そして、廊下の先にリビングとキッチンがあるという、シンプルな家だ。

しかし、部屋といってもシングルの布団を一枚敷いてしまえばそれだけで、部屋の九割は使ってしまう、その為学校の鞆等は枕の上に空いている僅かなスペースに置き、部屋というよりかは寝室といった方が正しい。

彩香の部屋のドアは薄い引き戸の為、彩香を抱えていても足で軽く横にスライドさせ、開ける事が出来る。

「そこまで汚くはないか」

ドアを開けると、そこには布団が敷かれたままであり、制服などは枕の上に畳んで置いてあるが、ここ最近使っていないかったのか薄らと埃が積もっている。逆に私服をここ最近着ていたのか皺が寄っている。隠したつもりなのか更に大河のバイト先の女性用の制服も僅かに鞆からはみ出していた。更に他にも見慣れない道着が折りたたまれている。大河は学校の道着だろう、と思いそのことは特に気にも留めなかった。

しかしバイトの制服を見る限りやはり学校に行かず、バイトに行っていたのだろう。と思い罪悪感を感じた。

そして、彩香を敷きっぱなしにしてある布団の上に寝かすと、

「ここを一ヶ月間、家を守ってくれてありがとな彩香」

と寝ている彩香に呟きそのまま静かに部屋のドアを開け出て行った。

部屋から出ると大河は古い廊下を軋ませながらリビングへと歩いていく、そしてリビングにたどり着くと、そのままフロアリングの床に腰を下ろし、壁を背凭れにして座り込む。流石に退院直後で一

人背負いながらあの距離を歩くと意外と疲れるものだ。

しかし、その疲れは今にせずそれ以上に今は”能力”の方が気になって仕方が無い。

「……能力か」

大河は入院中も、あの話を聞いた後から『能力』と『暴食』という単語から頭が離れないでいた。

そもそも”自分自身が持っている能力とは何か”まずはそれを知らなければならない、その為には異端学校という学校に行き、能力について知らなければならない。

更に『能力組織・ボルテクス』等、自分達は今この時間も命を狙われていると考え、他の考え事に集中が全くできない。

「……退院したし、異端学校に行ってみたいけどな」

徐にズボンのポケットに手を伸ばすと一枚の紙切れを取り出す。

その紙切れはクシャクシャ、で、何回も開いたり折畳んだりされたのか皺だらけになっている。その紙切れを広げるとそこには、何かの地図が書いてある。それも手書きだ。

しかしこれこそが、入院中に椿から貰った『異端学校への地図』。

この地図はもう入院中でも何回も眺めた紙切れだ、異端学校自体は行った事無いが地図の形は殆ど完璧に覚えている。最も地図に書いてある字や線が荒々しく、初めて見た時は解読するのに時間を要したが、今ではその荒々しい文字も読めるようになり、場所も把握できている。

だが一つ問題があった、それが場所が遠すぎるという事。地図が示している異端学校のある場所は『山梨県の富士山付近』。これは金があり無い大河達にとっては、遠すぎる場所であった。

だからと言って歩くと何週間掛かるか見当もつかない、それに”今も”自分達は命を狙われているのだから。そう思うと大河は先が思いやられる。

大河は悩んだ、このまま家にいてもまた襲われる可能性があるからだ……次は恐らくだが、ツヴァイが失敗したとなると、ツヴァイ

より上の奴が襲いかかってくるだろう、そう大河は確信できていた。しかし、このまま動かないのはもつと危険だろう。相手には大河が乗るバスがばれていたから、大河が通う通学路を組織が知っていたから、大河のバイトの休みの日をしっていたから、ピツタリの時間帯で大河を襲撃できたのだろう。

それにしても、ここ一ヶ月間狙われなかったのは何故か運がいいだけか、それとも向こうの計画か。

とそこまで考えたところで、突如古い木が踏まれ軋んでいる音が廊下から聞える。

即座に大河は廊下に振り返るがそこには誰もいない……気のせいかもしれないと思つた直後、大河は彩香の部屋のドアが僅かに開いているのに気付いた、先程自分は閉めた筈なのに。

「これは”敵”が来たのか!？」

それを見て大河は確信した、家に敵が侵入しているという事を、そしてその侵入者は彩香の部屋に入ったということを。

大河は即座に立ち上がり、リビングから彩香の部屋のへと駆け出す。

廊下が走っている大河の足の踏み出す力に悲鳴をあげ、侵入者に”大河が彩香の部屋へと向かつて着ている”と音から悟られてしまっただろう。そうなれば、侵入者は標的を大河へと変えるかも知れない。

『だが構わない』、そう大河は考えていた。むしろ自分に標的を変えてくれたほうが大河にとっては助かる訳だ。

だが本当に何故この一ヶ月間敵の攻撃が無かったのか……何か理由がある筈、しかし今はそのことを考える余裕は無い。今は一秒でも早く部屋に行く事が先決。

この時、家が小さい事に初めて大河は感謝した、廊下は大河の足の踏ん張りに抜けるんじゃないかという音を出しながらも、彩香の

部屋の前には三秒くらいで着く事ができたのだ。

そしてドアをスライドさせ開けようとするが今度はドアが閉まっております”開かない”。鍵は付いていないので、こうなると可能性は一つ、内側から閉められているという事。

スライド式のドアは、外部の者を部屋に入ってこれなくするのは実に簡単、開ける時にドアをスライドさせる方に、棒等で突っ返させるのだ。そうすると外からはドアをスライドする事が出来なくなり、壊すかつかえ棒になっている物を外して入るしかない。

「彩香！ 引っ掛つているものをどかせ！！」

名前を叫び、起こそうとするが返事が無い……。

まさか、既に殺されて……いや、違う！。

大河はこの考えが頭に浮かんだ瞬間、自分の愚かさを同時に知った。まだ生きているかもしれない彩香を故人と考えてしまった自分が、愚かで情けなく思えた。実の妹を根拠もなしに故人と扱ってしまった自分に怒りさえ覚えた。

「……くっそ」

自分に対する愚かさとこのドアを開けられない事に苛立ちが積もる。

とりあえず今はこのドアをどうにかしないと事は進まない。

先程は足でも開けられる便利なドアと思っていたが、まさかこの僅かな時間で便利ではないドアに変わるとは、思ってもみなかった事だ。

「彩香！ いるなら少しドアから離れているよ！！」

すると、大河はドアに体ごとタツクルしてぶち破ろうとする、一回では流石に破れなかったが、二回目ではドアがタツクルした場所を中心に折れて破る事に成功した。脆いドアで助かった。

大河はドアをぶち破った勢いで、彩香の布団の方へと飛び込むように倒れる。

ドアの近くに寝ていれば、彩香も怪我をしていたが悪い寝相のお陰でドアから大分離れていた所にいたので踏まずに助かった。

ドアの木の破片がいたる所に飛んでいるが、それ以外は特に変わったものは無い。だが、一つここで疑問が浮かんた、それが『つかえ棒となっていた物等が一切無い』という事。

しかし、彩香も見る限りでは無害に見えるが……。

「彩香、起きろ！ おい、彩香、緊急事態だ！！」

叫びながら揺さぶり、やつとの事で彩香は目を覚ました。

「えっ、何！？ 火事？」

飛び上がるように起きた彩香だが、まだ眠いのか目が半分しか開いていない上に、なにやら変なことまで言っている、それに身体全体の力も抜けている。

キヨ口、キヨ口、とあたりを見渡した後に数秒ほど固まると、自分の記憶がバスの中で途絶えているのと、今自分が家で寝ているということから、誰かに家まで運んでもらったと推測でき、寝ている間に誰に運ばれたのか、そう考えると少し恥じらいが沸いてきた。

だが、今はそんな茶番をやっている暇は無い。今はまず敵を探すのが先決、と大河は思いあたりを見渡すが見える範囲では人影らしきものは見当たらない。

「彩香、まずい事になった、今ここに……」

そこまで言い掛けた所で、大河は彩香の方を見ながらある異変に気付いた。それも部屋の中だからこそ気付けた異変に。

「どうしたの？ 大河？」

彩香は不安を感じていないのか、呼び方がいつも道理の呼び捨てで硬直している大河に呼びかける……しかし、大河は大きく不安を感じた、いや不安というよりは恐怖を感じたのだ。

その恐怖とは『影』。

いくら窓が無い彩香の部屋でも、影くらいはできるものだ……だが、その影がどういう事か『途中で消えている』。薄い、影が短いだとかそういうものではなく、影が何かに遮られ途中から途切れている。

「彩香……後ろを向かずにこっちに来い、いいか！ 絶対に後ろを

向くなよ！！」

根拠は無い、後ろを向いてはいけないと言う『根拠は無い』、だが大河は嫌な予感がした、今後ろを向くと何か嫌な事がおきる気がしてならなかった。しかし人は『やるな、見るな』等と言われると見たくないものでも、見たくなってしまうものだ。勿論今の彩香も同じ状態。

「後ろ？……一体何が」

「駄目だア！！ 振り向くなア」

焦りと恐怖からか、少し注意するつもりが思いつきり腹から怒鳴り、叫んでしまった。流石にここまで注意されると、好奇心も消え逆に恐怖が湧き上がってくる。

彩香は振り向こうとした所で叫ばれた為、その叫び声で後ろを向かずには済んだ。

大河は恐怖と焦りを隠しきれないのか、息を荒らげ、汗が額から垂れてきている。そして彩香が後ろを見たいという気持ちを抑え、立ち上がるうとした時。

突如、彩香の後ろから光を断絶したように真つ黒な人と思われるものが、出現した。同時に薄暗い部屋でも、十分に確認できる『銀色に光る物体』が彩香の首を狙おうと振り下ろされようと、掲げられているのを確認できた。

その物体の先端は尖っており、見た瞬間『刃物』と認識できた。

「伏せる！！」

大河は気付けば彩香に対して伏せるように命令しており、自らは彩香をなんとかして刃物が届かない場所に移動させようと考えていた。

彩香は混乱しているが、ここは大河の言ったとおり伏せる。が、敵はナイフで切りつけるではなく、刺し殺そうとしている、狙いは『首』と大河は推測できた。

首に突き刺し頸動脈をそのまま切ってしまう、という考えだろ

う。

防ぐにはどうすればいいか大河は考えようとしていた……だがこの時既に身体は頭よりも先に動いていた。

先に動いた身体は、気付けば伏せている彩香の上に被さるよう飛び込んでおり、ナイフは彩香に被さっている自分の右肩に突き刺さるうとしていた。

まずい……肩を刺されたら、右腕全体が使えなくなっちまう。

しかし、ここで咄嗟に大河は右手をナイフの前に出していた。本能が偶然か、どちらにしてもそのお陰で掌をナイフが貫通したが、右腕全体が使えなくなるという状態は防げた。

「きゃ
」

彩香が悲鳴を上げようとしたが、大河が飛び込みそのまま衝突した為、悲鳴をあげる前に布団に上から押し倒されていた。頭の上には大河の身体があり立とうにも大河が起き上がらなければ立てない状態だ。

大河は彩香の上に飛び込み、ナイフを防いだのはいいがこの怪我では拳は使えそうに無い。出血も思ったよりひどくこれではツヴァイの時の二の舞になってしまう。

血が止まりそうもないな……痛みで右手は麻痺しているか……。

この時、大河は右手の感覚が殆ど無かった。無論、刺された痛みからの麻痺。と考えるのが普通だろう、だがこの時大河自身もまだ気付いてはいないが、この時既に大河の身体の中に眠る『何か』は目を覚ましていた。

そんなことも知らない大河は右手をかばうように、彩香の頭の上からどき、左腕と足だけで寝転んでいる状態から立ち上がる。ナイフは腕から既に抜き取られており、真っ黒な何かが手に持っている。そしてまず目に入ったのは、赤いナイフを持った立っている”真

「真っ黒な何か」。”真っ黒な何か”は体系からして『男』、完全に光は届いておらず、本当にシルエットだけが立っているように見える。これは”光を断絶している男”といった方が正しいかもしれない。そして、彩香には見えているかどうか分らないが、こんな手品みたいな事をできるのは『能力者』だけだ。

「流石”暴食者”、あの一瞬で対応するとは」

真っ黒な男が低い声で言葉を発した。容姿は真っ黒だが上着がコートか、何かを着込んでいるのは容姿から推測できた。いきなり何も無い場所から出てきたのにも驚いたが、それ以上に何故真っ黒なのか、そちらの方の驚きの方が大きい。

彩香も大河が立ち上がった後に立ち上がると、能力を持つていないのに真っ黒い男が見えるのか、足が震え、目は泳ぎ、汗は頬を伝い垂れている。

大河は『彩香にも見えている』と確信し、相手が黒いのは能力で覆ったのではなく、なんらかの能力を使い自分を黒くした、と推測した。

「その出血じゃ時間が無いんじゃないか？」

真っ黒な男が、少し笑いながら大河達にプレッシャーを掛け焦らせる。大河も能力があるなら使いたい、大河には打つ手が無い……。

それ以前に「相手の能力は何だ」「能力者にはどうやって戦えばいい」、それすら分らない大河達がともに闘える訳が無い。

「その眼何処を見ている？ 汗も運動をしていないのに大分出てきている、更に身体が少しだが震えている……要するに貴様は恐怖している事だな」

こいつ……本当に人間離れしてやがる……。

大河は恐怖した、相手は自分の身体の状態を『見ただけで全て分っている』という事に。更に恐怖したのが、そこから心を読まれてしまうということ。

止血とかいっている暇は無いようだな……。

すると、大河からは薄らとしか把握できないが、真っ黒な男が恐らくだがポケットから何か光っている物を取り出すのと同時に、血が付着しているナイフを大河のほうへと投げつける。

そのナイフは車輪のように縦に回転しながら、空中を切りながら大河の方へと向かってくる。大河と彩香からはナイフが見え、ギリギリかわす事ができた。目標を失ったナイフは誰もいない壁に突き刺さり止まった。

そしてナイフから、視線を真っ黒な男に戻すと影の男が先程取り出した物をこちらに向けていた。

その物が直に『刃物』だという事が形状と光り方から大河達には直分った、しかし今度の刃物は、先程のナイフよりも刃が長く鋭い。その為大河には、小刀にも見えた。

「恐怖する事は無い、無駄な考えもよした方がいい……どのみち死ぬのだからな」

「……その言葉二度目だ」

大河はその言葉に『ツヴァイ』の時に言われた言葉と意味が全く同じ事から、半分呆れ気味に返す。

その言葉を敵が聞き終わった直後、大河の目の前で信じられない事が現象が起こった、それは『影の男の姿が消えてきている』という現象。

出てきた時もそうだが、真っ黒な男が今度は消えていく。

最初は”足元”から消え始め、その後に”腕”、そして『胴体・首・顔』と順に消えていった。

真っ黒な男が今度は消えてしまった……何処に居るか大河達には分らない。

「くそ……何処にいやがる」

大河が真っ黒な男が消えた場所を見ながら、壁に突き刺さっているナイフを左手で抜き取る。右手は出血が止まっていけない、長期戦となれば今度は死んでしまうだろう。死ななかったとしても、ツヴァイの時の二の舞になりかねない。

「……やはり、まずは止血か」

大河が自分の服をナイフで切ると、その切った部分を右手に巻きつけ応急処置を行う。その行動を行っている間も、大河は真っ黒な男が消えた場所から目を離さなかった。

第八話『ルーチェ?』

大河は敵が何時現れてもいいように、その場から目を離さず見つめている。彩香も同じく、敵が消えた場所をじつと見張っている。

だが、この見張るといふ行為は敵にとっては”好都合”。この見張るといふ行為が敵の『能力』の効力を高める手助けになっているのだから。しかし、そのことを知るすべも無い二人は依然敵が消えた場所を見つめていた。

と、その時敵が消えた方向で木が軋む音が発せられる。音からして間違いなく、何らかの力が加えられそれによって発せられた音。そう確信したのはいいが何故か大河はその時”動きはしなかった”。それも大河だけじゃない彩香も同じく、その場で動かずにただじつと見張っている。二人が何故この時動かなかったか。

動かなかった理由のひとつとして、二人はまず音の大きさと動けずにいた。それは発せられた音が、あまりにも小さかった為正確な位置が把握できなかった、それとも一つの理由が、音の大きさも含め『敵の畏』の確立が高いと考えたから。迂闊に音がしたほうへ近づけば、先程の短刀のような刃物によって、斬られることは殆ど分りきっている事。

「……………」

互いに沈黙が続き、その沈黙が大河達の精神を追い詰めていく。更に普通なら隠れている場所がばれる、又は自分の方を見張られているという状況は望ましくないのが普通。だが、この敵にとって”見張られる”という行為はむしろ望んでいる状況。

そして、先程発せられた音は敵が大河達を挑発する為ではなく、”見つけられない為に、自分の居場所を知らせる”為に発した音である。一見矛盾している考えだが、敵の”能力”にとってはこの矛盾こそが必要。

「そろそろか……」

敵があえて、声を発し大河達に自分の居場所を知らせる。更に今回は”声”で居場所を教えた為、確実に大河達は的確な居場所を突き止めるだろう。敵の策にも気付かず。

「そこにいるのか！」

大河がナイフの切っ先を声が聴こえた方に向ける。そのまま走って敵に突き刺そうとも考えたが、それではこちらが殺されてしまう可能性のほうが大きい。だが、このまま動かずに居る訳にもいかない。大河は異なる二つの考えに葛藤し、それと共に不安もつのつてきていた。敵の策が分らない、能力がわからない。そのことに対する不安感が時間が経つと共に大きくなっていく。

「暴食者……時間を使いすぎたな」

大河の心を揺さぶるように、不安を煽るような言葉を発する。この時大河は向こうから話かけてくることにも驚いたが、それ以上にもっと大河は恐れるものを感じた。

それは敵の行動、言動、全てに対する恐れ。隠れているはずなのに、見つけてみるといわんばかりに話しかけてくる敵。そして未知の能力に不安を感じた。その不安からか、今の敵に大河は言葉を返せない。更に敵の言動にも心を揺さぶられていた。

大河は、一体何の時間を使いすぎたのか、それが全く理解不能……いや、理解不能なことはそれ以外にもあるが、大河は最後の敵の言葉「時間を使いすぎた」という部分が引っ掛って仕方なかった。

この状況の中、大河はある答えを生み出した。その答えが「これ以上時間を使うのは危険」と判断したのだ。最後の言葉に何の意味がこめられているかは、大河は知らない。だが何故か危険を根拠も無く感じていた。そしてこれ以上時間をかけさせない方法はたった一つしかない、それは自らが敵に攻撃する事。大河はそう考え先手を打つべく直に行動に移す。

「っ！ お兄ちゃ」

大河が走り出して間もなく、彩香は大河の走り出した背中を見て何か”危険なもの”を感じた。今策も無しに突っ込むのは危険。そう思い彩香は大河を呼び止めようとするが今の大河の耳には入っていない。

今の大河は、敵が声を出した場所は大体の位置で把握できており、そこに向かい左手に持っているナイフで敵を刺す、この僅かな作業の事しか頭には入っていない。

彩香は、大河の耳に自分の言葉が入っていない事態に気付くまで時間は要さなかった。「このままでは、大河は、兄は何か危険な目に合う」そう思い彩香も大河に続くように、駆け出そうとしていた。

だが大河が走ってから敵接触するまで掛かった時間は殆ど一瞬。

直にナイフには重い感覚が押し掛かり、利き腕ではない左腕で持っているナイフはいとも簡単に、大河の左手から抜け宙を舞う。この時、大河はこの重さの正体をすぐに”蹴り”だと理解する事ができた。どのような体勢で蹴っているかは知らないが、自分はその蹴りでナイフを蹴り飛ばされたと、理解できていた。ナイフが天井にぶつかり、その天井から部屋の出入り口の方へと反射し、出入り口付近でナイフがやっと止まった。

丁度大河が理解し終えた時、透明な敵の短刀、正確にはサバイバルナイフが大河の腹を裂こうと振り上げられていた。

だが大河からは敵を見ることは一切不可能。つまり、大河が状況を理解した時には、既に絶望的状况に変わっていたということ。

しかし、この時敵は大河の手を完全に封じたとは思ってはいない。つまり、敵は大河の更なる”策”があると考えていたのだ。

やはり、ナイフは防がれたか……だが、次の策は。

敵の予想は的中、大河の本当の狙いは”刺す事ではない”。本当の狙いは敵ごと、この部屋から出るという事が本当の狙い。

この時大河には武器は無い、しかし元々この部屋から敵ごと外に出ることが目的の為、武器がなくても大河にはまだ”身体”という、

最も扱いやすく、最も脆い武器が残されていた。

そして、その最も脆い身体という武器で出した攻撃が全体重をかけた体当たり。実に単純な動作で、実に見切りやすい攻撃だが、今の大河にはこの考えしか頭には浮かばなかった。

「焦ったな、暴食者ウー！」

敵が落ち着いた声で大河を嘲笑うように、ナイフを蹴った右足を戻すとその右足で、大河の体当たりとなっている軸足となっている左足に引っ掛ける。勿論、軸足を崩された大河はそのまま体当たりの余った勢いで、床に転倒する。

次の策まで読まれていた！？。

大河は転倒していく中、自分は敵の策に見事にやられたと後悔と屈辱を同時に味わわれた。

と、大河が地面に転倒する最中。敵は右手にあるサバイバルナイフを大河の方へ切っ先を向け、止めを刺そうと振り下ろしていた。その時の敵の心には戸惑いや躊躇は一切無く、ただ「人が一人死ぬだけ」と、その考えしか敵の心には残っていない。敵にとっては人殺しという大罪が、既に顔を洗う程度という感覚に、変わっていたのだ。

だが、この時敵は自分が致命的ミスをしている事に気付かなかった。

大河を突き刺そうと、振り下ろされる右手に持つサバイバルナイフ。敵は完全には大河を殺すということしか今の頭には無い。これこそが敵の致命的ミス。

「まず一匹ー！」

高らかに自分を震えたたせるように、声をあげサバイバルナイフを大河の心臓目掛け突き刺す。

筈だった。敵が高らかに声を発した直後大河の後方、つまり彩香

が居た方向から木が蹴られたのかというほど、大きく木が軋む音が部屋に響き渡る。直後敵は音が発せられた方に、反射的に振り返る。振り返った先の視界に入ってきたのは、左足を軸にこちらに回し蹴りで右足裏を突き出している、もう一人の暴食者彩香の姿が目に入った。

しまった、と思う間も無く敵の腹に激痛が走る。

ボーリングの球を腹に投げ込まれたような、腹から全てを吐き出しそうな瞬時的かつ重い痛みを感じた直後。次に敵を待っていたのは追撃ともいえる、鈍く重くそして、鈍器でねじ込むように腹を押されているような持続的な痛みが敵の体を襲う。

この二つの痛みを同時に味わった敵は、瞬時的な痛みと腹を押されている謎の力により部屋の抜けているドア、つまり廊下の方へと押し出されるように蹴り飛ばされた。

「ぐつばあ！」

敵は蹴り飛ばされ、そのまま背中が廊下の壁に直撃。まず常人には出すことが不可能な程、力のある蹴り。敵は瞬時に蹴られる直前の事を、僅かに最後に見た光景を必死に記憶から探り、その記憶をパズルのように頭の中で、組み立て一つの光景にしていく。

そして、記憶を探り始めてから十秒もかからずに敵の頭の中で一つの”光景”が完成した。

その光景は彩香に蹴られる直前に敵が振り返り向いた時の光景。そして次はその中から異変、あるいは何か変わったもの、つまり”能力”を敵は必死に頭の中で探っていた。

（何かある筈だア……これ程の威力をたった一本の足で出すには不可能、ましてや女子などには）

怒りを必死に抑えながら、冷静に頭の中にある光景から”能力”を見つけ出そうとするが一向に能力と思われる異変どころか、能力の変化すら見当たらない。

（この俺がア……この俺の眼が異変を、変化を見つけられねえだと

オ！！）

自らへと劣等感と変化を見つけられなかった自慢の眼に、敵の怒りが更に沸いてくる。ここで敵の怒りを更に煽ったのが「たった一発でここまでやられた」という事と相手が子供、ましてや女にここまで屈辱を覚えた事に敵の怒りは頂点に達しようとしていた。

そして一方の大河達。

「さ……やか？」

大河が驚きのあまり、言葉が途切れてしまう。勿論何に驚いたかという、それは自分の目の前に居たと思われる敵を一瞬で蹴り飛ばしてしまった、妹に驚いていたのだ。一体どこからあれほどの力がある蹴りを繰り出せるのか、全く持つて不思議で仕方が無い。「本当に自分の知ってる妹なのか？」と思うほど驚いたせいか、彩香の名を呼ぶ時少し疑問詞になってしまった。

一方の彩香は突き出した足を戻すと彩香自身も、この威力と見えない敵にピンポイントで当てた事、何より自分にここまでのことが出来る事に驚いていた。だが、それ以上に今は大河の状態のほうが彩香にとっては気がかりな事、足を戻すと敵のほうへは目もくれず、すぐに大河のほうへと目をやる。

「っ……お兄ちゃん！！」

何も言わず、いや言いたい事がありすぎてか、どの言葉を選びかけていいかわからずその結果最も思っていたこと、つまり大河の名をそのまま呼んでしまった。だが恥やそういうものは一切無くただその名を呼ぶのに全ての思いをこめたと、少なからず彩香は思っている。

その場で自分の名を呼んでくれた彩香に対し、大河は嬉しさも感じたがそれと同様にまだ過ぎ去っていない、恐怖があることも感じていた。

「……助けてくれてありがとな、彩香」

大河が”何かを拾い、ズボンに入れる”動作を見せた後、立ち上がると彩香に優しく一言掛けると嬉しいという気持ちを抑え、表情を一変させると敵が飛ばされたほうに目をやる。彩香も大河の表情が一変したのを見て、即座に敵を吹っ飛ばしたと思われる方へと向き直る。

すると、まず視界に入ってきたのは分厚いコートを羽織った男と思える人物。その者の顔と体つきからして、二十代後半から三十代だろうと、推測がついた。

その人物の容姿は極めて珍しい格好ではなく、どこにでもいそうな厚着の格好。上にはどこにでもありそうな、濃い紺色のコートを羽織り、その下には黒いインナー、右手には大河が短刀と見間違えた、サバイバルナイフが握られている。ズボンは長く色は黒色。一見どこにでもいそうな極普通の格好。あえて特徴を挙げるのなら、髪の色だろうか。

染めたのか、地毛なのか、髪の色は白髪。とてもじゃないが、老いて白髪になったとは身体能力から考えてありえないだろう。

以上のすべての事をふまえ、大河は敵の容姿から顔全てを自分の脳内に焼け付けた。もし逃げられても直分るようにと。

「小娘がア……！！」

怒りをあらわにしたような鬼のような眼で、彩香を睨みつける。

彩香も即刻に自分が怒りの標的になっている、という事は直ぐに理解できた。大河は敵の行動の一つ一つに気を配り注意深く、敵を観察している。

「覚悟は出来ているんだろうなア！？」

次に敵は怒り狂った心を必死に抑えているのか、そのせいで表情は歪んでいる。大河は少し動揺したが、敵が今睨みつけているのは彩香のみ。一方の彩香は動揺の心を消すべく、敵を見つつ、その行動を頭の中で考えるという事を極端にやめている。少しばかりの誤魔化しにはなるが、この眼に睨まれている限りは落ち着けそうにも無いだろう。

「……覚悟、とは？ 一体何の事だ」

答えられない彩香の代わりに大河が、敵の言葉に答える。敵の耳にその言葉が入ったか知らないが、大河が話した時敵は表情を少し変え、段々落ち着きを取り戻しているのは大河には伝わってきた、最も推測に過ぎないが。

「覚悟つてのは俺を殴ったことに対する覚悟！ つまり死ぬ覚悟はあるのかと訊いているんだ！！」

大分落ち着きを取り戻したのか、大河の問いに敵は答えてきた。質問を出しといて立場がないが、大河には敵が”標的である自分の問いに返答した”事に、敵が余裕を持っているということを感じ取れた。彩香も敵が落ち着いてきたのと同時に、自分の中で考え事を極端に減らす、という掟を捨てる。そして相手の言葉を何秒か遅れて改めて理解し終えたとき、彩香はこの敵はやはり底知れない不気味さを持っていると改めて感じた。

一方の大河は、彩香とは全く違う所に目をつけていた。大河が目をつけているのは「敵が何故未だに座っているか」そのことに対して大河は疑問と違和感を抱いていた。大河は「あれほどの運動神経と、刃物を持っているなら俺達にいつでも切りかかって来れる筈」そう思っていたからだ。だが実際敵は、切りかかって来るどころか立ち上がるうとすらしない、ましてやこうして問いにも答えている。そこに大河は疑問と違和感を感じていた。

敵は意図的に大河に疑問を抱かせる為に、問いに答えたのか、それすらも大河達には分らない。

全く敵のことが分らない。そうなるとまずは逃げる事が先決、考え事は逃れた後からでも遅くない、と大河は考え彩香に「逃げる」という事を伝えようとした途端、大河はあることに気付き怒りすら出ない絶望と、禍々しい恐怖を再び感じた。

「……お兄ちゃん？」

彩香が大河の顔を見て、異変に気付く。先程迄、兄大河の顔は「なんとか生き残る」という小さな希望が感じられていた顔だが、今

の兄の顔は一度も見たことがないような、絶望しか感じられない精気が抜けたような顔。

一体何があつたのか尋ねようとしたが、何故だか兄から答えが返ってきたとき、自分は途轍もなく後悔するような予感が、彩香はしてならなかった。その気持ちが悪魔をしたのか、兄の大河に再び尋ねる、という行動は取れなかった。

「何を戸惑っている……暴食者、怖じ氣ついて」逃げる事」すらできなにか？」

敵は視線を彩香から大河のほうへと向けると、表情は笑っており嘲笑うように大河に問う。大河はその言葉を聞いて確信した、この敵はやはり自分達を追い詰める為に、この行動に出たのだと確信したのだ。

その行動とは敵が部屋の”出入口口に蹴り飛ばされた”時、敵は最初こそ怒りで冷静さを失っていたが、その時自らの居場所に敵は注目した。敵は自分が”出入口”に居る事を知り、それと同時に自分が部屋から出るのを許さない限り大河達は部屋から、出ることは不可能。と考へ”動かない”という行動をとっていたのだ。

彩香も敵の発言から、五秒ほど後に敵の言動の意味を理解できた。理解したのと同時に底知れぬ恐怖を、敵の表情から感じた。

「……俺が味わった屈辱を、怒りを、貴様らが味わえ!!」

↳ 第八話『ルーチェ?』（後書き）

一ヶ月ペースになると思います。

く第九話『ルーチェ?』

「まずは、貴様だア!! 暴食の娘エ!!」

すると、白髪の敵がサバイバルナイフの切っ先を彩香に向けるとその場で立ち上がる。が、やはりその場からは動こうとはせず、こちらに切っ先を向けるだけでそこから先の行動は行わない。

それに対し、彩香は半歩後ろにたじろぐが白髪の敵に見られている、という事であるべく恐怖しているという事を表に出さないように、と感情を押し殺そうとするが。

「”恐怖”しているな? 暴食の娘よ……貴様の感情は全て読み取れるんだよオ!!」

思った矢先、白髪の敵の言葉が彩香の心を突くような台詞を叫ぶ。その言葉に彩香の心は真正銘に砕けた。それと同時に彩香が必死に抑えていた恐怖という感情が、心の奥底から溢れ出し、彩香の小さな体を震わせる。

大河の耳にもその言葉は届き、それは絶望している大河の心も揺さぶった。確証も無い嘘かもしれないが、白髪の敵が人間離れた”能力者”であるという事もあり、大河は否定し切れなかったのだ。ならばどうやって、白髪の敵は心を読み取ったか。それは汗、呼吸、動き、姿勢、表情、眼、皮膚。それら全てを白髪の敵は『眼』と今迄の暗殺経験から、標的の心情を読み取っているのだ。つまり、白髪の敵に”見られたとき”見られたものは、心も同時に見られているという事だ。

そして彩香は自分が思っていることを、見事に読み取られたことに”恐怖”を感じていた。不気味さや、凄み、勘が鋭いなどではなく、隠していた筈の自分の心を。感情を読み取られた事で「この男には隠し事は通じない」と、自分の中で自分を追い詰めるような理

屈を作ってしまった。と直後。

「今貴様は、この俺を”騙したりはできない”と思ったな？」

追い討ちをかけるように、続けて彩香の心を突き刺すように言葉を放る白髪の敵。その言葉に更に恐怖を煽られる彩香。

が、それでも彩香の心は折れはしなかった。騙せない、心も読まれている。けれども彩香は、その場で”諦める”という事だけは決して考えはしなかった。

（この暴食の娘……強がっているみたいだが、既に精神はやられているな）

白髪の敵は彩香の、荒い呼吸、焦点が合わない眼、皮膚から少しだけ出ている汗、震えている身体。それらか、彩香の心情を白髪の敵は読み取ったのだ。

と、絶望の表情を見せていた大河も妹の事となると気がかりなのか、先程から白髪の敵に問い詰められている、彩香の方へと振り返る。すると、その視線の先にいたのは恐怖に怯えながらも、その恐怖に正面から立ち向かっている彩香の姿。小さな身体を震わせながらも、目頭に涙をためながらも、その恐怖に負けず立ち向かっている彩香の姿だ。

彩香……。

「ここまでとは、予想以上だ……」

白髪の敵が自分の予想をも超えた彩香の精神力に、小さく呟く。

が、その言葉は雑音が無い静寂なこの部屋では、普通の言葉と同様に部屋に響き渡った。勿論その言葉を、神経質になっている大河が聞き逃す筈が無い。

「おい……今予想以上って言ったよな、つまりお前はこれが予想でなかったんだよなあ!？」

自らが抱えていた絶望が、ショックが、彩香のこの一ヶ月間受けていた緊張と、更に今受けている恐怖と絶望に比べればどれ程小さ

いものか。更に妹の彩香はその緊張と恐怖に立ち向かっている。投げ出さず、恐怖に怯えながらもまだ生き延びようとしている。それを見て大河は自分がいかに愚かか思い知らされた。同時に、白髪の敵が発した言葉に大河は希望を持てた。「こいつは完全には予想は出来ていない」先程の言葉から、大河はそう考え再び立ち直る事ができたのだ。

白髪の敵にとっては先程の咄きは、大失態だろう。折角精神を追い詰めた敵に、助けの術を教えてしまったも同然なのだから。

が、標的に、自分のボロ。もしくは教えたくも無い情報を教えるのは馬鹿のやること。そう考えている白髪の敵は先程の失態を、それに対する悔しさを自分自身の励みにかえ、気持ちを切り替え、次はその質問にどう返答し誤魔化すか。既に白髪の敵はその考えに頭を切り替えていた。

そして返答は今迄の暗殺経験上から直ぐに探り出す事ができ、それを大河に返した。

「……ああ、そうだ、俺はこの状況になるのが読めなかった」

啞然。大河は白髪の敵が絶対に否定するような、言葉を返してくると思い心構えしていた。だが返答は意外にも、その読めなかったということと認める言葉。それもあっさりと白髪の敵は迷う事無く、濁す事も無く簡潔に返答をした。あまりにもあっさりと認めたことと、今迄の白髪の敵の行動から、大河は”逆に”疑心暗鬼になってしまった。これを信じていいのか、先程の咄きもこれも嘘ではないか、その様な考えが大河の頭に次々と浮かび、疑心暗鬼という状態に大河はなってしまった。

「どうした、暴食者？ この俺の返答が”信じられないか？”」
しまった。そう大河が思うまで時間は要さなかった。大河は白髪の敵を問い詰めて、ボロを出させるつもりが、逆に自分の方が白髪の敵の返答に動揺し、心を読まれてしまったのだ。

戦歴の差、それがこの心理戦では白髪の敵に有利に働いたのだ。

白髪の敵は幾多もの修羅場を潜り抜け、時には追い詰められる事もあるだろう。だがその度に白髪の敵は新たな策を企て、その状況を打破してきている。

一方の大河は、一回目の修羅場といえる、ツヴァイとの戦いでは見事な惨敗。それ以降も以前も修羅場というものは、今の今まで大河の人生には無かった。それがこの勝敗を分けた。

大河は自分で自分のことを間抜けと思ったのは、これが初めてだろう。心を読めるというのがわかつている相手に、心理戦で勝負しようなど。そのこと自体が間抜けな行動だったのかもしれない。

だが、内容を見るならばこの心理戦はある意味、大河達の”勝利”だろう。大河は疑心暗鬼になりながらも、絶望から立ち直れた。

彩香にも少しだが希望を与えてやれた。そこだけ見れば、目的を果たしたのは大河達の方の勝利だ。

勿論、白髪の敵もそれは知っている。それが故に苛立ちがつのり、白髪の敵の殺すという”土気”を高める事にもなってしまった。

「話は終いだ……暴食者達には、俺の能力によって先程以上の苦しみを受けてもらわねばならないからなア！！」

白髪の敵が声を荒らげると同時に、左手の掌をこちらにかざす。

また能力を使ってくる、と思った大河は、何があっても彩香を庇えるように少し後ろに下がる。

！？。

途端。怪我を負っている大河の右手を突然彩香が取り、そしてその右手を強く握り締めた。大河は最初こそその行動に少し驚いたが、その握ってきた手に触れた瞬間、握っている手を通じていかに彩香が、震えているか、怯えているか、恐怖しているか。大河はそれを手の感覚を通じて、やっと彩香の心の中を知ることが出来た。

……彩香……お前”無理”していたのか。

大河は迷う事無く右手を握っている彩香の手を、背を向けたままだがしっかりと、大河もその手を強く血の滲む右手で握る。同時に、

その手を何があっても離さないと心に誓った。

「おしゃべりの後は、まま事か？」

先程から自分の策略に見事に落ちてくれている大河達を見て、鼻で笑いながら挑発する白髪の敵。

「お前はまま事にすら呼んでねえ……カメレオン野郎が」

それに対し大河は重い口調で白髪の敵に返す。

と、直後白髪の敵が大河達の方に左手をかざしてくる。大河は何か飛んでくるのかと慎重にその左手を見つめ、警戒心を配る。

「カメレオンか……ならば、貴様らは”蠅”だ」

すると白髪の敵は次に、手の位置を何か規定の位置に合わせるように、少しずつその位置へと合わせていく。その動作に大河は警戒心を配りつつも、白髪の敵の今迄の動作と能力を頭の中で掘り返し、その記憶から白髪の敵の”能力の効果”を探っていた。

(……そうだな、こここの辺りが丁度奴の”眼”の辺りだな)

と、大河が思考を巡らせている中、白髪の敵はその位置に手が合わさったのか、その位置で掌を止める。その掌を止めた位置は、大河の眼球の前。大河からはよく確認できなかったが、大河の両目には白髪の敵の掌が丁度真中に映っており「何をされるか、判らないがこの位置はまずい」と、大河はその白髪の敵の左手目掛けて、足を振り上げる。

途端白髪の敵の口元が緩み、不敵な笑みを浮かべたのと同時に大河の眼を眩い光が襲う。

「ま、眩し……これはッ!？」

人間の眼は必ずしも一定の位置に定まる事は決して無い。必ず眼の筋肉の僅かな動き等から、見ている景色が一ミリにも満たない単位だが必ず”ブレる”のだ。なので、同じ景色をずっと見るはずが無い。が、今の大河は眩い光を見た直後から大河が見ている景色は一枚の写真のように”ブレていない”のだ。普段は眼がブレるだと

か、ブレないだとか大河は考えた事も無い。だが、こうして一切ブレずに写真のように景色を目に映されると、違和感を感じそれに気付くものだ。大河はそれに危機感を抱き振り上げた足を即座に戻すがその足を戻したとき、その戻した足のほうを見た筈なのだが、大河の眼にはそれ以前の”ブレていない”景色が映っていた。

景色が変わらない！？。

試しに大河が上を向いても景色は変わらなかった。それどころか目を瞑っても景色は大河の眼に張り付いたかのように、一切変わらず大河の眼には最後に見た、白髪の敵の不適な笑みとかざしている左手。そして背景には部屋の壊された出口と、そこから見える廊下。

これも奴の能力か……また見事に策にはめられたのか、俺はッ

！

大河はまたも、白髪の敵の策にはまってしまった事に”悔しさ”を覚えた。恐怖や絶望ではなく大河が感じたのは”悔しさ”であったのだ。勿論、白髪の敵も大河の汗や、表情、皮膚、動き方、等から『悔しがっている』という事を感じ取る事ができ、何故恐怖を感じていないのか、それが白髪の敵にとっての唯一の疑問であった。

だが、ここでそれを聞くのは考えるのは馬鹿がやること。白髪の敵は、まず第一の目的『暴食者の暗殺』をこのまま行うのが、暗殺者としての義務。そして当然の事。

（暴食の娘も同様に、視界は潰した……後は標的を決めるだけ）

白髪の敵が、歩みを大河達の方へと進める。大河と彩香は白髪の敵がいる所すら判っていないのか、キョロキョロ、と辺りを見回す、いや正確には音を探っている。耳に全神経を集中させ、木が軋む音、足音等から白髪の敵の位置を大体で割りだそうとしているのだ。まだ透明な白髪の敵の位置を大体で判ったように、またも実践しようと大河はしているのだ。

が、仮に見つけられたとしても大河の力では、白髪の敵の腕力には到底及ばないだろう。つまり、見つけるにしても彩香にそれを伝えるか、彩香同様に何か人間離れした力で白髪の敵を倒し、能力を

解かせるか。それしか方法は無い。

更に、白髪の敵は今度は自分の位置を知らせるようなことはせず、一瞬で大河達の元まで駆け寄りそのまま殺す、というこの状況に合う手段を選んでいる。

（そうだな、まずは暴食の娘にするか……奴の未知の力は脅威になりかねない）

標的を頭の中で決めると、白髪の敵がサバイバルナイフを右手に持ち直し駆け出す。

瞬間。木が大きく軋む音が発せられそれを聞いた大河は、すぐさまその方向に振り向く。彩香も気が付いたのか、即座に音がした方向に振り返る。

それと同時に大河はズボンのポケットに手をつ込み、何か光る物を取り出し”それ”を音がした方向に向ける。白髪の敵からは光っている”何か”としか最初は認識できなかったが、次に床を踏みしめ大河の後ろにいる彩香の方へと、駆け出そうとした瞬間。白髪の敵はその光っている”何か”が何であるか、それを知った途端に駆け出そうとした足の勢いを止め、その大河が左手に持っている光っている”何か”をサバイバルナイフの刃で弾き飛ばす。

同時に甲高い金属音がそこから発せられ、その光る”何か”は宙を舞い天井に”突き刺さる”。

（……こいつ、いつの間に”ナイフ”を……ッ！）

白髪の敵の目に映ったのは、紛れもなく鋭い金属の刃をもつ”ナイフ”。そう、大河は白髪の敵に転倒させられた時、白髪の敵に蹴り飛ばされた、自分の右手を突き刺した十五センチほどのナイフを、自分の横に転がっているのを見つけそれをポケットに入れておいたのだ。

だが、それも白髪の敵にとっては脅威ではなかった。暗殺という仕事柄、時には瞬間的な判断も必要とされる時がある。この白髪の敵はその瞬間的な判断を必要とされる場面を、修羅場を何十回と潜

り抜け養ってきたのだから、これ位の対応は正に朝飯前。

（いつ盗ったかは知らねえが、最早今となっては関係ない　　！！）

白髪の敵はそれに臆する事無く、むしろ隠し玉を全部使い切った、
と思い再び駆け出そうと、床を踏みしめる。もう既に白髪の敵は彩
香の布団の近く、つまり部屋の中に大分入ってきており、後一步で
彩香にサバイバルナイフが届く距離まで既に近づいていた。

そして、床を大きく軋ませ白髪の敵が蹴るように駆け出し、彩香
の懐へとサバイバルナイフを伸ばす。

瞬間、大河の後ろから一本の膝まで見える足が大河の脇腹の横
を通り、白髪の敵に今にも届こうとしていた。

（後ろから……”やはり”暴食の娘か　　）

そう、白髪の敵の予想は的中。その突き出された足は暴食の娘、
彩香の足。その足は意図的なのか、偶然なのか、不意をつく形で大
河の右脇腹から出てきていた。

が、それも白髪の敵の想定内の出来事。二度も不意をつかれるよ
うなことは、白髪の敵にとってはまず無い事。不意をつかれると分
かっていれば、その不意をついてくる相手に気を配ればいい事。そ
して後は判断力と瞬発力があれば、その不意をつくものを避けるの
は容易い事。

（これで、隠し玉は使い果たしたか、暴食者共ッ！！）

その突き出ている足を、白髪の敵は左に避けると今度はサバイバ
ルナイフを持っていない、右腕を使いその足を自分の脇腹と腕の間
に挟む。

「きゃッ　　！？」

彩香は僅かな悲鳴を口から漏らすが、それすらも言い終わる以前
に白髪の敵は、脇腹に挟んだ足の膝の部分に左腕を乗せるように置
くと、その左腕に体重を乗せ彩香の足の間接を逆の方向に曲げるよ
うに”押し折る”。

て左手にある、引きずり出した”何か”が眼に入る。

その何かの形は”白髪の敵を身体の線を縁取った様な物体”。その”物体”の胸の辺りには”黄色く発光する何か”が存在していた。

大河はそれを見たと同時に、病院内で埋め込まれた謎の記憶を思い出した。その埋め込まれた記憶の中では、大河がツヴァイの形をした”何か”を殴るとツヴァイもそれと同様に、同じ場所を痛めていた。つまりその記憶が正しければ、この”白髪の敵の形をした黄色に発光する物体”の痛みは、この白髪の敵が受けるという事。

「オオラアアツ!!」

その”黄色く発光する物体”を掴みながら、大河は右足でその物体に全力で蹴りを入れる。蹴った際に生じる反動はその時は発生はしなかったが、蹴ったという手応えはしっかりと感じていた。

蹴った位置はその”黄色く発光する物体”の位置が正しければ、白髪の敵の右足を全力で蹴った事になる。つまり、記憶が正しければここで白髪の敵は右足に衝撃を受ける筈。

「ぐうああっ!!」

白髪の敵が右足を左手で抑え、突如床に転倒する。
まさか……本当に……。

が、まだサバイバルナイフを右手から離さず、立ち上がろうとした為、大河は再び左手に持っている”黄色く発光する物体”の右手に左手で全力で殴りかかる。

「ぬうあああっ!!」

やはり先程と同様、白髪の敵は右手に痛みを感じたのか、サバイバルナイフを手から離し何か衝撃を受けたかのように、右手を左手で抑えのた打ち回る。同時に大河はそれを見て確信した。この異常な出来事。通常では考えられない出来事。

これが俺の
”能力”

。

第十話『ルーチェ?』

「これが……」

自分でも信じがたい状況に、今更ながらも驚倒する大河。

入院中自分に能力の片鱗があるということは、椿から告げられていたのだが、事実その言葉を大河は信用しきれていなかった。特に何か変わることもなく、怪我の回復が早いという訳でもない。その事から本当に自分に人知を超えた”能力の片鱗”があるのか、本当に自分を襲ってくる敵に自分は立ち向かえるか、それが大河は不安でならなかった。だが、たった今”人型の黄色く発光する物体”を二回目に殴った時、この事態を幻覚などではなく実際に起きている異常な光景と認識を持ち、これが自分の”能力”と確信を持ったのと同時に、敵に立ち向かえると自信を持てたのだ。

が、優越感に浸かるのも束の間。大河は白髪の敵の右手を痛める為に”左手”で右腕を殴った。つまり、”人型の黄色く発光する物体”から一時的だが手を離すという事になる。大河が離してから右腕を殴るまでは時間を要さず、殆ど一秒未満に終わった行為だがその右腕を殴った直後。途端にその”人型の黄色く発光する物体”が全身をビー玉のような”大量の小さい丸で作られた人の形”に変わっていくのと同時に、丸の塊となった”人型の黄色く発光する物体”が、突如として白髪の敵の身体の中へと、銃口から放たれた弾丸の如く瞬く間に戻っていく。

その光景を見「何が起きているんだ?」と、疑問を抱く大河。

大河自身、自分の能力だが全くその能力の効果を自分でも知らない。故に何が起きているか大河自身も理解不能。その為何が弱点で、何があつたら効果が切れるかも分かっていないのだ。

と、大河が何が起こったか状況を整理している最中、白髪の敵が

大河のほうを睨みつけながら、右足と右腕をかばうように廊下の壁まで背中で這い、廊下の壁にもたれながらゆっくりと立ち上がる。ダメージのせい、それとも怒りのせい、肩は上下しており息も大分荒々しい。

「暴食……」

低いトーンで、大河を鬼の様な怒りを露わにした形相で睨みつけながら呟く。『油断したら殺される』。大河の第六感がそう警報を鳴らしている。

大河は壁にもたれている白髪の敵に警戒しつつ、自分と白髪の敵との丁度中心付近にあるサバイバルナイフを、如何に白髪の敵に取らせずに自分がとるか。それと、もう一つどうやって足が折れ痛み悶えている彩香を、この部屋から運び出すか。その二つの事に思考を巡らせていた。

白髪の敵は相変わらず睨むだけで、向こうから行動を起こすということは見受けられない。大河も同様に行動を起こそうとはしなかった。

今、二歩ほど。ほんの二歩ほど歩けばサバイバルナイフが手に入る位置に二人は居る。がその短い距離が為に、二人は互いに振り返り討ちにあるのを恐怖していたのだ。ほんの二歩ほど歩けば確かにサバイバルナイフは手に入れられる、がそれは同時に敵からも二歩で攻撃を受ける位置にいるという事。つまり、この状況は先に仕掛けた方が高確率で負ける、という事だ。

カメレオン野朗も警戒してる……長期戦になれば、こっちの方が不利になるのは確実

甘ったれた考えじゃ生き残れない、大河はそう考えどんなに痛みが伴おうとも、ここから生き残ればいい、と思考を切り替えた。

だが、どうす……っ！？

とその時、彩香と繋いでいる右手に針を少しだけ刺したような痛みを覚える大河。大河は痛みから反射的に振り返りそうになってし

まったが、その手を握っているのは実の妹という事を思い出し、後ろを振り向こうとした体から力を抜く。

直後、次は彩香と握っている右手に何か違和感を覚え始める大河。一体何が起こったのか、と一瞬考えてしまったが、それを考えるまでもなく、すぐにその違和感の原因を大河は”刺し傷が開いたが為”と、率直に理解するのと同時に焦りを覚える大河。

警戒心こそないがその右手から傷口が再び開いたおかげで、大河は段々と焦りを感じてきていた。出血が多ければ、余計に長期戦は不利になる。そう考えていた為だ。

勿論大河が焦り始めている事には、白髪の敵も大河の表情などから読み取る事ができ、状況は再び大河達が劣勢となる状況に変わった。

（暴食の右手からあれほどの……成程これはしとめる好機だ）

それを知った白髪の敵は自分の心の中にある怒りを一瞬にして押し殺し、同時に表情も鬼の様な顔から心情を顔に全く出さない”無表情”に変えた。常人なら怒りという感情を抑えるには大分時間がかかる。だが、この白髪の敵は豊富な暗殺経験の中で”瞬時に気持ちを切り替える”という行為を身に付けていたのだ。この動作は白髪の敵自身も無意識に行っている動作。故に親が殺されようが、大切な物が壊されようが、白髪の敵はその相手を”標的”と捉えた時、一瞬にして”興奮状態”から”冷静”な状態へと切り替えられるのだ。

「……暴食者、その右手の出血。あと”何分持つ”？」

白髪の敵が口元を吊上げ不気味な笑みを浮かべながら、大河に語りかける。そしてこの言動による、白髪の敵の狙いは”焦りを更に煽る事”。

だがそれは大河も覚悟していた、焦りという弱点を突いてくるという事は既に理解でき何を言われてもいいようにと、心を身構えていた。しかし、頭で理解しているのと実際に言われるのでは限度が違う。言われるとはわかっていたが、その言葉は大河の予想以上に

心を揺るがした。

言われるとは分かったが、現実と空想ではこうも度が違うのか……ッ

自身が焦りを感じたことに更に焦りを感じ、自身で自分を追い込んでしまう大河。すぐにその考えを捨てようとするが、気持ちをすぐに切り替えられず、そのことに更に焦りを感じ、徐々に白髪の敵の策にに陥いていく大河。

落ち着け、落ち着け、落ち着け……落ち着

その策から脱しよう、必死に落ち着かせようと足掻く大河。だが。

途端、落ち着かせようと足掻いている大河の視界が一瞬揺らぎ、更に足から力が抜け体勢が崩れかける。

「なっ……くそっ!!」

すぐさま体勢を立て直そうと、気合で足に力を入れなんとか体勢は持ち直すが、頭と視界の揺らぎは依然治らない。大河は白髪の敵の攻撃かとも一瞬思ったが、すぐにそれとは違つと”右手の感覚”から理解する事ができた。

「……お……にいや……ん？」

大河の右手を握っている妹の彩香が、握っている兄の大河の右手に異常に不安を抱き骨折による痛みを堪えながら、必死に喉から声を搾り出し大河に問いかける。それに大河は振り向く事無く、背を向けたまま「どうした？」と答えようと口を開こうとした時、一瞬大河の脳裏にある考えがよぎる。

待てよ……この状況は

「……ど……どうし、た……？」

大河の口から発せられた返答には、荒々しい息遣いも混じっていた。大河も自身の息遣いの荒さに気付いていなかったのか、口を開き言葉を放とうとしたとき思つように息ができず、初めてその時息

苦しいと実感したのか、眼を見開き表情に驚きの色を浮かべる。

更に呼吸の乱れは安定するどころか、時間が経つにつれ逆に荒々しくなってきた。

そう思考を巡らせているうちにも、大河は足に力が入らなくなり、今度は気力などでは誤魔化せず近くの壁に背を凭れさせる大河。勿論右手は白髪 of 敵とは反対の彩香の方向になるように、自分から見て左側の壁に背中から凭れかかった。

息を荒らげ、肩を上下させ苦しそうに下を俯く大河。が、尚もサバイバルナイフからは目を離さず、白髪 of 敵の出方を見張っている。そして大河に質問を投げ掛けようとした彩香は、大河の右手の出血の酷さは自身の眼で見たので、どれほど状況が酷いか理解できていたのだ。

それは丁度大河が体勢を崩した時だ。左手で握っている大河の右手に、彩香は何か「ヌメ」つとした液体状の何かがあると異常を感じたのだ。すぐさま異常を感じた方に、右手で右足を抑えうつ伏せの状態のまま、異常を感じた方向に顔を少し上に上げ視線をやる彩香。

そして彩香の視線の先に入ってきた光景は彼女も予想外の光景であった。

赤い液体、”血”が大河の右手から巻き付けてある布を超え、滝のように溢れでており、その血は右手を握っている彩香の左手にまで達し、彩香の左腕を伝い肘の辺りで水滴のように、ポタポタと線をひき彩香が伏せている布団の上に落ちていた。そしてその事を、事の重大さを大河に伝えようと、大河を呼びかけたのだ。だが、彩香の予想以上に大河の出血は酷く尚も症状は悪化している。

無論、こんな好機を白髪 of 敵が見逃す訳が無い。大河が壁に凭れかかりそのまま下に俯いたその時、白髪 of 敵の”観察”が始まった。（完全に能力を”自制”できれば、こんな面倒な事（観察）をしな

くても済んだだろうな)

白髪の敵は大河が俯きながらもこちらを見ていることは気づいていたため、下手に動こうとはしなかった。そして大河がこちらを見ながら瞬きする時、五回に一度の確立で瞼を閉じてから瞼を開けるまでに、一秒程かかるという事に気が付いたのだ。勿論それを自分にとって良く使わない他は無い。白髪の敵は次に「何時どのタイミングで大河が」遅れた瞬き」をするか「それを観察していたのだ。そしてタイミングが分かれば、そのタイミングで白髪の敵はサバイバルナイフを取り返そうと、考えていた。

(一、二、三、四、五……やはり、五六回に一回。この暴食者は遅れた瞬きをする)

大河を観察し、瞬きのタイミングを掴んだ白髪の敵。それを理解した直後、白髪の敵は次にくるその瞬きに備え神経させる白髪の敵。決して失敗しないように、一度で大河を仕留める為に。

(一、二、三、四……この瞬間ッ！)

大河が五回目目に眼を閉じた、瞬間。白髪の敵が廊下の壁を両手で叩き、その反動を加えサバイバルナイフの元へと駆け出した。

大河達にとって、再び白髪の敵にサバイバルナイフを奪われるのは正に悪夢のシナリオ。仮に奪われたとしたら、次に取り返す機会を決して巡ってこない。故に絶対に奪われてはならないのだ。だが、その肝心の白髪の敵の行動を阻止できるものはこの場にはいない。彩香は足が折れ動けない状況。大河は出血多量で生延びるかどうかさえ怪しい。

それに比べ白髪の敵は、数回打撃を喰らっただけで命に関する怪我は無い。更には右腕と右足の痛みも消えてきている。白髪の敵にとってこの状況は絶対的優位にして、絶対的好機。

白髪の敵が最早動けない二人を尻目に、サバイバルナイフに向か

い駆け出す。

（傷口が開いたのは偶然。だが、勝利とは僅かな偶然と完璧な計算から生まれる）

そして遂にサバイバルナイフが手に届く距離まで近づき、白髪の敵がサバイバルナイフに向かい左手を伸ばす。

（貰ったアアアアアア！！！！）

そして白髪の敵がサバイバルナイフを手を取った瞬間

……つた、行くぞ」

突如右側から途中途切れている声が白髪の耳に入る。小さく呟いた程度の声だろうが、この静寂とした部屋の中ではその大きさの声でも十分聞き取れる。

白髪の敵はすぐさまその声が聞えた方向に首を捻り、その先にあるものに視線を向ける。

が、既に時は遅くその時白髪の敵の目に入っただのは一つの”拳”。その拳の行く先は、間違いなく白髪の敵の顔面。

だが、白髪の敵はその拳が誰の拳かそれを理解するのに時間は要さなかった。すぐにその拳が大河の拳だと白髪の敵は皮膚などから理解できたのだ。

そして大河は完全に白髪の敵に油断を与える為に、あえてサバイバルナイフを白髪の敵に取らせたのだ。その不意をついた拳と白髪の敵との距離は既に十センチを切っていた。

「策にはまったな……カメレオン野朗ウウウウウ！！」
激昂と共に拳が白髪の敵目掛けて突き出される。

この時大河は完全に”勝った”という心情を心に浮かべていた。この不意をついた策は決して敗れることが無い、そう確信していた。

……”やはり”な”

が、その拳は当たる直前に白髪 of 敵が咄嗟に出した右手によってコート越しに包み込まれるように、掌で受け止められてしまった。それもまるで拳が出されるのが判っていたかのように。

「暴食の能力は未知だが、どうやらコート越しなら発動はしないようだな……不発か？」

普通なら反応したとしても決して間に合わない距離だ。仮に白髪 of 敵の”視力”が並外れであったとしても、右手を出し掌で拳を受け止めるという動作を一瞬で思いつくはずが無い、”見てから”では決して動作が追いつく筈が無いのだ。つまり止めるには、予めその拳が突き出される、という事を知っておかなければ動作が追いつかないのだ。

だが、この白髪 of 敵はその拳を止めた。故に拳が突き出される以前にこの白髪 of 敵は、その事を”知っていた”のだ。

（あの時壁に凭れ掛った時、貴様の”眼”と”演技”を見抜けなければ返り討ちにあっていただろうな……念を押してコートの中に手を隠したのも正解だったようだ）

その手に取った拳を強く握り締めその掴んでいる拳から下を切り落とそうと、左手にあるサバイバルナイフを拳の上に持つてくる白髪 of 敵。そして、動脈ごと拳を切り落とそうと左手を、サバイバルナイフを振り上げた。

瞬間。白髪 of 敵の左方向から突如木が折れるような衝撃音が発せられ、反射的にその方向に視線を移す白髪 of 敵。

咄嗟に視線を移した先に見えたのは暴食の娘、彩香が拳を握り締め白髪 of 敵に殴りかかろうとしている姿だった。彩香は大河の右手の支えと左足だけで立っており、大河は自分を軸にし彩香の左手を右手で強く握り、そのまま彩香を全力で白髪 of 敵の方へと、遠心力

を利用し彩香を投げ飛ばそうと右腕と両脚に力を込め、左手からは既に力が抜けていた。

無論寝ている彩香を大河一人で投げ飛ばす事は不可能、故にまずは彩香に立つてもらう必要があったのだ。

白髪の敵は状況を理解し終える前に左手を戻そうとするが。

（間に合わない……ッ！！）

白髪の敵がそう悟るのに時間は要さなかった。そしてがら空きとなつてゐる左脇腹の辺りではなく、白髪の敵の頭目掛けて彩香が左足で”跳ぶ”。大河の遠心力も利用し、自身の左足だけで白髪の敵のほうへと跳ねるように”跳ぶ”。同時に彩香が立っていた布団を突き抜け、床の木が折れたような衝撃音を発する。

そして、大河が”跳んだ”彩香に更に勢いを拍車をかけるように右腕で、棒を振り回すように勢いを更に付ける。

（この娘、一体どのような能力を使っているのだ！？）

直前で頭を動かし、紙一重で彩香パンチをかわす。彩香の未知の力を理解できない、白髪の敵に残された道は既にそれしか残っていない。白髪の敵はその方法に賭け、眼と首に全神経を集中させ彩香の拳を見極めようと余計な考えを捨てる白髪の敵。

しかし、白髪の敵はこの手段に至るまで数々の時間を要してしまつた。つまり一手二手遅れてしまつてゐる。それはこの僅かな瞬間では致命的遅れと成り得た。

（まずい、一手遅れ

「うりゃあああああああ！！！」

激昂と共に白髪の敵の頬に全力で振り切られた彩香の拳が減り込む。同時に骨が碎ける鈍い音が部屋に響く。そして大河の手とサバ

イバルナイフを握っている手からは力が抜け手が解ける。

白髪の敵は鼻と口から大量の血を噴出させながら、一メートル程宙を舞うと廊下の壁に後頭部を激突させ衝撃音と同時に気を失い、その場で床に糸が切れた人形のように崩れ倒れる。

白髪の敵を殴った直後、彩香は空中でバランスを崩し振り切った右手の勢いで折れている右足から、右に半回転し床に落下する。大河とも手を繋いでいた為、大河も彩香が転ぶのと同時に残った勢いを抑えきれず、握っている右手が左手に引っ張られ彩香とは逆の左に半回転し背中から床に転倒する。

「く……ウっ!!」

「……っ!」

彩香は落下した際の右足の痛みで悲鳴が出そうになり、それを自分の中で押し殺したが小さな声を痛みから漏らす。

その後には大河が背中から倒れ悲鳴を上げようにも、背中から肺を圧迫され一時的に息ができなくなり、強制的に悲鳴が押し殺される。落下した直後、彩香は足の痛みから握っている大河の右手を強く握ってしまう。大河も彩香が強く握った事により、右手の傷口が僅かに開き再び痛みが走る。

「……彩香、大じよ　っ!」

大河は折れている右足から落下した彩香を心配しすぐに声をかけようとするが、先程落下した時に肺を圧迫された事により呼吸が乱れ、喋ろうとした途端に咽返ってしまい、台詞を全て言い切る前に遮られてしまった。

だが途中までは彩香にも聴こえていたのか、小さな声で「大丈夫」と痛みにも息を荒らげ弱弱しい声で答える。その声には大河は「大丈夫じゃないな」と確信する。しかし、大河も他人の心配ばかりはしていられなかった。大河自身右手からの出血が止まらず、白髪の敵を騙した時は呼吸などは演技だったが、足元がふらついたのは事実だ。

更に、大河に残された時間が残り少ないという事もまた事実。大

河に残された時間は既に五分ほどまでに迫っていた。

六分……いや五分

その時間内に止血をしないと、大河も意識を失いかねない。それを大河も自覚していた為焦りが生じる。

「……彩香、とりあえずここから逃げるぞ」

既に息のほうは整ったのか今度は咽返ることもなく、足を抑え蹲っている彩香に背中越しに声をかける。だが、彩香の脚の痛みは大河の予想を遥かに上回っており、それは返事を返す事すら儘ならないう状態になっていた。

大河も返事が返ってこないことに異常を感じたのか、返事を待つ事もやめそのままの体勢で、震えている彩香の背を挟み話を続ける。「俺の予想以上に痛いのは分る、が白髪の野朗もまた何時眼を覚ますかは分らない……だからここからは早めに逃げる必要がある」

彩香の体越しに廊下に倒れている白髪の敵を睨みながら続ける。

その白髪の敵は顔の骨格を少し歪ませ、大量の流血して気を失ってこそはいるがまたいつ眼を覚ますかは分らない。それを踏まえ大河は白髪の敵のことを言葉に付け加えた。

だが彩香は右膝に走る激痛を堪えるだけで精一杯の為、言葉を返そうにも口を開けた途端に、台詞よりも先に悲鳴が口から漏れそうになってしまふのだ。

「わか……っ!!」

必死に悲鳴を抑えつつ「分った」と返事を返そうとする彩香。だが口を開き喋ろうとするとやはり悲鳴の方が口から漏れそうになり、それを抑えるために言葉を遮り口を閉じる。

最後まで言葉をいえなかったことが僅かに彩香の心残りとなったが、二文字目まで言えば恐らく兄なら分るだろう、と自身の右脚の痛みのせいから少々他人頼りになる彩香。

が、その兄大河は彩香の期待に応えるように、その返事を最初の二文字目から残りの言葉を自分の中で予測する。この予測で作り上

げた返事は大河の都合のいい妄想かもしれないが、大河はこの状況で彩香が冗談などを言うとは思っておらず、そもそも返事が否定文だったとしても、大河は無理矢理にでも彩香をここから逃がすつもりでいた。つまり最初から返事など関係はなつたのだ。

「分つた」んだな……なら、早速ここから」移動する」ぞ彩香」
「……ん？」

大河の意気の入った発言から数秒遅れ彩香がその発言に疑問を抱き、口を閉じながらも発言できる言葉で大河に訊き返す。彩香が抱いた疑問は勿論この「折れた足どう移動するか」だ。歩けもしなければ、立つ事すらできない折れた足。だからと言って這い蹲って逃げる訳にもいかず、彩香は一体自分の兄大河が何を考え、何故この発言をしたのかが理解できなかったのだ。

が大河はその訊きかえしに応じることなく、彩香と繋いでいる手を離すと重い体を立ち上げ、少し緩くなっていた手に巻いてある布の切れ端を再び強く締め付ける。そして彩香の顔を向き合えるように、彩香を跨ぎ前に出る大河。

（お兄ちゃん………？）

彩香は不安と疑問を抱きながらも目の前に回りこんできた兄の顔を見上げる、だが大河はその視線も気にせず彩香が右手で抑えている折れた右脚の脚線に視線を走らせる。

折れたのは膝の部分なのか通常間接が曲がる方向とは全く違う方向を膝は向いている。その脚はまるで、膝のただけ彩香の脚で無いような曲がり方をしており、見るに堪えない光景だ。

が、その脚を見るなり何か考えているのか自分の額に人差し指を立てる大河。と、彩香が「何を考えているのか」と思った途端、何かを思いついたのか大河の表情が晴れたのと同時に、大河が口を開く。

「……彩香、その脚でもここから逃げられる方法で最もシンプルなものを搾り出し今から伝える、一回しか言わないので頭に叩き込

んでくれ」

視線を彩香の眼に向けると、真剣な眼差しで彩香を見つめながら説明を始める大河。彩香はその言葉に返事を返したいが、言葉を出せないため首を縦に振り小さく頷く事で大河の話に相槌を打つ。大河もその相槌を見て、再び語りを続ける。

「俺が彩香をおぶる……つまり彩香を背負い、ここから逃げるという手段だ」

大河が重い口調で彩香に逃走方法を早口に教える。彩香もその手段しか無いということなので、拒否するつもりは無いが、一応大河に分かったという事を伝える為相槌をうつ。

すると、大河は彩香に背を向けると「余裕がねえから、早めに行くぞ」と振り返る事無く、背中越しに語りかける大河。

それを見た彩香は”自分を背負わせる為に背を向けた”と率直に理解し右脚を抑えている右手を離し、両腕で大河の身体にしがみ付くように背中から、大河の身体の前方に血のついた左手と脚を押さえていた右手を回す彩香。大河は自分に彩香の腕がしっかりと捕まった事を確認すると、膝ではなく足の付け根の辺りまで手を回し、そのままゆっくりと立ち上がる。勿論脚の付け根まで手を回したのは、膝に痛みを感じさせないためだ。

と、立ち上がった途端。大河が急な目眩に襲われ足元が一瞬ふらつく。

「……つと！」

体勢こそ崩すことなく立ち直したが、出血は悪化する一方。彩香も足の付け根の辺りに手を握っていた時と同様の”ヌメツ”とした液体に違和感を覚え「兄が自分を背負い逃げ切れるか」と不安も抱き始めていた。

これは五、六分じゃあねえ……恐らく”三分”が限界

『第十一話『ルーチェ?』』

出血による立ち眩みからなんとか体勢を立て直す大河。同時にその出血の量から残りの時間を予測し直し、頭に浮かんでいる逃走方法を練り直す。

彩香の怪我も心配だが、実際命に危機が迫っている方は自分自身であり、それは大河も自覚していた。その為、安全面を考慮して歩くよりも、出血の度合いを重視し逃走方法を練り直さなければならぬ。

だが、逃走方法によっては背負っている彩香の怪我にも影響するのは分っている。故に大河は予めこのことを彩香に告げ、彩香はこの事を予め知っておく必要がある、と考え彩香を呼びかける。

「彩香……少し痛くなるかもしれない、予め謝しておく」

普段の兄からは想像もつかない言葉と、普段とは異なる小さくも芯が太い声が大河が感じている緊迫感と焦り、それに生じる苛立ちを醸し出す。

背中越しに話を聞いていた彩香にも大河が抱えている、緊迫感焦り苛立ち等が直接肌で触れているように、充分に伝わっていた。だがそれらから感じられる、言葉の重みが伝わりすぎた故に、それが彩香の返事に戸惑いを与えてしまう。

元々の応えは「分った」で決まっていた。だが大河の言葉の重みにその軽々しい一言でいいのか、この重要な判断をこうも簡単に決めてしまつて良いのか、と言葉の重要さが彩香の心に”迷い”を生んでしまったのだ。必死に返事を見出そうとするが、考えれば考えるほどその重みは彩香の中で増していき、ただ黙る彩香と大河との間で沈黙が生まれる。

だが、既に考える時間が残されていない事は彩香も分かっていた為、僅かな鬼胎を抱きながらも彩香は問いに応えようとするが

「さてと、行くぞ」

「え？」

啞然。

彩香の長考に待ちきれなくなったか、或いは初めから聞く気がなかったのか、彩香が応えるよりも先に大河はこの話を切り上げる。

必死に思案していた事自体が間接的に無駄だったという事を告げられ、思わず間拔けな声を上げてしまう彩香。彩香の声を聴いた大河は「声を出しても平気なのか？」と、彩香に訊ねる。

無自覚に声を上げていた彩香は、大河にそう訊ねられて初めて自分が声を上げた事に気づき、自分でも安堵が湧き上がってくるのが実感できた。

「少し……なら、平気よ」

途切れ途切れだが、一文字一文字を喉から声を絞り出しはつきりと応える彩香。大河もその応えに僅かな安堵を覚えると、重々しい足取りで玄関へと歩みを始め始める。

眼前にあるサバイバルナイフには目もくれず、廊下に気絶し横たわっている白髪の敵に対しても視線を向ける事はなかった。

彩香は白髪の敵の方に視線を向けたが、白髪の敵の出血の量に吐き気を覚え即座に視線を逸らし、前方に視線を戻す。

廊下に出てからは玄関までの距離は短い。これという障害物もなく、大河達は時間を掛けず辿り着く事ができた。

玄関に着くなり、大河は脱ぎ散らかして靴を足先で起用に足元に集めると、無理矢理爪先から脚を靴に捻じ込むように入れ、その後地面に数回靴の先端を叩きつけ微調整を行う。

まだ一分も経っていない筈……だが、病院までは最低でも一時間掛かってしまうか。

彩香からは見えないが表情を曇らせ、必死に思案しつつ逃げる大河。

仮にバスがバス停に止まっていたとしても、大河の家から病院ま

では最低でも一時間は掛かるのだ。最も速度制限を無視すれば時間は縮まるのだが。

「彩香、今の時刻分かるか？」

「……分からない、ごめんね……」

「そうか……いや、彩香が謝る事は無い」

背中越しに大河が時間を彩香に尋ねるが、途切れ途切れに返ってきた彩香の返事是否を表していた。時間を把握できないのは今の大河にとって辛い、時間の事は後々考えればいいとその問題を棚に上げる。

そして「今自分達がやらなければならない事は、二人揃って生延びる事」と、考えを改めなおす大河。

「少し手を離すぞ」

大河は彩香を支えている両腕の内左腕を一旦放しドアノブに手を掛けると、そのまま手を下げ重い鉄のドアを片腕で突き飛ばすように開ける

同時に眩しくも暖かい太陽の日差しが大河と彩香の視界を埋め尽くす。一瞬急な日差しに大河はくらっと倒れそうになったが、すぐに太陽の明かりにも慣れ体勢を立て直し、彩香の太腿を抱えるように左腕を戻すと、止めていた足で再び歩みを進めはじめる。

彩香は大河が左腕で抱えなおすまでの間、大河から落ちないようと両腕に力を込め必死にしがみ付いていた。勿論しがみ付かれているのは大河である為、再び彩香を抱えなおすまでは大河も締め付けられる、という苦しみを味わっていたのである。

だが、今の大河の傷はツヴァイとの時に比べればまだ浅い方だ。ただ、違うのは白髪の敵は”完全に殺す”気構えで来ているという事。病院で入院している間、大河は”何故自分が生き残れたか”その事に疑問を抱いていた。

バスに大河が乗っている間、いや乗る瞬間でもツヴァイは殺そうと思えば殺せた筈だ。能力の事も知らず、警戒すらしていない大河

なら不意を突けば殺せる筈。だが、ツヴァイは止めを刺せる筈が刺さなかった、それが大河にとって気掛かりとなっている、この現在も。

「……お兄、ちゃ……あ、れ」

後ろから彩香の声が大河に降りかかってくる。歩いている振動で痛みが先程より増したのか、その途切れ途切れの声は先程より小さくそして震えていた。その弱々しい声に、大河は胸を締め付けられるような感覚と罪悪感を覚えるが、歩くペースを落とす事は無かった。

その直後、大河は自分にしがみ付いている彩香の両手から人差し指が一本、自分達が歩みを進めているバス停より、遥かに先の地平線を差しているのに気付く。

大河はその指が示す先に何があるのか、と視線を向けようとした時

「―― 暴食共がああああつ！！！」

鼓膜に直接突き刺さり胸の中に響き渡るような激昂が、大河と彩香の耳に入る。その声は聴き覚えがある、否。つい先程まで聴いていた声だ。

それを理解したのと同時に、大河の頬を汗が伝い眼が見開き、体が小刻みに震え始めていた。

「なっ……………まさかっ!？」

既に彩香の怪我に気を遣う余裕など無い、大河は恐怖しながらも体全体で即座に後ろに振り返る。急に動いた為、彩香の骨折している脚に再び激痛が走る。が、彩香も声を上げる事はせず大河と同じく、その声がした方向に不安を抱きながらも視線を向ける。

視線を向け間も無く、大河と彩香の視界に入ってきたのはこの状況下では最悪の人物であり、大河達を追い詰めた人物

白髪

の敵。

顔の流血こそ止まっていなかったが、白髪の敵は気絶してから一分も経たずに起き上がってきたのだ。大河はあまりにも信じがたい出来事に「……早すぎる」と、顔を顰め表情には「恐怖」の色が浮かんでいる。

不幸中の幸いか、白髪の敵がいる玄関と大河達がいる路上との距離は二十メートル程は離れており、充分ではないが歩を進めていた中で、白髪の敵との距離は確実に離れていた。

これなら表情も見えないはず、と大河は確信していたが

「その」僅かな希望がまだある」と、勘違いしているその表情ツ！！ その表情を潰すのが俺にとって、最も至福の時ツ！！」

白髪の敵が鉄のドアに凭れ掛り、「その場」から大河の表情と心情を読み取り狂気に満ちた声で叫ぶ。

同時に二十メートル程離れていても、自らの心情までも読み取られた事に驚きを隠せない大河と、大河が心を読まれたことで動揺しないか不安を抱く彩香。

だからといい、何かできる訳でもない。彩香の右脚は骨折しており、寧ろ大河のお荷物となってしまうているのだ。

その事は彩香も自覚している、だが肉体的にサポートする事は既に不可能。先程の謎の力も、結局は殴りかからなければいけないので、今の彩香にできることといえば「話しかけること」のみ。

（でも……それだけじゃ、力になれない……っ）

無意識の内に大河を掴んでいる両腕に力が入る、そして彩香に強く締め付けられたことで、彩香が強く恐怖しているか、あるいは不安で震えているかと初めて異常に気付き、我に返る大河。

「……どうした、彩香？」

彩香の異常に気付いた大河は、体勢を変えずに背を向けたまま問いを投げ掛ける。その問いに彩香は「なんでもないよ」と、どこか弱々しく薄い作り笑いを込めながら応じる、大河もその事は確かに気がかりになったが、白髪の敵から再びどうやって逃げるかの方が

優先事項だと、その疑問を棚に上げる大河。

「そうか……それと、表情には気をつける。どうやらカメレオン野郎はこんだけ離れていても、俺たちの心情を読みとれるらしいからな」

彩香に釘を刺すように警告をいいつつ、自分にも同じく釘を刺す大河。無駄なことかもしれないが、やらないで終わるのが本当の敗北、と大河は考えていた。

「だがな……安心しろ彩香、俺達は”絶対に生き残れる”」

暴食者……先程の表情は僅かな希望ではなく、大いなる希望だったという事が。

大河は気付いていないかもしれないが、自然と、無意識に大河の心の奥にある本心は”変わっていた”。「逃げられるかもしれない」から「絶対に逃げ切れる」と、変わったのだ。

無意識だが思い込みは能力者であらずともとても重要なものだ。

思い込みでその者の世界は変わる、そして思い込みでその者も変わる。故に無意識であろうが意識していようが、大河が今「絶対に逃げ切れる」と思い込んだとき、既に大河から見る世界観は変わっていたのだ。

「暴食者……一筋縄ではいかないか」

鉄のドアに凭れ掛り、一步たりとも動こうとしない白髪の敵。出血多量で大河が弱った所を狙う為か、或いは単純に動けないだけか、大河の頭にはこの二つの思惑が浮かんでおり、同時にその思惑の結論も既に思い浮かべていた。そしてその二つの結論が

「彩香、今から全力で逃げる。後ろは任せたぞ」

「え……逃げる？」

突如として宣告された、逃げるという事。いや正確には今も逃げている最中なのだが、大河は「今から」と最初に付け加え、白髪の敵から視線を逸らすと正反対の方向に振り返る。

彩香はその言葉の意味を頭で理解する前に、行動で理解する形と

なり依然として頭の中は混乱している。

「だから」全力で逃げる」、そのままの意味、そのままの行動。だから彩香は俺の死角、後方を任せたぞ」

彩香の混乱すらも吹き飛ばすような勢いで、早口に説明をする大河。同時に脚を前に踏み出し、駆け出すようにその場から走り出す。骨折している足の痛みに堪えながらも、彩香は悲鳴を漏らさずに大河の説明に「分かった」と小さく相槌を打つと、首を捻らせ肩越しに後方を振り返る。

勿論、視界の中心には白髪の敵を捉えている。

「走って」逃げるつもりか？……それが暴食者、貴様の選択か」白髪の敵は追う事はせずにそこから暴食者、大河と彩香を眼で追っていた。体力が切れるのを待っているのか、それとも動けないのか。彩香の頭には、先程の大河と似た疑問が浮かんでいた。

（何もしてこない……一体、何を考えているの？）

眼で追われていることも何もせず動かない事も、全て見えている彩香の頭には、次々と疑問が浮かんでいき考えが統一できなくなっていた。

息を荒らげ殆ど残っていない退院したての体力で彩香を背負い、全力疾走している大河も追って来ない事が逆に恐怖となっていた。追って来られるのも恐怖だが、逆に追って来ないとなると今度は「待ち伏せ」と、「罠」への不安が生まれたのだ。

「……おにい……ちゃ、ん。あいつは何もしてこな、いよ」

痛みを堪えつつ、詰まったような声で途切れ途切れに状況を伝える彩香。その報告を受け、大河自身も前方に注意を払うようにと自分針を刺す。

白髪の敵はそれを後ろから眼で追い何かを投げるという素振りもなく、ただ眼で追っている。

「……あの速度と距離なら」当たる」か？」

大河達からは既に五十メートルほどの距離は離れている、既に彩香からは行動は窺えるが表情までは窺えない、勿論小さな声なら聴

こえる筈も無い。

故に白髪 of 敵は自ら言葉を発し、その言葉を自分に言い聞かせる事が可能なのだ。普段の暗殺とは異なり、隠密にではなく堂々とその場で殺害の計画を立てられる所は利点となる。

更には白髪 of 敵からは彩香の表情が窺える、いや表情だけではなく大河の筋肉の伸縮、出血の量、足を運ぶペース、など全てが”見えていた”。

その全てを観察し終え、白髪 of 敵は鉄のドアから離れ自らの脚で立ち上がると、胸板の前方に両腕を伸ばし、両手で標準を定め始める。

白髪 of 敵に視線を向けていた彩香は、その行動にすぐに気付きそのことを大河に伝える。

「こつちに、手を向けてき……た」

「ハア……手を、向けてきた？」

荒い息遣いの中、彩香の言葉に部屋の中での事を思い出し、思わず訊き返してしまう大河。その言葉自体は黙殺されたが、大河の頭には部屋の中で景色を固定された時の記憶が浮かんでいた。

……彩香の視界をまた固定するのか？ それか別のことでもやらかすつもり……待てよ、こいつの能力は光に関する能力。今は莫大な光がある、先程は無い莫大な光が……。

光に関する白髪 of 敵の能力、太陽、莫大な光、以上の事から大河は白髪 of 敵が何をしようとしているかを、推測した。

が、同時にその推測の先にある”結果”に大河は何度目かの恐怖を覚える。

「彩香っ、よく聞け……一度しか、言わないからな」

「……何？」

息遣いを一度整え間を空けてから、彩香を呼びかける大河。彩香は白髪 of 敵から眼を逸らさず、それに相槌をうつ。大河が何を言うのかと僅かな不安が生まれた為、少し間が空いてしまったが。

「……今から言うの、は憶測、だが……実際にありうるっ、こと

だ。いいか？ あいつは、俺達に向けてレエ……ハア……レーザーに似た物をつ、撃とうとしている」

「レーザー……？」

続かない呼吸の中、大河は肺の底から言葉を搾り出すようにして簡単な説明を彩香に語る。その説明を聞き終えた後、彩香はレーザーという言葉に疑問を抱き思わず訊き返してしまう。大河はその訊き返しを黙殺すると、駆けている両足を急にピタリと止めた。すると大河が、その場で完全にはないが、少しだけ息を整えなおす。大河が走るのを突然止めた事に「体力が切れしまったの？」と、気をもむ彩香。

白髪 of 敵との距離は大よそ七十メートル、バス停の方まで続いている田圃の隅っこだが、その田圃が真横にくる距離まで大河達は元の場所から離れている。だが、白髪 of 敵は依然として、両腕をこちらに構えて立っているだけで、他の行動は見せてこない。

「……無いか」

大河も何を考えているのか、両側にある田圃に視線を移すと何かを探すように、視線を田圃全体に走らせていた。

まだ完全に整っていない息を整える事もせずに、田圃の隅から隅まで舐め回すように視線を走らせ、目的の”物”を探す大河。

「お兄ちゃん……何を探しているの？」

「探している物は”水”だ、それも”大量の水”を探している」

不安げに大河の行動を訊いてくる彩香に、大河は勢いのある早口で応えた。勢いを付けて応えてしまったせいか、彩香にはその言葉はどこか強調的に感じ取れ気が引けてしまう。

だが、気が引けたからなので協力しない、というのは単なる怠け者に過ぎない。彩香も大河と同様に、大河が探している”大量の水”を自らも探そうと車道を挟み、反対側にある田圃に振り返り肩越しに視線を走らせる。

何のために使うかは不明だが、ここで意味の無い行動をとる兄ではない。と彩香は希望を大河に託していた。

「……何かを探している、それも絶対に必要な何か……一体何を探している？」

眼を細め、白髪の敵は大河達の表情から最低限の事を読み取り、同時に動かない大河達に”標準”を固定し始めていた。

（何を探しているかは不明……だが、それが何であろうとこの攻撃からは逃れられまい。”光を超越”しなければな）

白髪の敵は両手で大河達に標準を合わせ、固定すると深く深呼吸を始め呼吸を整え始めた。矢を射るものが精神を統一するように、白髪の敵も同様に精神を統一し瞼を閉じる。更に瞼を閉じた状態で大河達が居た場所、他の障害物となりうる物、を瞼を閉じる前の記憶からパズルのピースのように一つ、一つ、作り上げ頭の中で景色を完成させる白髪の敵。

その時、白髪の敵の心には一切の迷いもなく、ただある志は「殺す」という一つの残酷かつ、白髪の敵には最も必要な志。

「……位置は完璧だ、後は一パーセントの”運”と九十九パーセントの”実力”」

独り言を呟き、瞼を上げる白髪の敵。光を再び手に入れた眼の先に映るは、自らの手と二人の暴食者。一切の迷いも無い心で、遂に白髪の敵は”能力”を発動させようとしていた。

だが、それすらに気付かずに意味も分からず、”大量の水”を探す彩香と、理由があつて”大量の水”を探している大河。

時間はこうしている間にも、過ぎていく……くそっ！

中々見つからない”大量の水”に、大河は焦りを覚え始めていた

直後。

「……あ、お兄ちゃん！ 水、あつたよ！！」

「本当か？！ 何処にある！？」

彩香の言葉を聞くなり、背負っている彩香の方に首を捻り肩越しに振り向き、顔を近づけ場所を問う大河。その問いに彩香は「反対側のあのホースだよ」と少々、大河の喰い付きっぷりに気が引けな

がらも、左手を離しその指でホースの場所を示す。

大河はその指の先にある”ホース”を見るなり、車道を横切ってそのホースへと駆け出し、草を脚で？き分け、ホースの先端を視界に捉える。

「……これか」

そのホースは青色をしており、傷や切れ目も一目で分かるほど使い慣らされていた。泥なども大分付着している。

大河は視界に捉えたそのホースの先端から、そのホースを辿るようにして、蛇口と繋がっている部分を見つけるため視線を走らせる。青色は田圃などの草に隠れていても、比較的に見つけやすく、ホースを辿っていくように視線を走らせると、数秒ほどで蛇口と繋がっているもう一つの先端を視界に捉えることができた。

距離は短く田圃に生えている草に隠れて見にくい、ホースが繋がっている”蛇口”は泥から空を仰いでおり、使い慣らされているホースもしっかりと繋がっていた。

「……お兄ちゃん？ これ一体何に使うの？」

「あ、そういえばまだ言ってなかったな……」盾だ。こいつは”盾”に使う」

後ろから降りかかってきた、彩香の問いに必要最低限の言葉で応じる大河。”盾”という言葉で、彩香の頭は余計に混乱したが「これ以上兄の思考を考えるのは無駄」と考え、「うん」と取り敢えず相槌を打っておく彩香。

大河はその相槌を聞くまでもなく、脚で田圃の草と泥を掻き分けると蛇口の前に屈み、彩香を抱えている両腕の内の片腕を離し、蛇口をこれ以上捻れない限界まで捻り、水がホースから勢い良く出るのを確認すると再び、泥が少しいた腕で彩香を抱えなおす。

水道から勢い良く出る水の勢いにより、ホースが蛇のようにうねり先端からは水が縦横無尽にばら撒かれ、あたり一面の草や泥、更には車道までもその水は届いていた。

「……これだけの水の量なら、あいつの攻撃は防げるはず」

縦横無尽に水を撒き散らすホースを眺め、大河が一言呟く。終始混乱した状態であった、彩香も意味は分からないが、何処となく安堵を感じ一息吐こうとした

瞬間、彩香のしている景色が一瞬にして歪む。

まるで、空間自体が何かに引き込まれるかの如く、彩香の視界に映る景色は全て後方へと”吸い込まれていく”。だが自身が動いている感覚は皆無。大河にしがみ付いている、腕の感覚もあれば、抱えられている脚の感覚もある。

何が起きているか理解する以前に、彩香の視界から全ての”光”が奪われ、視界全体が一瞬にして光が一切無い、暗闇に染まった。そして彩香の頭も同時に混乱に陥る。

「何が……、お兄ちゃん？ お兄ちゃんも見えてい

彩香、俺も同じく見えていない。だからそう慌てるな」

彩香の言葉を遮り、冷静に落ち着いた口調で大河が応える。その一言で彩香は冷静さを取り戻すと、次に暗闇の中で様々な場所に視線を向けどこか光が無いか、と光を探し始める彩香　が、
「それと光は探しても無駄だ、それよりここで立っている方が危険すぎる」

と冷静な大河の一言で一蹴され、抗議する言葉もなく彩香は「うん」と力なく相槌をうつ。

大河はこの程度の事がおこるのは、まだ”想定の内”。なので冷静さをかるうじて保っているが、実際の心境は大きく揺らいでいる。だが、「ここで混乱に陥ってしまっっては生き残れない」と、自分に常時釘を刺しその揺らぎを誤魔化しているのだ。

「……彩香、今から俺は”ホース”を拾う。その間左手を離すが、絶対に落ちるなよ」

彩香に一言言い聞かせると、先程から自らの脚に水を撒いている

ホースを、足で踏みつける。その言葉に「左足なら、私も立てるから大丈夫」と応じ、左足だけ地面に下ろす彩香。

大河は踏みつけても尚蛇のように強くうねるホースを屈み、左手で捕まえると、そのホースの先端を指で挟み水の出口を小さくし、ホースから出る水の水压をあげる。

暗闇の中なので、実際どれ程水压が変わったかは不明だが、最初より水压が加わっているのは確実。

「よし……これで、盾の完成だな」

大河はそのホースから出る水を”盾”と名を冠し、一言呟いた

刹那、一瞬にして全ての”光”が元に戻る。

大河達の視界にも一瞬にして大量の光が差し込んだ為、家から出た時と同様に瞬時的な目眩を起こし、僅かな吐き気をも大河は覚えた。

「ぐうっ……………異変はどこだ?！」

眼が光に慣れてきたところで、大河は体勢を変える事無くそのまま辺りを見渡し、自分の予測と”同じ異変”を探す。すると間もなくして、”頭上”一メートル程に一本の薄い”光の線”を見つける大河。その一本の薄い光の線を辿って視線を走らせていくと、その先には激しく”火柱”を上げるバス停の木材ベンチが眼に入る。激しく燃え盛るバス停の木材ベンチは火花を撒き散らし、辺りの田圃までも燃やし尽くしそうな勢いで、炎の激しさを一層強めている。

その光景は大河や、彩香の瞳にはどう映ったか。少なからずとも、その紅く燃え上がる火柱は、二人に恐怖を与えただろう。

「……やはり”熱”か」

大河はそれを確認するやいなや、今度はその光の線を”逆に”辿っていく。途中でその光の線は姿を消したが、その線自体が直線であつた為消えたとしても、それを辿る事は安易な事であつた。

そして逆に辿っていくと、次に見えたのは手から煙を上げている

”白髪の敵”だ。

「予想以上だ、まさかここまで威力があるとはな……次は確実に暴食者に当てるか」

第十二話『ルーチェ?』

大河達の遙か後方で火柱を上げ、炎々と燃え上がるバス停のベンチ。

「一体……何が」

小さく震える声で、彩香が呟いた。

訳のわからぬままに、白髪敵の一撃目が炸裂したのだ。いや大河は判っていただろうが、少なからず、彩香はこの時点で既に頭が追いついていなかったのは確かだ。

「次は外さんぞ」

煙がのぼる手から、煙を振り払うように数回手を振るつた後、白髪敵は、煙を完全に振り払った両手で再び標準を合わせ始める。視線は極めて鋭く、大河達からこそは見えないものの、この鋭い眼付きを見て精神的に引かない者はいないだろう。

「お兄ちゃん?」

おずおずと、大河の頭上から彩香は声をかける。

「なんだ? この“盾”じゃ、あの“光線”は防げないとても不安に思っているのか?」

「い、いやそういう訳じゃないんだけど」

それも確かにあるけれど、と彩香は小声で呟き、話を続ける。

「……お兄ちゃんは、さっきのあの白髪をした、敵のさっきの動作を何で分かったの?」

「分かったんじゃない、俺の仮説の結論を実行しただけだ」

彩香の言葉を否定するかと思えば、否定せずに肯定でもない曖昧な応えを返す大河。

最も彼の今の言う所では、大河は自ら生み出した仮説をそれに基づき行動をした、という事になる。それは遠めに大河の予測からの行動とっている事にもなる訳で、根拠が全く無いという程ではないが、それはあまりにも根拠も理屈もなさ過ぎる、危険で愚かな行

動とも受け取れる。

が、大河はそんな行動をした自分を決して愚かだとは思っていない、失敗した場合なんてのは、はじめから考えておらず、考えているのは成功の先にあるものだけなのだから。

「だが今のでこの仮説は、確信へと変わったがな」

どこか自信有りげに大河は彩香にそう言つと、手に持っているホースの口を上に向け、白髪の敵と自分達との間で挟むように、落ちてくる水で互いに壁となる水の壁を作りあげる。

「水で、この攻撃を“屈折”させようという筋か　確かに餓鬼が思いつきそうな手段ではある」

と、それを眼にした白髪の敵は何時になく低い声で呟く。その低い声からは、彼の冷静さと今無意識に堪えてしまっている怒りが窺える。更に、水の壁が隔てられたおかげで、白髪の敵からは大河達がぼやけて見え、表情を窺う不可能となっていた。今、白髪の敵ができることは、ぼやけながらも見える大河達の“像”から動きを予測する事のみ。

「……見えないほうが厄介だな」

互いに五十メートル、いや七十。とにかくそれ程まで離れており、声は互いの耳には入らない故、白髪の敵はこうして呟けるのだ。

だが、逆にここまで距離が離れていて一瞬にして大河達の遙か後方まで届く物、攻撃に使えるものといえば、音、光、弾丸と限られてくるだろう。そこで大河が攻撃に関連付けたのは光だが、それに至る経緯は今迄の攻撃と能力からの推測であり、証拠の基にある理論とやらではない。

大河は少々銃や音やらから考える以前に、白髪の敵から“光に関する”攻撃を受けていたので、この攻撃もまた“光”ということが断定できた、故こればかりは不幸中の幸いとも言えよう。

ならば、次に浮かんでくる疑問は一体その『“光”でどう物を燃やすか』だが、それはここまでくれば誰もが分かる事だろう、錯乱状態に陥っていなければ。

「彩香、これから“非常に簡単な奴の攻撃の説明”を伝える。いいな？ これもまた一回しか言わないからよく聞き取れ」

体勢は変えず、背負っている彩香の足は左脚だけ立たせたまま、空いた左手でホースを持ち、低く冷静であつても白髪の敵とは似ても似つかない澄んだ声で、大河は言う。

「白髪をしたあの敵　　そうだな“白髪の敵”と呼ぼう。で、白髪の敵は、恐らくだが自分の腕……そこまですは断言できないが、自分の手に近い位置で、あいつは光を収集している。そのときに俺達の視界以外にも、一定空間から恐らく“光が完全に白髪の敵の手の中に吸い込まれている”、その光が完全に吸い込まれているときにあの真つ暗な世界、いうならば光が無い世界になる……ここまですに分らない事は無いな？」

「え、あ、うん」

大河の言う言葉を頭で整理している中、彩香は思案に入っている中で急に呼びかけられたので、拍子抜けの聲がそのまま口に出てしまった。が、すぐに平常を取り戻し「うん」と応える。大河はそれに頷くと「そうか、なら次に」と話を進める。

「その“光が無い世界”で、その時に消えた光があいつの手に渡っているのは確かだ、同時に外部から降り注ぐ太陽光さえも吸収してしまい、味方に行っている筈。そうじゃなきゃ、瞬時的に光を消した所で、太陽から降り注ぐ別の光によつてすぐに光が戻ってしまうかな。そして、あとはその集めた光の塊を一つの進行方向に、それこそ光線として一斉に全て放てばいい。二秒間も照射されれば一瞬にして燃え上がるのは間違いない。それこそ後方のベンチのようにただ、弱点もまたその照射している間だ、その間はいつは光を“一線”として留めていなければならない、つまりそちらに集中力が全部持つていかれているわけだ。更に白髪の敵自身の手も焼け焦げていた　その証拠に煙が手から出ていた、要はあの光線にも“撃てる数”があるってことだ。だが、あいつ自身の手が一回で燃

えてない辺りを見ると、温度はそこまで高くないだろう」

淡々と説明を続ける大河と、それに耳を立て思案顔を浮かべ勘考する彩香。もっとも考える事などは、ただ説明を受け取りその辻褄を合わせるだけで、そこまで深く勘考する必要は無いのだが、彩香は僅かな錯乱状態にもいるので、一つの言葉を理解するのに時間が掛かってしまっているのだ。

説明が理解できないほど馬鹿という事ではない。

「う……ん、成程？」

疑問系じゃ困るんだがな、と思う大河であつたが、流石にそれと言って話しの腰を折って、別の話をするほどの余裕は無い。それ以前に、大河の出血も大分危ない所まで来ているのだ。事実、彼は言葉と態度にこそ出さないが、常に眼が回っている状態だ。

言えるのは場違い、もしくは心底暢気なものだけであろう。

「彩香？　なら、この『水の壁』の意味も分かるよな？」

「……光を拡散……屈折させる？」

「俺の狙いは前者の方が近い、静かな水の溜まりなら屈折だが、このホースのようにばらばらに水を出せば、屈折だけではなく拡散紛いのものも起きるだろう」

どのみち、屈折が起こればあいつの制御も乱れ、一線の光は四方八方に拡散する筈だが　と大河は最後に付け加える。それもまた、淡々と。一切の焦りを感じさせずに、平然と話を進めていく。

彩香はその時淡々と説明を続ける兄の根拠の知れない自信を、少し訝しく思い、また「子供騙しな、少し腑抜けな作戦」と思ったのも事実である。

が、次の大河の一言でそんな考えは頭から遙か彼方に吹き飛ぶこととなった。

「あ、それと……俺の出血もそろそろまずそうだ、もって一分半だと思う、だからお前に“その先の作戦”を伝えておきたい」

「え　ちょ」

っと、待って。と口に出そうとした彩香だが、再び視界にある

色という色が歪み、光が吸い込まれていく現象に、開いた口がふさがらないという状態に陥ってしまう。

俗に言う嘔然。

先程はホースを探すのに必死になっていたため、色が、光が、景色が吸い込まれていくのが見えなかったが、今回は違う。今回の体勢は、大河が白髪 of 敵のほうを向いている為、必然として背負われている彩香も、同様の方向を向いているのだ。故、景色が吸い込まれる様の全てが彩香の眼には映ったのである。

その景色は歪み、やがて収縮し始め、光が消えていくという、とてつもなく奇妙で不気味な、見ているこちら側が飲み込まれそうなそんな光景であり、彩香はその光景に恐怖からか、無意識に唾を飲みこんだ。

が、大河は淡々と話を続ける。その景色に対して一切の動揺を思わせることもなく、平然と、その口を止める事をなく話を続けた。

「驚くな、呑まれるな、これは前兆に過ぎない、問題はこの後の光線のほうだ。そしてその光線を避ける為に取り敢えず体勢を変えるぞ？ 視界がないのは向こうも同じ筈……今なら何をやっても見られたりしないだろう」

実際は同じではないが、大河は白髪 of 敵が一々景色をパズルのようにして動きを予測しているなどという常識外れの事をしているという事は、ゆめゆめ思ってもないだろう。なので、大河からすれば『見えない』という状況は『同じ』というわけだ。だが、無駄にこれ以上白髪 of 敵の超人的能力を知った所で、大河達になす術は無いのは結局の所同じなので、知らない方が精神的には良いのかもしれない。

彩香の返事を待つ事無く、大河は彩香に左脚だけは立たせ、左手でホースを持ち、残りの右腕で彩香の折れた足を抱え、上半身を背負う、というそのままの体勢から身体を深く沈め、ホースの口の角度を沈んだ分だけ上に向ける。

無論、背負われている彩香も必然的に大河と同様に身体を沈めら

れる事となる。

「で、次の作戦の説明をお前に言うが、しっかりと聞き取ってくれよ？」

また、淡々と。

焦りや、恐怖や、そういうものを一切感じさせない、冷静な口調で淡々とこの真つ暗闇の中、大河は彩香に説明を言い聞かせる。彩香もまた、その説明を、自分の感情を押し殺して、無理にでも頭に入れようと必死に聞き耳を立て聞いていた。

辺りには水が大河達の足元、“田圃の泥土”に落ちる音と大河の声、そして時おり聞える彩香の返事のみが聴こえる。

白髪の敵は光を集める事に夢中で、音など何も耳に入らないがこの白髪の敵には、音の代わりに『撃つ寸前の景色』が脳内で、記憶からパスルのように景色を当てはめ、同時に大河達の疲労から逃げられる最大範囲を予想し、確実に“光線”を放つ位置を決めつつあった。

「……あの水の壁は確かに厄介そうだが」

誰に言う訳でもなく、独り言を呟く白髪の敵。

「“穴”は多し、か……タイミングさえ合えば 抜けれない壁ではない」

瞼を閉じ、大河が今も自らとの間に隔てている“ホースからでる水で作った壁”、『水の壁』を記憶の中で景色として組み立て、そしてそれを“動かす”白髪の敵。

それには多少の誤差などという物はなく、カメラ映像の如く正確で狂いなく、白髪の敵の脳内に復元されていた。この男の超人染みているところは、どうやら視力だけではなく、記憶力もまた常人を超えた、異常なまでの“記憶力”を持っているようだ。

“異常なまでの視力”と“異常なまでの記憶力”、白髪の敵はこの二つがあつてこそ、記憶から景色を作り出すことができたのだ。また、動かす事も不可能ではない。

そして先程まで、大河が彩香に光線の説明をしている間、白髪の

敵は行動を起こさなかった。ならば、何を代わりにやっていたか。

『標準をあわせる』、そのようなことは既に“一射目”を撃ち終わってから二秒ほどで、既にずれた標準の修正は終わっていた。いや、そもそも、一射目は白髪の敵にとっては、リスクと威力を知る為の『練習』であつた。故、白髪の敵にとっての一射目は、撃つたということにはカウントされていない。二射目からが、白髪の敵の本領とも言えよう。

ならば、一体何を白髪の敵はこんなにも時間をかけて、のんびりとゆつくりとやっていたか。

それは“観察”。

だが、大河達の観察ではなく次に観察していたのは“指で圧迫されているホースから出る水の観察”。要は『水の観察』をしていたのである。

水の強弱と、水の壁が完全に行き届いていない部分、つまり水の壁からはみ出ている部分の観察と、水の飛距離を観察していたのだ。だが、ホースから出る水、つまり水道水から、ましてや人の手でその水の距離などを変えてるともなれば、そんなのを測っても無駄であろう。

しかし白髪の敵にとっては、無駄ではなかった。

確かに水の強弱などを観察してはいるが、それはあくまで“過程での観察”。白髪の敵の真の目的、真の観察していた所は 大河が指でホースの口を押さえている中で、最も指の力が弱くなり、水が最も飛距離を縮める瞬間と、その瞬間から次への瞬間までの間隔を観察していたのだ。

白髪の敵は水を観察する事で、その“水の飛距離”を観察することで大河がどれ位のペースで、“ホースの口を押さえている指を休ませているか”を見極めていたのだ。

それさえわかれば、後は最も押さえているのが弱い時に光線を放ち、最も水の飛距離が短く横の範囲も小さい時に、水からはみ出ている部分を狙えばいいだけのこと

景色が戻る、光が戻る、色が戻る。同時に『光線が発射された』。

正に光の速さで、何もかもが元に戻り　同時に白髪の敵の光線も発射されている、大河達が気づいたときには既に白髪の敵の攻撃は始まっているのだ。

「……なっ!？」

景色が戻り、全てに光が戻った時。白髪の敵は自分の眼に入ってきた光景に驚愕し、声を上げる。勿論、光が戻った事に驚いた訳ではない。

白髪の敵が驚いたのは、大河と彩香の体勢が変わっていたこと
いや、その変わった体勢に驚いているのだ。無論、白髪の敵からは、ばやけて“像”しか見えないが、白髪の敵の視力と経験と記憶力があれば、それに近い体勢にもっとも近い体勢を過去の記憶から当てはめ、予測する事など容易いのだ。

白髪の敵が見たその体勢は、背負うなどとはまるで反対だが、どこか似ている体勢だ。

彩香の肩の部分を右腕で抱え、大腿の部分を左腕で抱えるようにもち、骨折している足も含め両膝から下は抱えていない。彩香は大河の腕の中で、地面に対してくの字になるように丸まり、顔は上を向いている　ありていにいうならば『お姫様抱っこ』の体勢。だが、大河達に羞恥の色は窺えない。もっとも、白髪の敵は表情などそもそも見えないが。

勿論大腿の部分を抱えている左手には、水の壁（盾）を作っているホースが持たれており、肩の部分を抱えている右手からは依然として鮮血が流れている。

また光線も、言うまでも無いが全てが戻ったのと同時に照射され、大河達の水の壁にぶつかっていた。水の壁にぶつかった光線は、そこで白髪の敵の一直線にする収縮のコントロールを完全に失い、四

方八方に爆発するように飛び散る。それこそ、“閃光弾”の様に。

それは白髪 of 敵にとっては、かなりの痛手　否、痛眼であった。大河達は水で防げば、このように光が飛び散る事が予想できていたのか、彩香は空いている両腕で自分の眼と、大河の眼を隠すようにし目を瞑っている。大河も目を瞑っているという部分では同じだ。

白髪 of 敵は、大河達がお姫様抱っこの体勢に変えた事を、完全に脳内に会得するまでに掛かった時間は　0.5秒にも満たない。

何故体勢を変えたかは不明だが、はみ出ている部分ははみでており、また大河が指を休めるタイミングも僅かにずれはしたが、殆ど撃った瞬間と一致しており、これは自分にとっての好機、と白髪 of 敵は考えていた。

ホースの口を押さえている指に力が弱まれば、当然水圧も落ちる。水圧が落ちれば、水が飛ぶ距離も短くなり自分達を庇う為の、水の壁の面積を当然縮まる。

ともなれば僅かだが、本当に一ミリにも満たないほどの僅かという差だが、大きさが縮まる以前に水が一パーセントでも完全に届いていない場所があれば、そこは当然余計に露わとなり、真っ先に白髪 of 敵の標的と変わる。

そして、白髪 of 敵はそこ（はみ出ている部分）を、始めから狙っていた。最初の0.5秒ほどは、水に遮られてしまったが　大河が無意識に指を休めてしまっているうちには、当然そこは確実に狙われ、照射され続ける。

照射されている本人は、恐らく気付くよりも早く発火してしまうだろう。たった今も、照射されていても気付いていない“彩香”のように。

彩香の右脚の爪先は“僅かだが水の壁からはみでていた”。だが、光の速さで来る攻撃に対応できる訳もなく、それも目を瞑っている状況だ。

確かに『脚が熱い』とは彩香も少しは感じただろう　だが、熱いと感じた時には、既に光線による照射は終了している。

「……ぐうつ!!」

「彩香っ!？」

声をあげた。

が、既にそのとき白髪敵の照射は終了し　彩香の右爪先は燃えていた。大河もすぐに気付きホースの向きを変え消そうとしたが　大河はあえてその選択を取らない、非情な選択だが、これも“次の作戦”の内。とはいえ、大河も一切罪悪感を感じないと言う訳ではない。本当にこの選択でいいのか、と迷いさえも生じていた。やがて爪先から発火した火は、足首から先の殆どを覆い、その勢いを高めていく。

「う……っ!」

この状況でも尚彩香は悲鳴を堪える。自らの足首から先が燃えているというのに、彼女は『熱い』の一言すら上げず、堪え、堪え、堪え、ただ堪え続ける。いや、それどころか、彼女は大河に対して「早く次に」というような、涙目では決して無い鋭い眼差しを向けていた。

「彩……」

大河もその眼差しから感じ取ったか、一瞬躊躇はしたもののこれは“自らが選んだ作戦”なのだからここで躊躇うわけにはいかない、と決意を改め、言いかけた言葉を呑みこむ。

そして大河は燃え上がる火を消す役割も含め　足元の田圃の泥土へと、崩れるように無様に泥の中へと無様に“転ぶよう”にして、飛び込んだ。

「泥に潜る　光を遮断する手立てにはなるが……いや」

途中までそう言ったところで、何かを思い出したかのように白髪敵は自ら言葉を遮り、『成程』と最後に言葉を付け加える。

白髪敵が何を思い出したのか、それは大河が“泥に水を降らせていた”という事。

水の壁を作り、その時に落ちてくる水をまだ乾燥気味の泥に降らせ、足元を“泥沼”に変え自分達に泥が付き易いようにとしたのだ。

更に水溜りも足元には溜まっており、火の鎮火もしやすい。

無論、自分達に付いた泥は光線からの護身用としての為だ。だが、そのような薄いたかが限度が知れている、泥でこれほどの強力な光線が防げるか。

答えは半分否、であり半分可能。つまり不明、が最も相応しい答えだ。それは大河達からしてみても“賭け”であり、白髪の敵も光線を撃つのは今回が“初めて”なので、今一どれほどの威力があるのかは不明なのだ。バス停に試し撃ちはしたが、それも標的が泥と変わると、殆ど意味が無いデータだ。

それにしても、何故暴食者は鎮火作業をしなかったのか？

それが、白髪の敵にとっての最大の疑問点であった。何か裏があるのか、とその裏にある企みを暴こうと思案するが 思案してもその答えはみつからなかった。

それどころか、この裏があるということをおぼろげに思わせることが本当の企みなのでは、と考えれば考えるほど、その思考は自分を惑わす答ばかりを頭に浮かべる。

が、流石は暗殺の百戦錬磨というところか、白髪の敵は混乱や戸惑いに陥る寸前に、その裏の企みを考えるのをやめ、思考を切り替えた。これ以上は考えても、無駄だと察したのだろう。それ以前に、泥が全身に付いたところで、“穴”はある ならばそこを狙えばいい、というのがこの男にとっては本音だろうが。

「……本当にすまん」

泥に彩香を抱えながら転びこんだ直後、大河は即刻に彩香の足首から先を覆いつくす火をホースの水で鎮火させたのと同時に、大河は苦虫を噛み潰したような表情で下を俯き、力ない言葉でそう言っ

た。

恐らく　ではなく、確実に大河は罪悪感を抱えていたのだろう。生き残るためとはいえ、妹を作戦の“手段”として使ってしまったのだ。唯一の肉親を、それもあるうことか年下の妹を。

作戦の中では『もしどちらかの身体などが燃えても、致命傷にならない限りは数秒間は放っておく』と一応伝えてはいたが、それでもそれが妹となるとは思いもしなかったのかもしれない。

「彩香、本当にすま　」

「　謝らないで」

が、彩香は大河が抱えている気持ちとは裏腹に、まるで自分が燃やされた事を当然と言うが如く、笑みを浮かべながら「大丈夫、どのみち使えない脚だから」と、大河の言葉を遮り、そう続けた。

「……………分かった」

完全に罪悪感は消えることは無いが、少なくとも今はその罪悪感を押し殺さないと、次の作戦には進めないであろう、迷いが生じてしまうだろう。

その迷いで、作戦が失敗へと向かったらどうする？　彩香はなんのために態々敵の攻撃に、声も上げずに耐えた？　自分が考えた作戦を今更自分が信用しなくて誰が信用する？

と大河は自分の心に問いかけ、心を覆う罪悪感をその言葉で誤魔化し、腕に抱えている彩香の顔を覗き込むようにして、

「なら……………さつき説明した次の作戦に移行するぞ」

と、謝罪の言葉を呑み込み、言葉をかける。それに彩香は「うん！　」と、気丈に頷くと、抱えられているままの体勢で、上体を僅かに大河の後方　つまり、バス停の方向に振り向くと更にそこから首を横に捻り、大河の後方全体を見回せるような体勢へと体勢を変える。

そこからバス停、いやそれ以上先にある、見えている“物”との距離を測るように、彩香は右手を伸ばし、親指を横に開きそれ以外の指は揃えて、距離を測り始めた。

距離の測り方は彩香が小学生の時に好奇心で図書館の書物から調べ上げた物である、無論その時から大河は生活の為働いていた。

大河は彩香を抱えたまま、泥沼の溜まりに右膝をつけ踵を立たせそれを臀部に当てて杖とし、逆の左膝は立たせ、いつでも何があっても走り出せるという体勢を構える。無論ホースでの壁は、依然として崩さず壁として隔てている。

「……届いていない部分は、隠されたか」

当然の事だが　と、最後に付け加え白髪 of 敵は一旦手を構えるのをやめ、自分の両手に視線を移す。

何故態々こんな動作をするのか、それは白髪 of 敵の眼に映る手は、白髪 of 敵の手は“火傷”を負っており、その手は火の中に手をつ突っ込んだ後のように“焼け焦げていた”から。

普通ならば、身を削ってまでやった自分を誇りに思ったり、傷の度合いを心配したり、と自分と傷に関することを思い浮かべるであろうが

なんだ、予想通りか。

白髪 of 敵は“それ”を見てもその程度にしか思わず、一切の危機感も名誉の傷という感覚も覚えることは無かった。否、そもそもこの男には不安というものやそういう感覚自体が無いのかもしれない。人を殺しても罪悪感を覚え、雇い主の為、報酬の為、だけに絶対の忠誠と成功を誓う。ただそれだけの事。覚悟もなく、何を捨てることがもなく、頼まれたから殺す。言われたから殺す。雇われたから殺す　それだけの事。

今回も暴食者という大層な名を受け持っている大河達を殺そうとしているが、白髪 of 敵からしてみれば、暴食者という標的、としか見ていないのだ。

それほどにこの男は人物を、物事を重視していない無機質な人間。重視するのは雇い主だけで充分なのだ。故、何度か大河達暴食者のことを賞賛し、また驚愕もしたが、それもほんの数秒で切り替わっており、一味違うからどうした、という認識しか　否、認識すら

していないのだろう。

無意識にこの男は感情を切り替えてしまうのだから。この“雇い主と報酬以外は重視しない”、という事が大きな痛手となるとも知らず。

「放っておいても、出血多量で死ぬか？」

白髪の敵は今、そんなことを考えていた　と、ここで白髪の敵にとつては思いもせぬ物が、視界に隅に映る。

「だが、やはり自分の手で　ん？　あれは……“バス”か」

先ほどの閃光弾の如く弾けとんだ光のせいで、焦点を合わすのに少し時間をかけてしまう白髪の敵だが、それでも眼を細める事も顔を顰める事もなく、依然悠然としたままで、その物がバスであるという事を認識すると、その“バスに手を向けた”。つまり、標準をあわせ始めたのである。

「殺人に関与したものは全て殺さなければならない　“この者達同様”に」

このの者達、言うまでも無くそれは大河達が住んでいる借家の住民のことであり、白髪の敵は既にその住民達を殺していた。人を何人も殺しておいて、それでいて平然としている。何事も無かったかのように。

何時殺したか　それは大河が彩香をおぶって家に着いたとき、この家が大河達の家、と確信を得た時、白髪の敵も同時に他の住人の暗殺を開始していたのだ。

鍵などは、この男の前では最早役目を果たさない。それこそ、厳重な金庫の鍵で無い限り。住人には声を上げさせないため、口を抑え一瞬にして首の骨を折り殺すという基本の動作で住民全員を、殺した。

白髪の敵はこの動作を八回、つまり八人を殺していた。更に時間も合計でたったの二分程度で。この男は、住民を殺しておいても尚罪悪感は一切なく、それどころか住民の口を押さえたときに付いた唾液やそういうものの方をこの男は気にしていたのであった。

住民が光が消えても騒がない訳は、そのためだ。

だがこの男、何故これほどまでに無情になれるか。無論、理由あつてのことだろうが。

環境、はたまた教育のされ方 否、どれも違う。どれも白髪の敵の理由とは一致しない。ならば一体何か、それはほどなくして明らかになるであろう。ただ、まだいえることではないと言う事だけは、確かだ。

「彩香？ 出血が酷くなってきた……そろそろ」

「 距離は四百メートル前後、それで今も近づいてきている」

大河の問いを遮り、彩香が応える。

その応えに大河は思案顔で暫く勘考し やがて「よし」といい、顔を彩香の方へと向ける。

「四百……ならそろそろ道路に出るが、“覚悟”はできたか？」

「そんなの、一ヶ月前からできてるよ」

笑いながら彩香はその問いに応じる。

大河はそれに「そうだな」と言うと、彩香を抱えたまま左手に持っていたホースを離し、ふら付きながらも立ち上がり、『道路の真中へと駆け出した』。大河に残された残り時間は、凡そ三十秒。

「！」

白髪の敵もそれを眼に捉え、即座に手の標準をバスから大河達の方へと移し、光を手元に吸収し、一定空間の全ての光を奪いつくす。暗黒となった空間の中でも、白髪の敵は記憶から景色を組み立て、その記憶から光線の着弾地点と目標の位置が重なるようにと、予測をたて 放った。吸収時間は凡そ“十秒間”。

たったの十秒間 されど、十秒間。太陽光さえも味方にしている、白髪の敵からしてみれば、十秒間で人を燃やすほどの十分な光は収集でき、光が少ないという事は決して無い。

が、この十秒間は大河達にとっても十分な長さであり、対策を練

ることは容易いとまではいかないが、なんとか間に合う程度で練れないことはない。

景色が戻る。

同時に光線は白髪敵からは最も当てやすい“彩香の頭”へと照射されたが、光線は大河の“右手”によって、否。

右手ではない。『右手で持つている布』に遮られた、だ。

体勢は彩香の頭を肘の内側で挟むようにし、出きる限り彩香の顔から火を遠ざけており、それ以外の体勢は、彩香が上体を元に戻し、くの字に抱えられている、という事以外は変わらない。

更にその布は水分を非常に多く吸っている。血ではなく、田圃の泥沼の水分を非常に多く、蓄えていた。

この手段は白髪敵の光線の威力を知っていたからこそ、できたともいえる手段であり、このために彩香は身を挺して、光線の威力を測ったのだ。

「止血をしていた布」までも、盾として使うか」

照射時間の二秒程度が過ぎ去った瞬間。大河はその布を自分から、彩香から、遠ざけるように前へと投げ捨てる。と、同時に布という壁を失った右手からは再びの流血が始まり、大河の全身から力が、意識が、段々と抜け薄れていく。

「……まだ。平気、だ」

だが、大河にとって、彩香の頭が狙われるというのは“想定内の出来事”。それは、白髪敵も自分の身体に、手に負荷が掛かっている事に気付いたなら、限度に気づいたなら、当たる確立が高いほうへ狙いを変える筈、それも一撃で済むようにどこか急所を。その二つの条件が丁度今の彩香にはあった為予測できた。いや、以上の事を踏まえ大河がそう仕向けた故、守れた、の方が正しいであろう。

因みに、お姫様抱つこの体勢になったのは、大河が『動きやすい』と思っただけで、深い意味合いは無い。

無論、白髪敵も予め守られていたなど、大河が予めこのことを

知っていたとしか考えられない、と推測しそこから察することができただろう。

が、この男は一瞬そういうことを考える大河の発想を『恐ろしい』とも思ったが、そんなことはすぐに頭から消えてなくなってしまう。それは今迄の無意識に感情を切り替えるのと、人を重視しない、という二つの“癖”が生んだ『ミス』とも言えよう。

と、ここで再びこの男の集中力がバスの方へと持っていける

これもまた、癖であろう。

「バスが引き返しえそうとしている……暴食者からは凡そ百メートル、俺からは百七十辺り 害ではないが、“この後”殺さなければならんからな。動いてもらっては困る」

少々独り言が過ぎる男だが、ある意味この独り言が自身に対しての、言い聞かせなのかもしれない。

白髪敵は手に残る少しの痛みと、手から立ち上る煙を振り払うようにし、標準を大河達に再び合わせ直す。淡々と、痛みも感じさせずに。が、それは痛みを傍からみれば感じさせないだけで、実際は非常に酷い、大きな火傷を両手に負っていた。だが、自身の傷すらも関係ないのだろう、この男には。

視界の隅には、バスが依然として捉えられ観察の対象となっている。勿論、バスに居る者は全員皆殺し、その皆殺しを実行する為人一人でもが逃げないかと見張っているのだ。

一方の大河は力抜けた脚を小刻みに震わせ、息を荒らげ、今にも倒れそうな状態となっており、それはどこからどう見ても瀕死の間と見えるだろう。

大河は鮮血溢れる右手で彩香の肩を抱えなおし、彩香は触れられたことで大河が出血によって意識が薄れていつている、という事を改めて実感させられ、焦りを覚え始めていた。

が、だからと言って心配の一言をかける訳でもなく、彩香は『今自分にできる最大限で最小限の事を探せ』と、考えており、この大河の出血を少しでも和らげる方法を思索していた。

更なる出血でタイムリミットは、大きく縮まり　大河に残された時間は数秒。

最早喋る時間さえも、今の大河には残されていない。

伝える事は全て彩香に伝えている、やることもやっている、後は白髪の敵が“一発光線を撃ってくれるのを待つだけ”。そして白髪の敵は既に標準を定めている、勿論次の標的は大河であろうと、辺り一面から再三光が失われる。

この攻撃は大河にとって、最後の好機であり“最後の反撃”。

白髪の敵もこの攻撃を実質的な最後にしようとしていたのだろう、訳は殺し屋の誇りとしてか、出血ではなく己が手で殺したい、という無意識な“誇り”からか、それは白髪の本人しか知りえないことだろう。

しかし、何よりも、白髪の敵は自分の殺しの腕を“完璧ではない”、と思っている、自分の殺しの腕はパーセント足りない、と。

だからこそ、そのパーセントを“運”に任せ、絶対的逆境をも好機に変える“運”を殺しに取り入れるために、敢えてこの男は自分の殺しの腕を完璧とは思わない。『九十九パーセントの実力と、パーセントの運』これがこの男の絶対的な自信の要。

光が一切無い空間が五秒ほど続き、大河が地面に“倒れる寸前”で、全ての光が“元に戻った”。

同時に光線も発射されたのは言うまでも無い、ならばその光線はどこに、誰に、撃たれたか

「俺、だっ！？」

光線は白髪の敵に自らに照射された。細かく言えば、標準をあわせている両手に。

白髪の敵はすぐにその光線の制御をやめ、弾け飛ばしたが　既に手は燃えていた。まだ二秒もたっていないはずだが、白髪の敵の両手は燃えていたのだ。

何故燃えたか、それには二つの理由がある。

一つ。

白髪の敵の手が撃つ度に自らの光線で僅かだが燃えていたのは、既に知っているだろう。それに加え、今回は“一発分の光線が自分に反射して”返ってきたのだ。何に反射したか、それは“バスの鏡”で反射し、白髪 of 敵のほうへと返ってきていた。大河達は恐らくこの事を狙ったのであろうが

だが、そんな事が普通に考えてありうると思えるか。

白髪 of 敵は狂いなき圧倒的記憶力と視力を誇る。それが、よりもよって標準 of ミスを起こすなど考えられない事。ましてや、それは大河達が最も体験し、誰よりも知ってることであらう。

しかし、現に、今、標準は“倒れている大河達”の頭上を通り越し、後方 of バスの鏡に反射し自分の所へ　と、ここで白髪 of 敵はある事に気付き、顔色を驚きの表情に一変させる。

その気づいた事というのが大河達が“倒れているという事”。

光を収集したの後の暗闇の中で、倒れていたというのは、白髪 of 敵も光が戻ってからすぐに察する事ができた、だが、何故“自分はそれを予測できなかった”か、白髪 of 敵はそれが理解できないのと同時に、そのとき自分が何を観察していたかと記憶を掘り起こす。

勿論、圧倒的記憶力を誇るこの男にとって、そんな記憶を掘り返すなどという事は容易いのも程がある。故、その記憶はほんの数秒で掘り返すことができ、また結論も同時に出た。

記憶を掘り返し、たどり着いた時間　それは、標準を合わせている時。白髪 of 敵は“バス”を観察していた。乗客が、一人も逃げないか、と大河達のことを“甘く見て”、確実に殺せると判断してしまい、バスの方に気を取られてしまっていたのだ。このミスは、雇い主と報酬以外を重視しない、という癖が招いたミスであらう。つまり、標準は大河の頭部に合わさっていたが、その大河自身が運よく倒れた事により、標準が“運よく”ずれたという事。

そして、二つ。

これが最もな理由で、白髪 of 敵さえも予測しえなかった　否、

誰であろうと予測することなどできない理由。

それが『運』。白髪の敵が最も信頼し、最も頼り、最も自信の要ともなっていた『運』。

大河が光が発射される寸前で倒れたのもその内かもしれない、何より今回最も運が大きく味方したのが、“反射角度と正確に鏡にあたった”という事であろう。

大河は確かに、白髪の敵が後方のバスに向かい光線を撃つように仕向けた。何故なら、これが彩香に話した作戦なのだから、当然の事だ。

だが、例え仕向けたとしても本当に鏡にあたるかと訊かれれば、誰もが当たらないと答えるであろう。同時に、この問いで当たらないと答えた者がこの作戦をやっても、絶対とまではいかないが、殆どの確立で失敗するであろう。当たると答えたとしても、確立ならば必然として『当たらない』と答えたものと同じ確立で失敗するに決まってる。

しかし『当たらない』と答えたものよりも『当たる』と答えた者の方に『運』は味方する。それは白髪の敵の理論でもあり、絶対的自信の要でもあり、同時にこのことは『できないと思っている者には、運は決して味方しない』と言っているのと同じである。

白髪の敵にとっての『運』とは『あるようで無いもの』ではなく、『そこにあつても届かない物』という認識、この男にとっての『運』とは所謂『神』のような存在であるのだ。

それ故、今回はその『神』が暴食者大河達に味方したのだらう、大河達は『当たると答えた人物』なのであるう、実際に何度絶望に陥れても這い上がってくる『硬い意志』を持つ者達ではあった、と白髪の敵は考え、大河達を“認識し”、倒れている大河とその大河を必死に起こそうとする彩香を、視界に見据え、炎に身を包まれていく。

「有り得んっ！」

未だに『生』に執着があるのか、自らの燃え盛る手を振るい、自

分が死んでいくということを白髪の敵は否定する。生きている物であれば、死を拒絶するのは当然のことだが、この男は『死』を恐れる者を、なんとも思わず、生物とすら思わず、覚悟もなく、慈悲すら感じずに殺してきた。

だが、その立場が逆になると、途端にその死を恐れる　　実に弱く、実に哀れな存在だ。

勝利とは僅かな偶然と完璧な計算から生まれる。

「何故俺があつ　　」

燃える手を振るい、燃える服を叩き、火を消そうと数々の事をやってみせるが　　既に火は、炎へと変わっており、とてもじゃないが叩き消せるような炎の勢いではない。コートにも火は燃え移り、頭にも、更には自身の服の下にある皮膚にまで燃え移る。

九十九パーセントの実力と、一パーセントの運。

「消えろおつ！　消えろ、消えろ、消えろ、消えろおおつつ！！
この俺を運は見放したのかつ！　この俺を、俺を見放したのかああああつっ！！」

運に見放され、自分の絶対的自信の要を逆手に取られ、白髪の敵は逆上し、自分自身に、運に、神に、吼えた　　が、ほどなくしてこの男は燃え滾る炎に全身を包まれ、間もなく立つ気力さえも失い、地面に倒れ込み、痙攣を起こし始める。

しかし、この時大河達は気付いていないだろうが、白髪の敵の身体にはある異変が起こり始めていた。痙攣ではなく、もっと別の通常では考えられない異変　　“急激な老化”が起こり始めていたのだ。

「こ……お……ほ……へ……あ」

まもなくして、白髪の敵の全身は炎に包まれていき、聞き取れな

言葉を残し、急激な老化とともに、炎に全身を焼かれた。
息絶え

第二章 第一話『隠者』

十月、三日。時間不明。

東京とは一見しただけではとても思えない、田圃などもあるとも田舎らしい土地に、その男は立っていた。

「……………」

洋装の黒いスーツに身を包み、腰には四丁の拳銃と思われる鉄の塊を左右に二丁ずつ差しており、それは明らかに日本の法律を無視している『武装』であつた。

髪は長い金髪、そしてそれを後ろでまとめたような髪型。眼の色は青色。日本人のそれではなく、誰がどう見てもそれは外国人と判断するであろう。

金髪碧眼。

「……………」

その男。足元にある、鼻をつく腐敗臭を放つ真つ黒く焼け焦げたというよりか焼けすぎたような、所々少し黄色が混ざっている白い棒状の何かが見える、“それ”を暫く見下ろして、睨みつけて。

「はあ………… “やはり”、駄目か」

と、大きな溜め息を吐き、やるせないような、そんな風に男は小さく呟いた。それから少し間を空けて、再び何かをぶつぶつと男は呟き始めた、あたかも誰かに報告するが如く。

「『^{ハミット}隠者』、能力『ルーチェ』と共に焼死。貴方様が仰つたとおりの姿でございます。しかし、この死体は どう致しますか？

…………… 了解致しました」

独り言で、しかし誰かと話している 否、目上の者に報告しているような口調で、その男は呟いていた。誰もいないはずの、この場所で、その男は独り言にまるで返事でも貰ったかのように、相槌をうつと、それから腰に差してる拳銃を一丁。手に取って、その銃口を足元の焼け焦げている死体へと向け、今度はその死体に言い聞

かせるように口を開く。

「『隠者』、たった今我が主から、貴様に対しての判決が下った。結果から話すなら、貴様の身体は“分解処分” 但し、頭脳だけは分解しないそうだ。死んでも尚尽くせる事を、幸せに思え」

言つて、男は躊躇いもなく、その引き金を数回引いた。

しかし、音はせず 銃にも拘らず、その銃からは火薬の爆発音がしなかった。

『かち。かち。かち。かち』と引き金を引いたときの、虚しい金属音が虚しく聞こえるのみ。

だが、不発というわけではない。

一方の撃たれた肝心の死体は、頭を残してそれ以外の身体の部位、全てが“消えてなくなっていた”。文字通り跡形も残さず、頭部を残してそれ以外の全てが、突如として消えたのだ。音も立てず。

男は残った炭の塊のような真っ黒い頭部を銃を持っていない方の腕で抱えると、次は銃口を自らの身体に向けて、その銃についている目盛りらしきものを指で動かし 今度は自らに“引き金を引いた”。

刹那。

男は、この田舎のような土地 大河達が先ほどまで居た土地から、音も立てず、何を残す訳でもなく、文字通り跡形もなく消え去ったのであった。

時は白髪敵が息絶えた直後まで、遡る。

「……お、お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

「……………」

意識を失い、そして地面に自らを挟むようにして、うつ伏せとな

っている兄を、そこに居る少女　肩に掛かるほどの茶髪、そして通常ではありえない方向へと曲がり、少しこげている右脚　『暴食の血を継ぐ者』・通称『暴食者』こと邊流是彩香は、自らの実兄であり、今は倒れ意識を失っている、実質的家長、邊流是大河の意識をどうにかして戻そうと、どうにかして命を繋ごうと、その場で必死に兄を呼び、揺する事はせず、大河の鮮血溢れる右手を、自らの両手で握り締め、ただただ呼びかけていた。

何をすればいいか　助けを呼ぶことなど、今はできまい。

辺りに人は居らず、電話もなく、あるのは燃え盛るバス停と、引き返していくバスのみ。

「どうすれば……」

とうとう、呼びかけることすら止めてしまい、彩香はその場でただその右手を握り締め、混乱している頭で、それでも必死にこの状況の打破を思案していた。

どうすれば、助けを呼べる　手を振れば助けを呼べる？

バスに向かって、今ならまだ間に合う？　でも、そうしたらお兄ちゃんの血は……一体どうすれば。

と、彩香が混乱に陥りつつあるとき。そのときであった。

「！」

ぱりん、と。

後方から、遙か後方から聞こえた決して小さいとはいえない、むしろ耳を塞ぎなくなるくらいに大きく、耳を引き裂かれるような、そんな風な『硝子』が割れる音に、彩香は咄嗟に振り向いた。深い意味はなく、反射的に。

彩香が振り向いた先に居たのは、引き返していくバスの窓を後方からつき破って、そのままこちらに何の衝撃も感じさせずに、何事もなくあったかのように走ってきている　異端学校教師、花美月椿の姿であった。

それを大河が見ていれば、恐らくバスから飛び降りたツヴァイを連想したであろう（ツヴァイは天井からであったが）。もっとも、

その記憶は病院で埋め込まれたような、正体不明の、そんな記憶であるのだが。

しかし、今回もまた大河は意識を失っており、それを見ることは叶わなかった。いや、本人からしてみれば、見ずともよいのだろうか。

「大丈夫つかああああ！！！」

「……………」

叫びながら 彩香からは確認できないが、恐らく何らかの能力を使いながら、椿はこちらに向かい、全力で走っていた。相変わらず服は上下ジャージだ。

彩香が椿の突然の登場に面食らっている中、椿は十数秒でその何百メートルという距離を走りきり というよりかは、跳ぶように一歩一歩を大腿で走りきり、彩香の前まで近づくと、次はその速度が始めから無かったかのようにぴたり、と速度を完全に、一瞬にして完全に殺し、その短い髪を存分に揺らして停止し、息を切らすこともなく、平然と ではなく、神妙な顔つきで彩香と大河に交互に視線を移し、怪我の度合いを見比べていた。そして、辺りも見渡し、敵の有無。人の有無を確認していた。

椿の眼に映ったのは、既に燃え尽き、崩れ始めている木材製のバス亭と、人一人分の大きさで小さく上がっている炎。

それを見て無かったなら椿も助けに行くであろう、しかし椿は先ほどのことをバスの中ながらにして、見えていた。今、炎に包まれている人と思われる物が 白髪の敵が光線を何度も照射していたと言うことを。見ていた。

だが、“助けには出ようとしなかった” 何故か。その理由はまた、別の話になるのだが。

しかし、現在。この状況で、大河達以外に人が居れば、それを椿は敵と見なすであろう。無論、乗客運転手は例外だ。

「……………」

「え、あ……椿さん？」

あまりにも突然の出来事に、思わず声を上ずらせ、目前で足を止めた椿を見上げて、声を掛ける彩香。しかし、椿はそれに応える事無く、彩香と大河に視線を落とし。折れ曲がり焼け焦げている脚と彩香が押えてもなお溢れ出す大河の鮮血を交互に見て、その怪我の度合いの憶測を立てる。

「あの……椿さん？」

「……………」

「椿、さん？」

「ん？ ああ、悪い、聞いてなかった……で、何だ？」

椿が気付くまで、実に三回もの呼びかけがあった。

「いや、今お兄ち……」

とそこまで言った所で、流石に他人に『お兄ちゃん』。などと言うのには抵抗が生じたのか、そこで「兄の大河が」といいなおし、話を続ける彩香。そうは言っても、もう大分人の前でも言ってしまうっているのだが。

「兄の大河が、意識を失ってしまっていて……椿さん、どうにかして助けられませんか!？」

椿が来た事に対する驚きで、彩香は欠いていた冷静さを取り戻したのか冷静な口調で　しかし最後は声を振り絞り、椿に力なくとも力強く言った。助けを、求めた。

対して椿は、至極冷静な口調で言う。

「どうにもこうにも、私は君たちを助けに来たんだ。もつとも、最初は退院の迎えのつもりだったが、こちらの事情で一時間ほど遅れてしまったな、しかし　」

言って、椿は大河と彩香の全身に、再び視線を走らせて。

「　その様子じゃ、襲撃にあったか……すまなかったな」

と心底申し訳なさそうに間を空けてから言って、椿は彩香に「大河君の手をこちらに見せてくれ」と言い、彩香もそれに特に何を言うわけでもなく、むしろ助けしてくれるのかと思いい、何か打開策があるのかと思つて、椿にその手を握らせようとした　のだが。

「なっ」

「……え？」

その手は、椿の“手を通り抜けて”、地面に落下した。

握った感覚も、触った感覚もなく。ただ滑るどろどろとした、物が手をすり抜ける感覚しかなく、大河の手は椿の手を通り抜けて

すり抜けて、そのまま重力の力によって地面に落下したのだ。無論、それは彩香も目前で目視しており、それ故に驚きも隠し切れなかった。

「……………」

椿は無言で、もう一度手を持ち上げようと試みるが　やはり、手は持ち上がらない。というより、すりぬけた。しかし、血は自らの手につく。どろどろの、気色悪い感覚だけが、手に残る。

「……彩香ちゃん？」

「は、はい？」

突然話が自分の方に向けられた事と、目の前で起きていることに、彩香は多少声を上ずらせてしまった。が、椿はそんなことは構わず、というより無視して、

「君は触れたんだね？」

と直截的に、真剣にそう言い、先ほど彩香が手を握っていた光景を確認するように問い、彩香もまた無駄な言葉は省き、その問いに疑問そうに首をかしげながらも、頷いた。

それに椿は暫く黙り込み、思索し、それから「成程」と呟き。

「……彩香ちゃん？　粗くてもいいから、これで大河君の傷口を縫ってくれないかな？」

と、彩香の前に、棒にぐるぐると何重にも巻かれている糸の塊と、裁縫用の針をポケットから取り出す。

そんなのを目前に急にだされても、言われても、彩香は何がなんだか分からなく、逆にその言葉に行動に混乱していた。自分が縫うのか、と、自分がこれで兄の手を縫うのか、と。考えもしなかった、考えようとも思わなかった　だが、今はそれをしなくてはならな

い。それを考えなければならぬ。

「……………」

それに彩香は少々迷い、思案したようだが　やがて決意が固まったのか、力強く頷いて、その二つを手にとった。

それから、恐怖が不安か、それとも罪悪感からか　小刻みに震える手で針に糸を通し、下唇を噛み締め、大河の手を左手で持ち、まずは掌から、彩香は縫い始めた。表情は決してよいと言うものではない。むしろ、顰めている。罪悪感があるのだろう、後ろめたいのだろう、自責しているのだろう　人の手を縫いつけることに。何の資格も無い自分が、裁縫道具で無理矢理、皮と皮を縫い付けていることに。

「……あの、椿さん。一つ訊きたい事があるんですが」

縫いつけながら、彩香は顔を向ける事無く、そのままの体勢で椿に問いを投げる。口調は冷静を無理矢理装った風で、小さく震え、ところどころ上ずり、それは椿からしてみれば逆に『動揺している』と自ら言っているようなものであった。

しかしこの物事を頼んだ椿も、自身が酷な事を頼んでいるのは百も承知。だけれど、今大河の能力を理解して　また、それによって彩香がその能力の対象外である理由も概ねわかったので、そちらの理由の方が“遥かに酷”なので、敢えて椿は縫わせるという、それと比べれば“まだ酷ではない”ほうを頼んだのだ。

そのことを踏まえ、ここでの問いは椿にとつては非常に、厄介なものであったが　応えないのも、場合によれば肯定となる。正に今がその場合だ。

「ん……………なんだ？」

椿が飛び出したことか、それとも別の理由でか、路上に引き返すことをやめ、止まったバスに視線を向けて、椿は神妙にはなくなるべく優しく、親が子の問いをきくような、そんな風に相槌をうつ。

「おに……………いえ、兄と病院内で椿さんから訊いた、その『異端学校』

というのは、どういふところなんですか？」

「……そうだ、な。簡単に言つと、君たちみたいな者を守る“組織”。といつても、能力組織とは違ふ組織構成だが」

「組織構成？」

縫う手を休めず、止めず。自らに圧し掛かる罪悪感を無理矢理抑えつけながら、彩香は組織構成という言葉疑問そうに反復した。

対して椿は冷静であり、彩香の問いを諭すように言い聞かせるのであつた。

「そう、私達の方は組織であつて学校。子供ならば社会に、“能力者として社会に出る”ときに必要な事を学ばせ、大人ならばそれは教える側として、働く側として動いてもらう。大抵能力がある者は、能力組織に引っこ抜かれるからな 能力組織にな」

しかし、最後だけその優しい態度を崩し、冷静なその口調を崩し、椿は吐き捨てるように言つた いや、無意識に態度を崩してしまつた、という方が正確か。

彩香にはその嫌に思ふ理由が分からなかつたが しかしそれでも、椿は自分に比べればもつと能力のことを知り、組織のことを知り、私達のこともあり、それを踏まえたうえでの先ほどの発言であろうから、追及するだけ話の腰が折れてしまつただけであろう、と彩香は思い敢えてそこには触れずに、一回相槌をうつてから不慣れな敬語で続けた。

縫う手は止めず。

「 やつぱり、同じですね」

「 ん？ 同じ？」

「 いえ、この一ヶ月私の面倒 というより、“稽古”を見てくれた、帆照ほてりさんと、同じだな、って」

彩香の少し安堵したようなその言葉に、椿は記憶を探るように少し思案する風をみせてから、

「 ああ、そういえば帆照だっけか……あいつにも、この質問を訊いたのか」

と、何かを思い出した風に言った。彩香はその態度を少し怪訝に思ったが、そのことを取り立て問い詰めなくてもいいことだろう、
と思いいその疑問を棚に上げ、椿の応えに「はい」と頷く。

そして　ここまで互いに話したところで、会話が途切れた。

「……………」

「……………」

別にどちらも、会話をしなくちゃ気まずいと言うわけではないので、どちらも口を開く事無く、彩香は大河の手の甲を縫う作業に移り、椿は止まっているバスに向かい、手を振っている、恐らくこちらにくるように促しているのであらう。

バスも暫くはそこに止まっていたが、椿達の態度に敵意が無いことを確認したのか、ようやくこちらに引き返し始め、彩香が大河の手の甲を縫い終わったところで、丁度バスも彩香たちの前に停まり、そのバスに彩香たちは乗せられた　というよりは、運び込まれた。

足が折れている彩香は、椿に抱えてもらい、意識を失っている大河は乗客と運転手によって、中に運び込まれた。

「……………間に合いますかね」

不安そうに、本当に不安そうに　本当に風が吹けば、聞こえなくなってしまうのではないか、というくらい小さな声で彩香は問う。
「大丈夫、“色々”と真つ盛り”の年頃だろう。貧血くらい　精気を抜かれる訳でもあるまい」

宥め、慰めの言葉としては、選択ミスにも程があるだろう。しかし、椿は一切顔色も変えずにそういった。むしろ訊いた彩香の方が、顔を赤らめるくらいである。だが、信じがたいが、これが椿の中では安堵を感じる言葉の一つなのである。

それに椿は付け加えるように「それと」と続ける。

「それと、彩香ちゃん　君には向こうに着くまで、幾分か話すところがある」

十一月、十二日。

日^ひ之出病院。病室。

「……まだ、起きない」

非常に　非常に、冷静というよりかは、少し気だるそうな口調で、その少女は目の前のベットに横たわっている、青年を見てそう言った。その青年は右腕から輸血を受けてはいるが、それ以外の外傷は外からは見えず　いや、よくよくみればその青年は右手を包帯で覆われていた。しかし、右手だけだ。

特に目立つ外傷もなく、酸素マスクも既に治療の段階で取られており、この一週間で眼を覚ますだろう、と担当の医者にもその青年はそう言われていた。意識不明の状態というよりかは、“疲労での眠り”、ということだ。もっとも、その青年　大河は眠っており、そんなことは一切聞こえていないのだが。

そして、現在眠っている大河を見ている　というよりかは、看ている少女は、椅子の上に起用にも両脚をのせ、その両脚を両腕で抱えるようにして、ストローを銜え、紙パックの飲料を飲みながら、気だるそうに大河を見ていた。見下ろしていた。

容姿から察するに、大河より一つくらい下の歳だろう。髪型はすらりと伸ばした長髪の黒髪。服はこの季節に実にそぐわない服装だ。ノースリーブ一枚に、デニムのショーツ、そして膝下まであるハイソックス、という実に季節感がずれている服装。肌も褐色、眼は黒色。

「……ん」

「お？」
と。

そこで、この少女に言われたからではないだろうが、少女にとっ

ては非常に良いタイミングで、大河は眼を覚ました。約一週時間ぶりである（意識不明を含めれば）。

大河は眼を覚ましたところで、その半開きの虚ろな眼で、純白の真つ白な天井を暫く見上げたあと、自分の右手に違和感を覚えたのか、そちらに視線をやって、そこでようやく自分が置かれている状況を理解したように、その虚ろな目をむき、表情を驚きのそれに変させた。

が。

「ようやく目を覚ましたか…… 邊流是君、とても呼ぼうか？ それとも大河君のほうがいいか？」

少女はそんな面食らったような大河をよそに、一方的に気さくに会話を浴びせるように口火を切る。返事が来ないことにもお構い無しに。

「ま、名前なんてものはいいか。呼び方も」

言ってる内に、自分で面倒になってきたのか、少女は会話を一方的に切り上げ、手に持っていた飲料物を飲み　というよりは、ストローを取って、紙パックを逆さにして握力で紙パックを潰し、かつ込むようにして一気に飲み干した。それからストローを尻のポケットにねじ込み、脚を下ろし、その椅子から腰を浮かせ、大河の前に立ち上がった。

身長は　目測で、百五十四センチやそこらだろうか。

状況は把握できたが、この少女が誰か分からない大河にとっては、更にはそれで名前も知られてるとなれば、敵対視するしかなく、大河のその眼差しは決して穏やかなものではない。

「誰だ？」

「『誰だ』はないでしょ。でも、そうだね…… 簡潔に話すと、君と三日間過ごした女」

簡潔すぎで、無駄な要点ばかり抑えている言葉である。

「…… いや、すまんが、全く意味が分からない　それに、妹はどこだ？　そしてここが病院だとは分かったが、君が呼んでくれたの

か？ それとも、また違う」

「まったく、せつかちだな。君の問いに対して全部応えとなると長くなるから、手短に言おうか」

少女は大河の言葉を遮って、気だるそうに言って、指を　大河の前に一本。

一本だけ指を立てた。それはまるで手品でもするマジシャンのごとく。

「……？」

眉を寄せ、その指に怪訝な視線を送っている大河を一度確認してから、それから少女はその指から当たり前のように、息をするように　小さな『火の塊』を出してみせる。

「！」

火は一瞬だけ『ぼわっ』と空気を膨らますような音を立て、一瞬にして大きく燃え盛り、そして一瞬にして何も残さずに消え去っていった

「これで、君も大体の推測が立ったでしょ？　言うまでもなくあたしは能力者であり、また君の面倒見をこの三日間やっていた、という事」

再び面食らっている大河を、またもよそにして、少女は淡白にそう言つと、ぎいと音を立て再び下にある椅子にその腰を下ろす。

「だからさ、そこまで敵視しなくても平気だって」

「待て、俺の問いはまだ一つも応えもらってない」

「あー……そうだね」

内心、「一体何がしたい」と思う大河であつたが、取り敢えず自分のそういう気持ちは抑え、

「じゃ、もう一度言うが　いえ、言わせて貰いますが」

と立場関係を踏まえたうえで、敬語に言い直してから、上体を起こし大河は謝意を表しすぎなような口調で続けた。

「まずは、貴女がこの俺を護衛してくれた事には感謝致します」

「くくっ……いやいや、そんな硬くならないで。むしろ、さっきみ

たいな口調の方が、あたしとしても話しやすいから」

大河の態度の落差の大きさに、豹変ぶりに、失笑し　やがてその口を手で隠し、笑いながらその言葉に応える少女。大河は笑われたことに、またこの少女の放埒的な態度に、少し苛立ちを覚えないこともなかったが、しかしそこに関しては触れずに、話をそのまま進める。

「そうかなら普通に話させてもらうが　まずは一つ目だ」

「いいよ、言ってみな？」

「……君は異端学校とか、そういうところの人なのか？」

「ああ、『異端学校の生徒』だよ」

断言。

あっさり、きっぱりと、さばさばとした口調で少女はそう言ってみせた。

しかし、この口調。この冷静と言うのか、気だるいと言うのか、さばさばと言うのか、そういう態度は兎も角、この口調。大河からしてみれば、どこかで話したことのあるような、口調であった。

昔に　といっても、五、六年かそれくらいまでの範囲だが、それくらい前に何度か話したことがあるような、そんな感じを覚えていた。

「……あ、名前も言った方がいい？」

「是非とも言ってくれ」

「なら遠慮なく名乗らせてもらうけど　あたしの名前は、『帆照』ほてり」

。船の帆の『帆』に、天照の『照』」

「成程……『帆照』、だな。で、苗字は？」

「うん、苗字ははね……みよ、苗字！？　え、と　」

「……？」

と、ここで少女　帆照が、大河の問いに対し、今迄の冷静であった態度を崩し、何やら戸惑い　焦りを見せ始める。

目を泳がせ、先ほど火を出した指で頭を？き、とにかく視線を大河とあわせようとしない。何か焦っているような、そんな様子であ

った。

大河もその様子で「訊いてはいけなことを訊いてしまったのか」と、少し自責してから、

「いや、悪い。名前だけでも、教えてくれてありがとうな。それとこの三日間も」

と話を切り上げ、さりげなく謝罪の言葉もそこに混ぜて、「もう一つ、訊きたいんだが」と話を先へと進める。

無論帆照としては、それは助け舟以外の何物でもなく、抗議するわけもなく、そのまま話を促す。

「で、もう一つの問いってのは？」

「もう一つの問いは」

神妙に言って、辺りに人が独りも居ない事を確認して 居なかったことを“残念そうに”再び確認して。

「俺の妹。彩香はどこだ？」

と、大河は低い声で帆照にそう尋ねる。またも急変した口調に少しじろいた帆照だが 否。“このことを言っているのか？”

と、少し自分の中で思案した帆照だったが、

「うーん……君とは違う、もっと重傷の患者が運ばれる病室に居るよ」

帆照は誤魔化す事も、曖昧な応えを返すこともせず、きつぱりと言いきって見せる。しかしその口調は、どこか沈んでいる口調であった。

一方の問いを投げた大河は、俯いて、「そうか」と遣る瀬無さそうに言って、

「なら、彩香とは会えるのか？」

と更に問いを投げるが、

「無理だ」

しかし、それもきつぱりと一蹴された。

なら、せめて怪我の度合いだけでも、と再び尋ねようとした大河の心境を察したのか。

「怪我の度合いは」

と、大河が口を開くよりも先に、帆照自らがその話を切り出し、続ける。

「骨折もそうだけど、何より火傷の度合いが酷い。それに加え、彩香ちゃんの脚は紫外線やらを大量に照射されすぎていてね、どうやら皮膚癌を発症しやすい状態にいるらしい」

「皮膚癌……」

その単語に、その言葉に 『癌』 と言う言葉に、低い声で反復する大河。

「でも、あたしの先生が言うには いや、医師の言葉を先生から聞いたんだけど、取り敢えずその皮膚の移植はもう終わったらしく、後は転移、再発などがなければ平気、と聞いているけどね。これで大体のことは話した、詳しくは、医師に直接きいてくれ。あたしはよく知らない」

「成程な……ありがとうな。帆照さん」

「いやいや、呼び捨てで構わないよ」

失笑しながら、帆照は気さくそうに、そう言った。

一方の全ての問いを、訊き終えて聞き終えた、大河の心境は決して良いものではない。むしろ、後悔がありあすぎて、罪悪感がありすぎて、恨み、僻み、自己嫌悪すらも覚えていた。

「……………」

何故、俺はあんな、策をとったんだ？ 他にはなかったのか？

何故、俺じゃなく彩香に照射されたんだ？ あいつは、俺じ

やなく彩香を狙ったのか？

何故、彩香なんだ？ 俺じゃなく、何で彩香にばかり不幸な事が起こるんだ？

何故、ボルテクスと白髪敵といい、あいつらは俺達を狙っているんだ？ 俺たちでなければならぬんだ？

何故。何故。何故。何故。何故。

「　　おい？　大河君？　たいがくーん？　大丈夫かー？」

「！　……すまん、まだ少し眠くてな、ぼーっとしてしまったただけだ。平気だ、平気」

と、前にいる帆照の呼びかけで、ようやく我に返った大河は、それから言い訳をするように、無理にさばさばした風で、大河はそう言った。

しかし、平気とは言うものの　身体はそうかもしれないが、その心境は決して平気なそれとは程遠い、というより正反対。それは表情にも表れており、帆照もまた大河のその表情を訝しんだが。

「そっか、平気か。なら、あたしも少し寝させてもらうが……いいかな？」

しかし、それも取り立て訊くことではないだろう、と帆照は思いそれは流して、気だるそうな口調で言って、話題を切り替える。

「俺は一向に構わないが　他の患者さんは入ってこないのか？　看護師も医師も見たとこ居ないようだけどさ」

辺りを見渡し、大河はふと疑問に思ったことを口に出す。

それに対して「ああ、そういえば」と帆照はどう聞いても何かを思い出したようにしか聞こえない言葉を発し、そのまま説明を大河に聞かせ始めた。

「一番大事なことをまた言い忘れてたね　この病院。『日之出病院』というんだが、日之出病院と異端学校は言ってみれば親密な関係にあってね、理由はどうやら理事長に大きな恩があつて、それで見たいなんだけど。まあややこしい、関係や理由はともあれ、簡潔に言えば“ここの階は異端学校の管理下”ってことを憶えてもらえればいいさ。それ以外の者は、一切立ち入らないし　“立ち入ろうともしない”」

「ふうん……じゃあ、俺以外の患者や看護師が居ないのは、それが理由なのか？」

「まあそんなところだ、一応最低限の看護師や医者達は中に入れてるけれどね　で、説明はもう終わりでいいかな？　いいのかな？」

いいのかな？」

最早、「終わらせてくれ、眠らせてくれ」といわんばかりの口調で、帆照が最後にそう付け加える。大河もこれ以上取り立てて訊く事はないので、迷う事無くその言葉に頷いた。

「そうか、じゃ、なんかあつたら起こしてくれ」

言つて、帆照は大河の横のベットにそのままの格好で横たわり僅か十数秒でそのまま深い眠りに入ってしまった。空の紙パックの飲料物を持ったままに。

「……………」

しかし、この眠っている様子を見ると、恐らくこの三日間。本当に、睡眠最小限に大河の面倒をずっと看ていたのであるう、見守つてくれていたのだらう。大河自身もそう察して、改めて「ありがとう」と言い、大河もつられるようにベットに横たわり　大河もまた、十数秒で深い眠りについていったのだつた。

無論、二人とも死んだ訳ではないが。

洞内　暗闇。

一寸先さえも見えない、暗闇の中。その男は歩いていた。

視覚など頼りにならない筈の暗闇の中でも、その男は悠然と普段どおりに歩みを進めていた。躓く事もなく、暗闇に臆する事もなく。その男、腰に四丁の銃を　左右にそれぞれ二丁づつ差しており、洋装のスーツに身を包み、長い金髪を後ろでまとめ、眼は青色をしていた。

金髪碧眼。

それはどこからどうみても、日本人のそれではなく、外国人のそれだ。

しかし、この男。先ほど拾った筈の炭の塊のような真っ黒い頭部は既に抱えていない。

「……おっと」

暫く歩みを進めたところで、その男は何かに躓いた訳でもないのに、そんな声を出す。というよりは、何かを見つけたような、そんな風な声であった。

男はそこで歩みを止め 同時に、瞬時に腰に差ししてる二丁の拳銃をそれぞれ手にとって、それを前に構える。一瞬にして。暗闇で何も見えてない筈なのに、その男はあたかも前が見えているかのような、そんな様子だ。

「！」

と、男が拳銃を前に構えてからほどなくして、その男の前から小石が転がったような小さな音が、静寂な暗闇に反響し 同時に引き金が二丁あわせて、十二回引かれた。

しかし、音はせず 銃にも拘らず爆発音はなく、破裂音はなく、ただ銃引き金を引いた際の虚しく小さな金属音のみが『かち。かち。かち。かち』と響くのみ。

が、不発ではない。

しっかりと、その銃は役割を果たしている。眼には見えないが、その銃は役割を、しっかりと果たしていたのだ。

が。

「……成程、『模造品』にしてはいい性能だな。流石は俺の部下を真似ただけはある」

「！」

その銃は当たらなかったのか はたまた避けられたのか、その男が撃ち抜いた筈の前に居る者は、気が付けばその男の真後ろに回り、腰に差しであつた筈の残りの二丁の銃を“手にとって眺めている”ではないか。この暗闇の中で。

興味深そうにその者は二丁の銃を暫く眺めた後か、それとも『前』か その者は男が自分の方に振り向く『前』に その男の心臓

を、背中から抉り出していた。『出した』のではなく、『出していた』だ。どうやら、時系列では『前』であっていたようだ。

「っ！？」

その男はたちまちその場に蹲り悲鳴を上　　否。声を上げるまでもなく、その場に崩れ落ち、その後、その男が指の一本でも再び動かす事は一回もなかった

「　しかし、ここまで来るとはな……侮っていたよ、正直。油断いや余裕、とても言うべ……ん？　この心臓は　くそがつ！」
言って、その者は手にとった心臓を強く握りつぶし　その『赤い眼』。火、というよりかは、血の色のような非常に不気味な『赤い眼』で、男の死体を見下ろして、睨んで、そのまま死体を回収する訳でもなく、踵を返して、そのまま暗闇の中に姿を眩まして行くのであった。

「　まさか、心臓が『偽造品』だとはな。命も随分と軽くなったものだ」

訳のわからぬ、言葉を発して。

第二章 第一話『隠者』（後書き）

第二章スタートです。これから、どうぞよろしくお願いします。

第二話『ネツアク』

十一月、十七日。正午前。

異端学校グラウンド。

そこにて、大河は椿と睨みあっていた。椿が大河のほうへとエアガンを、どこにでもありそうな、安っぽいエアガンの銃口を構え、それに大河が立ち向かうように、向かい合っていたのだ。

辺りには他に、彰あきひと帆照おきうが大河がこれから発動するであろう“能力”を見るために、丁度大河と椿を横から見るとな形で、二人揃って、監視するようにその椿と大河の二人を、校舎前の段差に腰を下ろすようにして、見据えていた。

「……………」

皆、真剣である。

さてと、と。

椿はそんな大河の集中力を見、一旦溜め息をついてから。今の大河の集中力なら、思い込みなら、能力が発動するであろうと判断し、ようやく、大河の『能力検査』を開始する事を決意した。

「彰、大河。そろそろ、互いにタイマーの時間を動かせ。無論、同じタイミングで、だ」

椿はエアガンを大河に向けたままで、視線だけを彰の方へと移し、対して、視線を向けられた彰は「わかった」と言っ、椿と向かい合っている大河に目配りする。大河もその言葉に頷く。

大河が頷いた直後。異端学校校舎に掛けられている時計が、正午丁度の時刻を告げ、鐘に似た低く重い音を、グラウンドに響かせ、それを二人は合図とし、時間を計測し始めた。直後。

「避けるよ！」

言っ、椿は、片手に持っているエアガンの引き金を引いた。同時に、風船が割れるような、乾いた音がグラウンドに響き渡る。

互いの距離は、実に二メートルほどにしか開いておらず、それは常人なら、そんな近距離で撃たれたなら、まず避ける事はできないであろう。どころか、反射できるかどうかすら怪しい。そもそも生徒に、いくら玩具とは言え、エアガンを撃つものも、いささか常人とは言い難い。

だが。

それも全て、常人　なら。

能力者なら。

“異”常人なら　話しは別だ。

「！」

大河はエアガンから放たれた、一発のＢＢ弾を目に捉え　否。それどころか、大河以外の、全ての物体が“ゆっくり”と、その時を刻みながら、大河の目に捉えられていた。その全ての物体が、ゆっくりと時を刻んでいく中で、大河だけはその時を同じとして刻んでいなかった　大河だけが、その中で、唯一通常の数で動いているのだ。

落ちる木の葉は、まるで空中に浮遊しているかのように“遅く”落下していき、また、エアガンの引き金を引いた椿の指も、“ゆっくり”と引き金から離されていき、ＢＢ弾もまたゆっくりと、まるでスローモーションでも見ているかのごとくの数で、大河に近づいていた。

無論。

ここまで、遅くなってしまうえば大河も避ける事は容易な事。まず手に持っているタイマーの時を止めて、それから眼前に迫りつつあるＢＢ弾を避けようとした　のだが。

「がっ！」

そのＢＢ弾は狂いなく大河の額を撃ち抜いた。

大河は撃たれた痛みで、少し身体を仰け反らしつつも、額を手で押さえ、涙目になりかけている目で、自身のタイマーに体勢を戻すのと同時に視線を落とす。無論、これは同意の上で行っているので、

これは避けなかった方が悪いということになる。

対して、彰は大河が視線をタイマーに落としてから、間も無く大河と同様にタイマーの時間を止めた。

「避けられると思ったが……これは私が悪かったな。大河君、無茶をさせてすまなかった」

椿は歯切れ悪く、本当に悪びれるようにそう言いながら、エアガンの銃口を地面に向け、その構えを崩し、両手を下げ頭を下げた。無論、大河も避けなかった自身が悪いのは言うまでもなく承知しているので、逆にこれは大河の良心を痛めつける形となってしまうたが。

大河はそれに、何か返事を返そうとしたが、しかしこの状況に適した言葉が見つからない。

と、無駄な思案をしている大河に向け、椿が顔を上げ、それから腕を組み 更に言葉を続ける。

今度はさばさばと。

「ま、それはそれだ。で、本題に移るが大河君。彰。互いのタイマーを見せてくれないか？」

「……………」

僅かの十秒も経たずしての切り替え 謝罪から一転し、椿は今回の本題へと話を切り替える。大河からすればそれは、ある意味助け舟のようなもののだが、しかし、こうもあっけらかんとされると、先ほどの謝罪が表面上の謝罪と思わされてしまうものだ。事実、表面上の謝罪なのだろうが。

その言葉に彰は大河と違い何を思うこともなく「了解」と一言言っ、立ち上がり椿の前へと歩みを進めていく。

彼の格好は相変わらずの格好だ。普通と比べれば大分裾の丈が長いブレザーの前を開き、カッターシャツを曝け出している、一世代前の不良のような格好。

対して大河はこんな季節にも拘らず、上は半袖のカッターシャツのみを着て、グラウンドに立っていた。しかし 汗の量は並大抵

の者が掻く汗ではない。フルマラソンを走りきったような、それくらいに、大河は身体全体に汗を掻いてるのであった。だが大河は走るところか、一步すらも歩いていない　やったことといえば、額を押えたのとタイマーの時間を止めたくらいである。

しかし、実際今の大河には相当な疲労が蓄積されていた。理由は至極単純に“能力を発動したから”であり、またこの能力を発動してしまえば、暫くは大河は動く事すらもままならない。服装といえば、椿は相変わらずのジャージだが、帆照は異端学校の女子制服に着替えている。無論、病院であったときは違う、スカートにブラウスという一般的な制服である。

ただし夏服。

一方の彰は椿の前まで歩いた所で、その脚を止め、手に持っているタイマーを椿の掌に載せるようにして渡した。

指定時間から一秒　どころか零点一秒すら、オーバーもマイナスもしていない、五秒の時点できっちりと止まっている、そのタイマーを椿に見えるように、掌の上に載せて渡した。

彰が能力を使用したのは言うまでも無い。

「成程、な……流石だ、一寸の狂いも無い」

椿はタイマーの秒数を見て、彰を褒め　しかし、当然のように頷いてから、それから踵を返していく彰とすれ違うように、大分遅れて歩いてきた大河のタイマーを手にとって、鑑みて　「やはり」と小さく呟く。しかし、それは決して良い気分のような口調ではなく、むしろ何か悪い事を確信したような　そんな、風に呟いたのだった。

「……………」

それに、大河もまた特に訝しんだりはず、ただ“あの時言われた事”を回想していた。

大河が退院した、その翌日にあった　ボルテクスの“付きまとい”のことを。

時を少々遡り 十一月、十五日。大河の退院翌日。

大河の手にあつた刺し傷は既に完治しており、また健康状態も既に元に戻っていたので、特になにを言われる事もなく、先日退院。彩香とはついに最後まで合えずじまいであつたが、椿を通してでの会話なら、少しだけ会話もする事ができていた。しかしそれも、会話と言うよりかは、どちらかと言えば『現状報告』に近いものであり、兄妹の会話とはとてもかけ離れている内容であつた。そして、椿とは現状報告のパイプ役以外にも、異端学校の事と、それから『転入』に関する事などを話し合つており 結果として、色々悩むまでもなく、大河はその異端学校に転入することとしたのだ。

異端学校は全寮生活。肝心のその寮は、廃校したプレハブの仮設校舎を改造した寮。しかし、大河は写真でもその寮を未だに見たことがないので、ある意味どのような寮なのか、大分気になる所であつた。学費は“学校内で稼ぐ”という、画期的且、意味不明な方針である。因みに、未だに大河はその意味を知らない というよりは、訊くことがほかにありすぎて、頭の外にあつた、と言うほうが正しいであろう。

転入に関する動機は『守ってもらいたい』では なく、『能力について、もっと知りたい』という、実に単純明快な理由にして、学校に入るにはもっともらしい理由であつた。

実際、能力云々以前に、大河は能力については無知なのだから、言ってみればその動機が、もっとも相応しいとも言える。

そんな決意を固めた大河は、今 見慣れぬジャージを羽織り、やることなく、ただ一人で、どこに行く事もなく歩いていた。歩いている場所は、午前椿につれられ辿り着いた『異端学校周辺の住宅街』である。しかし、辺りには一切学校らしき、建築物は見当

たらないし、そもそも何故椿が、ここまでつれてきて、そして自分にはここで待てといつているか、というその意図が大河には少し理解しがたい。因みに、見慣れぬジャージは、椿が大河に荷物として持たしているもので、大河の所有物ではない（無論、椿も上半身裸体という訳ではなく、下には半袖の टीー シャツを着ており、一応服の常識はある人なのか、と大河は初めて思わされた）。

そして、待たされて 既に時は夕方までを刻み、太陽の日差しも橙色に近い。

不審者と言われ、通報されても仕方がないほどに、大河は同じ場所をただ、ぐるぐると特にあてもなく、まだ彷徨っていた。此処につれられてから実に半日近くも、大河は同じ場所を廻っているのだ。実際ただ、じっと待っているのも彼にとっては、それはそれで、不安が募って募って、不安の種が絶えない。彩香の病状も含め 能力も含め。

なので、大河は気晴らしに取り敢えず歩いていた ここを見失わないように、あくまでも見える範囲で、ぐるぐると、廻っていた。不審者である。

「何？ らしくもなく、落ち込んでんの？」
「！」

と、どこ行く当てもなく、不審者よろしくと歩いていた大河の後ろに何時から居たのか 澁刺とした声で帆照が第一声にそんな言葉大河の後方から浴びせた。服装は、病院で初めてあった時と同じ、ノースリーブとショーツとハイソックス。一般的に見ればそれは寒そうで、世間から見れば少し貧しい子供、と誤解されかねない服装である。

その唐突な言葉に対して、大河は振り返りながら「らしくもなくは、余計じゃないか？」と思いつつも、「いや……」と曖昧に言うだけで、否定はしない。

つまりは 肯定。ではないが、殆どそれは肯定に近い応え方でもあった。

しかし、帆照はそんな大河の遠まわしの肯定をしつてか、知らずか、澁刺で快活な口調を変えることもなく、話を一方的に浴びせる。「ふうん……なんだ。てつきり、あたしは妹の事が気になって気になつて、行く当てもなくやることもなく、自責感に圧され、仕方なく歩いている、不審者よろしくのシスターコンプレックスを持つ兄大河は、落ち込んでいると思つていたんだが？」

「酷い物言いだな！」

しかし、またも否定はしない大河であつた。シスターコンプレックスも不審者よろしくも。

「あ、ようやく、言葉らしい言葉を発したね」

「ここまでいわれりやあ、誰だつて抗議くらいするさ」

むしろ、抗議しない奴を見てみたい　とやるせないように、苦笑しながら言う大河に対して、帆照は快活な笑みを表情につくり、ただ『しつしつしつし』と笑うだけであつた。

この少女　帆照は、この大河との会話でも分かるように『性格が悪い』。三日前、大河はこの帆照と会話したとき、どこか懐かしさを感じていたが、今となつてはこの帆照の性格の悪さの方が大河の中では印象深い。実際大河が退院するまで、帆照はずっと大河の前に居て、まるで人との接し方がわからないのか、というほどの人を食つたような態度で、その大河の面倒を見る　というよりは、大河を困らせる事も、少なくとも無かつた。

そのため、大河からしてみれば、良い印象は少ない。

言うならば　『苦手な人』。

因みに、大河はまだ、帆照と彩香が顔見知りであり、ちょっとした友好関係があることなどは、知らされていない。

「……そう、あれだ。俺、今からエロ本買いに行くんだ。お前とそっくりなモデルの奴の。じゃ」

帆照と二人きりなのは流石に気まずい、と大河は病院内での記憶を思い出しながら、適当な口実を作つて、その場から逃げようとしたのだが（これもこれでどうかと思われる判断だが）、しかし、帆

照はそんな大河の心中を全く察してないのか、

「じゃ、あたしもお供させてもらおう」

と、快活に言ってみせた。

大河はそれに対し「いや、流石に女子とは気まずい。第一にあのコーナーは、男だけの場だ」と姑息なことを言って、その場を凌ぐうとしたが、それさえも帆照は「いいよ、あたしは、大河と同じ書店にいくだけだ」と、さりげなく呼び捨てで、そう言ったのである。

「いや、でも、駄目だ。同じ書店でも駄目だ」

「え、何で？」

「あれだ、同じ書店に知り合いの者　ましてや、モデルに似てる女子がいれば、気持ちも萎えてしまうからな」

無論、大河に知り合いなどおらず、それこそバイト先の仲間ぐらゐである。以前に、帆照にそっくりな、モデルやアイドルはまず居ないといえるであろう。

「ふうん……じゃ、いいよ。あたしは、精々目に付かないように、ひっそりと、静かに、誰にも悟られないような場所で、孤独に涙を流しながら、本を濡らしながら読むから」

「そこまでは要求していない！」

思わずの怒鳴り声。そもそも、書店で読むという前提から、少しおかしい部分もあるのだが、今の大河にそこまで思考を回す余裕は無い。

しかし、対する帆照はこの時を待っていたといわんばかりに、一気に大河を畳み掛けるのであった。

「へえ　じゃあ、なんで一緒に言っちゃ駄目なのか不思議だなあ。そう思わない？　仮に、一緒にきてもそれはそれで、萎えるとかいわれちゃうし……なんだか自信がなくなるな。自分に自信が持てないよ」

「悪かった、一緒に行こう」

この返事に大河は「もう、これ以上拒否しても、俺が罵られるだ

けだ」と確信し　何より、これ以上断るのは帆照が可哀相だ、と思ひ、大河は渋々頷いて帆照の同行に了承した（結果だけをみれば、大河が頼む形になったが）。

その可哀相だと大河に同情されている、当の本人帆照は同行させてもらえることが嬉しいのか、少し小躍りでもするんじゃないか、という歩調で、大河を先導するように歩を進め始めていく。対して大河は、実際工口本なんか買ったこともなく　また中身を見たことも、無い。表紙くらいは、バイトやそういうので見たことがあるが、中身を見たことは一度も無い。皆無。なので、自然歩調が少々脚を引き摺る形となっているのだが、帆照はそれにすら、気付いていない。

というより、頭に入っていない。

「……随分と嬉そうだな、お前は」

大河はまるで気力を感じられないような声を、帆照にかけた。それに対して、帆照は自分が喜んでいいる事は無意識なので、少し首をかしげその言葉の意味を、訝しんだが　間も無く、自分と大河との距離が大分開いている事と、自分の歩調が大河より大分速い事に気付く「そうか、な？」と、どこか歯切れ悪く、照れ隠しするようにそれに応えた。それに、大河は「そうだ」と強く肯定し、まるで帆照の照れ隠しを無駄にするような態度を取るのだった。

しかし　こんなにも帆照が嬉しがっているのは、別に相手が大河だからと言うわけではない。

彼女は、単純に“怖くて寂しい”だけだ。

自分が除け者にされる事が、自分が一人になってしまふ事が、自分が虐げられる事が、自分が置いていかれる事が　そんな誰でも嫌で怖くて寂しがするようなことを、彼女はより過敏にそう思っているだけである。しかし　それは、彼女が過去にそういう体験をしていたから、そこまでにも、過敏にさせてしまっているのだ。

実際に体験して、実際に一人になって、実際に虐げられ、実際に置いていかれたからこそ、過敏になり　二度とそうなりたくない

為に、色々と接点を不器用ながらも彼女なりに作り、自虐とも取れる罵倒の言葉で、悪い方向でもいいから、取り敢えず相手の気を引いて、自らのトラウマを掘り返すような事まで言っても、彼女は孤独だけは避けたいと思っていた。だから、意識を失っていた大河の面倒を見ていたときも、眼を覚ましたその後も決して離れる事はなかった。別に、それが大河じゃなくとも帆照はそこにいたに違いない。

だから、特に、大河だったからと言うわけでは ない。

そして、帆照がそうした自分と文字通り、向き合うことになるのは、そこまで遠い話ではなかった。

因みに、彼女は不審者よろしくで歩いていた大河のあとを、実はと言うとずっとストーカーキングしていた。今日午前には椿につれられ、それから大河が椿に放置されてからずっと、帆照もまたストーカーよろしくで、大河のことを尾行していたのだ。しかし、大河には運よくか、運悪くか、ついに最後まで悟られることはなかったが。

仮に、帆照が敵ならば大河は既に殺されているに違いない。

「おい、どこまで行くつもりだ」

と、大分先ほど会話した場所から更に歩いていった所で、大河はそう帆照に問う。面倒臭いのもあるかもしれないが、しかし、実際、大河達が歩いてきた距離も距離だ。実に、一キロほどは既に歩いている。逆を言えば、その一キロ以内には一切書店やコンビニがなく、多くの住宅が並んで、密集してただけで、大河はその光景に「同じ場所を廻ってるんじゃないか？」とも思ったが、しかし、そんな事はなかった。実際、帆照にもそんな企みは一切無い。本当に、純粹に、書店に大河を先導しているのである。

なので、帆照はその問いに少々“困惑した”。

何故なら「本を買いに行く」と自分で言っていたにも拘らず、その当の本人の大河が、その場所すらも把握していないとなると、その発言の真偽を疑わなくてはならないからだ。先も言ったとおり、帆照は大分そういうのには、過敏になっている。故、それが、嘘だ

と分かった時点で帆照がどれほど落ち込むか　それはわかったものではない。

「……え、と。大河？」

「何だ？」

振り返り　少々、戸惑いながらそう言う帆照とは対照的に、大河は力強く応えた。

「いや……あの、あの、店の場所は大河も　知ってるよね？」

「“知らない”に決まってるだろう」

「……………」

おずおずと訊く帆照に　しかし、大河は帆照としては、もっとも望んでいない返答。

この場合での最悪の返答を、大河ははつきりときっぱりと、齒切れよく帆照にその言葉で応えた。帆照もその返答を受け、色々と勘繰らずにはいられない。否。

色々と落ち込まずにはいられない　が正しいだろう。
が。

だが、と。

大河は更にその言葉が続ける。

「だが　考えてもみろ、俺はここにくるのは今日が初めてで、その書店やら店やらを探すのも含めて、俺はうろつろつしてたんだ。だから、知る訳もない」

「そ……そう、だよな」

と、大河は更に淡白と続け　今度こそ、言い残しも無しに言い終え、その口を閉じた。

その言葉に帆照は安堵を覚え　また、辻妻があつてることから、嘘ではないと言うことを確認して、自分の憶測が外れたことに帆照は胸を撫で下ろし、同時に、自分が他人を疑ったことを自責しながら、帆照はそこで深々と頭を下げ、それから謝罪の言葉を口にした。帆照らしからぬ、謝罪である。

「大河。ごめん、こればっかはあたしが悪かった」

「いや、そこまでしなく……っ！」

大河の応えを聞きながら帆照は、下げている頭を上げ、そのまま前に振り返ろうとしたのだが。

「じゃ、次はゆっくりい　ぶっ!？」

と、帆照は振り返った途端に　何かにぶつかった。

しかし、それは壁というほど、硬くはなく　むしろ、建築物としては柔らか過ぎるほどの感触であった。だが、それでも物としては、決して軟らかいとは分類されないであろう、という感触。

帆照はそれが何か確認するため、一步退くまでもなく、すぐにその前にあるものに視線を戻し、その前にあるものを見上げる

が、それは見上げるまでもなく“人”であった。

成人の男。

体格は平均的だが、接触した時の感触から、帆照は「筋肉は成人にいはしてはついている方」と推測し、更にその男の色々な　色々な、“特徴的部分”に視線をやった。

髪は長い金髪。そして、それを全て後ろでまとめたような髪型。

全身を灰色のスーツに身を包み、手荷物はない。

眼は　『赤色』をしていた。

「……？」

金髪碧眼　ではなく両眼とも『赤^{せき}眼』。

言うならば『金髪赤眼』である。

帆照は最初、その眼の色に「充血しているのか？」と疑ったが赤いのは、白目の部分ではなく、黒目の部分。碧眼とか見分けるときに見る部分が、この者は赤い。次にカラーコンタクトか、どうかも疑ったが　それにしても、自然で、綺麗過ぎる赤色で、深過ぎる赤色であった。

夕焼けとは違う、赤だった。紅蓮ではなく、赤。紅ではなく赤。

あくまでも、赤色。血のように、濃く、深い　赤色。

「……」

この状況で最も驚いていたのは　言うまでもなく、大河である。

無論赤い眼というのにも驚いたが　それ以前に、大河はもつと驚くべき事を目の当たりにしていた。その赤い眼よりも印象深く、そして恐ろしい事、信じがたいこと。

それが　この者が、“瞬間的に帆照の前に現れた”という事である。それこそ、意識こそしていなかったが、大河は決して瞬きなどとはしていない。どころか、視線を逸らしてすら　意識を逸らしてすら、いない。むしろ、帆照の前方に意識を集中させていたくらいだ。

だが、この者は　なんの前触れもなく、現れた。帆照の前に、音も立てずに、あたかも初めからそこに居たかの如く、現れたのだ。
「……………っ！」

言葉は　だそうにも、出ない。
絶句。

恐怖でか　はたまた九月に夢でも見た『あの事件』の記憶が蘇ってか。大河は、言葉をだそうにも、その言いたい言葉が多すぎるあまりに詰まってしまう、絶句していた。

いや　言葉を言おうにも、どの言葉もこの者には“的外れ”に思え、絶句していた。

「　そう、動揺するな」

勘付いてか、察してか　はたまたこれも予定調和なのか。

その男は絶句している大河を説得させるように、諭すように、言葉を発し始める。

「わたしの名は『ネツアク』。“能力”は空間配置変更能力。わたしは『ハニエル』と呼んでいる。貴様等も、長つたらしい名より、こちらの方がいいだろう。話しが幾分スムーズに運ぶからな」

この男はあるうことか、自分の名を名乗り　更には、自分の能力まで語り始めた。まず、普通有能力者ならば、そんな行動はとらない。たとえそれが、嘘の情報だったとしても。

「……………っ」

それを聞き　しかし、大河は未だに、否。余計に状況が理解で

きずに居た。一方の帆照は「自分から言うつて事は、馬鹿か、自信家か」と、そんな大河が考えている事と比べれば、まだ平和な事を考えていた。が、その帆照の考えも、また“全て外れている”。この男は馬鹿でもなければ、自信家でもない。むしろ、消極的なタイプだ。

しかし、この男は大河の返事を待つことなく、更に一方的に会話を続けていくのであった。

「安心しろ　貴様を捕えるつもりは、毛頭ない。殺す気も、怪我を負わせる気も、全く無い。皆無だ」

この男は無機質な起伏もない声で、口調で　淡々と淡白と、話を続けていく。

「今回貴様に……いや、こういわせてもらおう　『暴食の血を継ぐ者、タイガベルゼ』に会いにきた理由は、他でもない。『助言』だ」

「……………」

こんなにも馬鹿らしい言葉にさえ、大河は　暴食の血を継ぐ者、邊流は大河は、啞然とさえもできずにいた。呆気にとられる事もなく、呆れる事もなく　ただ、驚くのではなく、恐怖するのでもなく　なんでもない、複雑な心境を大河は胸に覚えていた。

大河のそんな様子を見ずとも、帆照はそれを察する事ができた同時に、何故ここまで絶句しているか、その理解に苦しんでいた。

しかし、帆照にも一つだけ確信できてるものはあった　それは、このネツアクが、大河にとっては良い存在ではなく、むしろ、かなり悪い存在である、という事だけは、確信できていた。自分にとってもそのような、“恐怖すらも覚える苦手な存在がいた”から帆照は、すぐにそう察する事ができたのだ。

故　すぐに、大河を庇うように、“炎で男に威嚇した”のも、またそれ故。

帆照は、それを察したのと同時に　炎を自らとネツアクの間、

僅か十数センチというほどの、狭い間に炎の壁を隔てるように、噴き出させたのである。

威嚇にしても、少々やりすぎな気もあるが

「そして、その助言と言うのだが」

「！」

しかし ネットアクは淡白に。

帆照と自らの数センチほどの間から、壁を隔てるように、一瞬だけ噴出した炎を目の当たりにしても、眉一つ動かす事無く どこるか、口調を変えることもなく、話を続けるのであった。

対して帆照は、いよいよこのネットアクを普通の者ではない、という判断を自らの中で下し 二歩その男から後退して、大河と自身を守るように、次に臨戦態勢をとる。といっても、実際構えるのは心だけであって、それ以外は何も変わることはないのだが。

「貴様の能力に關してのことです」

「待て」

と。

ネットアクの言葉を遮り、ようやく大河は言葉を発した その言葉は、とても小さく低い。近くを車か何かが通れば、それで？き消されてしまうような、そんなにも小さく低い声。

だが、今は言うならば静寂 唯一音がするとすれば、ネットアクの声と、大河達を吹きつける風の音のみ。この音でも、十分に声として、言葉として拾うことは可能だ。

「……待て？」

大分間を置いて、ネットアクは大河のその言葉を訝しむように反復した。しかし、それは声だけであって、表情は何一つ変わることは無い。

まるで 『機械』。

それに、帆照は不気味さこそ覚えたが 大河は、それでも何も思うことはなく、否。既に、赤い眼という時点で、どの人種にも属さない人間だという時点で、大河はこの者を普通と思っていない。

もつとも、そう思う切っ掛けは、このものが瞬間的に帆照の前に現れたからなのだが。

そして、ネツアクを能力者と確認した時点で 椿に言われた『能力者全員が敵』という、今一現実味の無い言葉を思い出し、現実味がなくともその時点で大河は少なからずとも、既にネツアクを少しだが敵対視はしていた。つまりは、目の前に現れた時点から、大河は既に敵対視していたのだ。

それが、今 確信に変わった。『少し』が、『完全』に変わった。

無論ネツアクの容姿から、一瞬はあの事件を連想してしまったが、それでも鮮明にあの記憶が甦るという事は、無かった。金髪に赤眼という、二つの特徴は一致するが だが、その記憶が鮮明に甦るということは、ついになかった。

大河はネツアクの言葉に「ああそうだ」と言つて、それから続ける。

「 あんた、一体何者だ」

「わたしの名は、ネツアク。空間配置変更能力者。ハニエルと呼んだ方が呼びやすい」

「そうだが……いや、そういうことじゃなくてだな」

ここで大河は一旦思索してから、それから、言葉を選びなおして、
「 あんたも、能力組織に所属している奴なのか？ それとも、別の組織に所属してるとか、或いはどこにも所属していない、能力者なのか？」

と、ネツアクの身分を尋ねた。あくまでも、上からではなくそして、下手に回りすぎないように、同じ位の身分の者と会話するように、大河は尋ねる。

対して、ネツアクはその問いに、間を空けることもなく、また淡泊に応える。

「わたしは “ どれでもない ”」

「……それでも、ない？」

そう反復したのは大河　ではなく、帆照。

帆照はネツアクの「どれでもない」つまりは、能力組織でもなく、他の組織でもなく、無所属でもない　その応えに、納得がいかなかったのだ。無論、帆照は大河よりも組織とか、そういうのには詳しく、そんな組織でもなく、無所属でもない　そんなふざけた、返答が気に喰わなかったし、何よりそんなのがある筈が無い、と思い反復したのだ。

しかし、ネツアクはそれに「そうだ」と、動揺することもなく頷いて　大河達の前で、初めて行動らしい行動をみせてから、それに続けるように言う。

あくまで、淡泊と。

「そうだ　わたしには付き纏わせてもらっている、という言葉の方が正しいかもしれない」

「へえ。じゃ、誰に付きまとってるの？」

それに応えたのは、またしても帆照　というより、大河がネツアクの言葉に口を開こうとするが、その前に帆照が、大河に代わって言っている、という風な感じた。それに、帆照はここまで、ネツアクに思い入れとかがないので、思い入れが深い大河に比べれば幾分増しに、偏見やそういうのを無しに、スムーズに会話をできていた。

ここまで　は

「ふむ……」

その応えに、ネツアクは今度は少し間を空けてから「分かった

」と頷き　そして今迄の同じく、無機質に淡泊と、それに応えた。

「わたしが、付きまとわせてもらっているのは他でもない　マルクト・ボルテクス様だ」

第三話『助言』

「……ボルテクスの付きまとい、ねえ　はっ、ふざけてんの？」
しかし、帆照はその応えをまるで信じようとせず　肩を竦め、
鼻で笑い、むしろ、嘲笑するような仕草さえ見せていた。

そもそも、それは帆照でなくとも、能力者ならば誰もがそんな“馬鹿みたいな言葉”を信じようとするはずが無いであろう。『空間配置変更能力』にしても、そうだ。帆照の眼の前に現れた時のあれは、迷彩能力であつたのかもしれない、という線もある。帆照自身は現れた所を実際には眼で見えていないが　少なからず眼の前いきなり現れた、という部分は帆照自身も知っている。体感しているほんの数秒だけ前方から後方に振り向き、そして再び前に振り返つたら　そこにこの男、ネツアクが既にいた。壁や電柱などで隠れるような体格ではないし、以前に。

以前にネツアクは歩道の真中に、立っていた。

それを、ネツアクは『空間配置変更能力』と称しているが、しかし帆照は　実際は迷彩能力か何かで、自分の前をずっと歩いていて、タイミングを見計らって現れただけかもしれない、と考えていた。

事実それは辻褄が合うわけであり、ネツアクが仮に迷彩能力だとしたら『空間配置変更能力』と自ら能力を名乗り、相手にあたかも自分が瞬間移動を試みせた、と見せかけ『自らが強大な力を有している』と信じさせ、虚勢を張る事も不可能ではない。むしろ、そちらの方が普通に考えれば、辿り着く結論だ。

それに、何より馬鹿らしいと、帆照が思ったのが“ボルテクスの名を出した”ことであつた。

確かに　ボルテクスは現在、能力の知識を持っている、或いは能力がある者ならば、嫌でも目に映り耳に入る名である。

現時点最強と称され、能力組織からも暴食者以上に敵対視されて

いるものであり 否。そもそも、大河達が狙われているのも、ボルテクスが大河達を欲するが故なのだから、ボルテクスの方が、より危険視されてるのは、それは当然であり、必然であろう。

しかし、その『ボルテクス』という名はあまりにも広まりすぎ、逆に“弱者にとつての盾”となつているのも事実である。

大した実力も無く、知能もない、能力の世界でも殆ど見捨てられ、たに近い地位にいる者達が、その名を使い このネツアクのように、いかにも自らがボルテクスの手下であり、巨大な力が背景にある、と思わせる輩が蔓延つてきているのが事実であり、能力の世界の現実であつた。言うならば、能力者の中の『不良』。実際、一時期の間だけで現在は消失しているが、『暴食』と意味も知らずに名乗るものも、能力者達の間では少なくはなかつた。

そついう、名だけの、虚勢を張る輩が蔓延り始め、またそついう輩を何十と見てき、聞いてき、知つている帆照にとつては こんな大人の、そんな子供みたいな嘘をついているであろう事と、そんなあからさまな嘘に呆れ返つてさえたのだ。

だが、ネツアクは態度を変えずに 淡泊と続けるのであつた。

「ふざけてなどいない 以前。貴様に、信頼がなかるうがあるうが関係ない。わたしが話したいのはあくまでも、タイガベルゼだ」
「なら、その肝心の大河はあんたに信頼を置けてるのか？」

「言つに及ばず と言いたい所だが、しかしそれで貴様の警戒が少しでも解け、話が進むのであるのならば、教えてやろう」

ネツアクはそつは言いつつも、やはり淡泊と、淡々と、続けるのであつた。

「それもまた貴様同様だ。ベルゼにもわたしに信頼を置けなどは、一切思つていない わたしは『助言』するだけだ。あくまでも、今日は口に出し、言葉にして言うだけだ」

「へえ……」
と。

そつ、ネツアクが言い終えた 途端。

まるで、言い終えるのが分かっていたかのように、丁度ネツアクが言い終えた直後に　帆照は手から、何も無い空中へと“火を発火”させた。それから、火を包み込むように手を握り、その手を後方へと振りかぶる。

威嚇体勢ではなく　これは明らかな、攻撃体勢であつた。

「！」

大河は突如として帆照が、火を発火させた事に驚愕としたが、しかし、すぐに帆照がその火で何をしようとしてるかを察し、驚きよりもその方が心理的に勝り、すぐに帆照を止めようとした　が。だが、大河が丁度察した所で、帆照は既にその手を前方に、突き出すように振り切っていた。火もその姿を変え、空中を不規則にそれこそ、空気を喰らっているような動きで、ネツアクの眼前へと火は“炎”となり、迫っていた。

無論。

これこそ『言うに及ばず』にであろうが、それでも一応言うておこう。彼女　帆照の能力は『炎系統の原型にして典型の炎能力』である。

火を操ったり、大河にも見せたように、指から火を出したり、またネツアクに威嚇したときのように、形状を変化させたり　と、実に単純ではあるが、それ故に活用性も無制限といっても過言ではないだろう。しかし、火を指から出すといっても、実際は指の少し先から出しており、手や指から火を出したりしているのは、帆照自身が“集中”する為である。実際は帆照自身も火が出る理屈は不明であり、限度もある程度しか分からない。だが、そもそも、奇怪で怪奇で謎だらけの能力に、理屈を求めるほうがおかしいのだろうが、それでも。

謎だらけでも、理屈を付けようとするのは　人間だからだろう。疫病神ではなく、人間。

一方の炎が眼前と迫っているネツアクは　その一切の感情のない表情を変える事無く、否。どころか、眉の一つすら動かす事なく

その炎を見据えていた。

襲われる側ではなく、襲う側の目付きで　その赤い眼で赤い炎を見据えていた。

「　これが、貴様の能力か。“よく、わかった”」

「……っ!？」

帆照からネツアクへと放たれた炎の塊は　しかし、ネツアクに当たたる事はなかった。

炎はそのままネツアクを通り越し　否、遙か後方の誰もおらず、何も無い空中へと“飛ばされていた”。炎は燃やす物体がないために、すぐに消え去ったが　帆照は、後方に向かってその炎を操つてもなければ、ネツアクの後方に発火させてもいない。そもそも、この炎はネツアクを狙った筈だったのだが、肝心の炎はネツアクには当たらず　どころか掠る事もなく、僅かに焦がす事もなく、後方に“飛んでいった”。

帆照はその状況に一瞬驚愕としてしまったが　しかし、すぐにネツアクの言葉を思い出し、自らが疑っていた言葉。『空間配置変更能力』　本人曰く『ハニエル』の事を思い出したのだ。

空間配置変更能力　これが、文字通りの『空間の配置を変更する能力』ならば、これまでの現象にも辻褄が合う。合ってしまう。

それに、何より炎に触れずに一瞬で後方に飛ばす、という実に怪奇的な現象を起こすには、それくらいしか方法は無い。だが、それも『空間配置変更能力』ならば　簡単にこの辻褄も合うだろう。

ただ『空間の配置を変更した』という、実に単純明快な一言で説明がつき、辻褄が合ってしまうのだ。ただ“炎があつた空間と、後方の空気しかない空間を入れ替えた”　という、単純明快な理由で

しかし、人間。一瞬でそこまで早く二つの座標の演算ができるものだろうか。ましてや、片方は炎　常に不規則な変化をし、常に不確定な形でいる“炎”である。

が、それも『異常人』なら　また、別なのかもしれない。
異常ならば。

「……まずいわね、これは」

帆照は苦笑して 俗世から、例外の能力者の中でも『更に能力者外』なネツアクに苦笑して、それから、大河に耳打ちするように、振り向かないままに言葉を続ける。

「大河。あんたは取り敢えず、ここから逃げな。ここまで連れて来たのはあたしだ、責任はあたしにある」

「帆照」

その言葉に大河は「じゃあ、お前はどする」とか、そういう台詞ではなく むしろ。この場合では最悪な、しかし最善な台詞を大河は言ったのであった。

「“大丈夫”だ。逃げなくても。こいつは俺達を狙う気なんか無い。むしろ、俺はここに残るべきだ」

「……大河、あんた何を思いあがって」

「思いあがってなんかいない。それにもし、あいつ ネツアクが俺を狙ってるなら、とつくに、人目の無い場所からその配置変更能力で俺の首でも心臓でも刎ねている筈だ。だが、こいつは俺だけじゃなく、帆照の前にも現れたし、自分の名も名乗っている。以前にこいつは監視カメラとか、証拠になるものがある住宅地で喋っている 暗殺なら、もっと卑怯なやり方でやるに違いない」

大河は 先の白髪敵を思い浮かべながら、暗殺という言葉を吐き捨てるように、口にした。そして、大河はその暗殺を 『卑怯』と称した。

それを聞き、帆照は大河の剣幕に少々気圧された気もあるがしかし、内輪もめなどしている場合ではないので、今は渋々それに頷き、一度考えるのを放棄し、冷静さを取り直す。この辺りの切り替えの速さは、やはり豊富な辛い経験があるからであろう。

「別段現れたからといって、殺さないという保障はないが しかし、流石だな、ベルゼ。その吠える少女を、こつも簡単に宥めるとは。正直わたしは、これ以上能力を発動したら話が進まないのだから “飛ばす所を考えていた” ところだが その必要も、おかげでな

くなつた」

と。

ネツアクは帆照を宥めた大河を見ながら、賞賛しつつも息を呑むような言葉を言つて　しかし、淡泊と起伏のない口調で言つて、更に続けていく。それは、ある意味嘘にも負けそうな、薄っぺらな褒め言葉であつた。

「それはさておき　ベルゼ。わたしが貴様に言う助言は、貴様からしてみれば少々可笑しい物かも知れないが、それでも言つておこう。それに　」

言いながら　ネツアクは大河達の後方の地平線に沈んでいく夕日に視線を移し、それから、更に住宅街をぐるりと見回す風にしてから　凡その時刻を自らの頭で予測し、

「　時間もない」

と、声のトーンを落として言つた。

大河達からしてみれば、全く意味の分からない言葉だが、しかし、ネツアクはその時だけ、初めて口調を変えたのであつた。

声のトーンを落としたのだ。

大河はそれを怪訝に思つたが　しかし、ネツアクには詮索を入れた所で、どの道会話になるかどうかすら怪しく、そもそも、対等に会話できた所でネツアクの話術に翻弄されるだけであろう、と考へ、とりあえず今はネツアクの言動の一つ一つを憶えることだけに神経を尖らせていた。

「……すまないな、少しばかり脱線してしまつた。では、本題に戻ろう　ベルゼよ、貴様に対する助言とは『貴様は時間を前借できる』という事だ」

「……意味が分からねえ。それに今一信用できねえ言葉だ」

「ふむ……ま、にわか信じ難いのも無理はないか。しかし、それはそれでしかない　貴様は時間を前借できるのだ。だが、それ自体は“無意識”に行われているからな……確かに難しい事だつたか。ならば、わたしが言えるのは　それを意識的にしろ、という事だ

な。傷が早く治ったり　など、思い当たりはしないか？　ようはそれを意識しろという事だ」

ネツアクは淡白とそう言って　“姿を消した”。

「！」

突如として。突然と。唐突に。

まだ何か続きがある風な口ぶりではあったが、しかし、ネツアクは何も続けずに消えた。挨拶も合図も何も無しに、今度は最初からそこに居なかったかのように　消えた。

空間配置変更能力での移動　である。

「……もう、居ないみたいよ」

帆照はネツアクが居た場所を見つめ　それから、ネツアクが居た所に小さな火を放ったが、果たしてその火が燃えることはなかった。また、何かにぶつかり遮られることも、なかった。

つまり、既にそこには“物体はない”という事である。それと同時に、これで、帆照の頭の中から、ネツアクの能力が迷彩である、という線は消え　ネツアクの能力は『空間配置変更能力』という結果のみが頭に残り、またその能力がネツアクの能力である、と帆照はこの時点で結論付けたのである。

ならば　それは、例外的強さと言えよう。

『空間配置変更能力』。文字通り『空間の配置を変更する能力』。まず、科学では決して空間の配置は変更できないであろう、できたとしても、それは相当未来の話に達しない。更に言うならば、空間を変更する　これこそ、まさに無敵に達しない。四方八方から弾丸が飛んできたところで、自分ごと他の空間と入れ替わってしまえばいい。爆発が起きたところで、爆発ごとどこかの空間と入れ替えてしまえばいい、無論他にも逃げ方もあれば、対処の仕方もある

正に『無敵』。防御だけに限らず、攻撃面においても、それは同じ事が言えよう。標的の者がいたら、その標的の心臓でも空気と入れ替えてしまえばいい　そうすれば、たちまちその者は、死に至る。どんな生物であろうと、時間・空間だけは抗えない、否。

どんな生物であろうと 時間・空間だけは変えられない。干渉できない。

能力においても、帆照が知る限りでは、空間系統の能力を有す者はネツアクしかない。時間・空間を変更できるなどという、神の所業にも近い、行いをできるのは そうはいないであろう。

もつとも、ネツアクに今現在、時間を『前借』できるといわれる大河を含めれば、それはまた違う結果になるかもしれないが

まあ、それはともあれ。何はともあれ。

そんな神の所業に近い事を行える能力をもつ、ネツアクはこれから、少し時間が経った後に 異端学校教師にして、現在異端学校になんらかの目的で行って来た、椿と電柱の上にて、向かい合っていたのであった。

場所は住宅街の電柱の上。

そこに椿は立っていた。

文字にすればそれは、まるで、電柱に登るといふ悪戯をしているようにも見えるが しかし、椿の目的は別にある。

「……この辺りだな」

椿は電柱の上に立ち、そして頭から 『触角』を生やした。

二本一对の触角。節足動物の頭部に生えている、触角である。

無論。

言うまでもなくこれは能力によって、生えている触角であり、椿が宇宙人だったとか妖怪だったとか、そういうのではなく、椿は自らの能力によって 触角を生やしたのである。

その触角には血も何も付いておらず、まるで最初からそこにあったかのように、椿の頭部に生えていた。前頭部から、前に垂れるよ

うにして、生えていた。

椿はその触角を根元から起用に動かし 何かを探すように、何かを掴もうとしてる風に、その触角を椿は動かしていた。

時には見る向きを変え、時には大分間隔があるう電柱から電柱へと“とんで”場所を移したりもして、椿は探していた。かすかに触角から嗅げる、“自らの匂い”の本体を探していた。

つまるところ、椿はかすかに匂う自らの匂いを ジャーギーにつけておいた、自分の匂いの正体、その匂いの元を探しているのだが、自分の匂いと言うのは、普通他の匂いと比べれば分かりにくいものだが、しかし椿にしてみれば、それは僅かな誤差の範囲内であり、別段分かりにくいという事は無い。むしろ、嗅ぎなれている匂いだ。分かりやすい、といっても過言ではない。

なので、椿は大河に自らのジャーギーを持たせ、居場所をGPS携帯しながらに特定できるよう、仕向けたのである。

しかし、大河は椿の思いのほか 否。椿は自分の思いのほか先ほどの交渉で、“能力を酷使しすぎてしまった”。椿の服は現在、言うならば ぼろぼろ、だ。否。それも服だけではなく 身体

の所々からも、血が流血し、出血しているではないか。

満身創痍である。

ジャーギーの所々が破れ、シャツも所々破け、そこからは傷口が露わとなっており、その傷口からは鮮血が流血していた。今でこそ出血も殆ど収まるほどの小さな傷口だが、それでも傷口の数は優に二十は超えている。背にいたっては、出血こそしていないが、シャツに四個の大きな穴が開いている。

そんな傷だらけの状態で、椿は大河の居場所を搜索していた能力をその前の交渉で酷使しすぎ、集中力が殆どないにも等しい状態で、椿は更に能力を使って大河を搜索していた。自分のジャーギーを持っているであろう、大河を探しているのだ。

しかし、そこに 『探す』と言うところに誤算があったともいえよう。

椿はもつと早く見つかるものだ、樂觀視していたのだが　予想以上に、その前の交渉で能力を酷使させられ、酷使し、酷使しすぎた故に、その希望的観測は見事に外れたのである。もつとも、人を一人で　それも知らない土地柄で歩かせておけば、それもそれで、探すのが大変になるのは当然。希望的観測すぎた、というのもこの状況を作り出した原因としては、多々あるに違いない。

しかし、こうもしている間にも時は時間を刻み　気付けばもう、日もおち、辺りの空も暗がりつつあった。

「……あまり、動くなといっておくべきだったか」

眉を寄せ、後頭部を掻き篦りながら　この薄い匂いに頼っているだけでは埒が明かないので、もつと搜索範囲を広げるべきだと椿は考え、今まさに自らの能力を使って移動しようとした時。

丁度、その時であった。

「　ハナミズキ。どのみち動くなと釘を刺しておいたところで、わたしからすれば、結果は同じに見えるのだが、貴様は違うのか？」

と。

何の脈絡もなく、何の前触れもなく、何の前兆もなく　突如として、一人の男が“椿の前にある電柱の上”に現れた。あたかも、初めからそこにいたかのように、その男はそこに立っていた。音も立てず、息も切らさず、ずっとそこで立っていたかのように、自然に立っていた。

容姿は、長い金髪を後ろでまとめた髪型。全身を灰色のスーツに包み、眼は赤色をしていた。

『金髪赤眼』。

どの人種にも属さない、カラーコンタクトのような　しかし自然な、眼に馴染んでいる赤色の眼。

言うまでもなく、この男はネツアク　である。

「……………」

椿はその男、改め　ネツアクに怪訝な視線を送るだけで、言葉

を出そうとはしない。

驚きで　　というのもあるがそれ以上に、椿はネツアクを警戒していた。無論警戒するのは、当然の事だがしかし、椿のこのものに対する警戒心は普段のそれとはまったく比にならないような、『臆病』とも受け取り方によっては、そういうるほどの、警戒心を配っていたのだ。

片腕の肘から先を蠅螂の“鎌”へと変え、背から自らの体躯の二倍はあるだろう蝶の“翅”をそれぞれ“四枚”生やし、臨戦態勢へと瞬時に備えた。こちらは、生半可な臨戦態勢の帆照とは違い、“完全な臨戦態勢”である。臨戦体勢、とも言えよう。

臨戦体勢の椿の姿は　　ありていに言えば、『虫』。

蝶の翅に蠅螂の鎌、前に垂れている、長い触角　　どれをとっても、虫以外の何物でもなく、能力以外のどんな力でもない。

しかし、それを見て。

椿の急激な変態、変化を見てもなお、ネツアクは大して驚いたような様子も見せず　　眉一つ動かす事無く、そのままの姿勢で怪訝な視線を向ける椿と、向かいあっていた。

「ハナミズキ。何もそこまで、警戒する事は無いだろう　　それに、ここにこうして今貴様と向かい合っているのは“必然”であり、起こるべき事。偶然ではない、なるべくしてなる、会うべきして会う事柄だ、驚く要素など、どこにもあるまい」

「そうかな　　私の記憶によれば、貴様とのこの出会いは“初対面”だが、それともなんだ、貴様は初対面を必然にしたとでも言うのか？」

「ハナミズキ、貴様らしからぬ愚問だな　　」

ネツアクは椿とは相反した態度で、だが表情は変えずに、声だけで小さく失笑し　　それから、続けた。

「　　初対面を必然にしたなどという問いは、愚問だ。そんなの考えるまでもなく、“当然の事”であろうが。それとも、貴様は“偶然でわたしがベルゼの子孫と会い、偶然でわたしが貴様と会い、偶

然で貴様はわたしから情報を得た”。とでも、言っのか？ 得心しかねるな　そんなの偶然ではなく、“必然”に決まっているだろう”

「……………」

ネツアクのそんな言葉を聞き　椿は一瞬『戦慄』さえも覚えた。表情にこそ出していないが、心の中では大きく動揺していたのだ。それは『ネツアクが必然的に椿に会った』という事に対してではなく、『大河が彩香が、この男と接触している』という事を知ったからである。

向かい合っただけで分かる、こんな例外の中でも例外な例外的人物と、接触してしまっていた、という事に　椿は戦慄を覚えたのである。

もしも。

もしも、その場でネツアクがその気になっていれば　大河の命は既になかったに違いない。

と、椿は思っていたが　しかし、それは、逆を言えば“今はまだ生きている、という事を知っている”という事でもあった。いや、『生きていることを知っている』というよりは『死んでいないことを知っている』というほうが正しく、明確だ。

椿が、見ずともそう判断できた理由は　能力で作り出した『触角』にあった。

触角。

においを嗅ぎ、熱を感知し、気流の流れを読み、接触を感じ、音を聞き取る　節足動物の器官の中でも、重要な役割を果たす器官であり、今の大河搜索にしても重要な役割を果たしている器官である。事実、椿は触角を使い、大河に持たせているジャージーの“匂いを嗅いで”探しており　そこに死体の腐敗臭や血の臭いはない。

また、電柱の上にいる自分に近づく物体があれば、気流の流れを遮るものを、その遮られている位置と方向を感知して、その位置が明確に理解でき、先にこちらから気付く事ができるのだ。

が。

しかし、ネツアクの出現は 完全な予想外であった。探知外、察知外、されども、触角の探知内、察知内であったのだ。“そこにいる”迷彩ならば、気流の流れの妨げになり気付くのだが 仮に最初からずつと待ち伏せしていたとしても、それはそれで、矛盾するところがあるのだ。

その矛盾点が ネツアクの出現と同時に、僅かに自らのジャージーの匂いが漂ったと思えば、次に気流が“そこだけ”乱れたのである。突如として、そこだけ風が人一人分、妨げられたのである。

先に挙げた、最初からいる、という線であれば 気流は乱れない、更にずつと“そこに居る”事が当然のなら、体温で探知されてしまうであろう。言うまでもなく、体温も探知されていない。ならば、超スピードならば いや。

これも、どれだけ早く動いた所で、通ってきた場所の気流は乱れ、そこを通ってきた、とすぐに分かるであろう。無論、それでもなかった。

そして、ついにどれもなかった 故に椿は、これほどまでに警戒しているのである。どれでもなく 自分の知る能力の中でも、そんな能力はない。すべてが 『例外』。

「……………」

暫く 椿が、この状況の打開策を思案していると、ネツアクがそんな警戒心、殺意丸出しの椿に対して、言葉を投げ掛けた。攻撃でもなければ、逃げでもない。

単なる、言葉を 重い、助言を。

投げ掛けた。

「ハナミズキ」

「……………何だ？」

無論、ネツアクは淡泊とした口調で、無表情であるが、対して椿は厳しい顔つきであった。

「そこまで警戒する事はないだろう。わたしは今回貴様を殺し

にきたのではない、危害を加えにきたのではない。むしろ 貴様等にとって、利益のある情報を教えてやろうと、思っているのだ」
「利益、か しかし、おいそれと、その情報とやらを信じる訳にはいかないな。それは、これ以上貴様と会話をしても、結果は同じだろう。無駄だ、益体のない話になるのが、オチだ」
「ふむ……ま、そうだろうが、それでも参考くらいにはしてもらいたいものだ。頭の隅にでも置いといてくれ」
「ネツアクは言って この会話に嫌悪感すら覚えている、椿には構わず、一方的に話しを続けていく。」
「淡々と。」

「 貴様等。いや『イタンガツコー』、だったかな？ ハナミズキ？」
「！」

片言ではあった 確かに、片言でこそあったが、しかし。
しかし ネツアクは確かに『異端学校』と言ったのだ。一切身分を明かさずに、どこか臭わせてすらいないのだが、ネツアクは見事に言い当てたのだ。椿が属している組織を 否。
以前に。

それ以前に、考えてみればそもそも、既に、“名前が言い当てられている”ではないか。それも“第一声”から、名前で呼ばれているではないか。初めて会った時点で、初対面で 既に、身分が露見していたではないか。

椿はすぐにそこまで考えて そこまで考えて、それから何故、自分が初対面の相手に姓で呼ばれていることに気付かなかったか、を考えた。

しかし、それは考えるまでもなく、分かっていた事で また、考えなければ気付かない事でもあった。故、椿は思案してから、ほんの数秒も経たずに、比喻ではなく本当に瞬時に気付いたのだ。結論を出したのではなく ただ、“気付いた”だけ。

「まあ」

思案し終え、頭を整理している椿の態度とはまたも対照的に

ネツアクは相も変らぬ起伏のない、機械の様な奇怪な口調で言葉を浴びせるように、話を続けていく。

「まあ、たとえ『イタンガツコー』という名前が違った所で、大した齟齬は起きまい。ただ、貴様等が能力組織に対して、露骨な敵意を抱いている、という事実さえあつていればよいのだからな

ああ、言っておくが、ちなみにわたしは能力組織ではない。身分はベルゼとあの、寒そうな女にでも訊いておけ　二度も同じ会話をしたくはない」

「……………」

やはり。

椿はネツアクの言葉を聞いて　やはり、とそう確信した。ネツアクのこの言葉を　自然に耳に入り、自然に話し、自然に主導権を握られてしまう、というネツアクの『自然体』を確信したのだ。

自然すぎる、といっても過言ではないだろう　何せ、椿はこのネツアクのそこに居るのが当然のような“自然すぎる態度”と、“自然すぎる口調”のおかげで、自らの名が呼ばれていることにすら気付かなかつたのだから。更に加えれば“突然すぎる出現”も今の椿の思考を乱れさせるのには十分であつたに違いない。

この負の連鎖も偶然ではなく　“必然”なのだろう。ネツアクにとつては、必然こうなる結果であつて　椿にとつては、偶然こうなつてしまつた結果である。

能力やら、異常やら、それ以前に　ネツアクは自然体過ぎるのだ。自然体すぎて、その自然にすら気付かず、気付いた時には既にネツアクに主導権を握られている。その場を掌握されている。

大河達は果たして気づく事はなかつたが、実際、あの場の主導権は完全にネツアクにあつたといつても、過言ではない。また、帆照に能力を使わせ、能力の分析を行えたのも　ネツアクにとつては、必然に違いない。

能力を差し引いたとしても　この者は、基盤が例外である。人

間性そのものが、例外である。

異常な自然体だったのだろう。

「仮に、そうだとしたら？」

椿はようやく、といった具合の間を空けてから、曖昧にそう言った。

しかし、ネツアクはそれに食いつく風も見せずに、無表情でそれに応えるのであった。

「そうだな、仮だとしても事実だとしても、教えると言う事に変わりはない　いや、教えるのは貴様の生業だったか、すまないな」
そうはいうネツアクだが、しかし、その言葉だけに心がこもっているわけもなく、むしろそれは、挑発のような言葉となり、それは椿の耳へと届いた。

「はっ！　それは、洒落か？　随分とくだらない事を言うもんなんだな、無表情の割には」

「……それは貴様にも、言えた事だ。思いのほか食いつくものなんだな　正直心が狭いぞ。それでよく、教師をやっているのな。フォローしてくれる奴でもいるのか？」

「そうだな、うちの生徒は皆でいい。貴様みたいな、無神経な奴は生憎居ない」

そう、強くは抗議する椿だが　やはり、こんな挑発に乗る程度では心が狭いと言えるだろう。

そして、またも自然に　自らの『教師』という身分を、語らされた椿であった。

この場合は、椿の心の器の問題だが。

「ま、それは別の話題としてだ　ハナミズキ。そろそろ、本題に戻ろうではないか」
と。

一旦そういった会話をネツアクは切り上げ、話を本題に戻す。
至極、自然に。

「　と言っても、わたしから言えることは、“二つだけ”だ。一

つは 『かこ』に気をつける。わたしはこれ以降もこれ以上も一切加担しないが 今回だけは“助言”として、加担しよう」

「かこ……」

その言葉をいぶかしむ様に、噛み締めるように、反復した椿の言葉に、しかし 否。“やはり”、ネツアクは頷く事もなく、それを無視して進めていく。

「そして、もう一つが “次会う時は、わたしは貴様等の敵だ” という事だ」

そんな、ネツアクにはもつとも似合いそうもない、不似合いな言葉を言って ネツアクは臨戦態勢の椿の前から、またも突然として、突如として、唐突に消えたのであった。

「……………」

残された椿に、追う事は敵わないことであり また、椿はたったの今日一日で、これから考えなければならないことが、随分と増えてしまったのであった。

「どうしてこうも、問題ばかり続くのかねえ」

『第四話『理事長』』

あの後。

椿はネツアクと接触した後も大河の搜索を続け、間も無くして大河達と合流した。そこで、椿は大河達からネツアクの『空間配置変更能力』と『時間の前借』の事を聞き、同時に『自らの眼の前に、探知されずに突如として現れたこと』の辻褄を合わせていた。

確かに空間の配置を入れ替えれば、それは可能だ。実際帆照の能力も飛ばされおり、その能力の証明となるには十分な証拠があった。椿もその事を受け入れ、また、大河の能力に対しての『時間の前借』を確かめる必要もある、とも考えていた。もともと、その熟考の結果、何故エアガンで打つという結果になったか。

それはネツアクが言っていた『無意識に時間を喰らってる』という言葉と、『傷の治りが早くなってないか？』という言葉をヒントに、そこからその無意識を意識的にする、というより、その無意識を『認知』させる、という結果に至ったのだ。当の本人の大河を窮地に追いやる事で、その無意識に行われてる『時間の前借』を發動させ、同時に、タイマーで時間を計らせる事により、大河の体感時間が縮んでいるかどうかを確かめたのだ。

意識させたのだ。

『かこ』に関して椿は、自分が思案し対策を練るよりも、自分より知識もあり、権力もあり、様々なものを見、知っている、別の『適任者』に任せることにしていた。もともと、椿はその『適任者』とは、つい先方会ったばかりなので、その『適任者』に任せる、という考えがすぐに浮かんだのかもしれないが。

一応大河達にも警戒を配るようには言っではおいたが、しかし、そこで『かこ』に関する事は、一度も口には出さなかった。下手に口にしたところで、そもそもあの情報が本当かどうかすら怪しいのだ。どころか、それこそ気まぐれで口から出た言葉かもしれないが、

しかし実際大河の話は事実であつた為、そこは話半分として、椿は受け取っていた。

しかし、だからといってそんな確証もない事で、無駄に不安感を煽り、神経をすり減らしてしまつても困るので、椿は敢えてそのことを伏せ、とりあえず警戒を配るようにだけ促したのだつた。

警戒するという事も、結局は神経をすり減らすのだが、しかしそれでも、余計な考え事がないほうが幾分はましであろう。

満身創痍の状態は、有耶無耶に濁した感じだ。

そして数々の問題を抱えたまま　時間軸は過去から現代へと戻る。

異端学校校舎内食堂。

その食堂は人気がなく、またここを使う者もないので、手入れもされておらず、さながら廃墟のような様相を呈していた。校舎の中でも滅多に使わない場所である。たとえ使つたとしても、既に食堂として使うものはいない。螺旋階段も壁に沿って造られているが、そもそも二階やそういつた、別の階には殆どといつても過言ではないほどに、行く必要がない。

用事がないのだ。

そんな廃墟染みた場所で、今現在、大河は彰と会話をしていた。無論、好きでここに居る訳ではない、訳あつてここに居るのだ。

用事があつて、ここにいるのだ。

その大河は異端学校転入二日目にして、つい先ほど能力検査を終え、まさに疲れきつたといった風であつた。

「　　やっぱり、そこですよ。その『ネツアク』ってやつは、『時間の前借』と言つてましたからね」

大河はぼろぼろのテーブルを間に挟み、彰と向かい合う形で『時間の前借』についての話を振っていた。

「……『前借』という事は『いずれは返す』、或いは『何かしらから先に借りている』という事になるんだろうが」

彰はそこで一旦区切り、薄汚い天井を仰ぐようにして、少し思案し　それから、溜め息混じりに、応える。

「　寿命や、その能力が使える回数、だと思いがな」

「寿命……ですか」

大河は寿命という言葉に　寿命を前借している、という事に、少々の驚きを覚えたが、しかし今一実感が沸かず、驚こうにも驚けない、といった感じである。

大河としては、それは複雑な心境だ。自らの寿命を無意識のうちに前借しているかもしれないのだが、自分にとってそれはまるで『実感がない』。無意識だから実感も何も沸かないのが普通なのだろうが、しかし、つい先ほど行ったテストでは　自分は時間を前借をした。

仮にそれが寿命と言うのなら　つい先ほど、自分はテストで寿命を減らした。時間を前借し、寿命を減らした。

それはにわか信じがたい出来事である。

そんな、悲しみでも喜びでもない、強いて言うなら放心という心境に居る大河に対し、彰は先ほどの自説に付け加えるように、続ける。

「　だが、どこまで言った所で、これは俺の自説にすぎん。そもそも、寿命が一定の数値ではないと、俺は考えている。寿命なんて計れるもんじゃねえからな。これから決まる事だ」

「……これから決まる事ですか」

「そうだ。それに、てめえは“これから、理事長に会いに行く”んだろ？　んな弱気じゃあ、心がもたねえぞ」

彰はおどける風に言ったが、しかしそれはある意味、実際に面識を持ったものだからこそ、言えた冗談かもしれない。実際に理事長

と会って　話し合ったからこそ、そんな冗談が思いついたのかも
しれない。

一方の大河は、しかし、そこまで気楽な気分にはなれなかった。
それ聞いても、相槌をうつ程度である。反応らしい、反応すら見せ
ていない。

否。

反応できるほどに　頭に余裕がないのだろう。

「……………」

未知で不明で理屈のない人外な能力に対し、人の常識をぶつけて
必死に思案してる大河を見　彰は能力を覚醒させ、まだ間もない
頃の自分の姿を想起していた。

能力を覚醒させ、発症させ　それに思い切り悩み、理屈をぶつ
けていた頃の自分を、想起していた。今となつては、能力に理屈を
求めたり、その理屈を考えたり、という事はないが　初めの頃は、
自分も頭では理解しても心が追いついていなかったことを思い出し、
その姿を、過去を彷彿とさせる大河の姿に被せていたのだ。

あの時は帆照に励みをもらったが、果たしてこいつと帆照の
相性がいいかどうか。

「…………ベルゼ」

「あ、何でしょうか。彰さん」

「てめえは執事か」

大河の態度の改まりっぷりに、今更であるが思わずツツコミを入
れてしまう彰であった。

意志薄弱である。

実際煙草を未成年で吸ってる時点で、意志薄弱なのだが（この会
話で分かったと思うが、彰は大河のことを転入して以来『ベルゼ』
と呼んでいる。前までは、改まっていたが、今となつては同じ学校
の同じ生徒、加えて後輩という事もあってか、彰からすれば気遣い
の必要がなくなったのであろう。故、姓呼びである）。

「その敬語に関しては、今は流すぞ」

言って 彰は会話を、一度仕切りなおす。冗談抜きの、真剣真面目の会話へと。

「帆照とは、病院で既に何回か面識も持つてると思うが 印象としては、どうだった」

「印象って、いや……」

一週間やそこらにして、急にそんな印象を問われても、ただ大河は困惑するばかりであるが しかし答えないわけにもいかず、やや言葉を濁すような物言いであるが、それに大河は答える。

「どうもなにも……普通、ですかね」

「成程。やはり、印象としては『悪い』か」

「俺の意見は無視なんですか」

彰は、困り果てたように応えた大河の応え自体は無視し（抗議も無視したが）、その大河の思案した時間と態度から、大河のその印象を読み取るのだった。大河はそれに対し、自らの虚勢を破られたような、心中を見透かされたような、そんな気分になったが、しかし、どこかすっきりした気分になったのも事実であった。実際人間嘘を破られたときはそれこそ後悔、嫌悪、僻みなど、後ろめたい感情ばかりが頭をよぎるが、しかし、心なしか気が楽になるのもまた、事実であるう。

背負うものが、なくなるのだから。

気が楽になるのは当然だ。

「ふむ……」

彰はその意見を頭に入れ 大河にとっての帆照の印象が悪いという事を考えに入れ、改めてどうすべきかを、考えていた。

しかし何故彰が、ここまで大河のために尽くすか、と問うならそれは『足手まといにしたくない』からに違いない。実際、この先も大河を狙う能力者は居る それだけじゃなく、ネツアクという人物も、椿の話を聞く限りでは、そこまで協力的ではなかった。むしろ、消極的だ。どこるか、次に会うときは敵と宣言していた。

土台、能力者を相手にするかもしれないというのに、自分の能力

で放心し、狼狽し、杞憂し、自分の能力すらも不明などと言うのは、最早論外だ。

話にすらならない。

例え、先日能力を覚醒させたとしても、死んでしまえば結局、どんな事も言い訳にならない。死ねば人間、そこまで。

あえて仰々しくいうならば、能力が覚醒したのが先日であろうと、昨年であろうと、死んでしまったら、そんな時期などは意味を成さない。至極当然であろうことだが、しかし、それ故に至極重要でもある。

究極的には、生き残らなければならないのだ。

無駄な邪念や無意味な杞憂は、早急に切り捨て、切り払わなくてはならない。そもそも、異端学校自体が、そういった能力者を保護してる場所でもあるのだから、生徒自身で自分の身を護れるように育てるのは、当然ともいえよう。義務とも、使命とも言える。

故に、彰は大河の邪念などを取り払おうとしている。人として助けたい、というのもあるのかもしれないが。

そもそも、その彰自身もその生徒である。

護る側ではなく 護られる側。つまりそこに、使命感や義務感はなく、単純に足手まといにしたくないのだらう。

もしくは、一人を助けたい、という善良的考えか。

「……あの、彰さん？」

思案し それから一切喋らずに、瞼を閉じ、黙りこくってしまったっている彰に向け、大河は戸惑い、躊躇ながらも声をかける。

彰はそれを黙殺し聞き流そうとしたのだが、しかし。

「彰、返事はしろ」

と、今正に思案している彰の頭上に、女性の者と思われる声が降りかかった。否、女性だ。

そして、教師だ 待ち合わせの人物だ。

「 椿、先生」

彰はそのまま、更に背もたれによりかかり、顔を上下反対にして、

その声の主　椿の姿を、見上げるように、その眼に捉えた。
いや、体勢的には見下げる、のほうが正しいのであるつか。

椿はそんな見下げたか見上げたか、よく分からない体勢の彰に対し、

「見下げるな」

と言うのであった。見下げるで正しいようだ。

その注意を受けてか、彰はその逆さの体勢から、身体を起こし、それから改めて椿を見やった。その視線は　目配りとも思えるような、視線であった。

というより、目配りだ。

「……………」

「そう睨まんでも、分かってる。彰、お前は先に帰ってる。帆照は彩香ちゃんの見舞いに行ってるから不在だ。何かあったら自分で対処しろ。あ、だから外出はくれぐれも控え……………」

その目から　ではなく、元々彰は同行しない予定であったので、椿はその確認を取るような視線に、応えたのだが、しかしその当の本人の彰はそれを聞き終える前に既に席を立ち、椿の横をすれ違い、またも返事せずに踵を返していくのだった。

返事すらせずに。

「……………大河君、では行こうか」

椿は彰の行動に対して、やはり教師として思うところがあるのか、溜め息混じりに言いながら、大河に着いてくるように、促すがしかし、振り返ることもなく、廊下とは反対の、むしろ食堂の中心に向かつて、歩を進めていく。大河は「どこに行くのか」と、その行き先を怪訝に思いながらも、とりあえずは地の利も何もない、自分がどうこう言える立場ではないので、取り敢えずは黙って後をつけていった。

そんな疑問を抱いている大河には、構わず、椿は無言で歩を進めていく　言うより、見せた方が早い、と判断したのだらう。そして、会ったほうが早い、と。

「……………」

間も無くして、椿は食堂の壁に接している螺旋階段まで辿り着くと、そのまま何の躊躇もなく螺旋階段に足を掛け、手すりに手を掛けて階段を上っていく。

無論、螺旋階段も“廃墟”同然の状態である。

塗装は剥れ、階段もところどころその板が抜けており、そこを上るのは非常識ともとれるが、実際上へと続いている道はこの階段だけであり 上らないわけにはいかない。

二者択一ではなく、一者択一だ。上るか上らないかではなく、怖いと感じて上るか、それを制して上るか、である。

大河は少々、その椿の背に続くのに躊躇をしたが、しかし進まないわけにもいかないので、その階段を続いて上っていくのだった。

「大河君」

階段を上りながら 足を止める事も、振り返ることもなく、椿は大河に向け、前置きの注意とも取れることを言う。

「今から理事長に会いに行くが、その前に、予め言っておきたいことがある。言わせてもらっても構わないか？」

「あ、はい。構いませんが それって、重要な事なんでしょうか？」

「ご明察 とても重要な事だ。彰達にはまだ言っていないが、後にでも言っておくつもりだ」

「そうですか」

「そうだ」

“とても重要な事” と言う言葉に、大河は僅かな緊張を覚えつつも、その歩のペースは落とさずに、更に階段を上っていく。階段は見る限りでは 恐らく、屋上にまで続いているのであろう。

まさか屋上まで行くのだろうか、という上る前に少しかりあった大河の不安も上ってしまえば、もうどちらと同じようなものと、半ば諦めのような結論がついていたので、大分気分も落ち着いており、話の内容に集中できるほどにその緊張は和らいでいた。

「大河君たちにも言ったと思うが、あの日　私が『ネツアク』と接触した時、私も大河君達と同じように、あいつから『助言』をもらっててね。あいつは『かこ』に気をつける』と、言っていたもつとも、その意味は不明だがな」

「『かこ』、ですか……」

大河は一度、その意味を時系列の『過去』と考えたが、しかし、椿が一度も時系列や、そういった感じの『過去』とは言っていないことを考え、大河はその考えを切り捨てた。

そもそも、助言を受けた椿自身。その『かこ』がどういった意味を含み、何を示しているかは、不明なのだ。椿より知識もなく、ましてやその場にいた本人ではない大河に分かる訳もない。

考えるだけ無駄である。

大河もすぐにその結論に至ったが　ならば、何故この話をここで自分に振ってきたか、という疑問が浮かんだが、しかし、それも大体の予測はすぐについた。

それは、このタイミングでこのことを告げてきた事と、これから会いに行く人を考えれば、すぐに分かることであった。

「あの椿さん。もしかして、これから理事長に会いに行くのはそれを訊く為でしょうか？」

「まあ、そうだな。『かこ』の事を訊く為“も”あるが　本来の目的は、やはり大河君の『面談』にある。それを忘れてもらっては困るぞ」

椿は釘を刺すように、言って　そして、ようやくこの長い階段の先にある、二階の廊下と思われる方向に進路を変えた。大河も続いてそこまで階段を上りきり、それから更に先導していく椿に再びついて行こうとした、時。

「　少々遅れ気味だ。椿教頭」と。

歩き始めようとした所で　前方から、黒いスーツ姿に全身を包んだ初老か中年と思われる男が、道をふさぐように廊下の真中に佇

みながら、そう声をかけてきた。

容姿は初老に入ったか、どうかといった所だがしかし、体つきは貧弱とか軟弱とかではなく　むしろ、成人男性の並の体つき、と受け取れた。だからといって、細い訳でもないが、筋骨隆々でもなく、最低限で最高の筋肉を持っている、という感じた。

無駄な筋肉が殆どない。

灰色とも取れる白髪はオールバックに整えており、眼が青色をしているところを見る限りでは、恐らくは外国人なのだろう。顔立ちはいかにも、威厳がありそうな顔立ちであり、皺も少ない。

ただ、飾りつけでもやっていただろうか　背中から、数本の金色の糸のようなものが、ひらひらと空中を漂っていた。そして、服もどこか乱れており、遅れ気味というわりには、この男自身も割と先ほどきたばかりなのかもしれない。

「これはこれは　“テンペランス校長”。一体全体、貴方がお迎えに上がるとは何事でしょうか？　それとも、下に何かご用事があったのでしょうか？」

「見え透いている事を言わせるな、椿教頭。私は貴様の違反を指摘しにただであり、別段、用事があるわけでもない。用事があるのはむしろ、椿教頭のほうだと思うが……いや、違うか。正しくは

—

その老人改め、テンペランスは低く、歳のいった声で、言ってそれから、大河のほうへと、視線を移し、

「　貴様のほうだったな」

その鋭いとも取れる目を、より鋭くして　大河を睨むのであった。

一方の大河もそれにすぐに気付き、テンペランスの目を無意味ながらも、見返す。

互いに、見つめあうがしかし、それは心の探りありなどではなく　単純な、会釈のようなものだろう。もつとも、大河は見返すことくらいしかできないから、見返しているだけなのだが。

見栄を張ってるだけだ。

「……成程」

やがて、テンペランスは頷いて　それから、低い声で言う。

「こいつも、理事長と同じ能力者とかいう奴なのか？　椿教頭」

自分はあたかも能力者ではない　という事を前提とした口ぶり

で、テンペランスは問う。椿はそれに迷う事無く頷いて、テンペランスはそれを受け取り　再び、大河のほうを見やり、それから、

「……私には“見えん”がな。この少年が、能力者などとは　とてもじゃないが、“見えん”」

と、どこか寂しげに　どこか悲しげに、大河のことを見ながら
そう言ったのであった。大河にはテンペランスのその言葉の意味も、
気持ちも、一切分からないのだが　少なくとも、良いことではな
いという事くらいは、察したようだった。

テンペランスの中での、何が悪くて、何が善いのか、という基準
すらもわからないが、少なからず、善くはない、とは思ったのであ
る。

悪いことだろう、と。

「ま、御主さんよ。見えても見えなくとも、能力者であることには、
かわりなかるうに」

「！？」

と。

そんな暗い雰囲気を破るかのよう　甲高く、まだ幼い少女の
者のような声が、テンペランスの方向から発せられた。というより、
口こそ動かしていないが、完全にテンペランスから発せられていた。
威厳があり、口数も少なく、そんな可愛らしさとはもっとも遠い
と思われる、テンペランスから、しかし、その声は発せられた。

口調こそ古いが、しかし可愛らしく、愛でたくなるような、少女
の声が発せられたのだ。

ギャップにも程がある。ありすぎる、といわれても仕方ないだろ
う。

大河がそんなギャップに、呆氣とられてる間にも、その少女の声は、口数を減らす事も無く言葉を発していく。

「しかし、椿もわざわざきたことじゃ。この前は無礼な招きになっちゃったからの。そもそも、御主さんよ。御主さんには能力は見えなくて当然じゃろうが。一体どうして、能力を見ようとしておる」

「……？」

と、ここにきて、大河の頭にふと疑問が浮かんだ。というより、これは疑問が生まれたと言うよりかは、後からみればむしろ『齟齬を解消した』のだが、しかし今の大河にとっては、それは疑問だ。疑問である。

そして、その新たに生まれた疑問というのが“少女の声が明らかに、テンペランスの事を別人として話している”という、事ではなく。

それではなく。

むしろ、それは分かりきっていることで。テンペランスの後ろに、どうして隠れているかは不明だが、少女がいる、というのは第一声から分かりきっている事で、大河は氣に掛けてすらいなかった、呆氣にはとられたが。大河が疑問に思ったのは、そういった、少女どうこうということでは、そもそもない。

むしろ、それはテンペランスに関することである。

テンペランスには “能力が見えてない” という所に、疑問をもったのである。

「何を黙りこくっておる、御主さん？」

その少女は一切返事をせずに、剣幕すら感じ取れそうな無表情で黙りこくっているテンペランスに対し。なじるような、ちよっかいを出すような口ぶり、次々と言葉を連ねていく。

まるで、子供の悪戯である。

「なんじゃ、御主さんよ？　もしや、拗ねたのではあるまいな？」

「……………」

「御主さんよ、本当に拗ねているのか？ みつともない、大人にもなつて拗ねるとはな。ほれ、何か言い返してみせい？」

「……………」

「え。もしかして本気で怒っておるのか？」

「……………」

「すまなかつた、わしが悪かつた。じゃから、返事をしてくれ。な？ さっきのは冗談なんじゃ。本当に冗談じゃ、冗談」

最初こそからかうような口調ではあつたが、しかし、その少女の声は次第にうるたえるような、心配するような口調へと変わっていくのであつた。

「お願いします。もうさっきみたいなことはいいません。じゃから、どうか返事をしてくれ。さっきみたいに、一緒に話そうではないか？ 笑おうではないか？ な？ な？」

今にも泣きそうな、崩れそうな、そんな震える声で、訴えかけるように言いながら、少女はテンペランスの髪にしがみつくように、その髪を荒く鷲掴みにした。

テンペランスの背中から少女の腕が伸び、テンペランスの髪を鷲掴みにしたのである。

が、しかし、もうここまでくれば分かんと思うが　というより、大河も椿も既に、半ばあきれ返つてさえおり、その現象に驚くことは皆無であつた　というより、ここまでくれば『少女が大河達に見えないように、服が何かに捕まってテンペランスの背中に引つ付いている』と、いう事は分かるであらう。

そもそも、それには金色の糸らしきものが、数本空中に漂っている段階で、椿は薄々おかしいと思つていたのだが（大河が気づいたのは、既述の通り第一声である）、異端学校にそんな派手なものは生憎ない。

飾りつけなどやつたことすらない。

「いでっ」

その少女が、しがみつくようにテンペランスの髪を掴んでから

文字通り間も無くして、テンペランスはその手を軽くはたき、それからはたいていない逆の手を背に伸ばして、背中にいると思われる少女の襟の辺りを、がっしりと掴んだ。

無論、大河達には見えてはいないが、しかしそれとなく、やっていることの予想はついていた。

ついてしまっていた。

テンペランスは、その手で少女を背中から引き剥がし、それから、大河達にその姿をありありと見せ付けさせるように、自らの足元に置き、その襟から手を放す。

置く、というより、宙からその少女を降ろした、のほう正しいだろう。

そして、どうやらスーツに皺がよっていたのは、果たして少女がしがみ付いていたから故に、皺ができていたらしく、テンペランスは少女を引き剥がし、それからスーツによった皺を出来る範囲で直し始めていた。

「……なんじゃ、椿ちゃんか。久しくないのう」

そういう少女は、腰に手を当て、胸を張り。

まるで、先ほどの出来事があたかも無かったかのように、そう言うのだった。しかし、その目元は僅かに潤んでおり、今にも泣きそうだったということが、そこにはありありと現れていた。

そんな少女の言葉とは裏腹に、その少女からは威厳が微塵も感じられなく、それはむしろ幼稚で馬鹿なイメージすら与えかねない言動であった。実際、大河はそちらのイメージをもらったのだが。

体軀はやはり、予想通り小さく、まさに少女といった、大きさだ。彩香よりも遥かに年下である、というより普通に、そこの少女より年下だ。

幼女や、童女のほうが、表現としたら正しいのかもしれない。というほどの、小ささだ。

矮躯だ。

小学生、中学年か低学年といった辺りだろう。

純粋な金色のその髪は大分長く、ストレートで伸ばしており、服は小さいワンピースを着ていた。

「……なんじゃ、椿ちゃんまで。このわしに無言を突き通すとは、まあ随分と偉くなったものじゃの。それとも、そなたもわしに愛想を尽かしたのか？」

「あ、いえ。違いますよ。すみません」

そこで、椿は一度自分の気持ちを切り替えるように、一拍置いてから　それから、真剣な、冷静な口調で応えた。

「少しばかり、気が入っていなかったものですから　『理事長』、理事長、と　目の前にいる、幼女を指して、椿はそう言った。

「なっ
」

思わず口からそんな言葉を、意味もない間抜けな一文字の言葉を大河は零してしまった。

確かにそういわれれば、テンペランスは実際『校長』と呼ばれており、椿と大河が会いに来たのは、校長ではなく理事長であったのだが　だからといって、まさか、この幼女とも思わなかったが、しかし、後から考えてみればそれは、そう思うほかないようでもあった。

態度といい、口ぶりといい、なれなれしさといい　確かに、それは年上目上の者にとる態度でないことは確かだが、しかし、だからといって、それで「この方が理事長であったか」と、判断しろというものも難である。

そもそも、大河はこの幼女を『テンペランスの子供か、異端学校の子供』と決めてかかっていた為、これは埒外予想外の他ならなかった。

「はっ
」

その少女改め、幼女改め、理事長、は　大河の反応を見、一度鼻で笑ってから、さも気にもしない風に言うのだった。

「まあ、小僧がわしのことを認めんとすることも、わからなくはないがな。なに、わしの御主さんですら、未だ“わしのことを否定し

てならない”のじゃからな。なあ、御主さんよ、そうであろう？」「理事長はまたも、テンペランスをなじるような、ちよっかいを出すような口調で言う。

どうやら、彼女には反省と言う言葉がないらしい。

しかし、テンペランスはさして嫌な風も見せず　むしろ、普通に。ただの普通の受け答えのような口調で、それに応えた。

「それに違いはない。私はお前も、“お前をそうして縛りつけている能力”も　否定している」

テンペランスは、能力者が通う学校の、それも校長とはとてもじゃないが思えないような言葉を、戸惑う事も躊躇する事もなく、言った。

至極普通に、きっぱりと言い切った。

大河はそれを聞いて　先ほどの、能力に関しての悲観的発言ともとれる発言を思い出し、このテンペランスの能力に対しての姿勢が、やけに悲観的であるということを感じ始めていた。

能力に関する様々な事を教える場の校長という責任者の立場でありながら　しかし、その校長が能力を否定している。どこるか“見えてすらいらない”のかもしれないのだ。それが本当なら、それは実に奇妙な話である。理事長が学校の最高責任者、監督者ならば、仮にも、学校内での最高責任者、監督者が　教える側が、教えるそれを否定しているのだから。能力を教えるに当たって、能力を否定しているのだから。

やはり　奇妙な話である。

「ま、御主さんがそう頑固なのは、昔からじゃから今更、どうこう言うつもりはないわい」

「ならば、これ以降は訊くな」

「分かっておる　と。そういえば、『訊く』といえば椿ちゃん。わしから何かを訊きたいとか言っておったな？」

理事長はここにきてようやく、今回大河達が態々訊ねてきたその主旨を思い出したのか、テンペランスから椿のほうへと視線を移し

ながら、そんな風に言う。

「で、一体何を訊きたいのじゃ？ 椿ちゃん」

「確かに訊きたい事もあります。ですが、まずは面談のほうを」

「商談？ なんじゃ、そなたも偉くなつたな」

「めんだん、です」

「……あ、面談か。面談。そういえば、そうじゃったな。すまぬすまぬ、“これ”になつてから、忘れっぽくてな」

言いながら 理事長は自分の胸部を親指で差すようにして、言う。

「ならば、その『面談』とやらをやるうではないか」

「とやら、ですか」

「とやら、じゃ」

理事長は言つて それから、大河の前までその華奢な細い脚で歩み寄り、大河を見やつた。これは、先ほどのテンペランスと同じ事をしているようにも見えるが、しかし、やっていることの本質はまるで異なる。

テンペランスが会釈と値踏みならば 理事長は、試し見た。

いふなれば、彼女は現在、邊流是大河というそれを試し見している。値踏みではなく、あくまでも見るだけであり 別段、大河の何か奥底を知ろうというわけではない。

ただ、顔と名を憶えて、これから接するに当たつて後々に障害が出ないように、大河を試し見しているのだ。故、自然顔をじつと下から見上げるような、見つめるような形となつてしまっているが、それは大河にとっては、後から思えば幸福ともいえる時間となつていた。

彼の中で、何かが芽生えようとしていたのだが、幸いそれが芽生えることは今のところは無かつた。

今のところは。

「……ふむ、成程な」

理事長は、いかにもと言う風に頷いて 腕を組み、言う。

「小僧　そなたの妹御は『茶髪』じゃったりするのかえ？」

「はい。黒かそれかと言ったら、茶髪です」

「ふむ、やはりの……」

理事長は腕を組んだまま、瞼を下ろし、もっともらしく頷いてそれから、テンペランスのほうへと振り向き、意見を確認するよ
うな口調で言うのだった。

「やっぱり、わしが言った通りじゃったな　“暴食の血が強く受け継がれていたのは、やはり妹御のほう”じゃったよ」

第五話『血縁』

「常軌を逸している」とか“力を得た”とか、そういう側面だけをみれば、それはとても善い事なんだろうけれどね　でも実際、能力なんてものは不幸しか生まない産物よ」

日之出病院内の一室にて。

見舞いの品物として、大河から届けられた花瓶の水をかえながら
帆照は、ベッドで上体を起こし、座っているような体勢の彩香
に向け、言った。

右脚を包帯でギブスごとぐるぐるに巻き　抗癌剤を投与したにも拘らず、前に較べ、“大分伸びた、艶のある茶髪”を髪型とかを気にせずに、ただ伸ばしているだけの彼女に向け、言った。

その言葉は辛辣な言葉とも取れ　また、それは言外に、能力に対する欲が比較的高い彩香に対しての『忠告』でも、あつたのかもしれない。

「劣等感や、特別なものが欲しい　なんて、気持ちとじゃ、決してつりあわない代償が伴うもんなんだよ。能力つてのは」

「……帆照さんは、何でそこまで能力に悲観的なんですか？」

「悲観的も何も、あたしから見れば能力つてのは大抵そういうものなのさ。椿先生の過去なんかは、皆目不明だけれど　彰なんかは、ああ見えて結構な苦勞したからねえ。多分、あたしとおんなじ意見なんじゃないかな？」

それを受け、怪訝な表情を浮かべ、眉間に皺を寄せている彩香とは対照的に　帆照は思い出話でも語るかのように、僅かに口元をほころばせ、それに応えた。

それは彼女にとって、それが良い思い出だからか、或いは、ただ懐かしいと感じていただけなのか。

「ま。そういうあれこれもあるけれど、今あたしが言いたかったのは」

帆照は花瓶を手にとって、花を挿しながら、振り返り　微笑を浮かべて続けていく。

「　能力なんてもんは、望んで手に入れるようなものじゃない」、って事を言いたかったのさ」

もつとも、この言葉は校長の請け売りだけだね　と、帆照は小さく笑いながら、それにそう付け加えた。

「……………」

それを受けても、しかし、彩香の能力を欲するという気持ちは依然として揺るぎなく　無力からの有力への憧れが消えることは、果たして無かった。

無能力者から、能力者への憧れは。

無論、彩香も興味本位で能力を欲している訳ではなく　彩香は今の状況に。

自分が狙われている、という状況にも拘らず、それに抗える力が自らには無い　という状況に、焦燥と劣等を覚えていたのだ。その焦燥と劣等は白髪の敵との戦いと負傷で、より大きくなり　果たして、彼女は能力を欲するようになった。

その焦燥と劣等にも勝るような、『異能にも抗えるような異能』を欲しがるようになったのだ。

しかし、それに関しては　今となつては『叶っている』、といつても過言ではない。

「……………だからさ、彩香ちゃん」

帆照は、両手で抱えるように持っているその花瓶を、元の場所へと置いて　それから、帆照はこの会話を締めくくるように、言う。それは半ば説得を諦めたような風でもあったが　しかし、どの道これ以上話した所で、彩香の固定観念が変わることがないのは、それはもうありありと見えていた。

帆照としては、辛いばかりだが、これ以上どのような言葉を言つたとしても、それは空々しい言葉にしかない、という結果が見えてしまったのだ。

「いざとなったら、あたしが教えた護身術もあるし、あたしも彩香ちゃんを助けるからさ。心配する必要はないからね」

もつとも、護身術も、校長からの譲り受けだけどね　と、帆照は最後にそう付け加え、彩香を見つめた。

「……はい」

それに彩香は頷き、笑みこそ浮かべていたが　やはり。
やはり、本心から納得することは、無かった。

異能には異能。

能力には能力でしか抗えない　という、考えが変わることは、
ついになかった。

「……分かればいいんだけど、ね。じゃ、そろそろあたしは御暇するわ」

帆照も本心から納得してもらえると、そもそも思っていなかったのか　疑るような、釘を刺すような、そんな言葉を言い残し、それから扉のほうへと踵を返していく。

帆照自身としては、それは思うところが大分ある去り方なのだが、しかし、自分の考えを押し付けがましく言っただとしても、それはそれで仕方のないことで、偏見や一能力者の意見をいくら言っただ所で、それは説得力も何もないのは分かりきっている事で。

あくまでも『参考までに』、程度しか、彼女に言えることはなく
それ以上押し付けがましく言っただとしても、それは結局偏見の押し付けに過ぎないので、彼女はそこまで押し付けるようなことはしなかった。

できなかった。

そもそも、彼女自身　普通の意見が普通に言えるほどの、普通の人間ではない。能力がある時点で普通ではないのだが、しかし、人格やら性格やら品格やら、そう言っただそれが、彼女は“壊滅的におかしい”。

能力に関しての偏見もあるが、以前に。

彼女の事を　“自称” 帆照と名乗る人物を、常人と思うものは、

普通と思うものは、現在話した彩香も含め、さらには彼女自身も含めて、今のところ“一人もいない”。

それこそ、人格性格が壊滅したんじゃないか、と思うくらいに実際、彼女のそれは『壊滅』してしまっているのだから。

「あの」
と。

今正に、扉に手を掛け、その扉を開けようとした時　彩香は病室から出て行こうとする帆照を、呼びとめた。

帆照は先ほどのことに関しての、抗議か何かかと思ったのだが、しかし彩香は先ほどの能力に関しての話は、既に自分の中で消化し完結させており　彩香が帆照を呼び止めたのは、別の用事があったことだ。

「……何？」

帆照は振り返って、自分の方を不安げな目で凝視している彩香を見返す。

彩香は帆照が立ち止まったのを見、それから何かの確認でも取るような、何かを確かめるような物言いで、先の言葉に言葉を連ねていく。

「いや、でも、特に大きな用事じゃないんですが　帆照さんは、偽物っていうのをどう思いますか？」

「……偽物？　何の？」

「そういうのは、特に決まったわけじゃないんですけど、なんでもいいので、帆照さんは『偽物』という物を、どう思いますか？」

最初は心理テストや、そういった類の遊びかと帆照は思ったが、しかし、それにしても彩香からはいささか、余裕が感じられない。

遊び、というほどの軽いものではなく、それ以上に重く、もっと深刻な　真剣な口調であった。

決して遊びではなく、真剣なそれは口調であったのだ。

「……そうねえ」

流石に帆照もその問いに対し、何も考えずにおいそれと応える訳

にもいかないので、少しばかり思案し　それから、彩香とはまたも対照的な、さばさばとした風で、それに応えていく。

「『偽物』でも『本物』でも、あたしとしてはどちらも同じようなもんだけどね。善し悪しはそこにはないと思うし　でも、ね」

「……でも？」

と、帆照は一旦そこで区切って　それから、さばさばとした風ではあるが、しかし、どこか無理をしているような感じで。

不自然な感じで、歯切れ悪くそれに続けていく。

それは先程とは対照的に　苦い思い出話でも語るような、或いは現在進行形の苦い事を語るような、歯切れ悪い語り口で言うのだった。

「ただ、偽物のほうが、本物より辛いと思うわ。偽物をやるって事は、その偽物を全部、自身で背負わなきゃならないからね。演技きらないきゃならないから。背負うのをやめちゃったら、それは偽物でも本物でもなくなっちゃうからね」

「……そうです、か」

あたかも実体験でもしたかのような、帆照の口調に、彩香はこれ以上にはない説得力を覚え　同時に、“自分の行った事に対する責任”を。

“自らが決定した、その『偽物』を歩む道に伴う責任の重さ”を改めて、実感させられるのだった。

自分が背負うべき、『偽者』に伴う責任を。

「でも、偽物の『偽』は『人が為す』で『偽』っていうけれど、あたしは『人の為』だと思ってるわよ。場合によってそれは『人の為』になると思うし」

先程の言葉を誤魔化すように、帆照は苦笑しながら、そんな言葉遊びのような事を言って、それから、彩香に背を向け。

「じゃ、またね」

と、片手を挙げ、気さくな別れの挨拶を言い残し　その病室から立ち去っていくのだった。

「……………」

彩香は、帆照が後ろ手で扉を閉め、その足音が遠ざかっていくのを確認してから、掛け布団を被せてある、自らの右脚の“辺り”をさすりながら　自分に言い聞かせるように、呟くのであった。

「私でも　人の為に、なれるのかな？」

「そうじゃ。そなたの妹御のほうが、そなたより強く暴食の血を引き継いでおる」

理事長は大河の訊き返しに対し、あつさりと、そう応えるのだった。

場所は移り　異端学校内部。上階廊下。

「ま。じゃからといって、そなたに暴食の血が通ってない、というわけではないからな　そこを履き違えるでないぞ」

理事長は、にわか信じがたい事実を、能力に加え、更に突きつけられている大河に同情するようなことはせず　むしろ、自らも狙われているという現実を、改めて実感させるように、釘を刺すように、そう言うのであった。

それは一見すると、情が欠けているように思えなくもないが、しかし、理事長のいうことは正論で　また、含みを持たせずに、ありのままの事実をありのままに突きつける、という事もまた、この場合ではもっともな手段である。

一方の言われるがままに言われてしまった、大河はそれは驚きこそしたが　しかし、そこまで悲観的になることは無かった。

こうしてみると、一見彼が無情な人間に見えるが、しかし、それは違う。

彼は『無情』のではなく、『無知』なのだ。

能力やら、暴食に関して『無知』だからこそ、そこまで悲觀的になることがなかったのである。

暴食の血が多く流れている事で、狙われるリスクが大きい、という考えなどが頭を掠めるが、しかし、それには根拠もなければ、証拠もない。椿がネツアクから受けた『かこ』と同様に、考えるものにも、考えるに当たった情報の情報が全くといっていいほどに無いのだ。無論。

大河も自らが無知という、それをよしとしている訳もなく、故、今回の面談で、暴食などのことに關しての事を、いくつか訊こう、と大河は考えていたのだ。

椿と初めて出会う 病院の中で、暴食の事を初めて耳にした、あの日から思っていた疑問を訊こうと、思っていたのである。

もつとも、向こうから訊いてくるというのは、予想外であったが。

「……理事長さん」

「わしの名前は理事長ではないが、まあ、そなたに名前を教えるのも面倒じゃし、今回はかりは、よかろう。で、一体なんじゃ？」

一挙一動に、無駄な時間がかかるのには、大河も段々と慣れてきており、特に嫌な風もみせずに、大河は促されるがままに話を進めていく。

「理事長さんに訊きたい事が、一つありまして。暴食者、いえ、『暴食』というそれがボルテクスという者に狙われ、結果的にそれが能力組織や能力者も巻き込み、殆どの能力者から、暴食が敵と看做されているのは分かりました」

「ふむ。分かっておるのなら、何も疑問に思うところはないと思うのじゃが？」

「はい。“ここまで”は分かりました、ですが、そもその原点、いえ、『原因』と言ったほうが正しいかもしれません」

「……もつたいぶらずに、とつと言ったらどうじゃ？」

含みを持たせるような、大河の物言いに焦れたのか。理事長は、少々声のトーンを落とし、不貞腐れたようにそう言った。

大河はそれを受け、一度頷き「すみません」と謝り、言葉を續けていく。

「では、言わせてもらいます。自分が此の度、訊きたかった事が『暴食が狙われる原因』についてです」

「……ほお。つまり小僧は、『暴食そのものが、一体何故狙われるか』を、問うわけじゃな？」

大河の問いをまとめるのではなく　むしろ解き、拡げて反復する理事長に、大河は若干のペースを崩されるが、それに頷いて、話を先に促す。

暴食が狙われる原因。

この問いは理事長からしてみれば、それは本質を突くようで暴食者とボルテクスの因果、というその核心に迫るような、問いであった。

理事長自身、別段暴食について詳しい、というわけでもないのだが、だからと言って、他に暴食を古くから知るものも、今となっては、それこそ殆どおらず　果たして、彼女がもっとも、暴食に詳しいという事になるのだろう。

もっとも、それはボルテクスを差し引いた場合、での答えだが。

「ふむ……そうじゃな。小僧」

腰に手を当て、理事長は身体を休めるような体勢を取り、大河をその眼で見据え、話を進めていく。

「この話は先に話した『妹御の話』と多少なりとも、関係があるからの　それらを踏まえて、聞いてくれよ？」

「……わかりました」

妹御の話　つまり『彩香が強く暴食の血を受け継いでいる』という話と、『暴食が狙われてる原因』の話が関連するのは、それは大河からしてみれば善い答えとはいえなかったが、しかし、何かしらの関連があるだろう、ということは大河も既に予想していた。

理事長が態々彩香の髪の色やら、血を強く受け継いでいるやらを言った時点で　大河は、それがいい結果を生むとは、毛ほども思

つてもおらず、むしろ、希望的観測はせずに、敢えて最悪の場合を想定し、予想していたのだ。

故、理事長のこの答えは 大河の想定内の返答であった。

「よし、では話すぞ」

理事長は一旦、そこで区切り それから、滔々と話を語っていく。

「そもそも、暴食が狙われる原因というのは、実の所まだ不明なところが多くての。実際わしが知っておる原因も、ボルテクスの野望と能力組織がそれを阻止せんがために、そなたらを狙うとる、というくらいでな」

まあ、後者の理由は偽善じゃけの、取るに足らん無駄な殺生同然の行為じゃがな と、理事長は皮肉めいた事を、吐き捨てるように言って、続ける。

「ま、後者の方は偽善を謳う馬鹿騒ぎじゃとして、本質的にまずいのは、やはり前者のボルテクスの方じゃな。あやつは、暴食者否。暴食者に限らず、あやつは『人の心の臓』を蒐集しておうてな理由については、一つの推測がついておるのじゃが、それもなければの情報じゃ。実際問題、その情報じゃけでは、理由を肯定するに至らぬよ。じゃからそなたに、その理由を話すわけにもいかぬ」

理事長は大河からの問いを、先に封じるようなことを言ってそれから、また話を続けていく。

非常にマイペースな語り口調で。

「さて、どこまで言ったかの そうじゃ、そうじゃ、『心の臓』のところまでじゃったな。で、その『心の臓』なんじゃが、どうやらあやつは暴食者の『心の臓』の中でも、限りなく“暴食王に近い血筋”を持つ『心の臓』を求めておるようでな。つまるところ、これゆえに、暴食の血の通いが強いそなたの妹御が、そなたより狙われる可能性が増えておる、という事じゃよ」

ま、中々それが見つからぬようで、そなたらの親族は全員死んでしもつたのじゃがな と、理事長は失笑しながら。

せせら笑い、そう付け加えるのだった。

「！」

理事長のまるで気にもしない　どころか、その親族の死を嘲笑さえるように、失笑混じりに語る理事長に対し、果たして大河は僅かながらの、憤りを覚えた。

それこそ、大河は親族などあつた機会こそ少なく、親の顔すら今となつては半ば曖昧だが　しかし、それでも、自らの親族に対する侮蔑とも取れるような言動を許すほどに、寛容な心を持ち合わせてはいない。

無論。

理事長もその発言がどのような結果を齎すかは、知っている筈で　にも拘らず、彼女は悪びれる風もなく、そのような言葉を口にするのだった。

何を考え口に出し、何を考え失笑し、何を考え何を考えているのか　それが分かるものは、たとえどのような者でも、理事長本人を除いては、他にいないであろう。

その飄々しい態度は、人を喰つたような態度をとる帆照を彷彿とさせるが、しかし、理事長の態度はそれの比ではないほどに、飄々しく、まるでつかみどころがない態度であつた。

「どうした小僧？　そんなに目付きを悪くしておつて　ああ、そうか。そなた。わしに対して、憤りを感じておるのか？」

あからさまに、そんな分かりきつた事を、理事長は微笑を浮かべながら言つて　今でも充分に近づいているのだが、更にそこから大河の方へと歩み寄り、その身体を服越しに大河に密着させるようにして、大河の眼を見上げた。

互いの体温が服越しに伝わるほどの近距離から、理事長は大河の眼を　笑みを浮かべながら、睨みつけた。

「ならば、そなたは一体、わしの何に憤りを感じておるのじゃ？」
「……それはいいですから、話を進めてください」

大河はなるべく、元の話に話題を戻そうと促したのだが、果たし

て理事長がそれに促されることは、なかった。

「ほお、いいのか？ 小僧　そなたは、自らの親族。従兄弟も従姉妹も叔父も叔母も祖母も祖父も親も、皆“亡き者”となったというておるのに　そなたにとって、それは『いい』の一言で済まされる事なのかえ？　何をしようと、何をしようが、もう二度と会う事は叶わぬのじゃぞ」

「……………」

「今わしが言うておる情報は確かなもので　決して齟齬や、間違いは“ない”。そなたらの親族が亡き者となった事實は、間違いの“ない”、真なる現実じゃ。そこには曖昧さも可能性も“ない”」
現実じゃ。

理事長は繰り返しその言葉を言って　今の現実を、現状を、繰り返し大河に突きつけるように言うのであった。

非常に。

非常に今更ながらだが　そこで、ようやく大河は、親族を亡くした重みを、二度とあえない辛さを、実感させられた。

何よりも、大河にとって大きかったのが　親の死、である。

『赤い眼』の男に連れ去られ、行方不明となり、数年間見つからない時点でその『死』という結果に対する覚悟は、できていた筈なのだが　半ば大河もそう考えていた筈なのだが。

せめて、遺体でも見つければいい、と思っていたはずなのだが、しかし。

しかし、そんなのは誤魔化しに過ぎず　やはり、本心は諦めきれていなかったのだ。

本心はゆるぎなく、親の帰りを待ち、親の顔を待ち、親の言葉を待ち、親との再会を待ち望んでいたのだ。半ば忘れた顔を再び見たい、半ば忘れた声を再び聴きたい、半ば忘れた親というそれを再び味わいたい、と、どこかで思っていたのであろう。

所詮は、もつともらしい理由をつけ、本心を誤魔化し、親がいなくなっただという事実で受ける、悲しみや衝撃を軽減させていたに過

ぎない。

結局、大河は現実を知ることが、真実を知ることが 曖昧さもないにもない、揺るぎのない現実を知ることが、恐れていただけなのだ。

故に。

大河は『行方不明』という状況から 『死亡』、という現状に変わったことに、動揺を隠し切れなかった。曖昧さもないにもない、決して揺るがない現実を知ったことによる、動揺を隠し切れなかった。

二度と迎えられぬ親の帰り、二度と見れない親の顔、二度ときけない親の言葉、二度とない、親との再会。

二度と思い出せない 半ば曖昧な親の顔。

それらを、まざまざと突きつけられたが故に 大河は悲しみを、堪え切れなかった。

「現実を突きつけられた気分は、どうじゃ？ 小僧よ」と。

理事長のその一言で大河は意識を現実へと戻し、それから、まだ色々まとまっていらない考えをまとめる事無く 率直な、素直な、思ったままのことを、そのまま口に出し、それに応えた。

「……良くはないけどよ でも、少しだけ。“気が楽になった”気はする」

「……なるほどな」

自分でも何を言っているのか、分からないような事を、大河は思ったままに言って それから、自分が本当に何を思い、何故こんな事を言ったのかを、本当に疑問に思い、その時の心情を思い起こそうとするが、しかし、大河がそのときの心情を思い起こすことは、ついになかった。

「ま、そうじゃろ」

と、理事長は大河の胸部の辺りで、そんな大河の心中を見透かしたような事を言って その密着している体勢のまま、言葉を続け

ていく。

「小僧は先の言葉を言った時、恐らくは“何も思ってなかった”んじゃないろうよ。じゃから、あそこまで素直で純粋な意見が言えたんじゃない。評価するには程遠いが、気が楽になったのも、また事実じゃろ。気のせいではなかるうよ」

「……そうですか」

「そうじゃ。わしに間違いはない」

理事長はそう断言し、そして、大河の身体へと、より身体の重心を載せるように、身体を傾けた。

少しばかり不意を突かれた感があるのは否めないが、大河も流石に少女一人の体重ならば、いくら傾けられようが耐え切れるのだが、しかし、それがイコールで密着に耐えきれると同じではない。以前。

この体勢自体、大河からすれば大分精神を揺さぶられるもので、理事長がどうかは不明だが、大河としては、なるべく早く離れたいというのが本音である。まだ幼い少女と、こうして密着するというのは、それは罪悪感が芽生えるものであったのだ。

その罪悪感故に、大河は後方に一步退き、察せられないようにそれとなく、理事長から距離を置く。が。

「まあ、何はともあれ、小僧の要望にわしは応えた。ならば、次は“わしの要望”に、そなたが応えるのが順当ではなかるうか？」理事長は言いながら、一步後退する大河の歩とほぼ同時に、前方に、一步だけ。

一步だけ歩を進め、ほんの数秒たらずでその距離を詰めた。

大河は詰められた分だけ、更にまた一步、と、後退するのだが、しかし、理事長は不気味な笑みを湛えつつ、空けられたその距離を確実に着実に詰めていく。

自分一人では恐らく振り切れない、という結論に大河は至り、助けを求めようと、椿が居るであろう方向に振り返るが、しかし、

そこに椿は“居なかった”。

「……あれ、椿先生は？」

「それも要望に入るからな、気をつけい」

最早、言葉尻を捉えるような、物言いだ。

屁理屈である。

「要望つて 以前に、俺は面談をしにきたんですが」

「じゃから、わしはその面談を承諾し、そなたを正式にわしの学校に迎え入れてやるんじゃぞ。これ以上となく、そなたの要望を受け付けているとは思わないのかえ？」

「それは、そうですか……」

と、そこで大河が返す言葉に詰まったのを、理事長が見逃す訳もなく、そこでまくし立てるように、理事長は言葉を浴びせていく。「そうじゃろ？ ならば、これ以上の理由は必要なかうよ。そなたが受けた恩を、今度はそなたがわしに返すじゃけじゃ。それに、わしとて無理な願いはせんよ。金やら、立場やら、そういったもんじゃ、ありません たじゃ、『わしに協力してくれまいか』と、言うておるじゃけじゃ」

大河との追いかけつこのような、距離の取りあいも、やがて螺旋階段の手前で終了し、理事長は、そこで退路を絶たれた大河に向け、爪先で立ち、更に自らのその体重を載せていく。

一方の大河は、その『協力』というのが、一体何に対しての協力なのか、という部分が未だ不明なので、拒否も承諾もしようがない。交渉や条件交換というのは、前提として互いがその条件を齟齬をなしに知るのが、定石なのだが、理事長は一切の情報を開示せず、その承諾を求めてきているのだから、それは返事の仕様もあるまい。「……あの、理事長さん。その『協力』というのは、一体何に対しての協力でしょうか？」

自分の腰に両腕を回し、がっしりと自分を逃がさないようにしている理事長に向け、大河はおずおずと問いを投げ掛けた。

「そうじゃな ま、協力といっても、そんな大仰なことではない

わい。安心せい」

「いや、ですから、一体何に協力するのかを」と。

そこまで言いかけたところで　大河はその右脚を理事長の華奢な脚に後方から掬われ、無防備の背からコンクリートの床へと、“倒されていく”。

脚払い、である。

「っ！？」

不意を突かれたのも、それはあるのだろうか　しかし、それ以上に。

それ以上に、理事長がそもそも身体の体重の全てを、大河の身体に載せるような体勢をとり、両腕を大河の腰の辺りに回していた為、その体重のほとんどが、大河の身体に押し掛かるのに、その時間が掛からず、体勢を取り直す時間が無かったという事が、不意を突かれた事以上に、大河が脚払いをやすやすと決められた原因であろう。

加えて、理事長と大河は、文字通り密着していた為、脚やらそういったところにまで、視界が及ばず　その脚払いの予備動作に気付けなかったのも、またその原因の一つだ。更にいうならば、大河の意識は完全に会話の方に引き込まれており、それ以外にまで気が回らなかったのも、脚払いを見事に決められた原因の一つである。こうして一見すると、それは偶然が偶然重なったように見えなくもないが　しかし、これは偶然ではなく、全て理事長が“仕向け仕込んだ事”であるのだ。

密着したのも、距離を離さずに詰めたのも、腕を腰に回したのも、本質的答えを返さず、答えを濁してそちらに意識を持っていったのも　全て、理事長の『布石』であり、計画であるのだ。

そこへ行くと、脚払いを決められたもつともな原因は、やはり『理事長の計画に嵌ってしまった事』に違いない。

大河も幼女に脚払いされるなどとは、ゆめゆめ思ってもなかった

であろう。

「小僧」

と。

寸でのところで、両手をつき、背中が床に衝突するのを防いだところ、大河のその腹部に馬乗りになっている理事長が、不適な笑みを浮かべながら、そんな無様な格好の大河に向け、注意ともらえるような言葉を浴びせていく。

「そなた。もしやこのわしと同等の立場で交渉ができるとでも思うたのか？　じゃとしたら、それは滑稽じゃな　確かにそなたには、協力して欲しいが、何もわしは『断れぬ』などは、一度も言っておらぬぞ。恩を恩で返すのが嫌ならば、そなたは“断れば良い”。まあ、断った場合は、わしもそなたに“恩をやるのを断る”がな」

理事長は言外に『恩返しを断るならば、こちらも入学を拒否する』と告げ　そして、大河の顔に自らの顔を被せるように近づけ、続けていく。

「無論、褒美がないわけではないぞよ？　そうじゃな　例えば。仮にそなたが、わしの“これ”を欲しいと願うのなら」

長くさらさらな金髪が互いの顔を囲うように垂れ、ある意味大河と理事長だけの異様な空間ができあがった状態で　理事長は自らの、その潤っている小さな唇を、白く細い一指し指で示して、それから笑みを浮かべたままに。

「くれてやらんでもないぞ。わしのファーストキス」
と、言うのであった。

「必要ない」

人で賑わう、とある駅　そこで、一人の女と、その女に較べる

と大分若い一人の少女が、停車している電車に乗ることもなく、ただ駅に設備してあるベンチに腰掛け、何かを言い争っていた。

「で、ですが、これを渡しておくと、私は言われておりまして」

「だから、『そんなのは必要ない』。これで十九度目だ。全く、物分りの悪い子だな」

静かながらも、しかし、どこか剣呑を感じさせる口調のその女は明らかに成人を超えているだろう体躯であった。

眼の色は灰色をしており、非常に長いその金髪は、後方でポニテイルに纏められおり、服装は一切の飾り気がない、シンプルで、シックなドレスに身を包んでいた。

体系も全体的に引き締まっているせいか、そんな飾り気のないドレスでも、彼女は十分な妖艶さを醸し出していた。

一方のおどおどとしている、少女は眼鏡をかけ、そのストレートの黒髪を肩の辺りまで伸ばし、目は黒色をしている。

服装は、つい最近まで“大河が通っていた学校で定められた制服”を着用しており、その両手には、比較的大きい箱が持たれていた。

といっても、ダンボールやそれほどまでの大きさではなく、二十センチや、それくらいの大きさの箱である。

「^{かえで}楓ちゃんも物分りがいいのなら、今のうちに帰っておくべきだ。これ以上私と行動をとみにしたところで、恐らくは、無事には帰れぬであろう」

その女は、それが警告であるかのように、非常に沈んだ声で、突き放すように、そう言っ て 彼女は、ベンチから腰を浮かし、それから駅の出口の方へと歩を進めていく。

「あ、待つ……」

一方の少女、改め『楓』は、それを受けてか、一瞬その女を追おうと立ち上がったが、しかし、立ち上がったところで、楓は“立ち止まった”。

その女の姿を見失ったとか、そういうのではなく、むしろ、そ

の女はスーツ姿や、そういった群集の中では一際目立っており、一瞥するだけで彼女と分かるほどに、彼女の服装は場違いとも取れた。故、楓はその女を見失ったのではなく、しっかりと視界にその女を見据えたのだが　しかし、楓はその女が醸し出す、妖艶さとはまた別の『剣呑』さに気後れしてしまい、追う事ができなかったのだ。

ただ、その女はそこに『居る』だけなのだが　しかし、充分にそこからは、妖艶さと剣呑さが、ひしひしと感じ取れたのである。普通とは異なる空間を　その女は、見事にそこに造り上げていた。

同じ場所にいるようで　生きている次元がまるで、違う。

「……あ」と。

その楓がそう怯んでしまっている間にも、その女はその群集の中に埋もれていき、やがてその姿を晦ますのであった。

「……………」

果たして、楓はその荷物をその女に荷物を渡しそびれ、上からの命令に応えられなかったのだが、しかし、楓は　どこか安心していった。

否。

緊張が、解れたのだ。

あの異様な雰囲気醸し出す女から、離れることができ　緊張が解れたのだ。

ただ、同じ場にいるだけなのに、辺りに緊張感すら覚えさせる、それは異常で異質な　女であった。

第六話『任』

理事長との面談が終了してから数時間が過ぎ　　時間は、陽が大分傾きつつある夕方。

「さて、と　　帆照。これで今何本目だ？」

「三本目。残り、二本よ」

「あと、二本もか……」

やるせなさそうな苦笑を漏らしながら、大河は自動販売機から一本の缶ジュースを取り出して、それを片手に持つビニール袋へと放り込み、少し離れた所のベンチで待機している帆照のほうへと歩を進めていく。

場所は『街中』ではなく、『廃れた駅』。

駅を囲う金網は、所々に穴が開いたり金網自体が倒れていたり、手入れが全くといっていいほどにされておらず、さながらそれは異端学校の食堂を彷彿とさせるものであった。

しかし、線路やホームが最低限の整備されている辺りを鑑みるに、廃駅ではなく恐らくは今も使われている駅なのであろう。

「と、これが二本目だから　　」

帆照の横に大河は腰を下ろし、ビニール袋を横に置いて、ポケットから一枚の紙切れを無造作に取り出す。それから、大河はその紙切れを帆照と自分との間に置き、互いにそれが見えるようにと、それを広げた。

その広げられた紙切れを、帆照も大河も同様に覗き込み　　そこに記されている文に、視線を走らせていくのだった。

紙切れには上から順に『あつぷるあぢ』『おれんぢあぢ』『まごおあぢ』『どりあんあぢ』『ばいなつぷるあぢ』と、稚拙な字で記されており、大河と帆照はその稚拙な字に目を凝らし、自らの認識とそれに記されている内容を照らし合わせ、確認するのであった。

「えーと……次は四本目の『どりあんあぢ』か　　ここの“自販”

には無かったから、また別の所に行くしかないな」

「そうね　それと、今更だけど“理事長”先生。片仮名書けなかったんだ」

「まあ、平仮名すら間違えてるからな。語彙は豊富だったけど」

両者が内容を確認し終えた所で大河はその紙切れを折りたたみ、折りたたんだその紙切れをポケットに押し込むように、荒々しくしまうのであった。

唯一内容が記されているその紙切れを荒々しく扱うというのは、大河本人としてもそれは望ましくないことではある。が、しかし、その大河本人にも相当な疲労が蓄積されており、紙切れ一枚の出し入れまでに気を回すというのは、無理なことであつたのだ。

といつても別段、体力を消耗するような運動をしたという訳ではない。

体力的疲労もあることにはあるのだが、しかし、それは本当に僅かなもので、大河が真に疲労と感じているものは『精神的疲労』であつたのだ。

そして、それは帆照も同じことで　今現在大河と帆照は、精神的に非常に疲労する『任』を、“理事長から直々に託されており”、またそれを実行していたのである。

もつとも、これは大河の『恩返し』である為、帆照からすれば巻き添え感が否めないのだが。

「ねえ大河。一つ訊きたい事があるんだけど」

疲労からか、いつものような快活な口調ではなく、まるで気力が感じられない低いトーンで、帆照は大河に問い掛けた。

「何だ？」

「ずっと、思ってたんだけどさ　『ドリアン味』のジュースって、そもそも自動販売機で販売してるわけ？　あたしは見たことないんだけど、大河は目星でもついてんの？」

「あ」と。

帆照のその問い掛けで、大河は“初めて”その事に思い当たり
そして考えるまでもなく、それはまずない、という結論に至るの
であった。

同時に、仮にあったとしても、それは決して見つけることができ
ないだろう、という結論にも。

「『あ』って、まさか、あんた　　今気付いたのっ！？　馬っ鹿じ
やない！？」

滅多に驚きやらの感情を表に出さない帆照が、こும்怒鳴り散ら
すのも珍しい事であった。

が、それも無理はなからう。

何せ、その『ドリアン味』^{どリアンあぢ}を含めた、五つの飲料水を自動販売機
から蒐集できない限りは　彼女等は、異端学校へ“帰れない”の
だから。

つまるところの、『立ち入り禁止』である。

発端は、大河が理事長に馬乗りされていた時。

その時に、大河は理事長から「これに記されておる五つの飲料水
を、自動販売機から集めてこい」と任を託されたのと同時に「それ
ができぬのなら、この学校への立ち入りを禁ずる」という条件を提
示されたのだ。

無論、抗議の気持ちはあったが、しかし大前提としてこれは『恩
返し』であり、『恩を返せぬならば恩を売らん』、という理事長の
思想を考えれば、それは覆らないであろう条件であったのだ。

故、大河はその条件を渋々呑むほか無かったのだが、しかし、理
事長も一応は異端学校の教師としての義務感があつてか、或いはた
だの嫌がらせでか、或いは何かの布石としてか　その『任』に理
事長が指名した者を一人同行させるように、と更なる条件を提示し
てきたのだった（無論、理事長に指名された者にも大河と同様の条
件がかせられている）。

そして、その理事長から直々に指名された者というのが、たまた
まその時の予定が空いていた『帆照』であったのだ。

理事長は『褐色娘』と呼んでいたが。

一方の帆照自身は、やる事があるかないかと言えばそれはあるには違いないのだが、しかし、それでも異端学校最高権力者であるところの理事長直々の『任』よりも重要な事はなく　　帆照は大河以上に渋々と、否。

嫌々、といつても過言ではないほどの態度で、それを承諾したのだから　　当の本人であるところの大河の初歩的な不注意に激昂したとしても、それは不思議ではなからう。

むしろ、激昂しないほうが無理というものだ。

「……全く」

帆照は呆れたといわんばかりに溜め息を吐き、勢いで立ち上がりかけた身体を椅子に掛け直す。

「で、どうする？　てつきり、あたしはあんたに当てか何かがあると思つてただけだね。でも、その分じゃあ当ても何もないようだしね　『今からそれを探索する』って、手もあるけど、それは危険とかそういうのを差し引いた所で、あんまりお勧めはできないしねえ？　『知らない』って予め教えてくれていれば、それなりの策は講じられたんだろうけどさ」

「帆照、本当にごめ　」

「　　いやいやいや、何も大河君。何も何もあたしは君の事を責めてる訳じゃあないんだから、君は謝らなくなつていいんだよ。それに、これはあたしにだつて非があるんだから。そう、この疑問を真っ先に君に訊かなかつたあたしが悪い。君に期待したあたしが悪いんだからね。これからは自分で努力するさ、なるべく君に負担をかけないように」

「……………」

一見遠まわしそうではあるが、しかし実際は露骨なその罵倒に、ただただ肩身が狭まる大河であつた。

と、同時にこのさばさばとした風な帆照の話し口調に対し　　大河は再び、どこか懐かしげな感情を覚えていたのだった。

もつともそれが、日之出病院であつた時以来に聞いた口調だからか、或いは日之出病院で感じた懐かしさと同様か、というのは本人も皆目見当がつかないところであるのだが。

「はあ　でも」

と、帆照は一度嘆息し、それから。

「あたしがいくら怒つた所で、今の状況が変わるわけもないか……八つ当たりしちゃって、ごめんね」

最後は流石に言いすぎたわ、いつでも期待はしているよ　と付け加え、先ほどとは打って変わって、自分が衝動的感情で言葉を発した事を忸怩でもしたかのように、姿勢を正して大河の方へと向き直り、申し訳なさそうに頭を下げるのであつた。

「……………」

まずその行動を見て、大河が覚えたのは晴れ晴れとした気持ちや、謝罪する帆照を見下すような感情ではなく　どんな感情よりも真つ先に、大河が覚えたのは『恐怖』であり『違和感』であつた。

憤りを体現化したような態度から、謝罪の態度への切り替えが“さばさばとし過ぎていて”、というのも恐怖と違和感を覚えた主な原因の一つではあるのだが、それ以上に。

それ以上に帆照からは、まるで『自分を作っているかのような』

『人としての一貫性が破滅しているような』、そんな印象を大河は受けたのだ。

態度の急変は言わずとも、その態度態度によって“変わっていく”『性格』や『口調』に、大河は先のような感情を覚えたのだつた。だが、人の『性格』や『口調』がその時の態度によって変わるのには、至極当然な事であろうが、しかし帆照の場合は　彼女の場合は、“根本的に性格が変わっている”のである。

性格が『代わっている』、といつても過言ではない。

一つ例として挙げるなら、つい先ほどに『代わった』“憤り”の性格がまさにそれといえよう。

憤りを感じている時は、まるで人を突き放すような『口調』であ

り、あらゆる物事に拘らないような、さばさばとした『性格』に変わり 代わっていくのだ。

そしてそれは、憤りを覚える前とは根本から別人のような『性格』であり 大河は、その『性格達』を『感情』に合わせ、帆照が自由に“入れ替えている”ことに恐怖を覚えたのであった。

至極当然のように、自分の『性格達』を『感情』に合わせ“変えて代えていく” 帆照という一人の人間に。

また、この『入れ替え』故に、先のように帆照が『感情』を露わにするということは、帆照本人からしてみても非常に珍しいことであつたのだ。

「……………」

「ん、どうしたの？」
と。

帆照は若干俯き気味となつてしまつていた大河の顔を横から覗き込み、怪訝な目付きで大河の瞳を上目遣いに見つめるのであった。
疑るような、怪訝な眼差しで。

「え。あ いや、あれだ……なんつーか、ただ疲れたから、さ。うん。そう。ちよつと、休んでただけだ」

「成程。あんたは、咄嗟に嘘を吐けないタイプか」

呆れ気味に、そうは言うがしかしそれ以上の追及はせずに「ま、いいわ」と話を切り替える帆照。

「あんたが何を隠そうが思おうが、別にあたしの知ったことじゃないし それに、今はそんな益体のない話よりも先に、もっと話し合わなきゃならない事だつてあるんだし」

「？ 話し合わなきゃならない事……あ、そうか」

一瞬その言葉の意味を理解し損ねる大河であつたが、しかし今の状況と帆照の発言を鑑み、すぐにそれが『任』に関連することだと気付き、そしてその言葉が『残り二本のジューズ』を指していることだと気付くのであった。

「………… 成程。残り二本のジューズのことか」

言いながら、視線をビニール袋へと向ける大河。

「これまでは、マンガを除けば順調だったわけだが　パイナツプルはいいとして、やっぱ問題はドリアン味だよなあ……帆照。さつきお前は俺のことをさんざ責め立ててくれたわけだが、そう言うお前は何か知ってるのか？」

「知ってたら、怒ってない」

一言でその問いを一蹴し、大河に二の句を継がせない帆照であった。

「……まあ、そうだろうな」

「そうよ、そんなの当然の事。ただ、そんな“確定してない”事よりも、今話すべき事はもう“確定している”別の事だとあたしは思っただけ」

「……別の事？」

「ええ、別の事。あたしにとっても、大河にとっても、この上なく、とっても重要な事よ」

「……………」

半ば諭すように言われたが、しかし大河に思い当たるような節はなく　どころか、大河はそれ以外は全て順調だとすら思っている。で、帆照の言う『別の事』の意味がまるで理解できないのだった。しかし、それは後から考えれば至極滑稽で、至極希望的観測な見方であつたのだが。

「あんた、まさかとは思ったださ……“また”、分かってないわけ？」

「すみません、帆照さん」

「呆れ果てた」

文字通り、帆照は呆れ果てたように力なく項垂れ　それから大河の顔を険しい目付きで睨みつけ、非常にトーンの低い声で言うのだった。

「じゃあ、一から説明するけどさ。あたしもあんたも、まず『今日中にはドリアン味のジュースを入手できない』って意見は、多分同

じでしょ？」

「はい、そこは同じでございます」

「でしょ？　なら、『明日』も捜さなきゃならないわけ　つまり、絶対に『明日』を迎えなければならぬ、ってわけ。ま、ここまでいえば流石に分かるでしょうから、皆までは言わないけど」

「……あ」

と。

本当にようやくといったところで、大河は帆照の言いたいことを理解し　同時に、その事の重大さも、ようやくといったところで理解するのだった。

「成程　つまり、『異端学校を追放された俺達が、どうやって無事に明日を迎えるか』ということを、帆照さんは仰っているのですね？」

その応えに帆照は「まあ、そんなところね」と頷く。

が、それもどこか妥協したような、決して断言ではない口ぶりではあるのだが、しかし『頷いた』ということは、その応えの本質自体は、帆照の考えるその本質と一致している、という事なのだろう。

その『本質』というのは、言うまでもなくやはり『敵対している能力者からの襲撃』であり　また、それに対する『対策』であった。

実際、つい先ほど（午前）までは大河も帆照も『異端学校』という『敵対している能力者』から身を護ってくれる学校（組織）に入っていたのだが　しかし、理事長からの『任』によって、今現在、大河と帆照は二人揃って“異端学校から追放”されているのである。異端学校から追放されたという事だけでも、非常に大河達の身の危険度は高まっているのだが、しかしそれに加え、大河達には理事長から託された『任』もあるのだから、否。

そもそも、その『任』が為に異端学校を追放されたのだからむしろ、加えられたのは『追放された』という事の方である。

まとめてしまえば、つまり大河達は異端学校を『追放』されているという危険な状況下の中でも、その『任』を遂行しなければならぬのだ。

ひっそりと、あまり表立った行動を控えながら、その『任』を果たさねばならないのだった。

もつとも、巻き添えで同行させられ、巻き添えで同じ状況下に立たされた帆照からしてみれば、『任』を託された当の本人である大河の不注意には、それは苛立ちを覚えるものであったのだ。

「ま、分かってくれて助かるわ。これで、ようやく円滑に話ができるからさ。分からない事があつたら、今度はちゃんと云つてよ？ あたしは先輩なんだから、何にも知らない後輩の疑問くらい解消してあげるってもんよ」

目を細めて、笑みを浮かべながら　しかし遠まわしに大河のことを責めたてながら、話を進めていく帆照。

その後も大河は遠まわしな、最早『罵詈雑言』と称しても過言ではない言葉で罵られながらも、しかし言い返すようなことはせず、その『罵詈雑言』の殆どを黙殺し、まともな意見だけを聞き入れ、文字通り円滑に話を進めていくのだった。

最初のうちこそ、帆照が大河をリードするように話を進めていたのだが、しかし話が進むにつれて帆照の雑言の割合が増えていき、最終的には大河が帆照の怒りを宥めながら話を進めていく、という形になったのである。

これでは『どちらが先輩だ』といわれても仕方あるまい。どころか、先ほどの謝罪の意味がまるでないといつてもいい。

途中、全く持って大河とは疎遠な愚痴も混じっていたが、それも勿論黙殺である。

「　んじゃ、寝るところはそこだとして、見張り番もさっき言つた順番でいいかしら？」

溜まっていたものを全て出し切りでもしたかのように、帆照は清々しい笑みを浮かべ、早々と内容の確認をとっていく。

が。

「……うん、いいんじゃない？」

対する大河の声からは、およそ生氣というものが感じ取れずまた、その表情からも帆照と話す前と較べ、より一層の『疲弊』が見て取れるのだった。

人と会話した後に、その疲弊を露わにするのも不躑と思えるが、しかしそれも先の会話を考えれば致し方なかるう。

いくら黙殺とは言え自らに対する『雑言』、或いは自らとは疎遠でありながらも、愚痴という愚痴を長時間聞き続けたのだから、むしろ疲弊するなというほうが酷な事である。

どころか、大河は自らに罪悪感があったからこそ、言い返しはしなかったものの、仮にその罪悪感が無ければ、まず帆照との『友情』や『信頼』といった関係は“破綻したに違いない” 否。

例えば罪悪感があったとしても 普通ならば、破綻して当然の言われようだ。

が、しかし大河はそれに耐え忍び、黙殺し、それでも尚友情関係、信頼関係を破綻させない どころか破綻させようとすら思わず、むしろ帆照の愚痴の多さに『普段から大変なことやってんだな』と、大河は同情すらしかけたのであった。

この大河という人物は妹だけに優しく接するのではなく 意外と、皆に優しい『お人好し』な人物のようであった。

或いは『甘やかし』な人物。

「じゃ、決定ね」

「……ああ、そうだな」

「……………」

まるで生氣のない大河の返答に、流石の帆照も思うところがあったのか。申し訳なさそうに、しかし今度は“性格を入れ替える事無く”、帆照はこめかみの辺りを手持ち無沙汰といった風に指先でなぞるように？きながら、会話を切り出す。

「……あのさ、大河」

「今度は何だ？」

疲弊や苛立ちが重なってか、大河の口から出たその言葉はしかし大河の意識とは関係なく、怒鳴りつけるような声となって発せられるのだった。

その口調に帆照は自責の念に駆られ、話すことを憚られながらも、しかし性格を入れ替える事はせず　その性格のまま自責の念を押し切って、かぼそい声で続けていく。

「いや、その……さっきは、愚痴を聞いてくれてありがと、ね。中々あたしも言える相手いなくて、つい、溜まってた事言っちゃって

だから、ごめんなさい」

「あ……う、うん？」

若干、声のイントネーションがおかしくなってしまったが、それでも大河はなんとか頷き、それに応えるのだった。

が、声のイントネーションがおかしくなるのも、今までの帆照の行動などを鑑みれば、ある意味それが“一番普通の反応”といえよう。

感情に合わせ、性格を変えて代えていく、帆照という一人の人物が　しかし今回は感情にあわせた性格に代わることなく、いつもの“そのままの帆照”として謝罪してきたのである。短い付き合いでこそあるが、それでも帆照の『性格の入れ替え』を熟知したといったも過言ではない、大河からしれみれば　それは、驚かされるものであったのだ。

通常ならば『性格を入れ替える』であろう局面であるのだが、しかし今回に限って帆照は“通常”のまま謝ってきたのだから。

「……なあ、帆照。もしかして俺、何か変なことしちゃったか？　？　或いは、変なこと訊いちゃってたか！？」

「うん、たった今ね」

笑みを浮かべながら、しかしどこか不機嫌そうに応える帆照であった。

大河からすれば『自らがよからぬ事をしてしまった（訊いてしま

った）が故に、帆照の心に、何かしらの大きな影響を与えてしまったのでは』と、後ろめたい考えが脳裏を掠めるばかりであったが、しかし実際そんな憂慮はどれも外的なもののばかりであるのだが。

もつとも、この時は帆照自身『鬱憤晴らし』として、自らのその気持ちを受け取っていたので、どちらも帆照の気持ちの『正解』には辿り着けなかったのだが。

「ま、これからの休息場所や、見張り番も決まったわけだし　そろそろここも離れましょうか。能力組織にでもかぎつけられたら、至極厄介な事になるしね」

言って、帆照が腰を浮かせた　刹那。

「それは残念だったな」と。

大河達を除いて、一切人がいないと思われたこの駅で　大河達以外の声が、静寂とした駅に響き渡る。

発せられたその声は女のそれであり　艶やかでありながらも、しかしどこか剣呑さを覚えるような、張詰めた声。

「大河」

「分かつてる」

大河も帆照もほぼ同時に、その声がした方向へと振り返り　その声の主を己の視界に捉えるのであった。

声の主は、見る限りでは女であり、艶のある長い金髪をポニーテイルで纏め、眼は灰色をしていた。

端正な顔立ちに、妖艶とした雰囲気醸し出すスレンダーな身体。そしてそれを覆う飾り気のないシックなドレスが、逆にその身体つきを際立たせるアクセントとなり、より一層の妖艶さと気品さを大河達に感じさせるのだった。

が、それ以上に大河達はその声の主から　もつと異質な。

もつと異常な『何か』を、何よりも強く感じ取っているのだった。
「青年　いや『タイガ』、といったか？」

名を訊ねる、という事は自らの情報に確信がないことを表し、予

め大河という人物を知ってはいたが、しかし自分が知っている大河と実物の大河が大分違った。或いは、先ほどの会話から推したか、と大河は考え、そしてそこから『前者』の可能性はまずない、と踏み残った『後者』の会話から推した、という結論に至るのだった。

「……それに応える義理はねえ。どこぞの貴族だからねえが、生憎俺にはそんな知り合いはいないんでな」

私が貴族に見えるか　と、声の主はその冗談に失笑するが、どうやら満更でもないようだ。

しかし、そんないかにも『貴族』といった風貌のドレスを着こなしている時点で、それは貴族らと間違われても仕方のないことなのだが。

「仮に確信が欲しいんなら、まずはあんたから教えてもらわないとな？」

「ふむ……“それもそうだな”、失敬。実に不躰な頼みごとであったな」

鎌をかけた、とすらいえないような大河の軽率な挑発に、しかし意外にも声の主は納得したように頷き　そして、自らの情報という情報を口にしていくのだった。

「私の名は『カウニス』、姓は憶えていない。生まれは『フィンランド』。性別『女』。所属は『能力組織直轄暗殺部隊』。まあ、それでも長すぎるので『能力組織所属』と憶えてもらえばいい」

声の主　改め『カウニス』は臆する事も無く、端然たる態度で自らに関する情報を開示していくのであった。

あまりにも端然としたカウニスの態度に、大河は少々面食らったような感じとなってしまったがしかし、カウニスが『能力組織所属』だということから、気を引き締めなおし　改めて、眼前に佇むカウニスを睨みつけるのであった。

「ん？　どうしたのだタイガ？　そんなに私を睨みつけて」

「……………」

「……あ、そういうことか、成程。タイガは私が名乗ったので、自らも名乗らなければならぬ、と思っっているのか？ それだったら別に名乗らなくてもいいのだぞ？」

言いながら　　つかつかと、大河達のほうへと歩み寄ってくる、カウニス。

ポニーテイルを揺らし。

ドレスを揺らし。

されど、心は揺れず乱れず　　カウニスの鋭い視線は、しっかりと大河の姿をその視界に捉えているのであった。

「……大河。どうする？」

『闘うか、逃げるか』というニュアンスを含んだ帆照の問い掛けに對し、大河は自らに歩み寄るカウニスを見据えながら思索し　　間もなくして、その問い掛けに応えるのであった。

「そうだな　　まあどちらにせよ、まずはこいつの能力を見極めなけりやならない。逃げるか闘うかは、その後だろ？」

確認を取るような大河の口調に對し、帆照は「それもそうね」と頷き　　それから片腕を小さく振りかぶり、その片腕をカウニスの方に向け全力で振り切るのであった。

さながら、野球のピッチャーのように　　ではなく。

どちらかといえばそれは、何かを“押し出すような”そんな動作で、帆照は振り切るのだった。

その動作自体は、ネツアクと対峙した時に見せた動作と殆ど同じでこそあるが、しかしそこから産み出された『炎』の大きさ（量）は　　まるでその比にならない“大きさ”であった。

ネツアクとの時は精々数十センチ範囲の放射であったが、しかし今回は“数メートル”範囲での放射である。

とてもじゃないが、それは相手の能力を見極めるため、見るためのだけの炎とは思えない、確実な“攻撃の一手”であったのだ。

「……………」

迫り来る膨大な炎の波に、しかしカウニスは臆することも驚くこ

ともなく　ただ平然と歩を進めていき、何をするわけでもなく、その“膨大な炎の波の中に這入っていく”のだった。

いや、何をするわけでもなく　というのは、表現として間違っているので、訂正させてもらおう。

正確には“何かをして”、その膨大な炎の波の中に這入って行ったのだ。

が。

しかし、膨大な炎の波が過ぎ去ってみれば　そこに居たのはシツクなドレスに身を包んだカウニスではなく。

「！」

そこに“あつた”のは、縦横ともにおよそ二メートル程はあるであろう“コンクリートの壁”であつたのだ。

膨大な炎の波が過ぎ去る前には無かつた、コンクリートの壁が突如として、そこに現れたのである。

あたかも、最初からそこにあつたかのように。

「……これが、カウニスの能力か？」

それを受け、大河はカウニスの能力を『物体を創りだす能力』と解釈したのだが、しかし。

「いや、まだ断定するには早いわ。もしかしたら、駅のコンクリートを突起させて造った壁かもしれないし、今はまだ決め付けるべきではないわね」

大河のその仮説は　炎を放った張本人である帆照によって見事に否定されるのだった。

だが実際、帆照のいつてる事は正しい事であり　ここで『決め付ける』というのは軽率で浅はかな判断といえよう。

仮にその判断が間違っていたのなら、それは取り返しのつかない事態を招くかもしれないのだから　それは慎重になりすぎたとて、さぞ不思議ではない。

むしろ、相手の能力を探る時は慎重になりすぎて丁度良いくらいである。

「……まあ、でも、その線で探っていくのは間違いでは」と。

帆照がそこまで言ったところで 眼前を隔てるコンクリートの壁が忽然として“消え去り”、その壁の反対側にいたであろうカウニスの姿が、再び大河達の目前に晒された。
が、しかし。

再び現れたそのカウニスの手には 壁で姿を見失う前にはなかった筈の“一本の薙刀”が、握られているのであった。
薙刀。

長い柄の先に反りのある刃がつけられている武器であり また、それを『隠す』などということは、今のカウニスには到底不可能な事であった。

たとえばドレスでなかるうとも、全長二メートルにも匹敵する『薙刀』を隠すなどということは、まず不可能な事であるのだ。

それこそ、大きな仕掛けでもない限り、或いは と。

「！」

そこまで考えた所で、帆照は ある一つの可能性に思い当たった。

仮に。

もし、仮にカウニスの能力が『何かから、物体を自由に出し入れできる能力』だとしたら、それはコンクリートの壁を瞬時に出現させ、瞬時に消す、という現象にも辻褄が合い 今の『薙刀』を手にとっている状況にも、十分な説明がつく。

辻褄が合う のだが、しかし。

「……まだ」

帆照は自分に言い聞かせるように。

恐怖と焦燥に駆られ、答えを急ぐ自分に言い聞かせるように

帆照は小さく囁いた。

「まだ 決めるのは早い」

その言葉は一見、結論を先へ先へと先延ばししているようにも見

えるが　しかし、実際その手段は“まだ正しい”といえよう。

まだ、カウニスの能力を断定するには　カウニスの能力に関する情報が、あまりにも少なすぎるのである。

故、帆照は未だにカウニスの能力を断定することができないのだが　しかし。

何時までも疑って、何時までも能力を断定しないというのも、それはそれで望ましくないことであつたのだ。何時までも疑つた所で結局いつかは決め付けなければ、その能力の対策は講じられない訳であり　また、それ故に帆照は焦燥に駆られているのだつた。

「　さて、タイガ」

長く重い薙刀を“手馴れた手つきで、頭上で数回振り回し”、その癖やらリーチやらを確かめた上で　カウニスは再び、その薙刀を大河の方へと構えなおすのだつた。

華奢な身体には不相応な行動であるのだが　しかし不思議とカウニスには、その乱暴な行動さえも凶暴な武器さえも、実に相応しく、そして美しく映えて見えるのであつた。

否。

むしろ、カウニスには　乱暴で凶暴な姿の方が、皮肉にも似合っているのかもしれない。

薔薇に棘があるように、美しさに棘があるように。

「貴様の力が如何ほどか　しかと見せてもらうか」

第七話『喰』

「……帆照。こいつの能力、少しは分かってきたか？」

眼前で構えるカウニスを見据えながら、大河は声を潜め囁くように帆照に問う。

「そうね　今はまだ『物体創造系の能力』って、くらいまでしか分からないわ。生憎、まだどんな能力でどんな効果かってのは、今一不明瞭なところよ」

「そうか　なら、俺に一つ『提案』があるんだが」

「『提案』って　！」

と。

帆照が確認を取ろうとした所で　眼前で薙刀を構えるカウニスが、脚を踏み切った。

何故大河達に会話の時間を与えたかは不明だが、しかし会話を遮られて一瞬戸惑ってしまった大河達とは対照的に、カウニスは正に準備万端といった風であった。長く重い薙刀を前に構え、身体を全体的に沈めるような前傾の体勢をとり、走るには決して適していないだろうハイヒールで地面を蹴って、カウニスは大河の方へと接近していく。

無論、薙刀などという長く重い武器を持っていようものなら、走る速度が落ちてそれは当然なのだがしかし、カウニスの場合は走る速度が落ちることはなく　どころか、彼女の場合は走る速度が“速まっていた”。

が、それも当然といえば当然である。

『長く重いおかげで走りにくいのなら、その重さと長さで走りやすくすればいい』

それがカウニスの思想であり、結論であった。

その結論を実行すべく、カウニスは薙刀を身体の前に構え、更に自らの身体を前に傾けることによって、その“身体の重心と薙刀の

重心を前方に傾けた”。重心を前方に傾けた状態で走ることによって、カウニスが脚を一步踏み出す度にその脚にそれらの重さの殆どが載り、その重さが載った脚を踏み切ることによって、その重さを地面へと逃がし、同時にそれが地面を蹴る脚力にプラスされて、その分だけカウニスの走る速度が上昇していく、というカラクリがカウニスの走法のカラクリであり、カウニスが体勢を傾けた理由である。

実に単純なカラクリであるが、しかしそれ故に相当なテクニックが必要とされる走法であろう。

少しでも脚を踏み違えば、たちまち重心はあらぬ方向へと向かってしまい、転倒はまず避けられまい。更にいうならば、脚力も相当な脚力が必要となるに違いない。

自らの体重と薙刀の重さに耐え、しっかりと踏み出せる脚力がある。

「……………」

見る限りでは、カウニスというこの女 実に華奢な身体つきであるが、しかしどうやら最低限で最高の筋肉がついているようである。

「大河、構えて！」

気を引き締め直すように帆照は大河に一喝し、自らの両掌を接近してくるカウニスの方へと向ける。そのまま帆照はカウニスと自身との距離を演算し、放射する炎の火力を見定めていく。

「火か」

「炎よ」

演算の終了。

と、同時に帆照はその掌から ではなく。

「！」

前方に構えた掌ではなく 帆照は自らの“足元”から、その炎を放射した。

放射された炎はコンクリートの地面を這うように、地面すれすれ

を進んで行き 間も無くして、その炎は接近してくる“カウニスの足元”へと辿り着くのだった。

カウニスからすれば、そもそも帆照が掌以外から炎を放射するという事自体が予想外であつた為、驚きこそはしたが、しかしそれでも平常心を取り乱すという事はなく カウニスは、冷静に自らの足元に迫るその炎を見極めて、迫り来るその炎を“一躍して跳び越えた”。

より深く身体を沈め、その身体全体をバネにして 跳び越えた。

それは、幾度となく能力者を相手取ってきた帆照でさえも瞠目させられるものがある、およそ“ニメートル”は跳んでるであろう、巨大な跳躍であつたのだ。

「なっ ー！」

この状況で、そんな驚きの声を発したのは しかし、帆照ではない。

また、それは大河のような青年の声ではなく、その声は女のそれで その驚きの声は、紛れもなく“カウニスから発せられた声”。

空中に浮く“カウニスから、発せられた驚きの声”であつたのだ。

「え」と。

その声につられて帆照は空を仰ぎ そしてカウニスと同じく、驚きの声をその口から漏らすのであつた。

自らの視界で起こりうる、予想外、予定外の光景。

“カウニスの寸前まで、大河が接近している” という、その光景に。

「ー！」

無論。

カウニスは今現在空中にいるわけであるのだから、それに接近している大河もまた、空中にいるというわけである。

それも、カウニスの跳躍に匹敵しうる “巨大な跳躍”で。

カウニスは眼前に迫る大河に気付くや否や、手に持つ薙刀で空を

薙ぐように振り回すが、しかしそれは大河に“見切られており”

カウニスが完全にその薙刀を振り切る以前に、大河はその薙刀の柄を左脚で蹴り、見事なまでに“その薙刀を粉碎するのであった”。宙に浮いている故、満足に筋力は振るえない筈なのだがしかし、どうやらそれでも大河には“薙刀を破壊するに十分な脚力が備わっていた”ようである。

「……………」

薙刀を蹴ったことで威力が相殺したのか。宙で脚を振るったのにも拘らず、大河はそこで回転することなく、その視界にカウニスを捉え続けられていたのだが、しかしそれはカウニスも同じことであり、そしてそれは大河に比べ、カウニスの方が幾分有利な状況であつたのだつた。

「！」

と。

薙刀の木片が宙を舞う中、刹那として、大河の視界が遮られた。遮られた、といっても、しかしそれは白髪 of 敵の時のように光を消されたのではなく、物理的にカウニスを見据えていた大河の視界が、“コンクリートの壁によって物理的に遮られた”のだ。

今でこそ、大河もカウニスも宙に浮いてこそいるが、しかしそれは刹那的なものであり、いずれ、重力に遵つて地面に落下するといふことは、それこそ明々白々な必然的決定である。

そしてカウニスは其の落下するタイミングに合わせて、地へと落下していく大河の頭上に、そのコンクリートの壁を創りだしたのだつた。

大きさは炎を防いだものと較べると全体的に小さめだが、しかしそれでも大河を“押し潰す”には充分な重さと固さがあるに違いない。

現に。

大河は頭上で創りだされた、そのコンクリートの壁によって今正に、押し潰されようとしているのだから。

「大河っ！」

そんな帆照の声も虚しく　コンクリートの壁は落下した。

無慈悲にも　落下した。

落下。

と、同時に、胸の奥を叩くような轟音が轟き　コンクリートで舗装された地面が碎かれる。碎かれ、産まれた破片達が、落下したコンクリートの壁の破片と混じり合い、混合していく。

「……………」

こつん、と。

少し遅れて　高い着地音を立て、破片が飛び散る地面に着地したカウニスであるが、しかしその顔は決して晴れ晴れとしたそれではなかった。

ありていに言うならば、騙されたような　策にはめられたような。

そんな、険しい顔つきで　カウニスは睨んでいた。

“誰もいない、血もなにもない”　破片と化し、混じりあったコンクリートの残骸と、先まで帆照がいたであろうベンチの辺りを、睨んでいた。

無機物さえも恐れをなすような、鋭い眼光で。

「……………逃げられたか」

「……………大河」

と。

肩を大きく上下させ、全身の汗腺という汗腺から汗をとめどなく垂れ流し、氣息奄々となっている大河の腕の中で、帆照は心配そうに囁いた。

対する大河は、応えるところか呼吸すらも困難といった風であり、その顔は今迄にない苦痛と疲弊に満ちた顔をみせていた。

「……………」

また、その状態は言外に、“大河が『時間を喰らう能力』を発動させた”ということ、帆照に伝えているようなものでもあり同時に、それは帆照の中にあつた幾つもの疑問の答えでもあつた。その解消された疑問の一つが『大河の筋力の上昇』である。

常人ならば、まず二メートルほどの跳躍は不可能であろうし、ましてや、そこから宙に浮いた状態での蹴りで薙刀を破壊するなどというのは、最早常人の行動とはいえない。

その時点で、帆照も薄々『大河が時間を喰らっているのではないか』と勘繰っていたのだが、しかしまだその確信に至るには情報が少ない故、帆照はその事に対して確信を持てずにいたのである。

しかしその二、三秒後　大河の頭上にコンクリートの壁が出現した時。

その時には既に、仮に大河が時間を喰らっていたとしても、その“喰らった時間が消費し尽くされる”には充分であろう時間が経過しており、それ以上の常軌を逸した行動　常人を超えた『超人的行動』の続行は不可能、と帆照は踏んでいたのだが、しかし。

大河は帆照のその予想に反して、宙で自らの身体の下上を反転させ、上から落下してくるコンクリートの壁を足場とし　そこから大河はベンチの前に佇む帆照の方へと脚を踏み切り、跳んでいくのであつた。

あの時、帆照が大河の名を叫んだのは、決して心配やそういったことからではなく　自らの方へと、それも高速で向かってくる大河に対して、思わず叫んでしまった言葉であつたのだ。

しかし、そんな帆照の叫びも虚しく。

宙を跳んでいる状態から、大河は帆照の上半身を抱きしめるようにして抱き抱え、その後一度地面に脚をつけて更に踏み切り大河は帆照を抱き抱えたまま、最低限の整備が施されている“線路

”の方へと跳んでいくのであった。

そのまま、大河と帆照は駅のホームから線路へと落下し 地面全体に敷詰められている石に身体を打ちつけ、その勢いが収まるまで幾度か回転して更に全身を打ちつけた後に、ようやくといった具合で大河達のその回転は静止し、そして現在に至るのであった。

同時に大河の喰らった時間も、その時をもって完全に消費されてしまったのだが。

「よくもまあ、こんな無茶をしてくれちゃって 全く、まずい事になったわね」と。

ホームを一瞥し こつこつ、と近づく足音を耳に捉えて、そう言う帆照。

何がまずいか、といえばそれは今居る帆照達の『場所』であり、『状況』である。

確かに線路に逃げるというのは、あの状況を考えれば妙案といえば妙案であるが、しかし線路に逃げたところでその先が無ければ、それは無策で無意味な逃亡といえよう。大河にも、恐らくはまだ逃亡の先があるのだろうが、しかしそれを成し遂げる以前に、その大河が『喰らった時間』は完全に消費され 逃げるどころか、動く事すらままならないといった風である。

現在、大河達が居る位置は『ホーム下のレール付近』。

位置的には、まだカウニスの視界に入っていない位置なのであるうが、しかしそこは隠れるには決して適していない開けた場所であり、カウニスに発見されるのも時間の問題である。

仮に、カウニスが線路沿いまで接近したならば まず、発見されるのは免れないであろう。 まず、発見さ

「まずは、移動した方がいいかしら……」

そうは言うが、しかし帆照は大河の腕を振り払うわけでもなく、その体勢のまま自らのノースリーブの裾に手を伸ばし そしてそのまま、その“ノースリーブを起用に脱衣するのであった”。

「！？」

自らの前で起こりうる突然の出来事に、疲れも忘れ目をむく大河に対し、しかし帆照は別に何を言うわけでもなく 脱衣したその服を片手に持つて上体を起こし、そのまま“大河の腕をすり抜けていく”のであった。

さながら、大河の腕が塵気楼か何かであるかのように 抱きしめられていた帆照の upper body は、すり抜けた。

「……………」

「あら、この『現象』には驚かないのね」

下着姿を見られた意趣返しのもりなのか、いやらしく帆照は大河にそう尋ねた。

が、大河もこの現象 つまり『直截触れ合うとすり抜ける』という、自身の掟破りな『もう一つの能力』の発動条件と、その効果の大体の推測はついており、驚こうにもそれを理解しているのだから、大河からすればそれは『当たり前』の現象に過ぎないのである。驚こうにも驚けまい。

「ま、いいわ」

上半身下着姿のまま、帆照は自らの手にその脱いだノースリーブを被せて “服越し” に、大河のその腕をしっかりと掴んだ。

そのまま、帆照は大河をフェンスの方に引き摺る のではなく。

寧ろ、迫ってくるその足音の方へと つまり駅のホームの方へと、帆照は大河を引き摺って行くのだった。

「……………ほ、てり？」

「黙って。気付かれる」

残り少ない酸素を振り絞った大河の呼びかけに対し、同情も何もない、語彙を最小限に抑えた帆照のその冷淡な応えは、言外に現状の逼迫さを重々しく語っており それは、大河を黙らせるに充分な言葉であった。

「……………」

ずりずり、と。

帆照は自らが半裸に近い状態であるということを、まるで意に介してないようで、否。

今、この逼迫した状況において、そんな羞恥などを気にする余裕はまるでないようで　帆照は頬を赤らめる事も、肌を隠すような仕草の一つも見せる事無く、黙々と大河を引き摺って、着々とホームの方へとその歩を進めていくのだった。

一方の大河は、引き摺られている間にも体力が徐々に回復しつつあり　その呼吸も次第に整い始め、汗腺からとめどなく溢れ出ていた汗も大分収まってきていた。

体力も、恐らくは立ち上がる程度のことなら可能であろうがしかし、今更立ち上がったところで、それは帆照の邪魔にしかなるまい。

結局、今の大河にできることと言えば　それは、帆照の策の成功を祈る事と、最悪の事態。即ちカウニスに発見され、再び戦闘となった場合に備えることくらいなのであった。

「ふむ、成程」と。

ホームの上から　そんな声が、不意に発せられた。

無論、その声の主は他の誰でもない『カウニス』である。

「……………」

カウニスは暫く“下”を見つめ　そして、深く嘆息し。

「そうだな。これ以上、貴様等を追い詰めたとして、私も無事には帰れぬであろう　それに、今日こ^{こん}うして貴様等と顔を合わせた訳は別にある。今日は、殺すつもりは元よりない　貴様等を殺すのは、また次の機会だ」

もつとも、完全に殺意がなかったかといえば、それは嘘になるのだが　と、カウニスは自分の事を嘲るように、最後にそう付け加え、小さく笑った。

それから、カウニスは『誰もいない線路』から踵を返し　間も

無くして、その駅自体から立ち去っていくのだった。

「……………」

こつこつ、と響く足音が遠のいておき　やがて、その足音は大河達の耳に届かぬ範囲へと消えていく。

「……行つたか？」

「いや、一応まだ出ないほうがいいわ。仮にさっきの言葉が嘘だと
して、鉢合わせでもしてみなさい　それこそ今の努力も今迄の努力も無駄になってしまうわ」

確認しようとする大河を制しながら、早々と手に持つノースリーブを着ていく帆照。

「そう、だな……それにしても、本当に無茶苦茶な事思いつくよなお前。“敢えてカウニスに場所を悟らせて、自分自身を囷とし、更に自分自身でその囷に掛かったカウニスを仕留める”だなんて、捨て身な策。俺には到底思いつきそうもない策だったぜ？」

「あつそ。でも、それこそあんたに言われたくけどね。時間を“二度”も　それも無理をして喰らつといて。全く、どっちが捨て身よ」

腕を通し、再びノースリーブをその身に着けた所で、帆照は大河の方へと振り返り　その汗だくな身体を、じつと見つめるのだった。

『時間を喰す』。

それは『人』というものの枠を遥かに逸した『業』であり、『行い』である。

そして、それに伴う巨大な反動　巨大な疲弊。

大河自身、その巨大な反動（疲弊）の事を楽観視していた訳ではないのだが、しかしその反動は大河の予想を遥かに上回る反動であった。故に、大河は今回のような『逃亡の途中で体力を使い果たす』という失態を犯してしまったのである。

「……ま、まあ二回その能力を使ったのは事実だが、それでも無理はしてねえぜ？　それに、“意識して喰らった”のは今回が二度目

であるし、そこら辺は甘くみて」

「甘く見ない。誰が疲労困憊で動く事すらできなくなったあんたを、ここまで引き摺ってあげたと思ってるの？」

言いながら、帆照は地面を指差し　今居る場所。

即ち、駅のホーム下に設けられている『退避スペース』を指差して、強調して言うのだった。

「誰のせいで、あたしは半裸に近い状態になったのかしら？　誰のおかげで、あたしは野外で半裸にさせられたのかしら？」

怒鳴りこそはしないがしかし、その重々しく低い言葉からは充分な剣幕が感じて取れ、その剣幕は抗議の一つも許容しない、という風であつた。

しかし実際、大河が時間の消費時間を　その反動を読み違えさえしなければ、帆照が半裸になるということもなかったであろう。「それと、もう一つ」

剣幕に圧され黙りこくってる大河に同情する事もなく、帆照は更に言葉を続けてく。

「あの時は、結局最後まで聞くことはできなかったけど　大河。あんた『提案』があるって言うってたじゃない？　あれって、結局どんな提案だったわけ？」

「ん？　……ああ、そういえば言ったな　だが、“あれはもう『実行』したぜ”？　まあ、半分以上偶然だったから、胸張っていえることじゃあねえけどよ」

「実行したって　じゃあ、それは『失敗した』ってこと？」

見事なまでの大河の失態と今の劣勢を鑑み、帆照は『失敗』と推測したのだが、しかし。

「いや　“あれ自体は成功してる”」

と、大河は帆照の推測とは裏腹に　自らの失態などを踏まえたうえで、その『提案』の『成功』を口にするのだった。

「成功って　でも、何も変わってないわよ？　それとも、その提案自体。そこまで大きなことじゃ　」

「いや、大きなことだ」と。

帆照の言葉を遮って　大河は、応えた。

それこそ、帆照が我耳を疑うような、そんな言葉で。

「帆照。俺が成功させた提案つてのは他でもない　『カウニスの能力を暴く』　つつー、大事な提案だったんだぜ？」

「成程。その情報。確かなものであれば、我等にとって有益な情報であるには違いない。が、納得しかねる」

「……………」

場所は変わり。

同刻　能力組織日本支部本拠点内部。

無数にあるモニターが、それぞれに別々の場所を映し出しており、さながらそこは監視カメラのモニターングルームのような様相を呈していた。

そのモニターの前に佇むは、黒髪を伸ばした一人の少女　改め、『楓』。

そして、その古風な口調の声は　モニターの向こう側から聞こえる、何者かの声であった。

「よもやあの暴食が、個の力でその力を見出したとは思えぬ」

「と、い、言いますと……………やはり『別の者の加担があった』……………の、でしょうか？」

「ふむ　恐らくはそうであろうな。それに、あやつも加盟したの
ザ・ワールド
だろう？」　“世界が統べる『異端学校』とやら”に「

「はい……………その通りでございます」

「ならば、恐らくはそこに居る者が協力でもしたのであるうよ。『

節制』も居る事 不思議では無かるうに」

淡々と語る古風な口調の者とは対照的に、楓はまるで『恐怖』でも覚えていてるかのよう、気を張詰め 自らの一言一言に注意し、腫れ物に触るよう、おずおずと楓は言葉を発していく。

「……そう、でございますね」

気を張詰めて、精神を尖らせて。

それは会話をするには『異常』なほどの警戒心であり、緊張感であつた。

が、しかし楓がそう鋭敏になるのも 話している相手を考えれば、無理もなかるう。

何せ、今楓が話している相手は 。

「しかし、だ」

「！」

と。

少し間を空けてから 古風な口調の者は、どこか不満げに続けていく。

「其の方には、今にでも精神を強く持つてもらわねば困るぞ “

其の方の完成” があまり遅れては、難儀な事になりかねぬからな」

「……す……す、すみま……すみ」

取り立てて自らの臆病を責め立てられた訳でもないのだが、しかし古風な口調の者の言葉からは楓を黙らすには十分な威圧と、嫌悪がひしひしと感じ取れ あまつさえ、臆病な楓の事。ましてや自らに關しての事でそれ程の威圧と嫌悪を感じてしまったのだから

楓の精神的負荷は、計り知れまい。

モニター越しでこそあれこのうろたえ様なことから、仮にそれが面を合わせての会話だったのなら それは想像にし難い精神的負荷を、楓の精神に与えていたに違いない。

それこそ、楓の精神が『壊滅的』に壊れる程の負荷を与えていたに 違いない。

しかしそれは逆を言えば、それ程までに、この古風な口調の者は

楓からしてみれば『絶対の存在』であり『絶対の信頼』を置かれている人物であるのだ。

故に自らの失態によって、古風な口調の者に嫌悪感を“抱かせてしまい”、更には威圧までされてしまうというのは　それは、彼女の精神に大きな負荷を掛けたに違いないことであつたのだ。

「す、すみ……すみ、ま、せ」

「謝するでない」

と。

涙さえ浮かべ、しどろもどろに謝罪の言葉を口にしようとする楓を一言で制し　古風の口調の者は、その楓を宥めるように続けていく。

「我が其の方に求めているものは『謝罪』では無い。我が真に求めているものは、“其の方の『精神』である”。そこを履き違えるでないぞ」

普通の者からしてみれば、それこそ宥める程度にしかならぬであろう、古風な口調の者の言葉であつたが　しかし。

「！」

しかし、その古風な口調の者を『絶対視』している楓からしてみれば、それは『至福』以外の何物でもなく　その言葉は、楓の心を悦楽で満たすに充分な言葉であつたのだ。

『絶対の存在』から、自らが求められる　それ以上の悦楽が、果たしてあるだろうか。

自然、楓の口元は無意識に綻び　涙を浮かべるその眼も笑顔の“それ”へと変わってゆき、楓の顔はたったの一言にして“笑顔”のそれへと変貌していくのだった。

悦びに満ちた、至福の顔へと。

「そのお言葉、身に余る光栄でございますっ！」

悦びのあまり、思わず声を張り上げてしまう楓であつたが　しかし、その返事は『気丈』としたものであり、それは先の『臆病』な返事とは似ても似つかない返事であつた。

が、しかしその『気丈』さは『悦楽』によつて誘発された衝動的なそれに過ぎないということは、古風な口調の者も理解しているように。その者は、それに念を押すように。

その気丈さを維持させるように。その古風な口調の者は興奮する楓を諭すように、優しく、そして『妖しく』語りかけていくのだった。

「楓よ。其の方の精神は、其の方が思う程に脆弱ではない。失態など世に生きる誰もが犯し、誰もが恐れなす事。其の方は“精神を強く持てば、それで良い”。其の方は常人とは“異なっておる”のだ。」

強く持つだけで、其の方が恐れなすことはなくなるであろうよ。

楓の心に、直接囁くように。

古風な口調の者はそう言つて。別れの言葉もなしに、一方的にモニターでの通信を切断するのだった。

「……解かりました」

既に通信が途切れているモニターの前で楓は小さく呟いて。そのモニタリングルームから、去っていく。

通信の記録などを消す事もなく、ただ真直ぐと前を見据えてしっかりと床を踏みしめて。

先に、古風な口調の者から貰つた言葉を胸に秘めて、楓はその歩を進めていくのであった。

溢れんばかりの、『悦楽』とともに。

時は進み。日も落ち、月が暗い夜空に浮かび始めた頃。

場所は再び戻つて。しかし、少しだけ変わつて『廃れた駅のベ

ンチ』。

状況も僅かに変わっており、そのベンチの下には飲み干されたと思われる数本の空のペットボトルが置かれていた。

「へえ “あの能力”にはそんなカラクリがあったわけねえ……成程。じゃあ、あの女があたし達^{カウニス}に会話の時間を与えたのも、その為だったって訳ね」

大河の一連の説明を聞き終えて いかにも得心がいったという風に腕を組み、頷く帆照。

「 という事は『物体創造系の能力』っていう線も、案外的外れじゃなかったってわけか」

「ま、『創造』というよりかは『復元』の方が近いけどな」

「一々、言葉尻を捉えない」

子供の悪戯のような大河の幼稚な言動を帆照は戒めるように言うて、ベンチから腰を浮かし。

「 じゃ、そろそろ行きましょうか」

と、言って 一人てくてくと、帆照は足早に改札口のほうへと歩を進めて行くのだった。

何の前触れも、合図もなしに。

「あつ、ちょ、まっ」

一方の大河も、足元に散らばる数本の空のペットボトルを、片手に持つビニール袋へと慌てて放り込み 少々遅れはしたものの、間も無くして改札口へと歩を進めていく帆照の背に追いつき、その足並みを揃え、大河は駅の外へと歩を進めていくのだった。

「 ……お前って、ほんとに急だよな。やることなすこと」

「 あら、あたしとしてはこれでも考えて行動してるつもりよ?」

「 そうだろうな。じゃなきゃ、振り回されてるこっちが困る」

「 それはそうと、大河。さっきの“紙” もう一度、見せてもらえないかしら?」

「 ん? ああ、あれか。分かった」

言われて、大河は空いているもう片方の手でポケットを弄り

そこから、一枚の紙を取り出した。

しかし、その紙は理事長が大河に渡した『紙切れ』ではなくもつと使い古され、時代さえも感じさせる『古い紙切れ』。

「ありがとう」

と、帆照は一言だけ礼を言うと、その古い紙切れを大河から奪い取るようにして、その古い紙切れを手に取り　その古い紙切れに記されている『文章』に眼を凝らしていく。

「……………」

大河からすれば、帆照の唐突な行動には既に慣れてきている部分もあり、特に取り立てて言う事もないのだが、しかし　帆照のこの『往生際の悪さ』には、どうにも慣れていないようであった。

が、それもその筈である。

そもそも、“大河が慣れていた帆照とは、性格を入れ替えた後の帆照”であり　ここ最近、性格を入れ替えることも減り、このように性格を入れ替えることなく物事に挑む帆照の姿というものは、それは新鮮に見えて当然である。

しかし、その結果が『往生際の悪さ』を全面的に押し出す形となつてしまつたのだが。

「………… 帆照。もう、その文章はその辺にしたほうがいいと思うぜ？俺達には、理事長からの『任』もある事だ。“誰かがベンチに置いていった”文章を解く必要性は、今はないと思うが」

「黙つて。『待つ』までは読めたんだから、後はその前に書かれている………… そう、後は『これ』を読めばいいだけよ」

「『これ』つて…………」

やっぱ、読めてないのか。

内心、そう思う大河であつたが、しかし流石に言葉に出すなどという、モラルの欠けた事はせず　ただ、帆照の難題に挑むその横顔を一瞥し、改めてその決意の固さを思い知るのであつた。

「………… 分かつた、好きなだけ眺めてろ。元より、俺に所持の制限をする権限はないことだ　が、帆照。そんだけ、興味があんなら俺

に持たせるな」

「断るわ」

そんな牧歌的な会話が、静寂とした道に響き渡って 暫くした頃。

「ねえ、大河」

「ん、なん」と。

駅から大分、夜空の下を歩いていった所で 帆照はその足を止め、後方を歩く大河の方へと振り返った。

その呼びかけに、大河も帆照と同じように足を止め、前方に居る帆照をその視界に捉えた。

「瞬間。」

大河は今迄見てきた『帆照』という人物を再認識させられるようなその美しさを再認識させられるような光景が、大河の視界に飛び込んだ。

「……………」

真つ暗な夜空の下。

仄かな月明かりを曲線美のある華奢な身体で受け、一本一本を風で梳ったような、さらさらとして尚、艶やかに煌く深い黒色をした頭髮はたらりと伸ばされていた。褐色の肌がその黒髪と相乗して、その帆照という一人の少女からより一層の『快活』さを醸し出していた。タイトなハイソックスや、太腿の辺りまであるデニムのショート、上体に着る露出度の高いブラウスが、その身体の曲線美のアクセントとなり、その曲線美を更に際立たせ、魅せていた。

端整に構成されたその顔を緩やかに綻ばせ につこりと、帆照は啞然としている大河に向けて、暖かな笑みを浮かべるのであった。「昼間の事で、聞き忘れたことがあるんだけど 大河。あたしの半裸の感想は、どうだったのかしら？」

少々 of 恥じらいと躊躇いが籠った、その言葉で大河は我に戻り

その言葉の意味を咀嚼する事もなく、ただ恍惚と。

大河は自らの頭に次々と浮かぶその文字を連結させ、それを言葉にして発していくのであった。

おかげで、イントネーションがややおかしくなっちゃったが、しかしそれでもその言葉は、はつきりと　そして明確に、発せられた。

「『綺麗』、だった……ぜ？」

第八話『休息』

「ティファレト様。只今帰還致しました」

窓も扉も光も何もない、密閉された広い部屋に　不意に、一人の男が現れた。

その男は三丁の拳銃を腰に提げており、片手には一丁の拳銃を所持していた。長い金色の頭髪を後方でまとめており、眼は青色。

肌は白を通り越し、不気味な青白い色をしていた。

洋装の黒いスーツに身を包んだその姿は、見るものにどこことなく不安感と不気味さを抱かせる姿であった。

その金髪碧眼の男が視線を送る先には　大木の『根』のようなものが、部屋の床や壁と同化するように生えており、その『根』の中心には一人の人間と思われる姿が見えていた。

が、その『根』の中心に見える人間も、周りの壁や床と同様に『根』と同化しており　既にその下半身と両腕の前腕は、その『根』によって呑み込まれているようだった。

故、視認できる範囲はその痩せこけた上体と、まるで生気を感じられないその顔のみである。

「……ドライか」

と、その『人間』は小さく囁いて　その糸のように細い眼を、ゆつくりと開く。

しかし、光も何もないこの密閉された部屋である。眼を開いたところで、それはどちらにしろ見えないには変わりなく、それはその『人間』も承知のはずなのだが　しかし、その『人間』は眼を開いた。

無論、光が遮断されている故に景色どころか、人影の一つさえも見ることが敵わない筈なのだが　どうやら、その『人間』には“見えている”ようで。

金髪碧眼の男　改め『ドライ』の姿が、その『人間』の眼には

ありありと見えているようで。

「仰るとおりでございます」

ドライは片手に所持する一丁の拳銃を腰に提げ直し、その眼で前方に居るその『人間』と、それを呑み込む『根』を“物体として”見　それから、その『根』の中心に居る『人間』に向け、喋りかけていく。

「……………久方ぶりに見ましたが、ティファレト様を蝕む忌わしき『^{ザ・ワ}世^界』の『呪縛』。未だに解けていないようで」

「致し方あるまい。彼奴^{あやつ}とて、そう簡単には生き絶えぬであろうよ」
その『人間』　改め『ティファレト』と呼ばれる人物は、実に古風な口調でさばさばと応えた。

「土台、彼奴の目的は我の死にある　我が死なぬ限りは、彼奴も生というものに縋り付くに違いない。それが彼奴であり、我の犯した愚かな『失態』であるのだから　それだけは、甘受せねばなるまい」

「……………」

自らの非さえもを嘲り、尚それをしかと受け止めている。

どころか、この人間は　『生』というものを、本心から軽視していた。虚栄や誇張なしに、この人間は心底から『生』というものをまるで重視していないのだ。

異常ともいえるその言動に、ドライは微かな悪寒さえも感じたが、しかしその言葉こそが　常軌を逸し、常に常識の先を見据えているその姿勢こそが、ティファレトというこの人物の最たる“魅力”に違いない。

外見や能力ではなく　彼の『精神』こそが、彼というそれを人外たらしめているのだ。そんな彼の『精神』に惹かれ、彼に“追従”するものも少なくはない。例として挙げるなら、正に『楓』がそのうちの一人といえるだろう。

ドライは尊敬こそしているものの、しかしドライがティファレトに仕える理由は、また別の理由であるのだが。

「しかし、ドライよ」

と、ティファレットは嘲るような口調から一変して 真剣なそれでドライを睨み、問いを投げ掛けていく。

「“御主等”が、我の処に態々赴くとは よほどの非常が起きたと見るが、一体何事だ？」

「……………」

その問い掛けに、ドライはしばし俯き そして、実にばつが悪そうに応えるのだった。

「『神意先導計画』に 支障が生じました」

「……………」どのような支障が、生じたのだ？」

ティファレットの声に、微かな殺意が籠もる。

「非常に申し上げ難いのですが 『暴食者』の一方が、ネツアクより我等の『銃』を一丁、渡されたようでございます」

「……………」成程」

ティファレットは溢れんばかりの憤りを抑え、その細い眼を瞑りしばし、思案する。

自らが理想とする計画に生じた支障の排除手段。及びに、ネツアクの奇行にある真意。

そして、何よりが ネツアクの背後にいるもの。即ち『マルクトボルテクス』なる人物が、その奇行に関与したか否かが、ティファレットにとっての一番の気がかりであった。

「……………」

沈黙が密室を支配し、重い空気が密室に押し掛かる。

ドライは、ティファレットが思案の末に出すであろう『答』を待ち、ティファレットはその『答』を思案する。それ故に生じた、この沈黙は必然であり 両者ともに、決してこの沈黙を『重苦しい』とは感じていなかった。

重い空気こそあれ、苦しい空気ではないのだ。

「ふむ」

と。

そんな重い沈黙を破り ティファレットは、思案の末に見出した
であろう『答』を口にした。

「……………」

見るものを惑わすように美しく、そして眩い摩天楼の夜景を俯瞰
する女が一人、高層ビルの屋上に佇んでいた。

後方で結われている艶やかな金色の髪が吹き抜けるビル風に煽ら
れ、穂波のように夜風に靡く。

身に纏う飾り気のないシックなドレスが、無言で夜景を俯瞰する
彼女というものの高貴さを、より一層際立てていた。

「……まさか、子供だったとはな」

その女 こと、カウニスはどこか寂しげに、そのようなことを
呟いた。

俯瞰するその眼の焦点をあわせる事もなく、カウニスはただ茫然
と、眼下に広がる夜景を俯瞰していた。

しかし、その眼に映るのは夜景ではなく 頭に焼きついた、暴
食者と一人の少女の姿。即ち、先に一戦を交えた『大河』と『帆照』
の姿が、カウニスの眼には映っていた。

「……………」

暗殺部隊でこそあれ、以前にカウニスも一人の人間。

『殺人』という残虐且、危険な仕事をこなす以上、その暗殺者の心
に決して迷いがあつてはならないという事は、最早言うまでも無い
だろう。

しかし、それは『暗殺者』であり カウニスはその“暗殺者で
はない”のだ。

能力組織の命で標的を殺害する、という点をみればそれは暗殺者

には違いないだろうが、しかし、カウニスが殺害に動く真の理由は“別にあり”、能力組織の為ではないのだ。

金銭的理由でなければ、復讐といった私利私欲のものでもない。

彼女が暗に殺害を実行する理由は他でもない 『世界平和』の為なのだ。

無論、一概に世界平和と言ってもそれは多くの意味合いを孕み、受け取る者によってそれに対するニュアンスも、各々に異なるものとなるであろう。政治的なものか、或いは保身的なものか、或いは信仰的ものか。

もつとも、カウニスの言うところの『世界平和』は、そのどれにも該当しない 『能力的世界平和』というものののだが。

彼女が掲げる『能力的世界平和』、それが意味するのは『能力を不正に悪用、乱用する者に制裁を与える』、という実に社会に貢献するような世界平和 では、なく。

彼女が掲げる『能力的世界平和』とは『異端者である能力者が無能力者と同じく、至極普通に人生を全うできる世界』、といった世界平和であるのだ。

聞けば実に滑稽で見れば実に無謀な 能力的、異端的な平和こそが、彼女が掲げる平和なのだった。

しかし、彼女がそれを実現する為に取る手段は暗殺であり、その対象の殆どが“能力者の他ならない”のである。矛盾どころではあるまい。彼女が行っている行為は、最早自らの大義名分に対する『否定』の行為といえよう。

が、しかし一見するとそれは矛盾を孕んだ行為にみえるかもしれないが、しかしカウニスも全ての暗殺の委託をでたらめに引き受ける訳ではなく、彼女は彼女なりの判断の末、その暗殺の委託を拒むか引き受けるかを決定しているのである。いわば、彼女が引き受けた委託の標的 即ち、その暗殺の対象である能力者は、彼女の“理想の弊害となる”と判断を下された者達なのであった。

故に、カウニスは悩んでいた。

自らが“弊害と看做していない” 暴食者を殺めるということに。

「悩むのは勝手ですが、しっかりと暗殺方法も考えてくださいよ」と。

屋上にある唯一の鉄の扉が開かれ 同時に、実に気楽な調子の声が、カウニスの背に掛けられた。

背に掛けられたその声に、カウニスは反射的に振り返り 声の主を見、次いで落胆した。

「……久しいじゃないか。どこぞで息絶えたかと思ったが、まだ生きていたとはな。“ツヴァイ”」

振り向いた先に居たのは、男としては細い身体つきに、真っ白な肌。そして十一月という季節に相応しい、長袖のパーカーと丈の長いジーンズを身に包んだ一人の青年だった。さらさらとした茶髪は長すぎるといつても過言ではなく、現に深い蒼色をしたその瞳は今にもその前髪に遮られそうであった。表情は笑みの形で固まりでもしたのか、と周囲に思わせるほどにその顔には常に笑みが張り付いており、それが与える違和感はただならないものだった。

「そう落胆してもらっても困りますよ。僕だって、何か期待させるようなことができるわけじゃないですし」

「違うない」

ツヴァイを捉えるカウニスの眼は敵意に満ちたそれであり、自然言葉にも敵意が籠もる。

「貴様等のような者に期待するほど、私も零落れていない」

「ま、そうでしょうね」

殺伐としたカウニスとは対照的に、ツヴァイは実に飄々とした口調でそれに応えていく。

「ですが、僕も君には落胆させられましたよ 暗殺者ともあろうものが、請け負った委託を反故しようとするだなんて、恥さらしも甚だしい」

「貴様が言えた事ではないだろうが。私が暴食者を殺めなくてはな

らないのも、そもそもは貴様が暴食者を殺し損ねた事が発端だという事を忘れたか」

「元より殺める気はなかったんですけどね。能力者か否か、それがあの時は知りたかっただけです。暴食者が能力者であるという情報が組長の耳に入れば、否が応でもあの方は暗殺部隊を動かざるを得ないでしょうし、現にあの方は暗殺部隊を動かした。おかげで暗殺部隊に属していない僕が手を出す必要はなくなり、僕はめでたく泥沼の関係から抜け出せた、って事です。もっとも、その暗殺部隊の一人がこれじゃあ、僕も手放しでは安心できませんがね」

「……愚者が」

自らの保身のみを考え、能力組織の混乱を 否。能力者達の混乱さえもを傍観する、我関せずといったツヴァイの態度に、カウニスは改めて呆れ果てていた。

が、その一方でカウニスは、ツヴァイの先を見据えるその姿勢あらゆる出来事を予測し、さながら未来を閲覧でもしたかのよう、決定的外れな行動を一切行わない事に、微かな“恐怖”さえをも感じていた。

無論、今のツヴァイの言葉を鵜呑みにして、そう感じたのではない。

それこそ、カウニスはツヴァイと初めて対面した時から、どことなく彼女はツヴァイにある『異常性』を感じ取っていたのだ。その時こそ、ツヴァイの異常性の正体は不明であったが、今のカウニスはその正体を既に知りえており、それ故に、恐怖を感じていた。

自らの行動が。

次に打つ、自らの手が 予測され、掌握されているのではないか、という恐怖を。

「先ほどから無言ですけど、どうなされたんですか？ 僕の記憶が正しければ、ここまで寡言な人じゃ無かったと思います」

「……貴様が一体どうやって私の居所を掴んだか。それを、少し考えていただけだ」

「ああ、そんな事ですか。何、簡単ですよ。世捨て人気取りで夜景を俯瞰している人が居たので、からかってやろうと着てみただけです」

まあ、それが世捨て人気取りじゃなくて、本物の世捨て人だとは思ひもしなかったですけどね　と、面白おかしそくに、ツヴァイは言った。

その飄々しい態度に、カウニスは顔を微かに顰蹙させながらも、端然とした態度を装って　前方のツヴァイにその細い手先を向けた。

否。

向けられたのは細い手先ではなく　細い手の中に持つ、妖しげな黒さを輝かせる一丁の『拳銃』が、前方に立つツヴァイに向けられていた。

「貴様の言葉に間違いが無ければ、既に用は済んだ筈だ　私の前から立ち去れ」

「……まさか、ここまで嫌悪されているとは　流石の僕でも、少し傷ついちゃいましたよ」

言うが、しかし顔の笑みは絶やさずに　おどけるように、ツヴァイは淡々と応えるのだった。

まるで心境が読めない　仮面のように張り付いた、不快で不気味な笑みを称えて。

「……………」

この引き金を引き、果たしてツヴァイを殺める事が、否。

この銃が、そもそもツヴァイを脅すに足りているのだろうか
と、カウニスは引き金に指を掛けつつ、頭の中ではそのようなことを危惧していた。

ツヴァイの不気味な笑みを見て、ではなく。

ツヴァイの異常性を知り得ているからこそ、彼女にはこの銃がツヴァイの脅しになっているとは、到底思えなかったのだ。

しかし、それは銃口を向けた後に気付いたのではなく　向ける

前から、そんな事は分かりきっていた。

にも拘らず、彼女はその銃口を向けていた。

ツヴァイの額に 命中すればまず即死は免れないであろう位置に、向けていた。

自らの恐怖心を少しでも和らげる為か、或いは身体が反射的行った動作か、或いはそこまで考えが及ばなかったのか いずれにしても、その理由は自らの行動が『無駄』であると言っているようなものでしかなかった。

どれをとっても この拳銃でツヴァイを殺せるから、という理由は欠片もない。

「……撃つ気がないのなら、仕舞っ」

と、そこまで言いかけて、ツヴァイの声は遮られた。

言葉によって、ではなく 物理的な音量によって、遮られたのだ。

乾いた“銃声”によって 遮られた。

夜の街に、一際異質な音が轟いた。

「
からん、と。」

虚しい音をたて、葉莢が落下した。

熱を帯び、周囲の風景を微かに歪ませている銃口の先にあったのは、しかし無惨な亡骸でも、飛び散った肉片でも鮮血でもない。

そこにあつたのは、抜き身の一本の長剣と。

実に不快で不気味な、笑みだった。

「焦らないで下さいよ。世捨て人気取りの為に、態々お土産話をもってきたんですから」

歩いておよそ二、三時間と経ったところで、“それ”は大河の視界に入ってきた。

『廃れた駅』から大分離れており、時間もそれなりに消費してしまったが、しかしそれ故に安心できたともいえよう。

もつとも、現実問題『離れたら安全』と言うわけではないのだが、そこは気の持ちようとしか言いようがあるまい。どの道、どこに身を潜めた所で襲撃される確立は決して零にはなりえないのだから。

加えて、大河は疲弊している身。そこまで思考が及ばず、ただ安直に安堵しただけ、という可能性も否定できまい。

「間違えた」
と。

眼に見えてきた“それ” 即ち『廃墟』に無断で這入り、無断で塗装やらが剥れ始めた階段を最上階まで上り、そこで空いた空間を見つけ（大河が見る限りでは、およそ部屋と呼べる場所はなかった）、無断でそこに腰を下ろしたところで、帆照はそう言った。

「間違えたって……でも、話し合った時の場所はここであつてると思うが」
「

言いながら、大河は廃墟の中を見渡す。

見る限りではやはり部屋と呼べる空間は既になく、代わりに所々に大小様々な空間スペースができており、それらは他にも活用のしようがありそうな空間であつた。

時折、まだ新しいと思える泥の汚れや、壁の傷。捨てられたであろうビニール袋などが見えたのは、流石に大河も看過する訳にはいかなかったが、しかし今から思えば、それは取り越し苦労だったに違いない。

実際、大河が危惧していた『人が住み着いている』という可能性は、最上階まで来ても人に会うことがなかったのだから、否。どこるか、人の気配や、声、人工的な音すらも一度も聞こえなかったのだから、それは十二分に否定できる可能性といえよう。

それ以外に危惧すべき可能性も、皆無といって良いほどに等しく

（敵の襲撃という可能性を除けば）、大河からしてみれば、これ以上危惧すべき事はないのだが。

「あ、いや、場所はあるわよ？ それに、まあ隠れるにしちゃあいささか象徴的だけれど、内部構造とかは思いのほか単純だったし、這入ってくる人が居ても、すぐに気付けるでしょう。うん、見た目で決めたには、案外良い場所かもしれないわ」

「……んじゃあ、何を間違えた？」

「寝る場所。ここ、休むには適してるけど　寝るには、適してないのよね」

言って、所々塗装が剥れている床を手で軽く叩き『ここ』を強調する帆照。

「……………」

しかし『休む』と『寝る』の意味を同義としている大河にとって、その言動は『謎』以外の何物でもなく　大河はその言葉の意味を理解しあぐねていた。

いい加減、自分の無知加減に苛立ちを覚えてもいい頃だろう。

が、それでも一応は思案するよう　帆照に答を求めることはせずに、大河はその二つの『相違』を思案した。

それは、先の『古い紙切れ』と向き合っていた帆照と同じようなものであり、案外大河も人のことを言えないようであった。

「……あ、そういうことね」

と、帆照は自らの前で思案を始めた大河を見　大河が自らの言葉の意味を解していないということ事を察したようで、先の言葉に付け加えるように淡々と言った。

「あれよ。寝ると休むの違いは……要するに身体だけを休めるか、頭まで休めるかってこと。身体を休める、休憩する分にはここは適しているけれど、頭を休める　つまり、意識を断絶した状態で長時間休息するには、ここは向いてないってこと」

「……成程。ってことは、要はここで小休止する程度なら、さして問題ないってことか」

言いながら、大河はその指で塗装が剥れている床をなぞり　床に蓄積していた埃を、改めて確認する。

「そういう事　でも、ま、どこまでいった所で結局は廃墟だしね。そこら辺は仕方ないと思うけど」

「そこら辺、か　」

指についた埃を掃い　大河は、所々に穴が開いた天井や壁紙が剥れた壁、埃が充満した床を見渡し、帆照が言う所の『そこら辺』を視界に捉える。

そこら辺とは、つまりは『アスベスト』や『ハウスダスト』、『埃』等といった、身体に有害なもののことであり　それらがあるところに長時間滞在するという事は、確かに危険極まりないことである。とはいうが、しかし今更場所を変更するとしても、それはそれで行き先もなく　何よりも、この時点で大河の体力に限界が迫っていたのが、一番の問題であつただろう。

今日一日で時間を三回喰らい、実の妹に暴食の血が多く流れている事を聞き、あまつさえこの緊張状態。一体、この一日でどれだけ大河が神経をすり減らし、精神をすり減らし、体力をすり減らしたか　想像にし難い疲弊が、大河の背には圧し掛かっているのだ。

もつとも、帆照がそれに気付いたのはカウニスが去った後でのことだが。

「ま、そんな事は気にしなくて良いわ。何日間もここに留まるわけじゃあないんだし、ちょっと吸った位じゃ死にはしないでしょ。うよ。寝心地は悪いかもしれないけれど」

「んまあ、そういうわれればそうだが　」

「分かってんなら、早く寝なさい。あたしだって眠いんだからいくらあんたが眠いって言っても、見張りの時間が着たら起こすわよ？　あんたがいくら魔されようと、どれだけ心地よく眠ってようとも、あたしは二時間くらいで起こすわよ。どんな手段を用いても」

「……お前は、いつから誰彼構わず暴力振るう奴になったんだ？」
「今から？」

にこりと笑って、帆照は応えた。

が、その造られた笑みが醸し出すのは、不気味さ以外の何物でもなく、そこに可愛さや、暖かさを求めるのは酷な事だろう。

帆照としては、張詰めている大河の緊張を解そうと、ちよっとした気遣いのつもりだったのかもしれないが、果たしてそれは失敗に終わったようだった。

「分かった、寝よう。自分の為に」

「自分の為以外に寝ることはないと思うわよ」

「……だろうな」

言って、床の埃を掃い寝そべる大河。

「あら、随分と不機嫌じゃない」

「不機嫌じゃあない。ただ、あれだ……いや、うん、お前に言うべき言葉は恐らくこの言葉だけで充分だ　　帆照。起こすときは、優しく起こしてくれ」

「分かったわ。強引に起こすのは三回目からにする」

大河からしてみれば「何が分かったのだろう」と帆照の狭量さを知る形になったのだが、しかしそれは誤解である。

敵対者に襲撃されるかもしれないというこの状況において、帆照は“三回までの甘えを許”したのだから、それは寛容と言うべき器だ。

寧ろ、この場合狭量と言うべきは大河の方である。

この状況において『眠気で調子が優れない』などというのは、最早滑稽以外の何物でもなからう。実際大河には、それも相当な疲弊が押し掛かっており、常人ならば今だって起きていられるかどうかといったところである。

大河はあまりにも巨大な緊張が故に眠気を忘れ、辛うじて意識を保っているが　しかし、結局はそれも誤魔化しに過ぎない。

いずれ誤魔化しきれない睡魔が来る事は明白であり、確実だ。仮にそれが敵襲、或いは大河が見張り番の時にまだ残っていたのならそれは、惨事をも招きかねない事になる。

故、帆照はその疲弊が少しでも回復するようにと、大河に睡眠を促していたのだ。緊張を解そうとしたのも、自らの疲弊を大河自身に気付かせるためであったのだ。

もつとも、後者の方は違う形で良い効果を発したのだが。

「あ
と。」

一見寝たかに見えた大河だったが、しかし『寝そべってすぐに眠りに入る』とまでのリラックスはしてないようで　寝る前に何かを思い出したのか、唐突にそんな声を挙げ、大河は帆照の方へと肩越しに振り返る。

「……何？」

「いや、そんなに大したことじゃないんだが、言い忘れてたの思い出してよ」

小首を傾げ、自らの言動をいぶかしむ帆照を見つめながら　大河はその『思い出したこと』を言うのだった。

「帆照。お休み」

「………全く、こんなときに」

そうは言っが、しかしどうやら満更でもないようで　自然な笑みを浮かべて、帆照はそれに返した。

「お休みなさい」

「おっはよう！」

元気一杯の挨拶とともに、拳が一つ。大河の背に浴びせられた。

「　　いつ！？」

衝撃自体はさしてないが、しかし熟睡中である。意識も無ければ、警戒のしゅうもあるまい。

故、その拳は不意を突く形となり　それに驚いて、大河は飛び起きた。

「起きて早速、機敏な動きをしてくれるじゃない。案外寝起きがいいのね」

「……自分でもびっくりだよ」

今にも落ちてきそうな臉と闘いつつ、大河はいやらしい笑みを浮かべる帆照をその視界に捉え、言った。

同時に、拳が飛んできたということから『自分が二回の優しい起こされ方では、目を醒まさなかった』という事を理解するのだった。もつとも、あれだけのことを言った割には、それは『優しい』に類されるであろう起こし方なので、案外これが一回目という可能性もあるのだが。

「んじゃ、大河。見張りは任せたわよ　お休み」

「ん？　……ああ、任された。お休み」

頭に残る眠気からか、少々遅れた返事となってしまったが、しかしこの状況。そんなことを、一々気に留めまい。留められまい。

「……………」

唯一、外部からの侵入が可能な階段を見つめ　大河はそこに、座していた。

今大河達が居る場所は、恐らくは廊下なのだろう。部屋らしきものが見えない故、廊下とその部屋との区別がつかないので、はっきりとは言い切れないが。

視線は階段を向いているが、しかし意識が向くは　頭の中。

『カウニス』の能力、及びカウニスに関する疑問に　大河の意識は、引き込まれていた。

能力の大体は見破ったが、しかしその対策はできていない。また、カウニスがどうやって大河達の居場所を突き止めたかも、未だ謎　だが、しかし後者の方は考えても仕方あるまい。

能力組織ほどの巨大な組織だ。情報を集める手立ては幾らでも在

るだろうし、ましてやその『直轄暗殺部隊』。巨大な組織が故に生じる情報伝達の遅れも、恐らくは解消できているに違いない。

更に言うならば 今回の標的は『暴食者』である。

この機を逃すほど、能力組織も甘くなくなる。

もつとも、それは『能力組織が大河を狙っていれば』、の話なのだが 現に、自身が本当に殺意を持たれ、殺されかけたのは実の妹にして真の標的であろう人物。

『彩香』と共に行動した あの時だけなのだから。

実際、ツヴァイは大河を殺せるであろう機会を見逃しており、カウニスに至っては殺意がないことを自ら公言している。それが虚栄か否かは定かではないが、しかし殺そうと思うならば 少なくとも、あのような逃し方はしないであろう。否。

逃がす事すら、許されない筈だ。

大河はそれを白髪敵に襲われた際に、嫌という程に痛感しており 同時に、後から振り返ってみれば、ツヴァイとカウニスのどちらにも、あれほどの鬼気迫った殺意は感じられてなかったのだ。

ツヴァイとカウニス、そのどちらに遭遇したときも 大河の傍に、彩香は居なかった。

逆を言えば 白髪敵と遭遇したときは、彩香が大河の傍に居ただのだ。

「……………」

大河からすれば、それは実に不愉快で、しかし否定しがたい共通点である。故に、それを否定する証拠があれば、その不愉快な共通点は消えるのだが しかし、それもこれ以上考えた所で、仕方あるまい。

実際、カウニスに本当に殺意があったか否かが分かるのは、究極的にはカウニス自身のみであるのだから そこを突き詰めるのは、非合理的であろう。

「…………… 今考えなきゃなんねえのは、やっぱ今後の事か」

言って、数本の空ペットボトルと、理事長から頼まれたジュース

が入ったビニール袋を一瞥し、大河は思考を切り替えた。

今後の事。

それが意味するのは今後の飲食料であり、今後の隠れ家であり、今後のジューズの搜索方法であり、今後の能力者対策であり、今後の行動である。

いざとなれば、異端学校に帰ってみるのも一つの手段であるがしかし、それは無理であろう。

椿や彰なら、或いは協力してくれかもしれないが、しかし理事長はまず協力しないだろう。仮に椿か彰が協力しようとしたところで、理事長から諫められるのは明白だ。

恩を正式に貰う為に、恩を返しているのだ。その恩に加え、更に協力を仰ぐなどということは、無礼にも程があるものだ。

現在、彩香が入院中の日之出病院とも、どうやら何かしら『恩』で繋がっており、その辺りを鑑みる限り、やはり理事長と言う人物は『恩義を重んじる』人間なのだろう。

となれば、やはり飲食料も隠れ家も搜索方法も対策も行動も帆照と話し合って決めるほか、ないようだった。

もつとも。

時間を喰らう能力の活用法等については　大河が考えるほか、ないのだが。

「……二回、か」

二回。

それは大河がカウニスとの戦闘の際に、連続して時間を喰らった回数である。

その二回を連続で喰らった後の反動を考慮すれば、あのような無茶は今後極力控えるべきだろう。

現にその反動の一つとして、大河は身体中の水分という水分を汗として放出し　帆照が新たに買ってきた、数本のペットボトルの全てを飲みきってしまったのだから。

それら数本の一気飲みは、いくら水分を欲していようと流石に

不可能であるが、しかし時間差こそあれどそれ程の水分を、一時間かそこらで飲みきったのだから　それは、十二分に異常状態といえよう。

無論、余った金で帆照が新たに数本のペットボトルを買ったのは、大河の汗の量を見ての行動である。

仮にあの時に、そのペットボトル（水分）がなかったとしたら脱水症になっていたのは、まず避けられまい。

どころか、掛け値なしに死んでいたのかもしれないのだ。

寧ろあれだけの無茶をし、あんな荒治療のみですぐに復帰した事の方が、帆照としては驚かされるところだったのだが。

もつとも、大河の多汗の原因は運動による多汗というより『時間の喰』　ネツアクの言葉を用いていうならば『時間の前借』によるエネルギー消費、及び『時間の喰』に伴う発汗。言うなれば『時間を喰らった』大河の体感時間以上に、身体の機能はその一秒を長く時間を歩み、その分だけ体力と汗を消費した、という事である。更に要約するならば、『大河の意識が時間を喰らう能力に追いついていない』。そして、その事実と同時に『大河がその能力を自制しきれしていない』という事を示唆していたのだった。

故に、大河が今現在。実戦などで時間を喰らえるであろう回数は『一回』。

二回目以降は反動が大きすぎるが為に、実戦には不向きであろうし、何より能力者であるところの大河が、まだ完全にそれを自制しきれいていないのである。

だから、一回。

それも、連続ではなく　喫緊した場面のみに限っての、この一回なのだ。

時間を置けば、あるいは二回目、三回目と使えるかもしれないが、しかし敵対する相手は能力者。休息する時間を与えてくれるほど、甘い相手ではないだろう。

つまり、その許された一回は至極貴重な一回であり　安易には、

使えない一回なのだった。

「そんなに思い悩む事は、ないと思うけど」と。

大河の背に 不意に、そんな言葉が掛けられた。

「……帆照、起きてたのか？」

「うん、寝つきが悪くてね。ましてやこんな廃墟だし、落ち着いて寝れやしないわ」

「成程な でも、お前の言葉を借りて言わせて貰えば、寝れるときに寝ないとまずいんじゃないのか？」

「それでも寝れないときは、寝れないものよ。人間、焦って寝れるもんじゃないでしょ？」

「……そう、だな」

それを言われてしまえば、返す言葉がない大河であった。

「ま、背後でそんな愚痴みたいなきをぶつぶつと呟かれてたら、誰だって寝れやしないと思うけどね」

「……それは悪かった」

「謝る必要はないわよ。大河が何に悩んでるかなんてことは、あたしには全く分からないけれど でも、今日くらいは休んだほうがいいと思うわよ？ 明日だって悩む時間はたつぷりとあるんだし、休めるときに休んどけてるのは、やっぱりあんたにこそ使すべき言葉でしょうね」

それに、今日一日で色々あったみたいだしね。

「……………」

今日一日、か。

言われて、大河は今日一日というものを振り返り 今日という一日が、いかに濃密で衝撃的だったかを、改めて実感するのだった。能力検査から始まり、理事長との面談。実の妹の事、及びに異端学校からの追放。追放先でのカウニスとの接触。

そう振り返って そして、大河はあることに気付いた。

「そういえば、理事長は一言も言ってなかったな」

「ん？ 一言もって何を？」

「いや だから」

帆照以外の。

「椿さん達の協力の禁止を

“ していなかった”」

く 第九話 『地図』

襲撃やトラブルといったこともなく、大河達は無事にその廃墟で一
夜を明かした。

夜が明けた所で大河達はその廃墟から出、しんとした街中を異端
学校に向け進んでいた。静寂が支配するしんとした街に大河は一種
の『平和』さえをも覚えたが 反面。人氣がないという『静寂』
を牧歌的な『平和』と認識する自分に、微かな恐れを覚えていたの
もまた事実である。

「……平和か」

「何か言った？」

「いや、なにも」

感傷的になり掛けた思考を振り払って、大河はその歩を進めてい
く。

頬を滑る風は冷たく、冬の太陽はまだ傾いていた。

「……………」

歩を進めていくに連れて、周りの景色が家々の密集した住宅街へ
と移り変わっていき 太陽が自分達の頭上に上り詰めた頃。

よくやくといった具合で、大河達はその目的地 異端学校へと、
辿り着くのだった。

無事、目的地に辿り着けた事は実に喜ばしいことなのだろうが、
しかしその『目的』に辿り着けなかったのは、実に憂い嘆かれるも
のだった。

「先輩。恩人の頼みを断って本当にすまないんだが、今は学校を離

れられない」

校門の横に設置された来客用のインターホンを押し、それに応じた彰に帆照が大体の用件を話し終えたところで 彰はそう応えた。

「え……何で？」

インターホンの向こう側に居る彰にも伝わるんじゃないか、と思える程に動揺した口調で帆照は問う。

そして、どうやらインターホンの向こう側に居る彰は、その動揺を感じ取ったようで 単刀直入に、直截的な言葉でその問いに応えた。

「“任”だ。椿先生が昨日から別の任に出向いていな 異端学校には、俺と校長達だけって事だ」

「あ……そういうことね、成程。それは留守にできないわね」

「理解してくれて助かる。俺も同行してやりたい気持ちは山々なんだが、その話を聞く限りじゃ椿先生の任も、恐らくは理事長がこの日程に被せたんだらう。恥かしい限りだが、理事長相手じゃどうにもならん」

「理事長先生も、なかなかどうして嫌がらせが好きなものね」

「『嫌がらせ』の程度とは、到底思えないものばかりだがな と
ところで、先輩。話は変わるが、そこにはベルゼも居るのか？」

「べる……ああ。うん、大河なら居るけど ー」

言いながら、帆照は自分の名前が出てきたことに面食らっている大河を見つめた。

「 どうかしたの？ 話したい事があるのなら、かわるけど」

「……いや、それならいいんだ。ベルゼの話は置いて、こっちの続きはそこで話そう。椿先生から預かったものや、先輩達に渡したいものもあるからな」

「ふうん……ま、分かったわ。じゃ、ここで待ってるから」

「おう」

がしゃん、とインターホンの向こう側で受話器を置く音が聞こえて インターホンからの音は、そこで途絶えた。

「……やられたわね」

無然とした溜め息をついて、帆照は呟く。

何にやられたかといえば、無論それは『理事長にしてやられた』という意味である。

帆照も、まさか理事長がここまで徹底して嫌がらせを実行するなどとは、つゆとも思っていなかった。今回の嫌がらせには生徒の“命”が係っており、流石の理事長も生徒の命までもは弄ばないだろう、という考えから帆照はそれを軽視していたのだが　どうやら理事長にとつての命というものはそれほどまでに重いものではなかったようだ。

「しかし、何で露見したんだろうな。俺達が椿先生らに協力を仰ぐって事」

「始めからでしょ」

いぶかしむ大河とは裏腹に、帆照はきっぱりと応えた。

「あたし達がここに来ることなんて、理事長先生には始めから知れていたんですよ。あんたから聞いた話によると、どうやらその条件を提示した時点では助けを禁じてはいなかったようだけど、でもそれは逆に考えれば『そこに誘導してる』ともとれるのよね。誘蛾灯だったかしら？　暗闇の中に灯りをともし、灯りに引き寄せられた蛾等を駆除する、ってやつ。それと同じで、あたし達もまんまと希望に引き寄せられて、見事にその希望を摘まれたって事でしょよね」

「……そう言われれば、そうだが」

確かに帆照の言う事は理に適っており、実際その言い分に非の打ち所はまるでないのだが　しかし、大河はどこか煮え切らずにいた。

帆照の言い分ではなく、もっと根本的な何かに　根本的な何かが、致命的にずれているような気がしてならなかったのだ。

「……………」

大河は思案した。

帆照に訊くのも一つの手段ではあったが、しかしこれはあくまでも『気がするだけ』であり、根本も問題点も具体的な何かも何も分からない。

それに、もしかしたらこれは単なる『気のせい』かもしれない。実際、大河はそんな気がするだけであり、根拠も具体的なものも何もない。

だとしたら、そのようなことで逐一帆照に相談する訳にもいくまい。相談するだけ、無駄な労力を帆照に背負わせてしまうだけである。

故に、大河は一人で思案した。

『気のせい』かもしれない、正体も何もないその煮え切らないものの正体を　思案した。
が。

結果から言ってしまうえば、それこそ無駄な労力に終わってしまったのだが。

「　大河、もうすぐ彰がくるみたいだけど……　どうかしたの？」
グラウンドに見えた彰を見てだろう、顔を顰める大河を心配するように帆照は言った。

「　……………　なんでも、ない」

彰が来るまでの間、大河はその煮え切らないものの正体を考えこそしたが、果たしてその正体は掴めずじまいに終わるのだった。

しかしここまで熟考して尚その正体どころか原因すらも見えないとなると、いよいよそれは単なる『気のせい』なのかもしれない。

が、もっとも単なる気のせいならば　ここまで悩む事はないのだろうか。

校門前まで来たところで、まず彰は大河に一つのクーラーボックスを手渡した。

中身は乾パンが二袋とスポーツドリンクが四本。市販でも売られているだろう絆創膏一ダースの箱が二箱と、包帯が一巻。氷が入った大きめのビニール袋が二枚と、異端学校の制服が一セットづつ置かれており、その上には十枚の千円札が置かれていた。

ぱっと見ただけでも、それが自分達が遂行している任のサポートグッズであるということは、火を見るよりも明らかだった。

そして、どうやらこれら全ては椿が予め用意していたものであり椿は大河達がこういった窮地に立たされ自分の元に協力を仰ぎにくるであろう事を、大河が任を受けるより先に既知していたようだった。

しかし、そうなると任の日程をどうにかして被らないようににはできなかつたのか、と新たな欲望がとめどなく溢れてくるのが人間である。が、そればかりは既知でも無知でも不可能だったに違いない。是非を問わず、異端学校最高権力者たる理事長からの頼み事は異端学校に属している以上、決して断れるものではないだろう。

それはイコールで、理事長からの任や令を断る事は不可能という事に繋がっており、それは椿が理事長の企みを阻害できないという事にも繋がっていた。

故に、椿は企みを阻害するのではなく理事長に“敵対”する形で大河達に協力したのである。

もつとも、理事長からしれみてばこのような事も想定内の事態なのだろうが。

「とまあ、椿先生から預かつたのはこれで全てだ。後は俺から一つ先輩達にとっての“宝の地図”を渡しとくぜ」

らしくもない事を言つて、彰はポケットから折り置まれた一枚の紙を取り出した。

帆照は『自分達にとっての宝の地図』という点に首を傾げるがしかし、後から考えてみればそれは詮索するまでもない、実に単

刀直入な言葉だったのだ。

何せ、その地図に描かれていたのは他でもない。

先輩達、即ち帆照と大河にとつての『宝の地図』とは　ドリアン味とパイナップル味のジュースの在り処が描かれた、地図であつたのだから。

異端学校を後にしてから、大河達はその地図に従つて苦もなくパイナップル味のジュースを蒐集し、その歩を最後の蒐集対象である『ドリアン味』のジュースがある方向へと進めていた。

場所は住宅街。

時刻は、まだ日が高い昼。

落ちる影は濃く、照りつける陽光は暖かい。

「それにしても、こつも簡単にドリアン味の在り処まで分かるなんて……驚きね」

どうやってあの地図を入手したのか。それを彰本人に問い詰めた所、どうやら大河達が今現在遂行している任は過去に彰が遂行した任でもあつたらしい。幾つもの任をこなしてきた彰ではあるが、しかしその任以上に『無駄な任』はなかつたようだった。

故に、皮肉にもその任は彰にとつて最も印象が強く、記憶に残る『任』になつてしまつたのである。が、しかしそのおかげでこうして恩人にその在り処を伝える事ができたのだから、案外その経験も無駄ではないのかもしれない。

「全くだ。それに食料や水。果ては現金まで貰つちまつたし、椿先生と彰さんには本当に感謝しねえとな」

ふりふり、とスカートを揺らして前方を歩く帆照を見つめながら、大河は言つた。

因みに、この時には既に二人とも着替え済みである。

着替えは人目のつかない公園の茂みで行われた（傍から見れば、まず誤解されるであろう光景だったが）。脱いだ服は制服が畳んであった所に入るように畳みなおして、そこに入れ込んだ。

ジューズ等の荷物を詰め込んだのであるクーラーボックスは大河が持ち、地図や古い紙切れといった軽いものは帆照が持っていた。

といつても、この組み合わせは昨日のように帆照に強制されたわけではなく、大河が自ら望んでこの組み合わせにしたのである。不意だった大河の善意に帆照は思わず『裏があるの？』とそれを勘繰ってしまったが、しかしそれも取り越し苦労に過ぎないようであった。

実際、それには特に深い意味合いはなく　大河はただ単純に『女に重いものを持たせて、男が軽いものを持つのはどうだろうか』という、考えてみればまずぶち当たるであろう問題を解消したに過ぎない。

第一に、自分が軽い荷物を持っている横で重い荷物を持つ同行者がいるならば、少なかれ罪悪感や自責の念は生まれてくるものであろう。

もつとも、その二人の間柄の善し悪しにもよるかもしれないが。

「……………」

それにしても、新鮮である。

大河からしてみればそれは『ありえない』と思っていた事の一つであり、驚きの感情が新鮮さを掻き消してしまうのではないかとさえ思っていたのだが　しかし、驚きの感情が新鮮さを掻き消すという事は、果たして無かった。

帆照の制服姿に覚える新鮮さが、掻き消えるという事は無かった。普段露出している褐色肌は長袖のブレザーに覆われており、快活な印象があつた帆照からことなく落ち着きのある印象を醸し出していた。

ふりふりと揺らぐ、膝下まである丈の長いスカートに、膝上まで

を覆うニーソックス。

先ほどまで着用していた露出度の高い服装からは想像もつかない、帆照の新しい姿に　新鮮さを感じられずには、いられなかった。

「大河。さっきから、一体何をじろじろと見てるのかしら？」と。

新鮮なその姿に見入っていた大河の頭上に　不意に言葉が掛けられた。

「あ、え、いや　何にも、見てない」

前触れも何もない、見事に唐突だったその呼びかけに大河は虚を衝かれ、思わず誤魔化しともいえないような言葉を口にしてしまったが、

「なら、いいわ」

意外にも、帆照はそれで納得したようだった。

大河は今迄の帆照の行動から鑑みて、二回以上は追及されるであろうと気構えていたのだが、どうやらそれは無駄な気苦労に過ぎないようであった。

帆照にとって、それが些事なものだったからか　或いは、何らかの理由で看過したのか。

どちらにせよ、それは帆照でない大河には分からないものであったし、分かったからといって何をするわけでもない。ならば、そんな益体もない事を追及する意味もない。

故に、大河はそれを看過した。

が、しかしそれは後から考えてみれば　実に愚計で、愚かな考えだった。可能ならば、大河はこの時にでも気付くべきであったのだ。

帆照の異様な、寛容さに。

「ならいい、か……………そういえば、さ。帆照」

と、少し思案するようにしてから　腫れ物に触るように、おずおずと大河は話を切り出した。

「前々から、疑問に思ってたんだが…………お前って、ぶっちゃけ『何

歳』なんだ？」

「十歳」

何の躊躇いもなく、帆照は嘘をついた。

白昼堂々と、実に無茶で見るからに嘘だと分かるような鯖の読み方で。

「……………」

あまりにも堂々としたその態度に、大河は二の句を継ぐことができなかった。

なんと声を掛けていいのかが分からない。『流石にそれは嘘だろうと指摘するのは簡単だが、その後の関係を修復するのはとても難しい事だろう。だからといって、この嘘を見逃す訳にもいくまい。ここでその嘘を見逃せば、それはイコールで『その嘘を認めた』という事にもなりかねないのだ。

この嘘を見逃してしまつたら、もう一度帆照に年齢を訊く事は不可能に違いない。そうなつてしまえば、いよいよ大河の疑問が晴れることはなくなつてしまふであらう。

帆照が自身より年上か否か、という疑問が。

大河は悩んだ。

訊くべきか否か。疑問を晴らすべきか、嘘を見逃すべきか。

どちらを選んだとしても、それは決して後味のいいものにはならないのだろうが。

「嘘よ」

と、大河が思案している横で、あつさりと帆照は自身の嘘を自白した。

嘘の明白さもさることながら、今日の帆照は妙に大雑把だった。

巧妙な嘘をつくでもなく、それを伏せるわけでもない。

ただ考えるのを放棄して大雑把に物事を済ませているようにしか思えない、嘘のつき方認め方だ。

「まさか、大河も本気で信じていたわけじゃないでしょ？」

「え、いや……そりゃあ、本気で信じてはいなかったが」

それにしても、この嘘は“雑”すぎだ。

いつそ、嘘をついている自分を救ってくれといわんばかりの、明白で見え透いた嘘。そんな嘘に、一体誰が引っ掛るというのだろうか。

ましてや、ここ数週間の出来事で人を疑いやすくなった大河である。そんな嘘に騙される筈があるまい。

「……なんか、つまらないって顔してるわねえ。なんなら、もっと巧妙な嘘をついてあんたを疑心暗鬼にしても」
言いかけて、次の瞬間だった。

「へつくしゅ！」

びくと身体を震わせて、帆照は小さなくしゃみをした。
といっても、小さく思えたのは彼女が咄嗟に口元を手で覆ったからであり、実際にはもっと大きくしゃみであったのだろう。

よくよく見れば、帆照の頬は微かに赤らんでいた。

「お前って、意外と上品なんだな」

「手で覆うのはマナーでしょ。上品でもなんでもないわ」

「いやそっちじゃなくて 俺が言ってるのは、くしゃみ一つで頬を赤らめる辺りの事だ」

「……………」

言われて、その言葉の真偽を確かめるように、帆照は自身の頬にそっと触れてみる。が、案外自身の体温というものは自身の手では計りにくいものであり 果たして、彼女がその言葉の真偽をすることはついになかった。

「……そんなに赤い？」

自身の頬を気にするように触りながら、不安に潤んだ瞳で帆照は問う。

「それは……どうだろうなあ。まあ一目見てぱつと分かるくらいのと。」

そこまで言った所で、大河は気付く。

赤く染まつた頬。

潤んだ瞳。

大雑把ともいえる寛容な心持。

そして何よりも、帆照が先ほどにしたくしゃみ。

それらの事から彼が連想し、同時に気づいた事は　ただ一つのことだった。

しかし仮にその仮定が正しいものであるとするなら、何故帆照は自身からそれを申告しなかったのだろうか。一言でも断っておけば、今よりかは少しはましな扱いを受けることができただろうに。

それ以前に、同行者である大河が居る身だ。それならばより一層、そういった事は包み隠さず互いに打ち明かすべきなのでは　とそこまで考えた所で、大河は別の発想に行き当たった。

逆転ともいえる、まるで正反対な発想に。

いや……、“だからからこそ”、なのか。

大河が同行者として居るからこそ、彼女は自身の不調を告げられなかったのだろう。大河が行き当たった発想は、そこだった。

大河にこれ以上の負担を掛けない為に、彼女は彼女なりに何かしらの事をして　その結果が、これだったに違いない。つい昨日、帆照は大河のことを『お人好し』と思ったことがあったのだが、案外彼女も人のことは言えないようであった。

しかし、だとしたら、やはり大河は気付くべきであったのだ先ほどの、嘘の時点で。

或いは、もつと前の時点で。

「大河、どうかしたの？」

と、帆照のぼうとした声で、大河の意識は現実へと引き戻された。「あ、いや、なんでもな……………く、ない」

反射的に誤魔化し掛けた自分を制して、大河は言った。

この絶好の機会を逃さない為に。

「……………は？」

「だから、なんでもなくない問題がある。だから……………だか、ら……………」

そこまで言つて、大河は言葉に詰まる。

ここで帆照の見栄を破つて、先ほど気付いた事実を突きつけるのは実に簡単だ。簡単であるが故に、それは実に後味の悪い結果を残す事になるだろう。

帆照の強情さを考えてみれば、その結論に至るのは必然だった。

ならば、彼女にその事を突きつけずして尚、彼女に悟られないように彼女自身を休ませなければならない。そのための方法は　まだ、考えていない。

故に、大河は言葉に詰まった。

「大丈夫？　今日のあんた、ちよつとおかしいわよ」

お前に言われたくない、大河は内心でそう叫びながらも思案を続けるが　しかし、これ以上黙りこくるというのも、それはそれで確かにおかしな事だった。

故に、大河はそこで思考を停止させた。これ以上思案して、そこを突かれてしまったら本末転倒だ。ならば、これ以上思案する事もできない。

考えもしない小細工は、より一層事態を複雑にするだけだ。だから、大河は己の思うがままに　突発的に思いついた中で最もこの状況に適したものを選び抜き、それを実行へと移すのであった。

「いや、だから　帆照！　お前を俺に背負わせる」

言つて、大河は舌を噛み切りたくなつた。

もつと別の言い方は無かつたのか、というより何故自分は考えるのを放棄したのだろうか。

自身のアドリブ性のなさをこれほどまでに怨んだ事は、これまでになかつた。

が。

「分かつたわ」

言つて、帆照は大河の背後につく。

それはあまりにもあつさりとした返事で、あまりにも肩透かしな返事であつたのだが　逆に考えてみれば、彼女には返事を考える

余裕すらないとも取れよう。

そして、どうやらその当て推量は的を射ていたようで　大河が背負う姿勢を取った途端に、帆照は何の躊躇いもなく大河の腕にその脚を乗せ、大河の背中に張り付くように自身の身体を傾けるのだった。

布越しに、二つの柔らかい感触と火のように熱い体温が押し付けられる。

「……………」

やっぱり、風邪だったか。

内心で大河はそう呟いて、その軟らかい感触を堪能しながらゆつくりとその歩を進めていく。

肩に提げるクーラーボックスと、後ろに背負う少女の重さを踏みしめて。

少女一人とクーラーボックスを背負った状態での移動は、流石に負担が重かった。

目的地到着までに掛かった時間はおよそ三時間。道程の休憩や飲食等を差し引いたとしても、それはあまりにも時間を消費しすぎていた。

目的地が見えてきた頃には日も大分傾いており、辺り一面は紅色の陽光に彩られていた。

「帆照、大丈夫か？」

「……………うん」

背後から返ってきた声は、実に線の細いものだった。

今のところ意識障害等といった症状は見られないが、声の細さから察するに体力の方は大分消耗したと見ていいだろう。

寒さがいよいよ本格的になってきた頃に廃墟で、それもノースリーブやシヨーツといった実に開放的な格好で寝たのだから、それは風邪を引いても仕方あるまい。

大河の体力を気にするばかりに、帆照は自身の体調管理を疎かにしてしまっていたようだった。

結果として、それは帆照の望む結果とは正反対の、自身が危惧していた筈の結果を招く事となってしまうたのだが。

「大河、ごめん……」

「謝る事はねえよ。誰よりも辛いのはお前だろうし」

そんな事をさらつと言いながら、大河は視界に入ってきた目的地住宅街から大分離れた、人気のない駅へとその歩を早めていく。外から見る限りでは、その駅はどこにでもありそうな普通の駅に見えるのだが、しかし、異常があるのは内側ではなく“外側”の方だった。

といっても駅自体に異常はない。外部も塗装も標識もどこを見ても、どこにでもある普通の駅だ。

が、その駅の周りには“誰もいない”。

通常ならば、この時間帯の駅というのはもっと人で賑わい混雑している筈なのだが、この駅の周りには賑わう筈の人が居ない。

駅の建てられている場所が発展途上の田舎だという事も関係しているのだろうが、それにしてもこの閑散具合にはいささか得心し難いものがあつた。

今朝の静寂を思わせる、異常な静寂。

今から思えば、本当にあの時の自分の感性が分からない。

静寂など、孤独以外のなにものでもないというのに。

「……………」

駅が立派過ぎる故に人気がないのが不自然に見えただけなのか、或いは何らかの異常を捉えておきながらも、まだ自身がそれに気付いていないだけなのか。

大河からしてみれば、それは前者に越した事はないのだが 仮

に後者だとしたならば、それは早急にその異常を見つけなければならない。何の準備もせずに異常に踏み込むというのは、この上なく危険極まりない行為である。

大河は先の白髪敵の襲撃で身を持ってそれを体験しており、異常さが滲み出ている駅の周辺で長居するということは、彼にとっては何となく嫌われる事だった。

故に彼は急いだ。

異常な空間から脱するように、異質な場所から逃げるように

彼は駅の中へと逃げ込んだ。

駅員が居ない事を確認してから、大河は改札口を強行突破して（切符を買っている余裕など無かった）、駅構内に設置されているであろう、ドリアン味のジュースを販売している自動販売機を探そうとしたところで　大河の視界に、一人の女性が現れた。

否。

一人の女性が、待っていた。

「……遅かったじゃないか、タイガ」

面食らう大河達をよそに、シンプルでシックなドレスを着こなすその女性は、凜とした声で語りかけていく。

「一度は騎士に焦がれた身。このカウニス　刃を向ける相手に敬意を払い、刃を向ける相手に全霊をもって対処する」

言って、ドレスを着こなす女性　改め、カウニスは空から一丁の拳銃を取り出した。

型は回転式拳銃　所謂、リボルバーという奴だった。

「女を降ろせ。侮蔑する訳ではないが、人を背負った者を撃つ訳にはいかん」

親指で撃鉄を引き起こしながら、カウニスは冷たく言い放つ。

同情とも思えるその言葉だが、しかしその言葉に慈悲といったものは一切含まれていなかった。同時に、それは先の言葉が空虚な建前でないことを証明する何よりもの証拠でもあった。

「……………」

何故、分かった？

一瞬、大河はカウニスがいかにして自分達の目的地を知ったか、という疑問を抱いたが　しかし今の状況を把握しきれないほどに、大河も錯乱していない。

今考えるべきことは、そこではない。

今は白髪 of 敵の時とは違う。能力者であると自身に自覚を持っており、後ろには能力者の先輩であるところの帆照を背負っている。落ち着きのしようもあるうもの。

いくら風邪を引いているとはいえ、この喫緊した状況。流石の帆照も、ただ背負われてるだけじゃあないだろう。何を仕出かすかわからないが、それなりの事はしてくれる筈だ。

希望的観測といってしまえばそれまでだが。

「……大河、降ろして」

カウニスの言動を咀嚼してだろう、帆照はその要求に従うようにと大河に指示を出す。

カウニスの意思に同意する形のその指示に、大河は瑣末な躊躇いを覚えるが　しかし躊躇している暇はない。

ここでカウニスの要求を拒み、下手に刺激して撃たれては元も子もない。そう考えてみれば、帆照の指示にも頷けよう。

「……分かった」

その指示に従って、大河は肩に提げるクーラーボックスと背負っている帆照を地面に降ろす。地面に立つ帆照の脚はふらふらと覚束ないようすで、風が吹けば今にも倒れてしまいそうだった。

帆照が地面に降り立って、少しよろめいたかと思った　刹那の事だった。

だん。と帆照が片脚で地面を踏みなおしたのとほぼ同時に、陽光よりも禍々しい朱色をした炎が、彼女の足元から噴き出した。

燃え移る媒体こそないが、しかし量は膨大だ。帆照自身に燃え移る事はないのだろうが（自身で制御しきれない炎を出すほどに彼女も馬鹿ではない）、横に居る大河には今にも燃え移りそうだった。

大河に燃え移るという事も、恐らくはないのだろうか。

「
無言で、カウニスはしかしその炎ではなくその炎を出す『帆照』
の方を一瞥した。」

膨大な炎を噴出させながらも、彼女自身に燃え移る炎は一切ない。炎の熱で焙られる事はまず免れないだろうが、しかしそれでも発火に至るまでは焙られないだろう。

発火に至る前に、帆照はその炎を別の方向に飛ばすなりして自身の発火を防ぐに違いない。

だとしたら、帆照はカウニスの見込み以上に自身の能力を自制しているようだった。

噴き出した炎はホームの天井まで上り詰めると、そこで四散した。四散した炎のそれぞれが天井に燃え移り、紅色の空間が一瞬にして朱色の空間に塗りつぶされていく。

「……………」
無差別放火か。

朱色に塗られていく駅構内を見て、カウニスは内心で呟いた。

天井で燃え盛る炎は、その天井を伝って尚も燃え広がっている。その炎がカウニスの頭上に達するのも、そう時間が掛かるとは思えない。

当初の予定外ではあるが、この少女も殺してしまおうか。

怒りのように燃え盛る炎を見て、カウニスは考えた。

カウニスは平和の弊害になると判断しなかった者を殺す気はない。帆照の事も先ほどまでは殺すつもりもなかったし、寧ろ平和を統一してくれる方の人物だとさえ思っていた。

が、しかしこの攻撃の仕方は『危険』だった。

カウニス自身が危険というのも勿論あるが、しかしそれは殺す理由に入らない。自身の身の安全は関係ない。

この時に、カウニスが真に『危険』だと感じたのは 帆照の“

思想”のほうだった。

幾ら自分に襲い掛かってくる者を殺そうと考えても、それで他のものまでもを滅茶苦茶にしようとは思わない。仮に他のものに迷惑や負担を掛けてしまおうとしても、それを意図的に広げようとしなのが人としての良心だろう。

その他のものには、何の感情も抱いていない筈なのだから 意図的に被害を与える道理はない。

ならば、普通の者ならここまで“大袈裟”な攻撃をするだろうか。

いや、最早攻撃とも呼べまい この無差別放火を、誰が普通だといえるだろうか。

紅色の空間を朱色に塗りつぶしてしまう程の範囲。明らかに、カウニスへの攻撃に関係のない方向への放火。

そして、それを一切止めるつもりのない思想を持つ者を 果たして、平和に害を及ぼさない人物だといえるだろうか。

「否」

判断は早かった。

引き金に指を掛け、銃口を帆照に向けて 何の躊躇いもなく、

カウニスはその引き金を引いた。

撃鉄が落ちて、雷管を叩く。

瞬間。

「！」

カウニスの肩を大きな反動が叩くのと同時に、耳を突き抜けるような乾いた爆音が、駅全体に轟いた。

第十話『効力範囲』

時を遡ること、およそ一日。

十一月二十日　時刻二十三時。

ビル屋上。

「貴様の土産話など、聞くに堪えん」

拳銃を消し、後方にある鉄柵に凭れ掛るようにして、カウニスはツヴァイを睨んでいた。

「そう忌憚しないで下さいよ。まだ何も話していないじゃないですか」
長剣を消して、カウニスに笑みを向けるツヴァイ。

「はっ。貴様の持ちかけてくる話に、まともな話があるなどとは到底思えんがな」

鼻を鳴らして、カウニスは言う。

「それに、その話で行くと貴様は私がここに居るのを承知でここに来た、という事になるが、それでは先の説明と矛盾してしまわないのか？」

「いやだなあ、さっきのは“嘘”に決まってるじゃないですか。聡い貴女様ならば、態々言葉にせずとも分かると思っただんですがねえ」
わざとらしい溜め息をついて、ツヴァイは飄々と言う。

「まあですが、無駄だと分かっているにも衝動に駆られて発砲してしまう方でしたねえ、貴女は。流石は『元盗賊』といった所でしょうか？　常識がないというか、野蠻というか、狂っているというか」

「……生前の話はやめてもらおうか。盗賊に関しても、自ら望んであそこまで零落れた訳ではない」

「でも、“やりたくてやって”たんでしょ？　なら同義ですよ。どちらにしても、貴女は自分の事しか考えられないんです。僕の話は断るのだって、僕を嫌うのだって、僕を悪役にしたてたがるのだって、本当はただ怖いだけなんでしょう？」

僕という、たかだが一人の少年が。

面白げな笑みを浮かべて、ツヴァイはカウニスの方へと歩み寄る。
「ですが、今回の話に限っては警戒する必要はないと思いますけどね。今回持ってきた話は『暴食者』についての　簡単な、殺人依頼ですから」

カウニスの隣でその歩を止めて、カウニスを真似るようにツヴァイは冷え切った鉄柵に凭れ掛る。

「……殺人依頼なら既に請け負っている。能力組織直轄暗殺部隊統括者であるところの組長から、直々にな」

「へえ　しかし、それなら尚おかしいですよ。それなら、何で貴女はこんな所に居るんでしょうかねえ？　僕が知ってる限りじゃあ、この辺りに変わった能力者は居ない筈ですけど」

「変わり者でない能力者など居てたまるか　だが、まあ実際貴様の言う通りだ。私は今現在、あるうことにも我が主の令に背いている所だよ」

やるせない笑みをこぼして、カウニスは天を仰ぐ。空一面に被さる雲が街の灯りを反射して、およそ深夜とは思えない明りを作り出していた。

「……………」

騎士らしからぬ事をする度に、彼女は常々思う。

『やはり、私は騎士に焦がれる存在に過ぎない』と。

「ふむ。なら、話は早い」

と、ツヴァイは一人神妙に頷くとカウニスの方へと向き直り、淡々とその言葉を続けていく。

「では、次に僕と会うまでに暗殺対象である暴食者が死亡していなかった場合　貴女が、暴食者暗殺の依頼を“破棄”したと捉えさせてもらいます。その時には、貴女が庇う少年少女諸共責任を負わせるつもりなので、精々僕と鉢合わせしないように暴食者を殺してくださいね？」

一見、この会話でツヴァイは実に無意味で実に無関係な人質をとったように見えるのだが　しかし、その人質はあまりにも効果的

だった。

これ以上とない、カウニスを殺人へと動かす動機であった。

「……あの子達は　関係ないだろう！」

わなわなと震える声を、カウニスは振り絞る。

「あの子達はなにもしていない。この話とは、何ら関係のない筈だっ！」

「いえいえ、それが大有りなんですよ。だって、あの子達って『平和への害がない』、と見做された方々でしょう？　貴女を殺人へと動かすには、これ以上とない人質だと思いますがねえ。それに、貴女が庇っているという時点で、あの子達の背景には貴女が居るという事になります。今のあの子達の立場にも、少なからず貴女の力が影響しているともいえますよねえ　ほら、この時点であの子達と貴女との関係性が一切無い、とはもう言い切れないと思いますけどね」

「……………」

そういう事か。

ツヴァイの言葉を聞いて、考えるまでもなくカウニスは理解した。自身が『平和の害とならないと見做した者』　そう見做された者達は、この上なくカウニスとは無関係で大切な者達だった。

普通に生きてほしい。彼女がそう思う人間こそが『平和の害とならない者』、と判断された者達なのである。

逆を返せば、そういう事なのだから。

だから、ツヴァイが人質として選んだ者達は　至極、カウニスには大切に掛替えのない者達であったのだ。

自分からの頼みでは、否。たとえ組長の頼みであったとしても、彼女が途中で依頼を投げ出すであろうと見たツヴァイは自ら彼女の元に赴き、そこで絶対的な交渉を持ちかけようとしていたのだ。

組織の掟に触れるであろう、身内を人質にとるという手段をもつて。

「……しかしだな、現に暴食者は平和に害を　」
言い掛けた、瞬間だった。

ほとんど、と普段聞きなれない鈍い音がカウニスの足元から発せられた。

音につられて、ふと自身の足元に視線を降ろしてみれば、そこにあったのは紛れもない、

「……………」

自身が『害のない』と見做した者の、ざっくりと切り取られた頭部だった。

既に首元の切断面は腐りつつあり、よくよく嗅げば腐敗臭もどことなく漂っている。首元から顎の辺りまでが黒ずんだ赤色の血で塗りつぶされ、微かに開く瞼からは開ききった瞳孔が覗いていた。

大きさからして子供の頭部なのだろう、まだ幼い顔に恐怖の表情が張り付いていた。

「……………」

死体を見た恐怖よりも先に、『どこから死体を持ってきた』と勘繰る辺り、やはりカウニスも暗殺者だった。

「頭部って、子供のものでも意外と重いものですね。目立たないようにと思ってフードに入れてきましたが、いやはや思いの他肩が疲れてしまいましたよ。参った、参った」

そしてそんな事をへらへらと笑いながら口にするツヴァイは、やはり異常な者だった。

「さて、と　まあ、これで分かりましたよね？　貴女が請け負う、依頼の『責任』」

「……………」

湧き上がる感情を抑えて　　わなわなと震える唇を噛み切って、カウニスは静かに頷いた。

「わかった」

赤く染まった口元から　抑え切れない“笑み”が零れた。

「全うしよう、暴食の暗殺を」

「……………うん。やっぱり、君は狂ってる」

時は戻り 現在。

燃え盛る駅。

辺り一帯が朱色に塗りたくられていく中で、鮮やかな赤が帆照の肩を貫いた。

帆照の身体が、びくんと揺れる。

「ほて」

「こん、の！」

大河の呼びかけが届いていないのか、血が滲み出る右肩を手で抑え、殺意に満ちた瞳で帆照は睨む。

自身にむけ、拳銃を構えるカウニスを。

「……狂人だな」

弾倉を回転させて、カウニスは再び撃鉄を引き起こす。

標準は、帆照に向けられたまま。

「帆照っ！ 相手は銃火器だ！ まともに遠距離でやりあえる相手じゃねえ！」

肩を抑えている方の帆照の腕を引っ張って、大河は無理にでも帆照を移動させようとするが、しかし、帆照は動かない。

動けないのではなく、明らかに大河の引っ張る力に反して 帆照はその場にとどまっていた。

『何か特別な考えでもあるのだろうか』等という希望的観測は肩を撃たれた時点ですぐに消失しており、今の帆照にはとてもじゃないが頼れない。

どころか、放っておいたら壊れてしまいそうな感じさえもしていた。

「帆照、とつとと動かねえと」

大河の言葉を掻き消して、み度乾いた銃声が轟いた。
刹那。

「！」
発砲と同時に、カウニスの頭上に膨大な炎が降りかかる。
つい先ほどまでは頭上になかった筈の炎が、気付けば自身の頭上に降りかかるうとしている。

完全なる不意だった。

帆照が新たに発火させたものとは思えない。実際、カウニスは拳銃の標準を定める為に帆照の事をずっと凝視していたし、帆照はそれらしい動きを見せていない。故に、それに関しては絶対の確信があった。

が、それこそが、カウニスがこの炎を見落とした原因の一つに他ならない。

カウニスは帆照に標準をあわせる際に、同時に大河の存在もその視界に入れていた。二人の敵を一つの視界にまとめることによって、彼女は一種の安堵感を覚えていたのだ。

その安堵感が、彼女の心に微かな余裕を齎した。

その余裕が彼女の視野を大幅に狭めて、彼女の『疑心』を薄いものへと変えてしまったのだ。

だから、彼女は気付けなかった。

自身の頭上の、更にも 駅天井の“上”を、その膨大な炎が這ってきているという事に。

「」

咄嗟に後ろに跳び退いて、カウニスはその炎を回避する。が、しかしその足先までは回避し切れていなかった。

右脚の足先に、小さな炎が燃え移る。

「……………」

まだ、悔っていた。

およそ二メートル後方まで一躍して跳び退いて、戦闘中だとは到底思えないような華麗な宙返りを決め、乱れない端麗な着地を決め

た後に　彼女は己を責め立てた。

自身の予想を上回る、帆照の自制力。

あれだけの炎を出しながらにして、それが一切燃え移らないというのには流石のカウニスも感心させられたものだった。

故に、カウニスは警戒の心を高めた筈だった。が、それは彼女の心に新たな“隙”を作ったに過ぎなかったのだ。

カウニスは自身の予想を上回る帆照の能力を見て、ついその“予想を上回った時点での能力”を基準にして、警戒してしまったのだ。とは言うが、しかしそれに誘導したのは他ならぬ帆照である。

カラクリは単純だ。

まず、カウニスは小規模の炎の波を見せられた。この時が、初めて帆照達と接触した時である。

次にカウニスは炎を足元から出すところを見せられ、同時にそこで『掌以外からも炎を出せる』と認識を改めた。その次に、カウニスはこの駅で“膨大な炎を精妙に操る技術”を見せられて、その時に基準を改めた。その次に、帆照はゆつくりと駅の天井に炎を這わせ、その炎が燃え広がる“大体の速度”をカウニスに見せ付けた。

この時点でのカウニスの認識は『炎を精妙に操る事はできるが、物に燃え移った炎の速度は微かに減速する』という認識だったのだが　しかし、この時点で既にカウニスの認識には間違いがあったのだ。

『減速する』という認識が、この時点でずれていたのだ。

視認することはついに叶わなかったが、しかし天井の上を這っていた炎はよほど速かったに違いない。

でなければ、駅の天井を燃やし尽くしてカウニスが発砲するタイミングにあわせて炎を降下させる、などという大掛かりな事を実行するのは不可能に違いない。

天井を覆う膨大な炎に目を取られ、天井の上までに考えが及ばなかった。

暗殺者たる彼女にとって、それはよほどの屈辱であり　“快感

”であつた。

「……どうやら、あの少女の真名も聞かねばならぬようだな」

燃える靴と靴下を脱ぎ捨てて、カウニスはドレスの裾を太腿の辺りまで力任せに引き千切る。それから足先の炎を引き千切った布で引き締めるように覆つて、カウニスはその炎を鎮火した。

無論、靴を脱ぎ捨てるときも布で覆うときも、そのどちらのときもカウニスは自身の“手”でそれを行つたのである。手の方は爛れるまでに焼けはしなかったが、しかし足先の火傷は酷いものだった。皮膚の色が微かに変色し、焼け焦げた所には常に痛みが走っている。それも、意識を失いかねない鋭く強い痛みが。

素人目に見ても、冷ました所で治るような火傷ではなかった。

しかし、だからといってこのまま引き下がる訳にもいくまい。今、カウニスの背には自身よりも重い命が乗っている。自分の為ではない、他人の為の殺人。自分の命よりも、大切な者の為の殺人。

その義務感が、彼女の“衝動”をより大きなものへと変えていた。初めて大河達と会った時にはなかった“衝動”が、今や大きな波となつて彼女の心に押し寄せている。

千切った布を変色した足先に結び付けて、カウニスは立ち上がる。鋭い痛みが、よりカウニスに突き刺さる。

しかし、カウニスはその痛みに喘ぐことも呻くこともなく、端然とした姿勢で炎が消えていく駅全体を見渡していた。

燃え盛る炎達が、穿たれた一つの穴に吸い込まれるように集まつていき（恐らく、その穴からカウニスの頭上に炎を落としたのだろう）、そこから冬の空へと放たれていく。

冷たい空気が急激に熱せられて膨張したのだらう、鈍い爆音と共に微かな風が辺り一帯に吹き渡る。

後方で束ねられた金色の髪が、ゆらりと揺れる。

未だ暖かい空気が残るこの駅で、カウニスは先に銃弾を撃つた方向に視線を向けていた。

視線の先にあるのは、飛び散った肉片でなければ地にひれ伏す亡

骸でもない。

そこにあつたのは一人の少女を必死に抱き寄せる、一人の少年の姿であつた。

「全く、君はつくづく大胆だね。あたしじゃなかったら、とつくに惚れてるぜ？」

「……………」

腕の中からの戯言を黙殺して、大河はカウニスの手を凝視する。拳銃を持っている手と、まだ何も持っていない片方の手を。

「……………」

膝が笑っている。

息も切れている。

疲労も押し掛かっている。

今正に、大河の身体には“時間を喰らった反動”が押し寄せていた。

時間を喰らったのは、つい先程の事だ。

カウニスが帆照に二発目の銃弾を発砲する直前に、大河はその指が微かに動いたを視認して時間を喰らった。そして弾丸の軌道上に居る帆照を自身の方に抱き寄せて、反動が押し寄せる今に至るというわけである。

貴重な一回をこうも早くに使い果たしてしまったのは悔やまれる事であるが、しかし背に腹はかえられまい。

「少女よ。貴様、名をなんと申す」

拳銃を降ろしたままで、カウニスは帆照に問いかけた。

「……教えられない、って答えたら？」

「貴様の意見を尊重しよう。強制はしない」

「ふうん……じゃ、教えられないかな」

「良かるう」

潔く諦めるなり、カウニスは其の銃口を前方へと向けなおす。向ける途中での一連の動作は、一種演劇のようですらあった。

向ける途中で、カウニスは自身の太腿に弾倉を擦り付けて回転させ、前に構えるのと同時に撃鉄を引き起こした。

流れるような俊敏で端整なその動作には、敵である大河でさえもが見惚れてしまうような手際の良さがあつた。

が、今は見惚れている場合などではあるまい。現在大河がおかれている状況は、大河が思っている以上に危うく、張詰めているのだ。そんな張詰めた空気の中で、カウニスは淡々と語りだす。

「先の戦いといい、今の銃弾といい　タイガ。貴様の能力は『自身に身体的影響を及ぼす』能力か。しかしまあ、その状態を見る限りだと、安易に使える代物ではないようだな……使えて精々一、二回だろう」

「……………」

見抜かれた。

こつも簡単に、あろうことが弱点まで見抜かれてしまった。

多少の齟齬はあるものの、しかしその結論は殆ど同じといって良い。時間を喰らうにせよ、自身に身体的影響があるのは確かな事なのだから、結果的にカウニスの推測は的を射ている。

そして何よりも、使用回数と弱点までもを見抜かれてしまったことが、大河にとっての一番の痛手だった。

能力が齎す『益』の部分だけがばれるならまだしも、それによって齎される『害』の部分までがばれてしまうというのは、あまりにも痛かった。

『害』を知ったとなれば、これ以降はカウニスもその『害』　即ち、『弱点』をついてくるに違いない。そうなれば、大河の行動は大きく制限される事となるだろう。

手の内を知られるとは、そういう事なのだ。

「……大河。ちょっと、放してくれないか」

大河の腕の中で吐息の混じった、しかしそれでも筋の通った凜とした声があがる。

「……何するつもりだ？」

「あ、いや、もう何もできないよ？ 正直言つて、今の状態は最悪のそれに限りなく近い。肩は撃たれて動かないし、吐き気はするし、頭はぼうとするし、息も苦しいし 精神力だって、もうないよ」
相変わらず、この性格の帆照の意図は掴みにくい。

「……じゃあ、一体何が目的で」

「あのさ、さつきから思ってたんだけど これ以上の雑談は、もう必要ないんじゃないかな」

詰問しかけた大河の言葉を遮って、帆照は冷たく言い放つ。それは言外に、『これ以上話しかけるな』という意思表示を兼ねていた。
「っ……………」

言いかけた言葉を吞み込んで、大河は帆照の瞳を見返した。疑問の目配せに、しかし帆照の決意が揺れる事は無かった。

彼女の瞳には、決意の志のみが光っていた。

「……………」

その瞳に、頷く事もなく大河は無言で抱き寄せていた帆照を放す。帆照が何を考えて、何を決意して大河にその指示を出したのかは分からない。ただ、一つ言えるのであれば今は口論している場合などではない、という事だ。恐らく、先意思表示はその事を指しているのだろう。

だとすれば、得心もいこうものだ。
が。

「っ ととつ、と」

大河の腕から放れた途端に、帆照の脚は再び覚束ないそれとなつてしまった。

ふらふらと後ろに向かって歩くその姿は、生まれたての小鹿というよりかは泥酔しただらしない人、といった方が表現としては的

確だろう。

風が吹かなくとも、今にも倒れそうだ。

「……愚弄しているのか？ 少女」

銃口を帆照に向けたままで、カウニスはじりじりと歩き出す。踏み出す度に襲っている筈の、鋭い痛みに眉一つ動かさず。

ぞつとするようなその剣呑に圧されてか、無意識に大河の脚がしりぞいた。

と、それを見てなのか　カウニスの顔に、微かな苛立ちの表情が伺えた。

苛立ち？

それを見た大河は、その苛立ちを確認するように更に後ろに二歩下がる。すると、カウニスの表情に変化は無かったものの、しかし僅かにその歩調が早まった。

まるで自身との距離を気にするように、カウニスはこちらへと歩み寄ってくる。

「……………」

効力範囲。

彼の頭をよぎったのは、いつしか椿に教わったその言葉だった。

教わったのは、恐らく先の入院中での事。まだ、右手の傷がよく痛む時期だった。

転入の決意を固めた後の大河は、よく能力に関するあれこれを椿に訊ねたものだった。自分でも憶えきれない程の問いを、恐らく彼は投げ掛けていたのだろう。

そんな無数の問いの中でも『効力範囲』というその言葉は、彼の記憶に鮮明に焼き付いていた。

「『効力範囲』。射程距離や、有効範囲とも呼ばれるこの言葉だが、ここでは『効力範囲』と呼ばせてもらおう」

空いている正面のベッドに腰掛けて、椿は淡々としかし優しく語りかけていく。

「『効力範囲』とは、能力者を中心とした場合の能力の効果が有効な範囲の事を言う。『効力範囲外』には能力が通用しないし、そもそも届かない。いかなる能力にも物理的限度があり、その限度はそれぞれによって異なるものとなっている。また、能力者が保有する『効力範囲』の範囲自体が変わるという事は殆どないが、それも絶対とは言い切れん。能力という奴は、いまだ未知の領域が多いからな」

「成程……じゃあ、その『効力範囲』。例えばAという人物の能力を炎系として、一つの物体を燃やすとします。それで、その燃やした物体を『効力範囲外』においた場合、その炎と物体はどうなるんでしょうか？」

「……ふむ」

分かり易く要約するためだろう、少し思案してから椿は応える。

「そうだな。その場合は『炎は残るが、その炎に能力効果を及ぼす事は不可能』になる。物体を発火させた段階で、それは能力以外の“実在する物体”を媒体として燃えているからな。『効力範囲外』に出たとしても、その物体は燃え続ける。但し、一度『効力範囲外』に出した炎を再び効力範囲に入れたところで、再びそれを操る事は叶わない事だ。もつとも、もう一度それに火を灯せば、その炎ごと操れない事もないだろうけどね」

「そうですか……分かりました。なんだか、いつも付き合ってくれて、ありがとうございます」

「いやいや。何、礼には及ばないよ。ちょっとした体験授業だとも思ってくれば、それでいいさ」

暖かな微笑みを掛けてくる椿に、大河はいつからか安心感に似たものを抱いていたのだろう。椿の微笑みに、大河の顔も思わず綻ん

だ。

「成程 貴様等、私の射程距離を掴んだか」

構えていた銃を消失させると、カウニスはそこで立ち止まった。

恐らく、大河達が効力範囲（射程距離）から出てしまったためだろう、大河の推測が正しければだが、そうなれば能力で“復元”させた銃弾は消えてしまう。

そしてカウニスの言動から察するに、その推測は今や間違いないといっても過言ではない。そうでなければ、態々銃を消失させる意味もなからう。

「となると、先に私の射程距離を掴んだのは ふむ。少女の方となるのか」

「みたいだね。ひよっとしたら、その少女にはばれだったんじやない？」

嘲るように、カウニスの言葉に皮肉めいた相槌をうつ帆照。しかしその帆照もかなり弱っている様子なので、今一挑発になりきれていないというのが現実なのだが。

「ほう。ひよっとしたらばれだっただのかもしれないのか。では、一体どの部分がばれかもしれなかったかを、少女に問おう」

「うん、いいよ。ばればれかもしれない部分、はっきりにって炎を避けてからの行動全部さ。だって、おかしいよ？ あたし達が動けないっていうのに、何であんたは発砲してこなかったのか。そこを考えてみれば、答はすぐにも解かると思うぜ」

「……成程。やはり不自然だったか。全く、とんだ失態だな」
失笑を漏らし、されどカウニスの眼が歪むことは無かった。

鋭い眼光は、しかし壁に凭れている帆照ではなく大河の方に向けられていた。

「いやいかん。つい目的を忘れていたが、しかし今の指摘で色々と冷めたよ。少女。貴様とは、また後で決着をつけよう。私の相手は、あくまでタイガだった」

昂る想いを抑え込むように、深く息を吐くカウニス。この時、彼女の心に湧いていたのは紛れもない高揚感だった。

心臓が早鐘を打つ。

口角が無意識に上がる。

元盗賊、現暗殺者としているうちに身から剥れた“殺傷への躊躇い”。同時にそれは『殺人衝動』という、新たな欲求を彼女の心に植えた。

彼女が殺人前に行っている『平和の判断』も、所詮は建前に過ぎない。結局は、彼女が抑えきれなくなった『殺人衝動』を正当化させる為の判断。殺す標的が、いかに卑賤かどうかを見定める為の判断。

自身の欲求を満たし尚、自身の殺人を正当化できる者を捜す為の判断なのだ。

だから、彼女は人の命を計る事に容赦がない。自身の欲求を満たす者への、容赦がない。敬意も何も、そこにはあったものではなかった。

たとえば彼女の平和への想いが本物だったとしても、それは壊滅的に矛盾してしまっている欲求だった。

そういった矛盾した行い、常識から外れた欲求こそが彼女から、『異質』な空気を醸しているのだろう。

その常識から外れた欲求が、今、大河に向けられた。
「能力組織直轄暗殺部隊が一人。このカウニス いざ、名乗りを上げて参らんっ！」

鋭い痛みを振り切って、カウニスは脚を踏み切った。

大河との距離は、およそ六メートル。帆照は更に遠く、その距離

はおよそ七、ハメートルといったところだろう。

しかし、今は大河との距離が解かっただけで彼女には充分だ。今の相手（捌け口）は、決して帆照ではなく大河なのだから。

六メートルを詰めるのに、そう時間は掛からない。

脚を踏み切ったのとほぼ同時に、彼女は手の内に持つ破片から“一本の短槍を復元”させた。

復元させた短槍を右手に持って、カウニスはそれを振りかざす。突きではない、薙ぎの構えで。

ひゅん、と短槍に切られた風が甲高い悲鳴を上げる。

風と同じく、カウニスが振るった短槍は大河の胸部を切り裂いた筈だった。

果たして、彼女が振るった短槍は大河の胸部を掠める程度に終わっていた。そう深くない、二ミリ三ミリの所を。

直前で、後ろに退かれたか。

振り切った短槍を投げ捨てて、カウニスはその手に“一本の短剣”を復元させた。

振り切った右腕を戻す動作にあわせて、彼女はその手に持った短剣を振るう。眼で追いきれない程に加速した短剣が、辺りの空気を切り裂いた。

びゅん、と先程よりも少し濁った、しかし勢いのある音が発せられる。

「！」

風の悲鳴に混じって、大河の呻き声があがった。

鮮やかな赤が、白刃の色を塗り変える。

「う、うっ」

短剣が切り裂いたのは、大河の左肩だった。今度もそこまで深くはないが、しかし戦闘においては致命傷になりうるであろう傷だ。

何よりも、剣戟を受けた場所が悪い。

腕ならばまだしも、肩に創傷ができてしまったのは致命的だった。肩が動かなくなれば、必然的にその腕も動かなくなる。腕が動かせ

なくなれば、それはあまりにも大きな枷となる。

故に、肩への傷はなるべく避けたいものであったのだ。

逆をいえば、カウニスはそれを狙って振るった、ともいえるのだが。

ぱっくりと傷口が開いた肩を右手で抑えて、大河は後方に飛び退いた。時間を喰らい、ここでカウニスに反撃するのも一種の手段であつたが、しかし今の状態では致命的なダメージは与えられまい。

肩に剣戟を受けて動揺しているのもあれば、肩に走る痛みもその理由の一つ。反動の方は、帆照がカウニスの気を引いてくれている間に殆ど治つたが、しかしそれでも完全ではない。

今の状態では、時間を喰らつたとしても精々四肢のどれかを使用不可にするのが限界だろう。

それでは、カウニスの“狂気”は止められない。

勝負を仕掛けるとするならば、次のタイミングだ。

タイミングを逃す、或いは次のタイミングで勝負を決められなければ、その次のタイミングは、恐らくやってこない。

「……………」
不幸中の幸いというべきだろう、左肩は痛みを堪えれば動く程度の傷だつた。

満足に動かす事はできないが、完全に使用不可というわけでもない。殴る、受け止める、投げるなどといった動きはできそうにないが、しかし身体のバランスを取るくらいのことなら可能だ。

それだけでできれば、後は両脚と右腕のみで彼は充分だつた。

「なかなかどうして、避けるものだ　貴様に、真名を名乗れぬのが悔やまれる」

そう言うカウニスの声は、張詰めながらもどこか沈んでいるようだった。

すつ、と赤く染まつた短剣が大河に向けられる。その動作に、大河の精神も張詰める。

「……………」

彼らの間に、静寂が降りたつた。

風の音一つ、彼らの耳には入らない。

鋭く光る互いの眼光だけが、彼らの眼に映る。無駄な動き一つ、許されない。

肩の止血をする暇など、そこには存在しなかった。少しでも動作を間違えば、カウニスの短剣が自身の首を断つ。先の短剣の速度を見る限り、恐らく短槍の薙ぎはフェイクだったのだろう。次に振るわれる短剣も、先と同等かそれ以上と見ていい。

タイミングを間違えれば、時間を喰らう前に首がとぶ。

かといって、この好機を逃すわけにもいくまい。カウニスに接近できるのは、恐らくこれが最後のことだ。

「　　っ！」

と。

一瞬、カウニスの顔が苦痛に歪む。

足先の痛みが今更になって響いてきたのだろうか、それともフェイクなのだろうか　どちらにしても、そんな事は今の大河にはどうでもよかった。

今、彼が為すべき事は一つ　時間を喰らい、カウニスを徹底的に叩き伏せること。

それだけだ。

「　　」

辺りの景色が、スローに変わる。

反撃の火蓋が、切って落とされた。

『第十一話 理想の果て』

カウニス・ロイツ。

祖国であるフィンランドにカトリックが齎され始めた時代に、彼女はその命と名を授かった。天使のように美しい彼女の相貌には、誰もが見惚れ羨んだことだろう。そして彼女を知る誰しもが、彼女は将来立派で奇麗な女性になる、と思い、その成長を願った事だろう。

だが、現実はそのを否定した。

彼女の年齢が丁度五歳となった頃に、それは起こった。

特に深い意味合いもない本当にただの幼稚な気まぐれで、彼女は足元に落ちている何時処分したかも分からない椅子の破片を握って

それを、気まぐれで“復元”させてしまったのだ。

それも運が悪かったのか、実の母と実の父が居る前で 彼女は、奇奇怪怪な所業をいとも容易く行った。

それを見た母は錯乱し、父は怯えていた。当の彼女といえは特になにを覚えるわけでもなく、いつものように天使のような明るい笑顔をあたりに振りまいていた。

異常現象に何も感じない彼女こそが真の異常、と取るものもあるだろう。そしてそれは、何よりも正論だ。

正論で異常だが しかし、彼女にとってそれは“通常”の他ならない。行えて当然の行為に、他ならなかったのだ。

当然の事に驚愕など、ましてや自身の行いである。そんな感情を、態々覚えられるわけもないだろう。

そして、それが災いした。

先の十字団の遠征があつても尚、彼女の両親はキリスト教の教徒となる事を選択しなかった。その心情は、今や察するに至らない。実の娘である彼女でさえも、時折両親の言動には“違和感”を覚えていたものだ。

故に、その心情を知る者は本人達のみにならなかったのだ。

だから、娘であるカウニス・ロイツも知らなかった。実の両親が神や天使を決して信じない、否 信仰しない神や天使からの懲罰を恐れる、非信仰的且臆病な人間だったという事を。

そんな事を知らなかったからこそ 両親を自害にまで追い込んでしまうような事を、彼女は気まぐれで行ってしまったのだ。

両親が自害したのは、その日の夜だった。

互いの首を固い紐のようなもので結び合い、抱き合った状態で彼女の両親は高所から低所に身投げした。身投げした場所は、どこだったろうか あまりにも昔のことなので鮮明には憶えていないが、それでも身投げした場所は相当高いところだった気はしていた。

身投げした場所一帯に鮮やかな血液がぶち撒かれ、その中心には紐のようなもので繋がれた二つの首が転がっていた。その下にあった筈の身体は、最早身体と認識できるそれではない。互いの内臓と肉片がぐちゃぐちゃに絡み合って、ねちよねちよに混ざり合ってその二つは、最早身体の原型を留めていなかった。

どちらが父で、どちらが母か。

それすらも、一見するだけでは判別もつかない。判別する手段としては、頭髮の量が最も有効的な材料といえるだろう。

父か母ではなく、男か女かを判断する材料。

「……………」

自身の両親が混ざり合った死体を見て、否 自身の両親に罵倒された挙句、その身投げするところをまざまざと見せ付けられて実の娘である、カウニス・ロイツは何を思ったのだろうか。

何も思えなかったのかもしれない。あまりの衝撃に、彼女は自我というそれを完全に壊れてしまったのかもしれない。

感情というものが壊れ始めたのも、恐らくこれがきっかけだったのかもしれない。

やがて日が昇り、暖かな陽光が照らし出したのはしかし凄惨な光景。

当時五歳だったカウニス・ロイツは、結局次の朝まで立ちすくんでいた。起こったことを整理するのが精一杯で、それに対する感情など遅れてやってくるものだった。

間もなくして彼女は同村の村人に引き取られ、この自害に関するあらかたの事情の説明を求められた。が、しかし教育施設もない時代、ましてや当時五歳だった彼女に具体的な説明が出来るわけもなく 結局、その事件は『両親の自害』という形で幕を閉じた。

そしてその事件を契機に、カウニスの地獄は幕を開けた。

彼女の“能力”が村中に膾炙するのに、そう時間は掛からなかった。きっかけは、恐らく何十とあったに違いない。無邪気な彼女はこれ見よがしにと、その能力を乱用していたのだから。

時は流れ 彼女の歳が十五となった頃。

事件からおよそ十年という歳月を経て、彼女の心身は実に美しく成長していった。燦爛と煌く金色の髪に、うら幼くとも端整とした顔立ち。濁りなき灰色の瞳に微笑まれたら、男なら誰しもが惚れてしまうであろう美しさ。同性の女性でさえも、その美しさには目を背けたくなるものだった。

そんな彼女が、ある日攫われた。

何の前触れもなく、突如忽然として カウニス・ロイツは、何者かに攫われた。家出と疑うには、あまりにも思い当たる節がない。それに加え、彼女の所有物の殆どが当時彼女を引き取っていた村人の家の中。

とてもじゃないが、自主的に旅立ったとは到底思えない。

村人達が彼女の失踪に頭を悩める一方で、当の被害者であるカウニス・ロイツは 今正に、一人の暴漢に犯されようとしていた。服は破かれ髪は乱れされ、彼女の身体には幾つかの創痕ができていた。それもまだ新しく、傷口からはとめどなく真つ赤な鮮血が溢れでている。

「……………」

ほのかに明るい洞の中で、暴漢の持つ白刃が煌く。

壁一面に武器や獣の毛皮がずらりと掛けられており、洞の隅には食糧と思われしき植物が整頓されまとめられていた。

備蓄庫だ。

それらのものを一瞥して、カウニスは自身の居場所を特定した。それも、特定した場所は他の村の備蓄庫ではない。自身の村の備蓄庫だった。

ほのかに見える暴漢の顔も、しげしげと見れば見覚えのある顔だ。大して深い関りを持つている訳ではないが、しかし十五年も同じ村で暮らせば互いの顔など覚えるものだった。

特に、暴漢はカウニスの顔を良く憶えていたに違いない。村一番の美貌を持つ少女の顔を。村一番の危険人物であるものの顔を、忘れる訳がなからう。

暴漢はカウニスの両腕を縄で縛りあげると、己の前にカウニスを跪かせた。最早全裸といっても過言ではないほどに、カウニスの服は乱雑に破かれている。その姿が、より暴漢の支配的欲望をかきたてた。

手に持つ刃物を投げ捨てて、欲求に駆られ自らの衣服を？いदैく暴漢。これから何が行われるのか。そんなことは、考えるまでもなく容易に推測のつくものだった。

あたりを見渡して、カウニスは抵抗に使えるような物を視線で探す。壁に掛けられている武器。いや、それは遠すぎる。

かといって、丸腰の逃亡を図る訳にもいくまい。たとえ洞から抜け出せたとしても、両腕が縛られていては全力で駆けることは敵わないし、それ以前に身体能力では暴漢の方が勝っている。

たとえ全力で走れたとしても、暴漢から逃げ切ることは敵わないだろう。となればやはり、暴漢を負傷、或いは追跡を妨害しなければカウニスに逃げ道はない。

暴漢の手が、カウニスの裸体に伸ばされる。

「！」

脚をばたつかせて抵抗するが、しかしそれも暴漢の前では非力な

抵抗だった。

ばたつく脚を両手で押さえると、暴漢はそれを強引に横に開く。抵抗しようにも、一少女の力は高が知れている。暴漢の腕力に、カウニスの脚力が敵う訳がなかったのだ。

いよいよをもって、カウニスは覚悟を決めた。

一回、二回、三回　いや、何回でもいい。だから、この暴漢が飽きるまで我慢しよう。暴漢だって、三ヶ月も経てば自分に飽きるに違いない。暴漢の欲に飽きが生じたときこそ、自身が逃げ出す唯一のチャンスだ。だから、今は我慢しよう。

カウニスは己にそう言い聞かせると、暴漢の映る視界から目を瞑った。真っ暗になった視界には、己の意識だけが投影されていく。

カウニスの意識　カウニスが思う、景色。

今になって、カウニスの瞼にあの景色が蘇る。

両親が自害した景色　人間が肉塊と化した瞬間。

と。

カウニスの肩に　ひんやりとした、冷たい感触がのつかった。

少し重くて凄く鋭利な、さながら刃物でも添えられているような感触。

その感触の正体を確かめる為に、カウニスは瞼を開けて自身の肩に視線を向けた。暴漢はカウニスを犯そうとする事だけに集中しており、幸いカウニスの肩に乗っている物体には気付いていない。

犯される寸前で、カウニスが視線を向けた先にあったのは　自身の肩に突き刺さった、先の暴行で暴漢が振りかざしていた一本の“ナイフ”だった。

それを見るや否や、カウニスは肩に刺さったナイフを口で銜えて引き抜いて　自身の裸体を弄ぶ暴漢の喉を、一突きにした。

血飛沫が噴き出して、悲鳴を上げる間もなく暴漢は地にひれ伏した。雪原のように真っ白なカウニスの肌に、鮮やかな赤い斑点が飛び散った。

「……………」
両腕の縄をナイフで切って、壁に掛けられた獣の毛皮を肌羽織る。獣の毛皮はカウニスが思ったよりも冷たくなって、だけれども思ったよりも暖かくもない。

肩に刺さったていたであろう刃の破片から復元した今や赤いナイフは、消える事なく今も彼女の前に転がっている。

肌寒い空気が、カウニスの身を震わせる。

赤い鮮血が、カウニスの心を震わせる。

暴行。殺人。死。

「……………っ！」

暴漢を殺してしまったという事実、彼女の思考は追いついていなかった。どころか、十年前の事件にすら未だ彼女の感情は追いついていない。

彼女の感情は、“死”という現実から目を背けて成長してきた。

その現実が、今更になって彼女の前に突きつけられた。

死という事実。親を自害に追い込んだ事実。殺人を犯したという事実が 彼女の背に、追いついた。

暴漢殺人から、更に五年が経ち 彼女の年齢も、いよいよ二十歳を超えるまでになっていた。

殺人後、彼女が村に帰るという事はついになかった。彼女の“能力”は村人の皆が認知しており、同時にその恐怖も認知していた。それだけは、彼女も十二分に知っていた。

だから、たとえ村に帰ったとしても 人を殺したという罪がある限り、決して自身が許されることはないだろう、と。

物体を復元させる能力 不可能を、可能にしてしまう力。それが村人達に与えた恐怖といったら、それは想像に難くない。

神を信仰するが故に、村人達は“魔的なカウニスの力”を畏れ崇めた。その情報がカウニスの耳に入ったか否かは定かではないが、陰で彼女が“神の子”と畏れ崇められていたのは確かな事だった。それに加え、彼女は今回の強姦未遂で完全な人間不信となっ

まったのだ。よもや自分が攫われて、暴力を振るわれて相手の性欲を満たすただけの道具に成り下がりがけるなど、彼女はつゆとも思っていなかった。故に、この強姦未遂が彼女の心に与えた衝撃は、暴漢の想像を絶するものだったに違いない。

そんな彼女が、暴漢の暮らしていた村に帰れるわけがなかった。

村に戻らず、カウニスが一体どこで何をしていたかといえればそれは、徳に反する強奪行為に他ならない。

自身が持つ能力を駆使して、彼女は金目のものや食糧などを強奪していた。時には村を襲い、時には人を襲い、時には倉庫を襲ってそこに、最早天使のような笑みなど存在しない。悪魔のように冷酷で、鬼のように冷血な鋭い眼差しのみが彼女の顔に張り付いていた。

そんな彼女の背德的愚行が近くの街に膾炙するのも、そう時間が掛かることではなかった。

街から荷物を出荷していく馬車にも、より一層の警備がついたものだった。重要な荷物を運ぶ馬車には警護が十五人以上。そうでなくとも、公共的物資（食糧・金銭など）を運ぶ馬車には最低でも警護が七人はつく。

盗賊を生業とするカウニスにとってそれは手痛い処置であつたが、しかしそれでも彼女の強奪が減少する傾向は見られなかった。彼女は自身の“破片から物体を復元する能力”と、今迄の経験から身に付けた多芸な武芸を駆使して尚も、その強奪行為を続けていた。

が、そんな彼女の傲慢極まりない人生にも　　いよいよをもつて、幕がおろされる事となる。

日も忘れて、歳も忘れて　　だけれども、まだ彼女の歳が二十五にもいかない頃。

そんな時、彼女は一人の騎士に心を奪われてしまった。顔も名前も見たことはないが、しかし声と性格なら知っている。

きっかけは、いつも通りに彼女が強奪を行っていた時の事。その時、彼女が襲撃しようとした馬車についていた警護は　　た

った一人の、騎士だけだった。

それも驚くべき事に、その騎士は何の武器も所持していなかった。重い鎧のみを身に纏って、騎士は馬車の警護を務めていた。

徒手空拳の格闘戦が得意なのだろうか、或いは罨か、或いはただの自惚れか　どれにしても、その騎士を殺す事には違いない。

予定通り、彼女は幾つかの武器の破片を身体中の様々な所に武装して　その馬車を強襲した。

が、しかし彼女がその馬車の積荷を盗むことは、果たしてなかった。

騎士の死角に回って、彼女は一本の槍を騎士の背中目掛けて構えた。足音を殺し、できるだけ気配を殺して　音もなく、彼女は突いた。

果たして、槍は騎士の背中を貫いた。背中から腹部までを、鎧の合間を縫って貫いた。

「
血反吐が兜の中で溢れかえり、胴体の辺りに熱い感覚を覚えたところで　ようやく、騎士はカウニスの存在に気が付いた。いつでも、最早警護など出来るはずもなかるう。自身の命すら、警護できずに騎士は死ぬ。」

自惚れた結果か、侮った結果か。どちらにせよ、それは実に不名誉な死だ。

そう思い、カウニスは考えさせる間も無く一思いに殺してやるうかとも思ったが　しかし、その無用な気遣いは後から見れば必要なかったに違いない。

「……………」

槍から脱するように、騎士は前方に二三歩駆けた。

槍から抜けると膝をつき、跪くような姿勢になって騎士は後ろに振り返る。

そして炯眼を向けるカウニスをその眼に捉えようと　騎士は、咳くように何かを語り始めた。

憐れだ。

まだ若く、これ程までに美しい娘が、何故こうも世に忌憚されなくてはならない。

神は非情だ。こんなにも小さな背に、これ程までの酷な呪縛を背負わせるか。もし私が神ならば、皆が平等な世界を創ったというものを。

そなたは私が思うよりも若く、そして美しかった。もし、私がもっと昔にそなたに逢えていたならば、私はそなたを奪ってでも愛情を注いだに違いない。

そなたに刃を向ける事無く去れたことを、私は本望と想う。

そなたの一度は、憐れ過ぎた。

「……………」

馬車の轟きが、大地の叩かれる音が、遠ざかっていく。

一人、草原に残されたカウニスは 自らの前で息絶えた騎士に、あろうことにも恋をしてしまった。鎧を剥がし、冷え切った死体を、カウニスは力いっぱい抱き締めた。

その時に顔を見たかもしれないが、しかし記憶には焼きついていない。ただ一つ、彼女が鮮明に覚えていることといえば 人間に、初めて純粋な愛情を向けられたという事のみ。

彼女は騎士の死体を抱き締めている所を別の騎士団に捕えられ、そして民衆の前で処刑された。

これがカウニス・ロイツの第一の人生の終幕であり カウニスの、第二の人生の開幕である。

周りの景色がスローとなった次の瞬間には、大河はカウニスの懷に潜り込んでいた。

潜り込み、次に大河はカウニスの“腕”へと狙いを定めた。自らは決して触れる事のできない、生身の人間の“腕”。

触れることはできずとも、しかし大河はその内にある『何か』を掴むことができる。ツヴァイの強襲のときに初めて発現し、白髪の敵との戦闘で確信を得た“掟破りのもう一つの能力”。

相手の“内”を掴み 直接、相手の痛覚触覚に干渉する能力。発動条件は未だに不明だが、しかし今のところ能力者に対しては必ず発動している。

そこから推測するに、発動条件は『能力者に対して』と見るべきなのだろう。

大河の拳が、カウニスの腕に伸ばされる。

これ以上とない至近距離において、最早腕を取り損ねるという事はあるまい。加えて、自身の体内時間は通常の何倍もの早さで時を刻んでいる のだが。

大河の視界がぐらりと揺らぐ。途端脚の力が抜けていき、意識が一瞬遠のいていく。

立ち眩みのような、重心の揺れる感覚。

だんつ、と大河は地面を強く踏みなおして、倒れかけたその姿勢を持ち直す。

一瞬揺らいだその間に カウニスの短剣が、伸ばされた大河の腕を切り裂いた。直前でその腕を引いたものの、しかし振るわれた短剣は大河の腕の肉を抉り取るように切り取った。

八ミリ程の深さを、カウニスの短剣は抉り取っていった。

「あ、ぐ」
自身の時間を喰らう能力を、どうやら彼は過信していたようだった。

いくら通常よりも早く時が流れているとはいえ、今の段階ではま

だ銃弾も見切れない。現に帆照を銃弾の軌道上から自身の方に抱き寄せた時は、銃弾自体を見切ったのではなくカウニスの指の動きを見て、銃弾が放たれる直前に帆照を自身の方へと抱き寄せたのである。

まだ自身の意識が自身の能力に追いついていないが故に、彼は時間を喰らう能力を活かしきれていないのだ。

短剣によって挟まれた部分は、前腕の外側のあたりだろうか。熱く燃えるような痛みが、そこを中心に右腕全体を覆っている。

「……………っ！」

時間を喰らっても尚カウニスの振るう剣戟を避けきれなかった。加えて、大河の身体には無意識の疲労が大分のつかっている。

それらを加えて考慮すると、この状況でカウニスを叩き伏せるという事は、大河の思っている以上に難儀な事のようにだった。

が、それでも大河のやる事には変わりはないし、一旦退いて態勢を立て直すつもりも彼にはない。土台、彼は自身が能力を自制し切れていないのと、カウニスが振るう剣戟の速さは時間を喰らっても恐らく避けきれないだろう、という事は予想していたので（まさか、本当に避けきれないとは彼も思わなかったが）、彼にとって予想外の事といえばそれは無意識に蓄積されていた疲労だけだった。

たったそれだけの想定外の事で、この好機を逃すわけにはいかなかった。

彼は、何もカウニスを殺そうとしているのではない。彼が行うべき事はカウニスを徹底的に叩き伏せ、その後の任の遂行に支障を来たさないようにする事だけなのだ。

挟まれた傷口を確認する事もなく、大河は再びカウニスの正面に飛び込んだ。

刹那。カウニスの左手から、無数の槍が、瞬時に復元された。長槍から短槍、三楯から鉾の形状をしたもので、多岐に及ぶ無数の槍が彼女の指の間から突き出した。

大河がカウニスの能力、即ち、破片から物体を復元させる能力

を見極めたのは、一回目に接触してカウニスの薙刀を蹴り碎いた時。その時に、時間を喰らっていた大河はカウニスが己の手から“コンクリートの破片”を、“コンクリートの壁”に復元させる瞬間を視認したのである。

恐らく復元させる破片は予め手に持たせておく、或いは取り出し易い場所にしまわなければならないのだろう。故に、カウニスは初めて大河達と接触した時に、彼らに会話をさせる隙を与えたに違いない。

そう考えてみれば、カウニスが先の帆照の挑発にのつたのも頷ける。その間に、破片を武装する時間は充分にあったのだから。

「――！」

無数に復元された槍を、しかし大河は碎く事も避ける事もせずに寧ろ、その槍に向かつて彼は脚を踏み切った。

自殺願望があると思えない、自滅的な大河の行為。だが、生憎大河に自殺願望なるものは存在しない。

何度も言うようだが、彼はカウニスを“叩き伏せる”事が目的なのだ。決して自殺でもなければ、殺人でもない。

互いに殺さずにして、彼はこの物事を回避しようとしているのだ。

「――っ！」

無数の槍へと飛び込んだ大河の身体に　しかし、槍が突き刺さる事もなければ、彼が貫かれる事もなかった。

以前に、カウニスが復元させた無数の槍は大河の身体に届く事もなく　“朱色の炎”によって、その全てを焼き尽くされていた。

最早、横から迫るその炎が誰によって発火され、誰によって槍に引火されたかは言うまでもなからう。

大河は眼前で燃え盛る炎の中を突っ切って　己に纏わりつく炎を振り切って、彼はカウニスの内側から“その何か”を引き摺りだした。“何か”を引き摺りだした後も彼はその足を止める事無く、大河はカウニスの後方にまで駆け抜けた。

射程範囲（効力範囲）外まで、駆け抜けた。

「……………」

刹那の間に、戦いの決着はつけられた。

反動が自身の身体に押し寄せる前に、大河は更に連続で時間を喰らって　大河は取り出した“その何か”に、自身の全霊を込めた打撃を幾重にも浴びせ続けた。

反動が押し寄せて、刻まれる時が元の早さに戻った頃には　既に、カウニスの身体は最早動ける“それ”とはなっていなかった。

「……まさか、二つも能力を所持しているとは……、それともなんだ？　その能力は、一つで二つもの効果をもつのか？」

天を向いて、血を吐いて、骨を砕かれ、肉をぐちゃぐちゃにされて、内臓をめちゃくちゃにされて　瀕死とも呼べる状態でも尚、カウニスは冷淡とした調子で問いかける。

対する大河といえば掴めなくなつた“その何か”を放して、地面に跪くような姿勢で地に視線を向けているのだが。

「……………」

「返答はなし、か……いやそうか。そういえば、貴様の能力の見返りは大きかったな。今はとても話せる状態ではなかったか」

内臓から湧いてくる血を吐き捨てながら、独り言のようにカウニスは呟く。

「だが、これもまた面白い体験をしたものだ。触れられずして、よもや自身の身体を壊されようとは　私は常に蹂躪する側の人間だったのだがなるほど、蹂躪される側というのはこのような心境だったのか……ふむ、確かに屈辱的だ」

強姦されかけた時を思い出すよ、と。

自身の過去を嘲笑するように言って、最早身体というその役割を果たしていない自身の身体をゆっくりと立ち上げていくカウニス。

所々の骨が砕けきっているために、その立ち姿は非常に不恰好なそれとなっていた。が、そもそも大河は自力で立ち上がれる程に手加減したつもりはないのだが　匙加減を間違えたのだろうか。

いや仮にそうだとしても、大河は特に肢体を痛めつけたのだ。ど

ころか、匙加減を間違えたというのなら寧ろ痛めつけすぎたくらいだ。普通なら、ショック死してもおかしくない状態のはずなのだが。「流石に、力を入れるとなる、と……大分、痛むものだな」

小刻みに身体を震わせながらも、カウニスは己の脚でしっかりと自身の身体を持ち上げていた。立ち上がった時に大量の血液が腹から溢れかえったが、それでも彼女が動揺する気配はつゆともなかった。

その様子は、最早人体構造から疑いたくなるようなものだった。否、人体構造からして既に常人のそれとは異なっているのだろう。彼女は一度、死んでいるのだ。

「……………」

傷だらけのこの状態でも、彼女にとって今ここで大河を殺すという事はさほど難儀な事ではない。大河が射程範囲外に居るならば、自ら大河に近づいてしまえばいいだけの話だ。血を吐いても身体を引き摺ってでも、一度射程範囲に入れてしまえば後は拳銃で撃ちしとめれば良い。

加えて幸いというべきなのか、今の大河の身体には相当な反動が押し寄せている筈だ。カウニスの想像を絶するであろう疲労と、それに伴う身体の悲鳴が。

「タイガ。どちらかの命が絶たれる前に、貴様に一つ訊ねたい事がある」

落ち着いた調子で、カウニスはその場に佇んだまま大河に問いを投げ掛ける。

「貴様は、私を殺そうと思えば殺せたのではないのか？ いやしかし別に愚弄する訳でも、貴様の精神を貶しているわけでもない。ただ 殺戮しかできなかった私には、どうしてもそれが解せぬ。貴様も最期だ。できることなら、教えてくれ」

その時に 彼女の頭をよぎったのは、およそ千年ほど前に出逢った騎士の姿だった。恋に落ち、命を落とした騎士の姿。

「……………いい、……………」

生きている、から。

息も絶え絶えな状態で大河が紡いだ言葉は、しかし大分抽象的な返答だった。

「……『生きている』という理由で生かすのならば、貴様はどのような卑賤な輩でも生かすという事か？ 卑劣な者も怨み妬む者も、貴様はその者の命を尊重し、殺さずして生かすというのか？」

追及してくるようなカウニスの問いに、大河はかぶりを振る動作で応えた。呼吸がより荒くなっている所を見る限り、先の返答もよほど酸素を振り絞って応えた結果なのだろう。

カウニスは血を吐いても尚その口調を崩すことはないが、しかしそれは異常であるからこそできることだ。普通の人体構造を持つものならば、まず悶絶しているであろう状況である。口調を保つどころか、意識を保つことすらできない。

「……状況次第、相手次第という事か」

しかし状況次第相手次第というならば、何故大河はカウニスを殺さなかったのか。この状況、どう考えたとしてもカウニスは絶対的な敵である筈だ。カウニスを殺さなければ、大河自身の命が危ぶまれる状況。

否、大河だけではない。帆照の命も、同じく危機に曝されることとなるのだ。命を尊重するならばまずは自らの命、仲間の命を尊重すべきではないのだろうか。

それとも、カウニスの命が仲間の命を差し置いてでも価値のある命だったのか いや、万が一にもその可能性はあるまい。

ならば 何故。

「……いち、ど」と。

咳き込んで、肺にある酸素を目一杯に搾り出しながら 微風に
も掻き消されそうな細い声で、大河は言葉を紡いでいく。

「命は、“一度きり”だ。他人の一度、を……終わらせられる程、俺は、強くない」

「 静寂に包まれた駅に、細く弱い大河の声が木霊する。

その言葉を聞いて カウニスは、どこか晴れたような表情を浮かべていた。まるで長年抱えていた悩みが解消したような、驚きと喜びの二つの情を併せ持った表情を彼女は浮かべていた。

「……………成程」

零すように、聞き取れない程の声で呟くと カウニスは大河に背を向けて、駅の外へと脚を引きずるようにして歩き始めた。

「……………？」

突拍子もないカウニスの行動に、一瞬大河の思考は停止した。が、それもほんの数秒と経たない内に我に返って 我に返って、大河はそこから何もできなかった。

酸素を吐き尽くしてしまったが為に、彼の呼吸は酷く乱れていた。骨と筋肉が悲鳴をあげて、心臓は早鐘を打っている。視界が眩み、瞳孔の広さが落ち着かない。

とめどなく溢れる汗が、彼の服をぐちよぐちよに濡らす。口腔内から喉までの間が渴き切って、息をするたびに激しい嘔吐感が彼を襲う。

「 遠ざかっていくカウニスの背を見つめる体力さえも、彼の身体には残っていないかった。

意識とは関係なく、次第に瞼が降りてきて 間も無くして、彼の意識は闇に落ちた。

任を完遂することも、カウニスの行動を見ることも、自身の仲間に状況を伝えることも 何もできずに、彼の意識は落ちていった。

日も没し、暗い夜空には眩い月が輝いていた。

街中だけあって、星の明りよりも街路灯の灯りが眩しく発光する。真つ白な蛍光灯に照らされて　カウニスは人気のない街路を、傷だらけの身体を引き摺って歩いていた。

吐血の頻度も増えてきており、目の焦点も既に合わせられていない。仮に大河に殺す気がなかったのだとしたら、彼はもう少し手加減をするべきだろう。人間というものは、案外脆く壊れやすいものだ。

「……………」

一度きりの命。

何時からか彼女が軽視していた『命』というものを、久しく大河は重く見させてくれた。およそ九百年ほど前に壊れてしまった感情を、彼は久しく呼び起こしてくれた。

一度目の命は恋で終わり、その人生は実に背徳的で残酷なものだった。故に、彼女にとっての二度目の人生とは、いつてみれば“贖罪”のようなものだった。害となるものを殺し、益となるものを生かす。それが彼女にとっての贖罪で、彼女の破綻した人格の権化でもあった。

命というものの重さを忘れてしまったから、彼女は殺戮という行為に何の躊躇いも疑問も持てなかった。どころか、命を殺すという行為に快樂さえ覚えてしまったのである。

贖罪などと称した人生も、気付けば私利私欲の人生になっていた。一度目の人生と何ら変わらない、罪から逃れて快樂を求める人生だった。

皮肉だが、結局はツヴァイの言っていた事が何よりも正しかったのかもしれない。

『結局は、自分の事しか考えられない』

その言葉が、今になって彼女の心に響き渡る。

「……………！」

と。

暫く進み、街路灯の数も少なくなってきた所に　その男は居た。
不愉快な笑みを、へらへらと称えて。

「おや、そこにいるのはもしやカウニスさんですか？　だしたら偶然！　丁度僕も人払いを終えてそろそろ貴女の様子を窺いに、と思っていたところなんですよー！　いやいやいやあ、こうも二日連続で偶然が重なってしまつと、もう一種の運命すら感じてしまいますね！」

その男、ことツヴァイ・インページは飄々とした態度で話を進めていく。

「いやあ……しかし、酷い傷ですねえ。その身体の傷を見る限りですと　戦闘後とお見受けしますが、結果の方はどのように？」

「それが、貴様の最期の言葉か」

「はい？」

と。

ツヴァイの返答を受けるまでもなく　カウニスは一丁の短機関銃を復元させると、それを即座に構えて掃射した。

重く乾いた唸り声とともに、無数の弾がツヴァイが居たであろう周囲一帯を撃ち崩していく。損傷している身体でも尚、機関銃を掃射できる彼女はやはり異常な者　否、化物だ。
が。

ツヴァイはそれをも凌駕する、化物だった。

「
」

甲高い金属音が、銃声と重なって街路に響く。

カウニスの効力範囲はおよそ六、七メートルといった所なので、視認しきれないほどの距離にツヴァイが離れているという事はまずなかった。故に、彼女にはずっと見えていた。

短機関銃を掃射し始めてから、その弾倉にある銃弾を出し尽くすまで　彼女にはツヴァイの姿が、否。

身に纏った純銀色の鎧と盾を駆使して、短機関銃の銃弾から身を防ぐ騎士の姿が、彼女には見えていたのだ。

「……………」
装填されていた全ての銃弾を撃ち放つても、彼の鎧を？がす事は敵わなかった。

どころか、彼の鎧はへこみもしていない。へこんでひしゃげていたのは、カウニスが撃ち放った銃弾の方だった。

「成程。僕を殺そうとする辺り、どうやら暴食を殺し損ねたようです。ね。大方、僕を殺して先の約束をなかった事にしようとしたんでしょう。愚かしい考えです」

空いているもう片方の手に鋭い長剣を顕現させて、その長剣をだらん、と力なく構えるツヴァイ。

しかしその構えとは対照的に、鎧の奥からは底なしの殺意が溢れ出ていた。

「……………」

隙を探ろうにも、しかし彼には一点の隙すらも存在していなかった。どこから刃を向けようと、その全てを返されてしまう。そんな雰囲気、彼の周囲には漂っていた。

再度、先よりも貫通力のある火器で攻撃を試みるか　そんな思考すらも、彼の前では無謀にしか思えなかった。

そして実際、それは無謀に違いなのだろう。

「そんなに怯えなくても良いじゃないですか？　殺人なんて、貴女にとつては所詮快楽を得る一種の手段だったのでしょうか？　なら、別に怯えるようなことはありませんよ　ただ、快楽を得る立場が逆転するだけですから」

彼の攻撃は、一瞬だった。

「……………」

ツヴァイは鎧を纏い盾を持ち長剣を構えた状態で、されど一瞬にしてカウニスの腹を切り裂いた。

瞬時に間合いを詰めて、腹部を一瞬で切り裂いた。

血液が噴水のように噴き出して、ツヴァイの鎧を赤く染め上げる。

「……………」

力が抜け、意識が遠のき、身体が倒れていく最中で、彼女は何を思っただろうか。自身の行動を悔いたか、或いは自身の人生を悔いたか。自身の生き様を悔いたか、或いは自身の死に様を悔いたか。どれにせよ、恐らく彼女は“やりきった”のだろう。第一の人生ではできなかった、本当に殺したい者に刃を向け本物の殺戮（快樂）を知るといふ事を。

そして彼女は悟っただろう。自身の抱いた理想が、憧れが、望みが どれだけ虚無で、無謀だったか。

これが、私の理想（殺戮）の果てか。

人が理想を悟る時、それは恐らく死ぬ時だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4071m/>

暴食王の戦い

2012年1月13日20時57分発行